

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

中川 博夫

例言

- 一、鎌倉幕府第六代將軍宗尊親王の家集の一つ『竹風和歌抄』（一〇二〇首）の注解を試みる。
 - 一、一番歌から始めて順番どおりに注釈を付して、数次の分載とする。今回は、巻第一（1～288）を取り上げる。
 - 一、次の各項からなる。
 - ① 整理本文。
 - ② 本文を改めたり注記が必要な場合は、当該箇所*印を付して、別に本文の項目を立てる。
 - ③ 通釈。
 - ④ 本歌・本説・本文（前項の「本文」とは別、基にした漢詩文の意）、参考（宗尊が踏まえた歌ならびに解釈上に必要な歌）、類歌（表現・趣向等が類似した歌）、享受（宗尊歌を本歌取りした歌）、影響（宗尊歌を踏まえた歌）。
 - ⑤ 出典。
 - ⑥ 他出。
 - ⑦ 語釈。
 - ⑧ 補説。
 - ②と④～⑧は、無い場合には省略。
- 一、底本は、本集の現在知られる唯一の伝本、愛知教育大学付属図書館蔵本（九二一・一四八・T一・C）。
- 一、本文は、次の方針に従う。

1. 底本の翻印は、通行の字体により、歴史的仮名遣いに改め、意味や読み易さを考慮して、適宜ひら仮名を漢字に、漢字をひら仮名や別の漢字に改める。送り仮名を付す。清濁・読点を施す。なお、原則としてひら仮名の反復記号は用いない。「譚」「哥」は「歌」に統一する。

2. 本文を改めた場合、底本の原状は右傍に記す（送り仮名を付した場合は圈点）。私にふり仮名を付す場合は（ ）に入れて区別する。その他、問題点や注意点は、適宜特記する。

3. 出典や他出などの他資料の本文との異同は、漢字・仮名の別や仮名遣いの違いや送り仮名の有無など、表記上の違いは原則として取らない（解釈の分かれる可能性のある表記上の違いである場合は参考までに注記する）。

4. 底本の本行の原状（見消ち等の補訂は本行に復元）に対して他資料の本文との異同を示す。

5. 歌頭に通し番号を付した（私家集大成ならびに新編国歌大観番号と同じ）。

一、引用の和歌は、特記しない限り新編国歌大観本に拠る。万葉集は、原則として西本願寺本の訓と旧番号に従う。

なお、表記は私に改める。歌集名は、原則として「和歌」を省く。その他の引用は、日本歌学大系本や日本古典文学大系本他の流布刊本に拠る他、特殊な本文の場合には特記する。

付記 ご所蔵本の翻印をご許可下さいました愛知教育大学に対し、厚く御礼申し上げます。

注 釈

竹風和歌抄宗尊親王 定家枕屏風歌 和歌九品／八代集秀歌（扉左肩）

竹風和歌抄卷第一

文永三年十月五百首歌

立春

1 野も山もまだ雪深き年の内に霞ぞ遅き春は来にけり

〔本文〕 底本では288まで、詞書（歌題）は歌頭に記されているが、和歌の前に和歌より二字下げの書式に改める（以下同様）。

〔通釈〕 立春

野も山もまだ雪が深い旧年の内に、霞こそ遅く立たない、（けれど）春はやって来たのだ。

〔本歌〕 年の内に春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ（古今集・春上・一・元方）

〔出典〕 文永三年十月五百首歌。以下288まで同じ出典。

〔他出〕 中書王御詠・春・年中立春・一。

〔語釈〕 ○文永三年十月五百首歌―文永三年（一二六六）に宗尊は將軍を廢されて京都に戻る。七月二十三日に子息

の惟康が征夷大將軍となるが、宗尊は既に七月八日に鎌倉を出て二十日に入京している。その直後の八月に詠じた「三百首」（本抄492～595）に続く「五百首」。十月九日に移った土御門殿で詠むか。現存は、本抄288までの二八八首。全体に、失脚して帰洛し、しかしいまだ父帝後嵯峨院や母棟子にも会えない状況の、不遇感の述懐性が露わである。○立春―「五百首」の題の典拠・由来については、この「立春」が『古今六帖』（第一・歳時・春）の「はるたつ日」に当たるのを初めとして、多く『古今六帖』（あるいはそれを踏襲した『新撰六帖題和歌』）に重なるが、なお同帖に見えないものもかなりある。後考を期したい。○霞みぞ遅き―係り結びで四句切れだが、「遅き春」と続くとも解される。

〔補説〕 該歌の詠まれた文永三年（一二六六）は、前年の十二月二十三日に立春を迎える年内（年中）立春であり、それを詠じたものであろう。

「み吉野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は来にけり」（新古今集・春上・一・良経）や「風まぜに雪は降りつつしかすがに霞たなびき春は来にけり」（同・同・八・読人不知）のように、「春は来にけり」と立春を言う限りは、霞が立つことを前提とするのが、伝統的通念であろう。俊成の「年の内に春立ちぬとや吉野山霞かかれる峰の白雪」（統後撰集・春上・一）も、源具親の「年の内の春とは空にみ吉野の山も霞みて雪の降りつつ」（千五百番歌合・春一・二七）も、該歌と同じく「年の内」の「雪」を詠みつつ立春の霞を併せているのは、大枠ではその類型の中にあることを意味しているよう。該歌が「霞ぞ遅き」とするのは、その点で新鮮である。溯ると、「年の内に春は立ちぬとちつけに雪げの雲を霞とぞ見る」（永久百首・冬・旧年立春・四二一・大進）が、明示的ではないにせよ、「霞」の立っていない「年内立春」を詠じていようか。

早春

2 春のなど憂き身をかけて立ちぬらんかさなる年は人も分かぬに

〔通釈〕 早春

春はどうして、憂鬱の我が身に及ぶことなく、立ってしまったのであろうか。春になりまた積み重ねる年齢は、どの人ということを分け隔てしないのに。

〔参考〕

数知らずかさなる年を鶯の声する方の若菜ともがな（後拾遺集・春上・三七・藤原親子）

我がものといかなる人の惜しむらん春は憂き身のほかよりぞ行く（続後撰集・春下・一六六・慈円）

などて世の老いの憂き身を隔つらん霞は春のよそならねども（中院集・廿七日月次三首 霞・一）

〔類歌〕

里分かず立ちける春のいかなれば憂き身一つをよそになすらむ（中書王御詠・春・早春・三）

〔語釈〕

○早春―『家持集』（一）や『友則集』（二、七）に見える他、『和漢朗詠集』に題として立てられる。勅撰

集では『金葉集』（上六）に初出。○憂き身をかけて―辛い境遇の身には関係することなく、の意。憂き身が（春か

ら）無縁にうち捨てられている、ということ。「憂き身をかけて」は、下句の「人も分かぬに」との対照が不明確になるので、採らない。

〔補説〕

題の「早春」を憂鬱の我が身に寄せた、春の歌らしからぬ述懐性が強い詠作。

参考歌の親子詠と慈円詠は、それぞれ勅撰集に収められており、宗尊が師事した為家詠と共に、宗尊が目にする機会があったかと思われる。慈円には他に、「あはれにも春は憂き身のよそながら老の坂より年は越えにき」（拾玉集・百首題 建久八年・立春・四四七二）という類想の歌がある。こういった歌まで宗尊が学んでいたかどうか

は、現時点では分からないが、宗尊が前代の有力歌人の歌に目を向けていた可能性は低くないので、慈円詠に対する態度については、今後の追究に俟ちたい。

子日

3 いつまでか我が為にとて松も引き若菜も摘みし東なりけん（*あつま字母左）

〔本文〕 ○底本の結句の「あつさ」は「あつま」の誤写（「万」の「ま」と「左」の「さ」と見て、私に「東なりけん」に改める。

〔通釈〕 子の日

いったい何時まで、私の為にということで小松も引き若菜も摘んだ、あの東国であったのだろうか。

〔本歌〕 松も引き若菜も摘まずなりぬるをいつしか桜はやも咲かなむ（後撰集・春上・五・実頼）

〔語釈〕 ○子日―ねのひ、ねのび。正月最初の子の日、またその行事。野外で若菜を摘み小松の子を引き抜いて、長寿を予祝した遊宴。『古今六帖』（第一・歳時・春）の「ねのび」。

〔補説〕 同じ「五百首」（↓↑）で、宗尊は「起きて見し今年の夏の有明や東の月の限りなりけん」（50・夏月）と、直前の夏まで関東に在って見た有明月の感慨を詠じている。こども、東国で幕下の諸士達と新春子の日の行事に興じたことを追想したものと捉え、本文を私に「東なりけん」に改めて解釈しておく。

題の「子日」の本意にはやや適わない述懐詠。

若菜

4 今は身に憂^うきことをのみ摘^つみたためて春の若菜^{わか}の時も知られず

〔通釈〕 若菜

今は若菜ではなく辛いことばかりを摘み貯めていて、摘み貯めるはずの春の若菜の時節であると知ることでもないよ。

〔参考〕 摘みたむることの難きは鶯の声する野辺の若菜なりけり（拾遺集・春・二六・読人不知）

〔他出〕 中書王御詠・春・若菜・一二、初句「今は身の」。

〔語釈〕 ○若菜―『古今六帖』（第一・歳時・春）の「わかな」。○今は身に―真観の「今は身になにを愁ふとなければも涙ぞ落つる秋の夕暮」（万代集・秋上・九五二）に学ぶか。宗尊は、該歌と同じ「五百首」（↓1）で「今は身のよそに聞くこそあはれなれ昔は主鎌倉の里」（本抄・里・106）や「今は身のよにすすけたる蘆簾かかりける身のはてぞ悲しき」（本抄・簾・113）と詠み、あるいは他にも「いつまでかよそに別ると慕ひけん今は身に添ふ秋の心を」（本抄・巻二・文永五年十月三百首歌・暮秋・394）と詠んでいる。過去を述懐する「今」の我が「身」を強く意識する表れであろう。○時も知られず―古くは「常夏の花を見ればうちはへて過ぐす月日の時も知られず」（新撰和歌・夏冬・一五七）の例があるが、これは、時を忘れてしまう、というほどの趣意で、該歌の場合と異なる。伏見院の「春雨は降り潤せどまだ寒き草の垣根は時も知られず」（伏見院御集・春雨・五三二）や「なべて世はただすさまじき心ちして春になるらん時も知られず」（同・正月三日正安四年・二二六七）の「時も知られず」は、その時節であると認識できない、の意で、該歌と同様である。伏見院が宗尊詠に学んでいた可能性を見ておく必要

はあろう。

〔補説〕 2、3番歌と同様に、「若菜」の題については落題とも言えるが、『正徹物語』が「宗尊親王は四季の歌にも、良もすれば述懐を詠み給ひしを難に申しける也。物哀れの体は歌人の必定する所也。此の体は好みて詠まば、さこそあらんずれども、生得の口つきにてある也」というように、季節の歌に述懐を詠じる傾きがある宗尊親王らしい詠作であるとも言える。加えて、『瓊玉和歌集』巻一の二三の梅香に寄せる物思いや、三二―三五の春曙に寄せる悲愁、あるいは五七と五八の花に寄せる憂き身の述懐詠などに窺われる、京都から自らの意志とは無縁に將軍として東下せざるを得なかつた宗尊の心情と呼応するように、再び不本意にも將軍を廃されて帰洛させられた宗尊の情念を窺うことができようか。

二月

5 初瀬路はつせちや中宿なかつどりせし二月の宇治うぢの渡わたりはさぞ霞かすみけん

〔通釈〕 二月

初瀬路よ。中休みに宿った、二月の宇治の渡りは、さぞ霞んでいたであらう。

〔参考〕 初瀬路やありし宿りの梅の花人はいさとぞ香かにほひける（夫木抄・春三・梅・中務卿親王家百首・

七二七・光俊）

〔他出〕 夫木抄・雑三・路・はつせぢ、泊瀬、大和御集、春御歌中・九三三三。

〔語釈〕 ○二月―『古今六帖』（第一・歳時・春）の「なかの春」に当たるか。○初瀬路―古くは平城京等大和の京

から後には平安京から、大和国の笠置山地から流れる初瀬川の峡谷に開けた地である初瀬に至る道筋。長谷寺参詣の道。○中宿り―旅行で目的地への途中で中休みして宿ること。ここは、京都から初瀬詣での途次あるいは帰途に宇治で宿泊すること。○宇治の渡り―山城国の宇治を流れる宇治川の渡渉場。

〔補説〕『源氏物語』『手習』に、横川の僧都が浮舟を見つけた経緯を語って「この三月に、年老いて侍る母の、願ありて、初瀬に詣でて侍りし、帰さの中宿りに、宇治の院と言ひ侍る所に、まかり宿りしを」と言う場面がある。このような物語などの、何らかの典故に基づいた詠作ではないか、とも疑われるが、判然としない。

春曙

6 霞かすめるをあまはれとばかり見し世だに物は思はるひあけほき春の曙

〔通釈〕 春の曙

霞かすんでいるのを、あますばらしいとばかり見ていたときでさえ、深く思い悩んだのだ、この春の曙は（今はまし）て。

〔参考〕 心からあくがれそめし花の香になほ物思ふ春の曙（定家卿百番自歌合・一五七）

〔類歌〕 おのづから涙くもらで見し世だに春はおぼろの袖の月影（南朝五百番歌合・春四・六一・経高）

〔語釈〕 ○春曙―『永久百首』（春）の設題が早い。○あはれ―しみじみとした情趣。底本の「哀」の字義は、ここでは希薄であるので、ひら仮名に開いた。

〔補説〕 前歌までと同様に述懐性の強い歌。例えば「あはれとは誰もや見らん遠山に霞たなびく春の曙」（実家集・

春・遠き山の霞・五」と歌われる、「霞」立つ「春の曙」の「あはれ」なる景趣を、素直に喜べない憂愁の思いを詠じる。関東で眺めた春霞を懐旧するような趣もある。あるいは宗尊自身の旧作、「如何にせむ霞める空をあはれとも言はばなべての春の曙」（柳葉集・第三・弘長三年六月廿四日当座百首歌・三六三）などを意識したか。

三月

7 あはれ今年我が身の春も末ぞとは知らで弥生の花を見しかな

〔通釈〕 三月

ああ、今年で私自身の春も終わりだとは知らないで、あの弥生三月の花を（東で）見たことだな。

〔参考〕 契り置きしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり（千載集・秋上・一〇二六・基俊）

いにしへに我が身の春は別れにきなか弥生の暮は悲しき（続後撰集・雑三・一〇四八・基氏）

〔影響〕 四十まで旅の野山に家居して帰るさ知らぬ花を見しかな（宗良親王千首・春・翫花・一一四）

〔語釈〕 ○三月―『古今六帖』（第一・歳時・春）の「やよひ」。○あはれ―否定的慨嘆で、底本の「哀」の表す悲哀の趣が感じられなくもないが、文法上は感動詞なのでひら仮名に開く。○我が身の春―自分の身に関わる春、自己と無関係ではない春の意。自分自身の人生の盛期の喩えを重ねる。続く「末」で、將軍位を廢されて関東を追われたことを暗喩。

〔補説〕 前歌と一連の趣。581、703が類想。

宗良は、宗尊の歌に倣っていた可能性が高く、影響歌とした一首もその一連と見られる。

春興

8 見も聞きも飽あかれぬものか鶯の花に鳴く夜の曙あけほのの月

〔通釈〕 春興

見ること聞くことも、飽あきることなどできないものだな。鶯が花に鳴いている夜が明けてゆく、曙の空に残る月よ。

〔参考〕 見も聞きもならぬ夜半の寢覚めかな苦もる月に磯の松風（道助法親王家五十首・秋・船中月・五六〇・定

範）

梅が枝の花に木伝ふ鶯の声さへにほふ春の曙（千載集・春上・二八・守覚）

〔他出〕 夫木抄・春二・鶯・御集、春興を・三三二、二句「飽かれんものか」、結句「在明の月」。

〔語釈〕 ○春興―『和漢朗詠集』（春）に設けられた題。○見も聞きも―参考の『道助法親王家五十首』歌の第一句を国立歴史民俗博物館本を底本とする新編国歌大観本の翻印「みもききも」に従い、これと同様と見た。ただし、同書の例えば穂久邇文庫本の本文表記は「見もきくも」であって、「見るも聞くも」であった可能性も否定しきれない。加えて、「いかにかく見るも聞くもと卯の花に郭公鳴く玉川の里」（御室五十首〈底本書陵部本〉・夏・八二〇・寂蓮。第二句穂久邇文庫本表記「みるも聞もと」の例もあり、やはり「見るも聞くも」と見るべき余地が残されているのである。○飽かれぬものか―四段動詞「飽く」の未然形、可能の助動詞「る」の連用形、打消の助動詞「ず」の連体形に「もの」が付く。「か」は、詠嘆の終助詞。○鳴く夜の曙の月―「あけ」を掛詞に「鳴く夜の明け」から「曙の月」に鎖るか。「曙の月」は、先行例の見えない新奇な句。後の例も、「さすがなほ夜の間は

それと影見えて霞に消ゆる曙の月」(俊光集・春・春曙月・四八)の他、数は少ない。「有明の月」と同様の景趣か。

暮春

9 散ればただ花も跡なき山の端の霞ばかりに春ぞ残れる

〔通釈〕 暮春

散るとただ花も跡形もない山の稜線、そこにかかる霞だけに、春が残っているよ。

〔参考〕 花も散り春も暮れぬる山の端に霞ばかりぞ立ち残りけり(東撰六帖・暮春・三〇七・頼業。新和歌集・春・

八四、結句「なほ残りけり」)

〔類歌〕

花鳥のなさけも過ぐる故郷は霞ばかりに春ぞ残れる(嘉元百首・暮春・一〇一六・公顕)

花鳥の色音も絶えて暮るる空の霞ばかりに残る春かな(玉葉集・春下・暮春霞・二七五・公雄)

〔語釈〕

○暮春―『古今六帖』(第一・歳時・春)の「はるのはて」(第一帖の目録では「暮春」)に当たる。

三月尽

10 よそならで暮るる別れを惜しみしも今年の春の限りなりけん

〔通釈〕

三月尽

自分と無縁ではないものとして暮れて行く春の別れを惜しんだのも、今年の春が最後であったのだろう。

〔参考〕 かくばかり暮るる別れを慕ふとも思ひも知らず春や行くらむ（宝治百首・春春・七七七・師繼。続古今集・

雑上・一五三八）

忘るなよとばかりいひて別れにしその暁や限りなりけん（続後撰集・恋四・八六六・良経）

〔類歌〕 起きて見し今年の夏の有明や東の月の限りなりけん（本抄・夏月・50）

〔語釈〕 ○三月尽―『和漢朗詠集』（春）や『堀河百首』（春）に設けられた題。○限りなりけん―参考の良経詠などに学ぶか。50にも。

〔補説〕 7番歌と同様に、七月に関東を追われ將軍を廢位された失意から、もはや「春」は自分とは無縁だとの詠嘆。

閏三月

11 さればとて盛り久しき花も見ずなにと加はる春の弥生ぞ

〔通釈〕 閏三月

そうであるとして、盛りが長く続く花を見ることもない。どうして、さらに一月付け加わる春の閏三月なのか。

〔語釈〕 ○閏三月―『和漢朗詠集』（春）に設けられた題。○さればとて―「加わる春の弥生」即ち閏三月であるからといって、ということ。○盛り久しき―俊成（長秋詠藻・六二七）あたりから詠まれ始めた措辞。勅撰集では、兼実の「裾野より峰の梢にうつりきて盛り久しき秋の色かな」（新勅撰集・秋下・文治六年女御入内屏風に・

二五二) やその子良経の「春を経て盛り久しき藤の花大宮人のかざしなりけり」(続後撰集・春下・一六一)が早い。これらに学ぶか。○なにと―副詞。何故の意。

〔補説〕 この歌の詠まれた文永三年(一二六五)は平年で、閏月はない。前年は閏月があるが、それは閏四月である。一般的に、閏三月の空しさを詠嘆したものである。

更衣

12 ためしなく憂^うきは今年^{ことし}の夏衣ひとへに身さへかはりはてつつ、

〔通釈〕 更衣

例がないほどに憂く辛いのは今年の夏頃だった。夏衣の単衣に替わるように、ひたすらこの身までがすっかり変わり果てて。

〔参考〕

蟬の羽のひとつへに薄き夏衣なればよりのなむ物にやはあらぬ(古今集・雑体・一〇三五・躬恒)
ためしなく憂きにつけても忘れぬ心弱さよの身をくだきつつ(新撰六帖・第五・わすれず・一五〇一・家良)

心もやひとへにははる夏衣たちでも居ても風ぞ待たる(信生法師集・更衣・六九)

〔語釈〕

○更衣―『古今六帖』(第一・歳時・夏)の「ころもがへ」だが、同帖では「はじめの夏」「ころもがへ」の順。本抄では次歌が「首夏」であり、『和漢朗詠集』(夏)の「更衣」「首夏」の順に一致する。○夏衣―「夏頃」を掛ける、と解する。○ひとへに―「偏に」に、「夏衣」の宴で「単衣に」が掛かる。○かはり―(自身が)変化

する意に、「夏衣」「ひとへに」の縁で、(夏衣に)替わる意が掛かる。

〔補説〕 宗尊が鎌倉を追われて將軍を廢されたのは、この年文永三年(一二六五)の秋七月だが、その前の夏に、宗尊は四月五日から小瘡を病み、治療・祈禱を行って、六月一日に漸くやや平癒に至るのである。その祈禱の驗者の一人に良基があり、その良基と宗尊の妻宰子との密通の一件から、六月二十日に良基は鎌倉から逃亡する。二十三日には、宰子と娘の掄子は山内殿に、嗣子の惟康は時宗邸に移され、宗尊は家族と離別するのである。宰子と良基の關係の實際は判然としないが(後年二人は夫婦となつて暮らしたが露見して宰子は所領を幕府に没収されたとの風聞があつたという)、宗尊は既に三月の段階で二人の關係を知っていたらしい。宗尊がこの夏を肉体的にも精神的にも辛く過ごしたことは間違いないのではないだろうか。その記憶が詠まじめた歌であろう。これも、夏の更衣題の本意から離れて、述懐性の強い歌である。

首夏

13 訪はば、やな藤の色濃きたそかれに一日の花の陰はいかにと

〔通釈〕 首夏

(あの内大臣に招かれた夕霧のように)訪れたいものだよ。藤の色が濃い黄昏に、夏の初めの日の藤の花陰はどのようにであるかと。

〔本歌・本説〕

「二日の、花の陰の対面、あかず覺え侍りしを。御暇あらば、立ち寄り給ひなむや」とあり。御文には、

我が宿の藤の色濃きたそかれに尋ねやは来ぬ春の名残を

げに、いとおもしろき枝に、付け給へり。(源氏物語・藤裏葉・四三九・内大臣＝頭中将。日本古典文学大系本)

〔語釈〕 ○首夏―『古今六帖』(第一・歳時・夏)の「はじめの夏」に当たるが、『和漢朗詠集』(夏)に見える「首

夏」に一致する。↓前歌語釈。○一日―①月や季節の初めの日・朔日、②過去のある日、の両方に解しうるが、①の意味と見る。↓補説。

〔補説〕 本歌・本説は、内大臣が、藤の花の宴に夕霧を招き、雲居の雁との婚約を許すに至る場面。「四月朔日ごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむこと、惜しき盛りなるに、遊びなどし給ひて、暮れゆくほどの、いとど、色まされるに、頭中将(柏木)して、御消息あり」に続く箇所。

右に引いた、「藤裏葉」の「一日の、花の陰の対面」は、前文に言う、三月二十日に、極楽寺で営まれた内大臣の母大宮の御忌日の法事に於ける内大臣と夕霧の交わりを指す。情景は「夕かけて皆帰り給ふほどに、花はみな散り乱れ、霞たどたどしきに」とあり、まさしく「花の陰」という訳ではないのだが、それを春の名残の桜陰に見なしているということであろう。該歌の「一日の花の陰」は、この「一日の、花の陰の対面」の詞を取っている。仮にその内容まで厳密に取っているとすると、該歌の下旬は、「(あの内大臣と夕霧が極楽寺にまみえた)春の名残のある一日の桜の花陰は、どのようであったかと」という解釈になろうか。しかし、これでは、「首夏」の題意に適わず、夏の「藤」の歌としてもそぐわないのではないか。むしろ、「一日の花の陰」は内容の上では、「四月朔日ごろ、御前の藤の花…」を踏まえていると見るべきであろう。

宗尊は、関東で屏風の色紙形源氏絵について、女房達から難陳の裁断を仰がれているなど、『源氏』には相応に通じていたものと思われる。

14 卯月
夢なれや我が身東に住み初めし卯月の今の心ちのみして

〔通釈〕 卯月

夢だったのだな。我が身が東国に住み始めたあの四月が、たった今であるような気持がするばかりで。

〔参考〕 現にもあらぬ心は夢なれや見てもはかなき物を思へば（後撰集・恋四・八七八・読人不知）

水まさる心地のみして我が為に嬉しき瀬をば見せじとやする（後撰集・恋五・九九三・読人不知）

〔語釈〕 ○卯月―『古今六帖』（第一・歳時・夏）の「うづき」。○卯月―「夢」の縁で、「現」が微かに響くか。

〔補説〕 宗尊は、この歌を詠む十四年前の建長四年（一二五二）三月十九日に京都を出発し、四月一日に鎌倉に到着して、北条時宗邸に入り、京都で征夷大将軍の宣旨を受けた。その「卯月」（特にはその朔日）を、昨日今日のよううに思い起こした歌。鎌倉を追われて京都に舞戻ったこの時の宗尊にとって、季節や月日は、関東に於ける様々な体験と強く結び付いていたのに違いないであろう。

15 五月
袖の上に涙の雨の晴れぬかな憂き身やいつも五月なるらん

〔通釈〕 五月

袖の上で、涙の雨がちっとも晴れないことであるな。憂く辛いこの身はいつも、雨が降り続く五月なのであろう

か。

〔参考〕

墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨の絶えず降るらん（拾遺集・哀傷・一二九七・読人不知）
 今もなほ心の闇は晴れぬかな思ひ捨ててしこの世なれども（続後撰集・雑中・一一八九・俊成）

〔類歌〕

数ならぬ身をうき雲の晴れぬかなさすがに家の風は吹けども（千載集・雑中・一〇八三・中原師尚）
 晴れやらぬ思ひや空にかよふらむうき身ひとつの五月雨の頃（長景集・五月雨・二八）

〔語釈〕

○五月―『古今六帖』（第一・歳時・夏）の「さつき（五月）」。
 ○うき身―「憂き身」に、「雨」（五月雨）の縁で「浮き」が響くか。

〔補説〕

これも、身の沈淪を嘆く述懐性が強い。

五日

16

菖蒲草あやめ袂たもとにかけし時ときだにも知らしらずよ長ながきねに泣なかんとは

〔通釈〕

五日

五月五日に菖蒲草を袂に掛けた時でさえも、分からずにいたよ、菖蒲の長い根のように、長い間声を上げて泣くことになろうとは。

〔参考〕

墨染の袂にかかるねを見ればあやめも知らぬ涙なりけり（千載集・哀傷・五七二・俊忠）

今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の陰かは（古今集・春下・一三四・躬恒）

〔影響〕

東路に行きかふ身とはなりしかど知らずよ君に逢坂の関（宗良親王千首・恋・寄関恋・六二九。新葉集・恋

〔語釈〕 ○五日―『古今六帖』（第一・歳時・夏）の「五日」。○菖蒲草―「しやうぶ」。水辺に生える宿根草。葉は

剣形で香気が強く、邪気を払うとされ、端午の節句に軒に差したり、身に掛けたりした。○ねに―「音に」に、「菖蒲草」の縁で「根に」を掛ける。○知らずよ―先行例を見出せない。該歌以降に、作例が散見する。

〔補説〕 関東を追われ將軍を廢され妻子とも離ればなれになった境遇の悲嘆。「五日」（五月五日）の菖蒲の歌の本意からは離れる。

六月

17 つよくのみ思ひぞ出いづる荒あき風かせ吹き始はじめにし水無月の空みなつき 在注

〔通釈〕 六月

ただ強烈に思い出すことだ。激しい風が吹き始めてしまった、あの水無月の空を。

〔参考〕 いたづらに過ぐる月日の明け暮れは思ひぞ出づるいにしへの空（明日香井集・詠千日影供百首和歌元久二年正

月九日相当立春仍始之・懷旧・四四九）

〔語釈〕 ○六月―『古今六帖』（第一・歳時・夏）の「みな月」。○在注―注文そのものは失われているが、補説に記

すような特異な体験の記憶を詠じたものであろうと解されるこの歌に、何人かが付注した痕跡であろうか。

〔補説〕 ここで言う忘れ難い六月の記憶は、この歌を詠んだ年文永三年（一二六三）十月の四ヶ月前の六月のでき事であろう。六月一日に病脳がやや平癒したのも束の間、五日には京都から戻った藤原親家を通じて妻宰子の事につ

いて父後嵯峨院から内々に諷諫があったが、二十日には北条時宗邸で北条氏の長老達が密議をこらしている一方で、宰子と通じた（という）僧良基が逐電し、二十三日には宰子と娘の掬子が山内殿へ、息子の惟康は時宗邸に移され、鎌倉中が騒然となり、二十四日には祈禱に活躍した左大臣法印嚴恵の出奔があり、二十六日に近国の御家人が鎌倉に群集する事態となったのである。その後間もなく七月八日に、宗尊は鶴岡八幡宮に向け祈念・詠歌しつつ京都へ出発し、二十三日には惟康が將軍となるのである。このように鎌倉を追われ將軍を廃されるに至る直前の六月が、宗尊にとって堪えがたく辛い時期であったことは想像に難くない。それに対する感懷を、「六月」の題に寄せて詠じたものであろう。

鵜河

18 大井川鵜舟はそれと見え分かで山もとめぐる篝火の影

〔通釈〕 鵜河

大堰川では、鵜飼の舟自体はそれだと見分けることはできなくて、ただ鵜飼の篝火の光が嵐山の麓をぐるっと廻っているよ。

〔参考〕 大井川幾瀬鵜舟の過ぎぬらんほのかになりぬ篝火の影（金葉集・夏・実行卿家歌合に鵜河の心をよめる・一五一・雅定）

〔影響〕 大井河堰のさ波立ちかへり同じ瀬めぐる篝火の影（隣女集・第三自文永七年至同八年・雑・鵜・一五〇九）

大井河流れも見えぬ夕闇に山もとめぐる篝火の影（拾藻鈔〈公順家集〉・春上・聖護院二品親王家五十首、

鵜川・八三

大井川水の水上はるばると山もとめぐる篝火の影（慶運法印集・夏・鵜河・八二）

水底にめぐるやいかに鳥つ鳥うたかたうかぶ篝火の影（草根集・夏・夜川篝・二八〇三）

めぐるとも昔にはあらじ橋の小島にほふ篝火の影（草根集・夏・鵜舟廻島・二八一七）

〔享受〕 さしくだす鵜舟はそれと見え分かで河島廻る篝火の影（為村集・夏・鵜舟廻島・五三六）

〔他出〕 風雅集・夏・鵜川を・三七二。

〔語釈〕 ○鵜河―『永久百首』（夏）に設けられた題。○大井川―山城国の歌枕。丹波高原の大悲山付近に源流して

淀川に注ぐ桂川の上流部分、嵯峨・松尾付近、特に嵐山の麓辺りの呼び名。堰を設けた故の呼称という。この上流は現在保津川と呼ばれる。○山もとめぐる―新奇な句。「ふる川の入江の橋は波越えて山もとめぐる五月雨の頃」（続古今集・五月雨をよめる・一五五三・尊海）が先行例。これに学ぶか。○見え分かで―光俊の「暮れぬれど暮るる春とも見え分かで人頼めなる常磐山かな」（洞院撰政治家百首・春・暮春・二七六）や信実の「里遠く塩焼く浦は見え分かで煙にかへる沖つ白波」（信実集・雑・八幡卅首とて人人よみ侍りしに、浦の煙・二〇二）などが早い作例。後者は、『続古今集』（雑中・一六五三）に初句「里遠み」四句「煙に隠る」で所収。関東圏でも僧正公朝が、「五月雨の空に煙は見え分かで音のみ高き富士の鳴沢」（東撰六帖抜粹本・夏・五月雨・一四八）と詠んでいる。この後、鎌倉時代を通じて作例がかなり見える。該歌も、その流れの中にある。この「山」は嵐山を指し、川がその山裾に沿って彎曲して流れているので、「めぐる」と言ったものであろう。

〔補説〕 前歌とは一転した、夏の叙景。伝統的歌題だが、「見え分かで」「山もとめぐる」の措辞とそれが表す景趣に新しさがある。

影響に挙げた五首の内、一首目の雅有詠は、該歌の数年後の作である。雅有は、宗尊とは一歳違い（年長）で関東にも祇候していたので、帰洛した宗尊の詠作に目を向けていて、做った可能性はあろう。そうだとすると、祖父雅経や父教定と同様に、同時代歌を真似る癖があったことになる。二首目の作者は法印公順である。生没年は未詳ながら、藤原秀能の曾孫で、永仁二年（一二九四）から建武年間（一二三四～一三三八）までの活動が知られる。『風雅集』成立前に没したかと思われるが、もしそうだとすると、公順が宗尊歌に做ったのだとすれば、『竹風抄』あるいはその出典の「文永三年十月五百首歌」を参看したことになるのか。三首目の作者慶運は、応安二年（一二六九）六月までの生存は知られるので、あるいは『風雅集』に拠って宗尊詠を知り得た可能性が高いであろう。四首目と五首目の作者の正徹は、『風雅集』以後の人なので、該歌からの影響とすれば、『風雅集』に拠って宗尊歌を知り得た結果であろう。享受とした江戸時代の冷泉為村の歌は、『風雅集』所収の該歌の模倣的本歌取りと考えられる。

避暑

19 秋近き木の葉の色もかつ見^みえて夕べ涼^{すず}しき杜の下陰

〔通釈〕 避暑

秋の近いことを示す木の葉の色も一方では目に映って、夕方が涼しく感じられる杜の木々の下陰よ。

〔参考〕

秋近きけしきの杜に鳴く蟬の涙の露や下葉染むらむ（新古今集・夏・二七〇・良経）

山里の峰の雨雲とだえして夕べ涼しき楨の下露（新古今集・二七九・夏・後鳥羽院）

〔類歌〕 秋近き草の茂みに風立ちて夕日涼しき杜の下陰（風雅集・雑上・一五二三・基輔）

〔語釈〕 ○避暑―『永久百首』の設題が早いか。

蚊遣火

20 寂しさに柴折りくべし冬よりも煙けぶたき宿の蚊遣火

〔通釈〕 蚊遣火

寂しさに柴木を折ってくべた冬よりもさらに、立つ煙がけむたい我が家の蚊遣火よ。

〔本歌〕 寂しさに煙をだにもたじとて柴折りくぶる冬の山里（後拾遺集・冬・三九〇・和泉式部）

〔参考〕 寂しとて柴折りくべし山里になほ蚊遣火の煙立てけり（千五百番歌合・夏三・九八九・通親）

〔他出〕 夫木抄・雑一・煙・御集、蚊遣火・七九六一、二句「柴とりくべし」。

〔語釈〕 ○蚊遣火―『堀河百首』（夏）に設けられた題。○煙けぶたき―和泉式部の「蚊遣火の煙けぶたきあふぐ間

に夜は暑さもおほえざりけり」（和泉式部集・夏・三七）が早く、基俊の「夏の夜を下燃えあかす蚊遣火の煙けぶたき遠の山里」（基俊集・山蚊遣火・二六）が続く。建長八年（一二五六）九月十三夜の『百首歌合』に、顕朝が「今ははや小野の山なる炭窯の煙けぶたきころも来にけり」（冬・一一九〇）と詠んだ。左方は土御門院小宰相の「心なきしづが庵の蚊遣火も思ひありとは見えぬものは」（夏・一一八九）で、判者真観は「左、下句艶にこそ侍れ。上句いまま少し思はるべくや侍らん」としつつ、「右歌、重ね詞は不_二庶幾_一は侍れど、古き詞のめづらしからむを求め出でたらんは、捨つべきにもあらず。われと卅一字の不足に同じ事を重ね侍ること、術尽きたるしわざとは

見え侍れ、煙けぶたき、は和泉式部に譲りて、持とは申し侍るべし」と言うのである。判詞の大意は、以下のごとくであろうか。左の歌は、下句が艶であるが、上句はもう少し思案すべきである。右の歌については、重ね詞は望み詠むことではないが、古歌詞で珍しいようなものを探し出したような場合は、それを棄却すべきでもない。自ら、三十一字に足らないので同じ詞を重ねるのは、手段が尽きた行為（結果）とは見えるが、「煙けぶたき」は、和泉式部に免じて、持とする、ということであろう。宗尊が、同歌合を披見し、この真観の考え方に従った可能性は低いのではないか。

〔補説〕「冬よりも」は「けぶたき」にかかり、冬の柴焚く煙に比べて夏の蚊遣火のそれが一層煙たいことを表す。しかし、一般的な冬と夏の景趣の比較というよりは、この夏の蚊遣火の煙に、より一層「寂しさ」が募るといった含意もあろうか。とすれば勿論、家族と離ればなれになって鎌倉を追われ將軍を廃されるに至る一連の夏の出来事が念頭にあったころになろう。↓17。

六月祓

21 かく辛つちき夏も今はとせし御祓神は請うけずやなほ沈しづみけん

〔通釈〕 六月祓

このように辛い夏も、今はこれで（その穢れが除かれる）と行った六月祓の禊ぎ、それをしかし神は承引することなく、やはりそのままに沈淪したのであろうか

〔本歌〕 恋せじと御手洗川にせし禊しづぎ神は請うけずぞなりにけらしも（古今集・恋一・五〇一・詠人不知）

〔語釈〕 ○六月祓—みなづきばらへ。「夏越の祓」「夏祓」とも。古くは六月終り頃、院政期以降は六月晦日に固定して行われた祓。半年間の種々の穢れを払い除く年中行事。水辺に出て禊ぎをしたり、河社を設けて齋申を立てて人形や麻の葉に穢れを移して川に流したり、夏神楽で疫神を鎮めたりした。また、菅や茅などを編んだ茅輪をくぐり抜けることも行われた。『古今六帖』（第一・歳時・夏）の「なごしのはらへ」に当たる。「六月祓」の表記の詞書（歌題）は、勅撰集では『後拾遺集』（夏巻軸）が初出。○沈み—「御祓」との縁で、水に「沈み」が響くか。

〔補説〕 宗尊の四季歌には全体的に述懐性が認められるが（↓4）、特に12からここまで、恐らく宗尊の人生で最も辛かったであろう文永三年（一二六六）夏の出来事が（↓17）、夏題の歌にも濃い影を落としていて、述懐性の強い詠作が多い。

七月

22 思へた^{おも}だ^ださ^さても年経^へし故郷^こを心の外に別^{わか}れぬ^ぬる秋

〔通釈〕 七月

ただだだ思^{おも}つてみてくれ。それにしてもまあ長い年月を過^{すご}した故郷を、思いがけないことに別^{わか}れ来てしまった秋（七月）を。

〔本歌〕 都出でし春の嘆きにおとらめや年経る浦を別れぬる秋（源氏物語・明石・二四一・光源氏）

〔語釈〕 ○七月—七夕に寄せずに、「七月」単独の歌題は珍しい。○思へただ—「思へただ頼めていにし春だにも花の盛りはいかが待たれし」（後拾遺集・別・四八三・兼長）に拠るか。○故郷—鎌倉のこと。↓補説。○さても—

感動詞に解する。

〔補説〕 宗尊にとつて、本来の「故郷」は京都で、事实在鎌倉時の詠作からなる『瓊玉集』には、「月見ればあはれ都と忍ばれてなほ故郷の秋ぞ忘れぬ」（秋下・二二九）や「臥し侘びぬいかに寝し夜か草枕故郷人も夢に見えけむ」（雑上・四二五）、あるいは「年月はうつりにけりな古郷の都も知らぬながめせしまに」（雑上・四五六）などと、京都を「故郷」とする意識の歌が見えている。しかしながら、宗尊十一歳の建長四年（一二五二）春三月十九日に京都を立つて四月一日に將軍として鎌倉入りしてから、二十五歳の文永三年（一二六六）夏の騒動を経て（↓17）、同年秋七月八日に鎌倉を離れるまでの十四年の歳月が、その意識にも変化を生じさせたと思しい。該歌の歌題とその内容から判断して、「年経し故郷」は、疑いなく鎌倉を指していると考えられる。本抄の次の歌うたも、同様であらう。

七夕の別れし日より別れしにま〔た〕は待たれぬ故郷の秋（文永三年十月五百首歌・七月後朝・24）

故郷を思ひやるこそあはれなれ鶉鳴く野となりやしぬらん（同右・鶉・239。中書王御詠・雑・二五三、詞書「東の故郷を思ひやりて」）

春雨ののどけき比ぞ今さらに古郷人は恋しかりけり（文永五年十月三百首歌・春雨・314）

故郷を何の迷ひに別れ来て帰るかねたる心なるらん（文永三年八月百五十首歌・雑釈教・595）

いかばかりあはれなるらん故郷の払はぬ庭の秋の紅（文永六年五月百首歌・秋・725）

ただし一方で、「故郷を寝とは偲びて草枕おくと急ぎし暁の空」（文永三年十月五百首歌・不忍・148）の「故郷」は、鎌倉からの帰途次に懐旧の念が沸き上がった、京都を言ったと思しく、また「いかげん錦をとこそ思ひしに無き名たちきて帰る故郷」（同上・錦・177）の「故郷」は、明らかに京都を指している。また、「忘れめや鳥の初

音に立ち別れ泣く泣く出でし故郷の空（同上・鶏・230）や「故郷に恨むる人やなかるらん旅寝の夢も見えぬ夜半かな」（文永六年四月廿八日柿本影前百首歌・雑・672）の「故郷」は、鎌倉を指すかと思われるが、京都を指すと見てもおかしくはない。二つの「故郷」の間で揺れ動く宗尊の心情が垣間見えるのである。

本歌は、帰京する光源氏が、送別する明石入道に対して詠んだ惜別の歌。十四年前の春に京都を離れ、鎌倉を「故郷」とするまでの歳月を経て、秋にその鎌倉を立った宗尊は、自らを光源氏に重ねつつ、明石ならぬ鎌倉から心外にも追われた胸中の無念を吐露するか。

早秋

23 吹きはらへさのみもいかが絞るべき袖の涙の秋の初風

〔通釈〕 早秋

吹き払ってくれ、涙に濡れてばかりではどうしたものか。このままではどんなにか私が絞らなければならない袖を濡らす涙を、そこに吹く秋の初風よ。

〔参考〕 涙にぞ濡れつつ絞る世の人の辛き心は袖のしづくか（伊勢物語・七十五段・一三八・男）

藻塩垂れさのみもいかが浦風の干せかし袖を思ふかたより（壬二集・九条前内大臣家三十首・恋・怨恋・

一九〇六）

〔語釈〕 ○早秋―『古今六帖』（第一・歳時・秋）の「はつあき」（第一帖の目録では「早秋」）に当たるが、『和漢朗

詠集』（秋）に「早秋」の形で見える。○さのみもいかが絞るべき―特異な措辞。「さ」は、「絞るべき袖の涙」を

指すと見る。「さのみもいかが」で一旦切れて、「いかが絞るべき」に鎖る、と解した。「絞るべき」は、原表記「しほる」が「湿る」あるいは「萎る」で、ぐっしよりと濡れ萎れる（ぐっしよりと濡れ萎れさせる）に違いない、の意にも解されようか。西行の「我ながら疑はれぬる心かなゆゑなく袖を絞るべきかは」（山家集・恋百十首・一二三九）が先行の類例だが、これも「しほる」にも解されるか。

七月後朝

24 七夕の別れし日より別れしにま（口虫掛）* たは待たれぬ故郷ふるさとの秋あき

〔本文〕 ○底本第四句の「ま□は」を、一首の内容から私に「または」と推定して「た」を補う。

〔通釈〕 七月の後朝

七夕の両星が別れた七月七日の翌朝の日から、私も故郷と別れたのだが、七夕とは違い（二度と）廻りくるのを待つことができない故郷鎌倉の秋なのだ。

〔参考〕 七夕の別れし日より秋風の夜ことに寒くなりまさるかな（続後撰集・秋上・一二六五・源重之）

〔語釈〕 ○七月後朝―『古今六帖』（第一・歳時・秋）の「たなばた」に続く「あした」に当たる。「七夕後朝」は、『永久百首』（秋）に設題されている。「七月後朝」の表記は、他には『信生法師集』に「七月後朝に女に別れ侍るとて」（二五八）と見える。○故郷の秋―俊成の「その年の秋、故郷にてひとり月を見て暁方までありしにおぼえける／かくしもは姨捨山もなかりけんひとり月見る故郷の秋」（長秋草・二〇一）以降、季能（千五百番歌合・一一二〇、一六〇〇）や良経（秋篠月清集・故郷の秋を・一一六三）等の用例を経て、中世前期に散見する。勅撰

集では『玉葉集』（八〇四・從三位為子）に初出し、『風雅集』にも二首（一五七〇・為守、一五八三・慈勝）見える。

〔補説〕心ならずも追われることになった鎌倉を「故郷」とし、そこを文永三年（一二六六）七月八日に離れたことを七夕の後朝の別れに寄せつつ、一年に一度の廻り逢いを待つ七夕とは異なり、二度と再び待つて出会うことのできない鎌倉の秋を思つて詠嘆する。↓22。

秋夕

25 またもなきあはれは人も思ひやれかかる所の秋の夕暮ゆふぐれ

〔通釈〕 秋の夕べ

他にはないこの哀れは、人も思いやつてくれ。このような所の、秋の夕暮よ。

〔本歌〕 大方の秋のあはれを思ひやれ月に心はあくがれぬとも（千載集・秋上・二九九・紫式部）

〔語釈〕 ○秋夕―『六百番歌合』（秋）に設題されている。○またもなきあはれ―肯定的なこの上もないしみじみとした情趣の意にも、否定的な比類のない寂しい悲哀の意にも解されよう。この「五百首」（↓1）に通底する一連の悲痛な詠嘆に照らして、後者と見ておく。○かかる所―これも、前項の「またもなきあはれ」と同様に、肯定的に賛嘆されるような場所の意にも、否定的に詠嘆されるような場所の意にも解される。後者と見ておく。歌詞としては、『道命阿闍梨集』の「所の、木の枝のやうにて一尺ばかりなるを、人のもとに／音に聞く高麗唐は広くともかかる所はあらじとぞ思ふ」（二四二）が早い例。宗尊の同時代には、「都出でてかかる所の旅寝にもなれずはいか

が須磨の浦風」（人家集・右京大夫行家人人によませ侍りける住吉社歌合に）旅泊風を・一三三）や「夜もすがら悲しき物はうき浪のかかる所の旅寝なりけり」（安嘉門院四条五百首・鹿島社・旅・四九八）の作がある。

〔補説〕鎌倉を追われて帰洛する途次の何処かを想起して詠じた一首かとも疑われる。西行の「心無き身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」（新古今集・秋上・三六二）を微かに意識しているか。「またもなきあはれも」「かかる所」も、語釈に記したように、否定的に詠嘆する趣旨で用いられた表現であるとするが、しかし同時に、「秋の夕暮」の情趣をそのような悲嘆の中に詠じていることを、積極的に捉え返して読むべきであろう。

八月

26 草も木も色かはり行く時にこそ憂きもためしは有りと見えけれ

〔通釈〕 八月

草も木も、色が変わってゆくこの（秋八月の）時にこそ、憂く辛いこともその最たる例がある、と分かるのであった。

〔本歌〕 草も木も色かはれどもわたつ海の浪の花にぞ秋なかりける（古今集・秋下・二五〇・康秀）

〔参考〕 草も木も色かはりゆく秋風に里をばかれず衣うつなり（壬二集・為家卿家百首・秋・一二八九）

あはざりし昔を今にくらべてぞ憂きはためしもありと知らるる（続古今集・恋四・一二九九・平政村）

〔他出〕 中書王御詠・秋の歌の中に・一二一。

〔語釈〕 ○八月―『古今六帖』（第一・歳時・秋）の「はつき」。○ためし―ここは、物事の基準、典型といった意

か。参考の政村歌は、「逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物も思はざりけり」（拾遺集・恋二・敦忠・七一〇）と
同工異曲で、この「ためし」も、同様の意味。

九月

27 たぐひなき辛^{つら}さなりけり秋^{あき}深くなり行く比^ひの夜半^{よなはん}の寢^ね覚^めめは

〔通釈〕 九月

比類のない辛さなのであった。秋が深くなってゆくこの頃の、夜中の眠りからの目覚めは。

〔参考〕 たぐひなき心ちこそすれ秋の夜の月すむ峰のさ牡鹿の声（山家集・秋・月前鹿・三九七）

人知れず心ながらや時雨るらん更けゆく秋の夜半の寢覚めに（後拾遺集・雑三・九三六・相模。相模集・
八三）

秋深き夜半の寢覚めはわりなしと知らせ顔なる虫の声かな（相模集・秋・五二五）

〔語釈〕 ○九月―『古今六帖』（第一・歳時・秋）の「ながつき」。○辛さなりけり―古くは躬恒の「散るにだにあは

ましものを山桜待たぬは花の辛さなりけり」（躬恒集・三八一）があり、比較的近くは俊成の「恨みわびなほ返せ
どもさ夜衣夢にも同じ辛さなりけり」（俊成五社百首・春日・恋・恨・二八〇）がある。後者は『続後撰集』（恋
二・七二五）に採られ、これが勅撰集の初出で、前者は続く『続古今集』（春下・一五二）に入る。宗尊は、これ
らを学ぶか。

28 鹿の鳴く野山の末に霧晴れて尾花葛花秋風ぞ吹く

〔通釈〕 秋興

(それまで霧にこめられていた) 鹿が鳴く野山のずっと先の方で、霧が晴れて、現れた尾花や葛の花に秋風が吹いているよ。

〔本歌〕 萩の花尾花葛花撫子の花女郎花また藤袴朝顔の花(万葉集・巻八・秋雑歌・一五三八・憶良)

〔参考〕 露しげき尾花葛花吹く風に玉ぬき散らす秋の夕暮(治承三十六人歌合・二八〇・師光。万代集・秋上・

九一九。師光集・秋の歌の中に・一一八)

〔類歌〕 立ちかへる浪かと見えて三島野の尾花葛花秋風ぞ吹く(文保百首・秋・二六三七・国冬)

〔語釈〕 ○秋興―秋の感興。秋に物思ふこと。伝統的漢語。題としては『和漢朗詠集』(秋)に見える。○野山の末

―定家の「立つ煙野山の末の寂しさは秋とも分かず夕暮の空」(千五百番歌合・雑一・二七四九・定家)に始まる語で、用例はさほど多くはない。順徳院にも定家詠に做ったと思われる「かきくらす野山の末の雪のうちに一村見え立つ煙かな」(紫禁和歌集・同(建保四年)十一月一日会・遠村雪・九二二)があり、これも宗尊が目にした可能性が高い。『瓊玉集』にも、「見ず知らず野山の末の気色まで心に浮かぶ秋の夕暮」(秋上・秋夕を一九九)や「まだ知らぬ野山の末にあくがれてかはる草木に秋を見るかな」(雑上・旅の御歌とて・四二七)の作があつて、宗尊好みの語と言える。

〔補説〕 「鹿」「霧」「秋風」の組み合わせの歌は、「宮城野やながむる末は霧こめて秋風ぞ吹くさ鹿の声」(内裏詩歌

合建保元年二月・野外秋望・七二・家衡）や「立田山朝霧隠れ鳴く鹿の声の色なる秋風ぞ吹く」（万代集・秋下・一〇八九・忠信）が目に入るが、これらは「霧」が立ち込めている中で「鹿」の声が「秋風」に乗って聞こえてくる趣向で、該歌の「霧晴れて」は対照的。

類歌に挙げた国冬詠は下句を同じくするが、偶合か宗尊詠からの影響か、現時点では判断しかねる。

重陽

29 今日けふごとに積つもれる菊の露よりも憂うれさが涙や淵となるらん

〔通釈〕 重陽

毎年の重陽九月九日の今日毎に積もっている菊の露よりも、私の憂く辛い涙が、それこそ深い淵となるのであらうか。

〔本歌〕 我が宿の菊の白露今日ごとに幾世積もりて淵となるらむ（拾遺集・秋・三条の後の宮の裳着侍ける屏風に、

九月九日の所・一八四・元輔）

〔語釈〕 ○重陽―九月九日の節供「九」は陽数で、それが重なるから重陽という。古来中国ではこの日に、高い丘に登り、菊酒を酌んだり、茱萸の実を頭に挿したりすると邪気を払うとされた。日本では宮廷行事となり、平安時代には、朝廷で重陽宴が行われた。菊水の話も相俟ってか、この時期の花である菊は延寿の効能が信じられたので、菊にまつわる催事・所作が行われ、歌にも詠まれた。歌題としては、『古今六帖』（第一・歳時・秋）の「（ながづき）九日」に当たる。『和漢朗詠集』（秋）でも「九日付菊」。

30 昔思ふ泪もいとど降り添へて時雨がちなる秋の暮かなむかし ふかしのなみぞ

〔通釈〕 暮の秋

昔を思い起こすにわかな涙もよりいっそう降り加わって、時雨がちな秋の暮であることよ。

〔参考〕 昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山郭公（新古今集・夏・二〇一・俊成）

袖にさへ涙もいとどふりそひぬ十づつ六の秋の別れに（百首歌合建長八年・秋・七五四・家良）

雨涙身を知り顔にふりそへて恋のま袖は干すかたもなし（宝治百首・恋・寄雨恋・二四八五・為家）

山深み旅の日数のふるままに時雨がちなる秋の夕暮（万代集・雑四・三三四九・平範圍。別本和漢兼作集・

三三七）

〔語釈〕 ○暮秋―『六百番歌合』（秋）に設けられた題。○降り添へて―秋の暮に冬を先取りして時雨が降るのに加

えて、時雨のようなにわかな涙が降る、ということ。○時雨がちなる―時雨がはっきりと降る傾向を見せる、とい

う趣旨。宗尊は別に、「長月の晦日頃、時雨間なくかきくれたるに、山里なる人に／山里の梢もいかなりぬらん

都の空ぞ時雨がちなる」（中書王御詠・秋・一二四）と読んでいる。

〔補説〕 結句の「秋の暮かな」も一見平凡だが、そう古くから使われてきた句ではない。『堀河百首』の「たまさか

に逢ひて別れし人よりもまさりて惜しき秋の暮かな」（秋・九月尽・八七九・紀伊）に始まり、勅撰集では、『千載

集』の俊成詠「さりとともと思ふ心も虫の音も弱りはてぬる秋の暮かな」（秋下・三三三三）が初出で、上記の紀伊詠

が『続後撰集』（秋下・四五五）に収められ、『続古今集』の為氏詠「嵐吹く山の木の葉の空にのみさそはれてゆく

秋の暮かな」（秋下・五三九）が続くのである。参考の諸詠を併せ見れば、比較的近い時代の有力歌人や歌集の歌うたが用いている詞を組み合わせたような歌ということになる。初期の『瓊玉集』の時代から見られる宗尊の詠作の傾向で、前代から同時代の和歌までをよく学んでいたことを窺わせる、宗尊らしい詠作方法と言つてよいであろう。

なお、参考歌の中では、俊成の「昔思ふ」歌が宗尊に強く意識されていたと思われるが、この歌は言うまでもなく、「蘭省花時錦帳下（らんせいのはなのときのさんちやうのもと） 廬山雨夜草菴中（ろさんのあめのよのさうあんのうち）」（和漢朗詠集・山家・五五五・白居易）が本文として踏まえられていて、宗尊もそれを認識していたであろう。

閏九月

31 おのづから秋ははれる年にこそげに長月も名には立ちけれ

〔通釈〕 閏九月

自然と、秋が長月九月に一月付け加わっている年にこそ、まことに長月も、その長いという名の評判が立つつのであったよ。

〔語釈〕 ○閏九月―歌題としては「閏九月尽（閏九月晦日）」がより一般的で、「閏九月」は珍しい。○おのづから―「名には立ちけれ」にかかる。○秋加はれる年―閏九月で秋が一月余分に加わっている年、ということ。↓補注。この措辞は、天曆九年（九五五）閏九月『内裏歌合』の「紅のやしほの色は紅葉ばに秋加われる年にざりける」

(紅葉・四。清正集・三八。万代集・秋上・一二三三)が早い例。西行に「後九月、月を翫ぶと云ふ事を／月見れば秋加はれる年はまた飽かぬ心も空にぞありける」(山家集・秋・三八一。西行法師家集・秋・後の九月に・二二〇)の作がある。

〔通釈〕 この「五百首」(↓1)の詠まれた文永三年(一二六六)は平年で、それ以前で近い閏九月の年は、建長三年(一二五一)。

立冬

32 身ひと一つに秋の心をとどめ置をきてなべての世には冬ふゆぞ来きにける

〔通釈〕 立冬

我が身一つに秋の情趣を留め置いて、しかし、すべての世の中には冬がやって来たのだ。

〔本歌〕 大方の我が身一つの憂きからなべての世をも怨みつるかな(拾遺集・恋五・九五三・貫之)

月見ればちちに物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど(古今集・秋上・一九三・千里)

〔影響〕 なべて世の秋の心を身一つの愁へになして虫や鳴くらん(延文百首・秋・虫・一一四九。公賢集・七九二)

〔語釈〕 ○立冬―歌題としては新奇。○秋の心―秋という季節の情趣、あるいはそれを解する気持ち、の意味か。

「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(古今集・春上・五三・業平)や「山も野も千種にももの悲しきは秋の心をやるかたやなき」(新撰万葉集・三七六)が早い、これらの「春の心」「秋の心」は、春・秋の季節に於ける人の心情、という意味。また、「吹く風に深きたのみのむなしくは秋の心を浅しと思はむ」(後撰

集・秋中・三三三・読人不知)の「秋の心」は、秋を擬人化して言う、秋の思いやりの心情の意味。

〔補説〕 影響歌とした公賢詠は、「ことごと悲しかりけりむべしこそ秋の心を愁へといひけれ」(千載集・秋下・

三五一・季通)を踏まえていようが、この季通歌はまた、離合詩の「物色自堪傷客意(ものいろはおのづからかくのころをいたましむるにたへたり) 宜将愁字作秋心(うべなりうれへのじをもてあきのころにつくれること)」(和漢朗詠集・秋興・二二四・篁)を踏まえ、字訓歌「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ」(古今集・秋下・二四九・康秀)に倣ったもの。

氷

33 とけやらぬ思ひを何にたとへまし氷りも春の水の白浪しち

〔通釈〕 氷

十分にうちとけることのない思いを、何に喩えたらよいのか。春には解けて流れる水の白波も今は氷が張っている。(このようなものなのか)

〔参考〕 人を思ふ思ひを何にたとへまし室の八島も名のみなりけり(重之女集・恋・八一)

氷りぬし水の白波岩越えて清滝川に春風ぞ吹く(続古今集春上・春上・一三・良経。万代集・春上・八〇。秋篠月清集・治承題百首・立春・四〇四。後京極殿御自歌合・六)

〔語釈〕 ○氷―『古今六帖』(第一・歳時・天)の「こほり」。○とけ―気持ちかがほくれる意。「氷り」「春」「水」の

縁で、氷が解ける意が掛かる。○思ひ―「氷り」「水」の対照的縁語として「火」が響くか。○氷りも春の―底本

の用字は「春」だが、主意は「氷りも張る」で、「はる」を掛詞として、「春の水の白浪」に鎖ると解する。○水の白浪―原拠は、『古今集』の「石間行く水の白浪立帰りかくこそは見め飽かずもあるかな」（恋四・六八二・読人不_知）で、参考の良経詠もこれを本歌とする。

〔補説〕ここにきて、再び述懐性の強い季節詠。「とけやらぬ思ひ」は、妻子とも別れて將軍を廢されて鎌倉から帰洛した宗尊の、この時点での実感なのであるう。それを、冬には氷っているが春になれば氷が解ける「水の白浪」に喩えたことに、やや希望を見出そうとした心情が窺えるか。

寒夜

34 氷る夜は玉をなしける我が涙_{なみた}せきあへぬ袖はおろかならねど

〔通釈〕 寒夜

寒さに氷るこの夜は、我が涙は玉となって置いたのだ。その涙を、塞き止めきれない袖、それは粗末ではない袖、それはだけど。

〔本歌〕 おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつ瀬なれば（古今集・恋二・五五七・小町）

〔参考〕 氷る夜は月の影見る鏡山昔をうつす冬のかたみに（建保名所百首・冬・鏡山・七一三・俊成卿女）

おろかなる涙ぞあだに名取川せきあへぬ袖はあらはれぬとも（建保名所百首・恋・名取河・九四九。紫禁和歌集・六九四、二句「涙ぞあだの」五句「あらはれずとも」）

〔語釈〕 ○寒夜―「寒夜千鳥」他「寒夜」の結題には多く用いられるが、「寒夜」単独の形の題は珍しい。○おろ

かならねど一本歌の「おろかなる涙」は、清行の贈歌「包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり」(五五六)を承けて、相手である清行のいいかげんな・気まぐれな涙、の意。該歌は、袖について粗末というわけではないのに、と言う。氷った涙の玉の多さを暗示する。

五節

35 幾千世もをとめの姿君ぞ見ん限りも知らぬ雲の通ひ路

〔通釈〕 五節

幾千代にも渡つて、五節の舞姫の天つ乙女達の姿を、我が君は見るでしょう。限りも知らない遙かな(その乙女達が帰って行くはずの)天空の雲の通い路のように(ずっと続いて)。

〔本歌〕

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ(古今集・雑上・八七二・遍昭)
動きなき巖の果ても君ぞ見むをとめの袖の撫で尽くすまで(拾遺集・賀・三〇〇・元輔)

〔参考〕

雨の下めぐむ草木のめもはるに限りも知らぬ御代の末末(新古今集・賀・七三四・式子)
万代を重ねる声にしるさかな限りも知らぬ君が御世とは(続古今集・神祇・七三八・通親)

〔語釈〕

〇五節―ごせち。大嘗会や新嘗祭の際に、五節舞姫による舞樂を中心に行われる公事。その「五節舞姫」あるいは「五節舞」の略でもある。公事は、十一月中の丑の日から辰の日にかけて行われる。丑の日に五節帳台試、寅の日に五節淵酔と五節御前試があり、卯の日は新嘗祭では舞姫の付き添いの童女御覧があり、辰の日、豊明の夜に五節舞が演じられる。天武天皇の代に起るといふ。五節とは、『春秋左氏伝』昭公元年条の記事に基づき、遅・

速・本・末・中の五声の節の意という。歌題としては、『永久百首』に設けられている。○をとめ―五節の舞姫のこと。舞う少女。人数は四人以上とされる。○君―詠作時は、直接には宗尊の弟である亀山天皇を指すことになるが、父後嵯峨院を意識しているように感じられなくもない。ちなみに、参考の式子詠の「君」は、「正治初度百首」の歌であるので、後鳥羽院を指し、通親詠の「君」は、詞書にある「建春門院」即ち後白河女御・高倉生母で皇太后となる平滋子を指し、この場合の「御世」は寿命の意であろう。

〔補説〕 下句は、「御世」の永続を言う比喩であろうが、帰洛後にまだ参上してない皇居あるいは仙洞御所への遠い道筋を暗喩しているように解されなくもないか。

炭竈

36 かくしつ、いつまでか世にすみ竈かまのなげきの煙た立ちもまさらん

〔通釈〕 炭竈

このようにしながら、いったいいつまでこの世に住み、炭竈に入れる投げ木から盛んに立ち上る煙のように、胸に焦がす嘆きの煙がしきりに立ち上るのだろうか。

〔参考〕 かくしつ、つ世をや尽くさむ高砂の尾上に立てる松ならなくに（古今集・雑上・九〇八・読人不知）

うちはへて燻るも苦しいかでなほ世にすみ竈の煙絶えなん（後拾遺集・恋四・八一九・範永女）

煙絶えて焼く人もなき炭竈の跡のなげきを誰か樵るらむ（新古今集・雑中・一六六九・賀茂重保）

〔語釈〕 ○炭竈―『古今六帖』（第二・山）の「すみがま」。○世にすみ竈のなげきの煙―「世に住み」から「すみ」

を掛詞に「炭窯の」に鎖り、さらに「炭窯の投げ木の煙」から「なげき」を掛詞に「嘆きの煙」を起こす。この「五百首」(↓1)で宗尊は「身を焦がす嘆きの煙くらべみん富士も浅間も立ちはまさらじ」(煙・68)とも詠んでいる。

〔補説〕 冬の「炭竈」の歌というよりは、述懐そのものと言ってよい歌。

歳暮

37 憂く辛く今年ことはさらに惜おしまれずただ早暮はやくれぬ月日いそ急いそぎて

〔通釈〕 歳暮

憂く辛くて、今年が行くのはいつこうに惜しいと思われない。ただもう、すでに暮れてしまった。月日が慌ただしく過ぎて。

〔語釈〕 ○歳暮―『古今六帖』(第一・歳時・冬)の「としのくれ」(第一帖の目録では「歳暮」)。○憂く辛く―類例の「憂く辛き」を併せても古い用例は見えない。定家の文治三年(一一八七)冬「閑居百首」の「憂く辛き人をも身をもよし知らじただ時の間の逢ふこともがな」(拾遺愚草・恋・三七五)が早い例となる。これに倣ってか為家は、「憂く辛く思ひ取りにし年月は我がいつはりになほや恋ひまし」(洞院撰政治家百首・恋・怨恋・一四一六)を初めとして、『中院集』に二首(三〇、八六)、『為家集』に一首(一四五五)、「憂く辛く」を初句に置く歌を残している。これらに学んだか。

〔補説〕 この歌を収める「五百首」(↓1)の詠まれた文永三年(一二六六)は、心ならずも鎌倉を追われ將軍を廢

されて帰洛した年である（↓17）。「五百首」の詠作は十月なので、「歳暮」の題詠としても、「早暮れね」とあるべきかと疑われなくもないが、「早暮れぬ」であれば、むしろ十月の時点で早くも「歳暮」を実感していた、ということであろうか。

世

38 かかる世にさてもあらるる命こそはかなきもの物のつれなかりけり

〔通釈〕

世

このような世の中で、それでもやはり生きていけることができる命こそは、はかないものであり、それがまた思うにまかせないのであったな。

〔参考〕

散ると見てさてもあられぬ辛さかな人の頼めし宿の梅が枝（弘長百首・春・梅・五四・行家）

いつはりと思ひとられぬ夕べこそはかなきものの悲しかりけれ（新勅撰集・恋三・八四四・藻壁門院少将。

閑窓撰歌合建長三年・三五。新三十六人撰・二三七）

〔類歌〕

厭へとやさてもあられし世の中の憂きことしげくなりまさるらん（柳葉集・卷五 文永二年潤四月三百六十

首歌・雑・八四七。中書王御詠・述懐・三〇九）

〔語釈〕

○世―歌題としては珍しいか。○さてもあらるる―類歌の「さてもあられし」も同様で、「さてもあり」に

助動詞の「る」が付いた形で珍しい。参考の『弘長百首』詠が、近い先行例。宗尊は、弘長元年（一二六一）に京都で父後嵯峨院が召した同百首の題に従って、鎌倉に於いて翌年冬に百首歌をものしている。同百首をいち早く披

見したかと想像される。あるいは、この行家詠などに刺激された可能性もあろうか。○命こそ―結句にかかるのであれば、「つれなかりけれ」とあるべき。次句の「はかなき」にかかり、それが「ものの」に続いて、係り結びが流れたと解する。○ものの―「の」は、格助詞で主格と見るが、同格の趣意もあるか。↓補説。

〔補説〕「ものの」を、逆接の接続助詞と解することもできよう。その場合も、下句は、「はかない」とはいうものの、思うにまかせないのであったな」という意味で、一首の大意は変わらない。

39 長き夜の寢覚めねの後みも見る夢は心こゝろに浮うかぶ昔むかしなりけり

〔通釈〕 昔

長い夜に眠りから目覚めた後にまた（現に）見る夢は、心の中に浮かんでくる昔のことなのであったな。

〔参考〕 現にて夢なるものは長き夜の寢覚めに思ふ昔なりけり（続古今集・雑下・中務卿親王家百首に・一八一七・

公朝）

憂き身こそなほ山陰にしづめども心に浮かぶ月を見せばや（続後撰集・雑中・一一三三・慈円）

見るままに現の夢となりゆくは定めなき世の昔なりけり（続後撰集・雑下・往事似夢といふことを・

一二一七・光成）

〔類歌〕 長き夜の寢覚めの床に思ひ出でておどろく夢は昔なりけり（中書王御詠・雑・懷旧・三三三）

〔他出〕 中書王御詠・雑・懷旧・三三二四。

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔語釈〕 ○昔―歌題としては珍しいか。

〔補説〕 大枠では、「往事渺茫都似夢（わうしべうぼうとしてすべてゆめににたり） 旧遊零落半帰泉（きういうれいらくしてなかばせんにくゐす）」（和漢朗詠集・懷旧・七四三・白居易）といった、往昔を夢と見る詩的類型の上にある歌。

参考の公朝歌は、弘長元年（一二六一）九月に、宗尊が召した百首の一首で、作者公朝は当時の鎌倉歌壇の主要歌人。

暁

40 夢のうちの覚めぬ迷ひも明くる夜を我が暁と思はましかば

〔通釈〕 暁

夢の中の覚醒することのない迷いも、その夜が明けるのを、私自身の（迷いが明ける）暁と思えたらいいのにな。

〔参考〕 我はまたむなしき夢の覚めぬ間に誰が暁と鳥の鳴くらん（続古今集・哀傷・暁の心をよめる・一四七三・雅成）

長き夜の夢のうちにも待ちわびぬ覚むるならひの暁の空（続古今集・釈教・未得真覚恒処夢中、故仏説為生死長夜の心を・八一四・法印長恵）

〔類歌〕

見る夢の迷ひのうちに明け暮れて覚めぬを覚むと思ひけるかな（中書王御詠・雑・未得真覚恒処夢中・

〔語釈〕 〇暁―『和漢朗詠集』に設けられた題。ただし、『古今六帖』の題を踏襲した『新撰六帖題和歌』（第二）の、現存する『古今六帖』に見えない（増補か）題にも「あかつき」がある。また、承久二年（一二二〇）秋慈円勸進の「四季題百首」（拾玉集、壬二集、拾遺愚草）にも見える。〇我が暁―「鳥の音を聞きてののちもまどろまず我が暁の程を知れとや」（宝治百首・雑・暁鶏・三一九九・道助）が先行例だが、宗尊の念頭にはむしろ参考の雅成歌があったのではないだろうか。

〔補説〕 類歌に示した宗尊詠の題「未得真覚恒処夢中」は、『成唯識論』中の一節「未_レ得_二真覚_一恒処_二夢中_一、故仏説為_二生死長夜_一」（大藏經・三十一卷）によるもの。該歌もこの、いまだ真の悟りを得ない内は常に夢の中にいるのと同じで、だから仏は説いてこれを生死の長夜というのだ、といった考え方に従っていよう。参考の両歌および、後出の例だが、「迷ひ来し憂き世の夢を寝るが内に見はてて覚むる暁もがな」（新千載集・釈教・八四五・昌義法師）や「高野山迷ひの夢も覚むるやとその暁を待たぬ夜ぞなき」（太平記・光嚴院禪定法皇行脚事・一二四・光嚴院）等から、「暁」は、無明の闇の「迷ひ」から覚めるときとの意味合いがあった、と解されよう。

41 旅衣袖も涙にそぼちつ、いくしののめ露^{つゆはら}払ひけん
曙

〔通釈〕 曙

旅衣の袖も涙に濡れそぼちながら進んで行き、一体幾つの明け方の露を払ったのだろうか。

〔参考〕 心から花の雪にそほちつつうくひずとのみ鳥の鳴くらむ（古今集・物名・うぐひす・四三二・敏行）

〔他出〕 中書王御詠・雑・旅歌とて・二三二、結句「露払ふらん」。

〔語釈〕 ○曙―歌題としては珍しいか。○そほちつついくしのしのめの―「そほちつつ行く」から、「いく」を掛詞に、「幾しのめの」へ鎖る。「しのめ」は、夜明け方の空が白む頃。

朝

42 山見^みれは雲たえだえ^くにたなび^{なる}きて物寂^{さむ}しかる朝^{あさ}ぼらけかな

〔本文〕 ○底本第三句「たるひきて」は、「る」（留あるいは累）を「な」（奈）に誤写したと見て、私に「たなびきて」に改める。

〔通釈〕 朝

山を見ると、雲がたえだえにたなびいて、何となく物寂しい夜明け方であるな。

〔参考〕 たえだえにたなびく雲のあらはれて紛ひもはてぬ山桜かな（新勅撰集・春上・六七・藻壁門院少将。新

三十六人撰・二三一。三十六人大歌合・一八二）

山里は物寂しかることこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり（和漢朗詠集・山家・五六三）

明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな（後拾遺集・恋二・六七二・道信）

〔語釈〕 ○朝―『古今六帖』の第一・歳時と第五・雑思に「あした」と見えるが、これは共に『新撰六帖題和歌』で

は「のちのあした」とあるもので、歌の内容も後朝であるので（前者は七夕後朝）、当たらない。40の「暁」と同

様に、『新撰六帖題和歌』（第一）の現存『古今六帖』に見えない（増補か）題の「あかつき」に続く「あした」が相当する。その『新撰六帖題和歌』では、「あした」「ひる」「ゆふべ」と続いていて、該歌と次歌と次次歌の「朝」「昼」「夕」の並びに一致する。なお、「朝」の表記では、承久二年（一二二〇）秋慈円勸進の「四季題百首」（拾玉集、壬二集、拾遺愚草）に見える。○朝ぼらけ―夜がほのほのと明ける頃。「曙」と同じ頃。

昼

43 久かたの天つ日影かげの半空そらに傾かたふかぬ身といつ思ひけん

〔通釈〕 昼

天の日の光が中空でまだ傾いてはいないように、傾くことのない我が身だと、いったい何時思ったのだろうか。

〔参考〕 傾かぬ妹が心の日影かな中空にのみ物思ひして（六百番歌合・恋上・昼恋・八二二・慈円）

名にしおふ今宵は秋の中空に影傾かず澄める月かな（歌合文永二年八月十五夜・停午月・八六・為教）

〔語釈〕 ○昼―歌題としては珍しい。『新撰六帖題和歌』（第一）の現存『古今六帖』に見えない（増補か）題の「ひる」に相当する。↓42語釈。○天つ日影―天にある日の光、太陽のこと。後鳥羽院の「いく年の天つ日影にさらすらん誰がてづくりの布引の滝」（後鳥羽院御集・建保四年二月御百首・夏・五二四）が早い例で、『宝治百首』には家良の「久方の天つ日影も曇りなき御代のためとや照り始めけん」（雑・寄日祝・三九六一）の他に、三首（二二五八・知家、三九七九・為氏、三九八二・為繼）の用例がある。これらに学ぶか。

〔補説〕 將軍を廢された自己の境遇を寓意か。

夕

44 いにしへを昨日の夢とおどろけば現の外にけふも暮れつつ、

〔通釈〕 夕べ

過ぎ去った頃を、ただ昨日見た夢だったのだと気が付き驚くと、現実とはかけ離れたところで今日も暮れていて。

〔参考〕 現には臥せど寝られず起きかへり昨日の夢を何時か忘れん（後撰集・恋五・九二五・読人不知）

〔他出〕 中書王御詠・雑・夢・三二八、結句「今日も暮れぬる」。

〔類歌〕 寝るがうちも現の外の世界を見よ何をとて夢と分くらん（隣女集・卷四自文永九年至建治三年・雑・夢・二五七四）

いにしへは今と覚えて見る夢の驚けばまた昔なりけり（他阿上人集・雑・四二五）

〔語釈〕 ○夕―『新撰六帖題和歌』（第一）の現存『古今六帖』に見えない（増補か）題の「ゆふべ」に相当する。

なお、「夕」の表記では、承久二年（一二二〇）秋慈円勧進の「四季題百首」（拾玉集、壬二集、拾遺愚草）に見える。↓42語釈。

〔補説〕 過去はほんの昨日の夢のようだと現実には驚くが、今日もまた夢のように現実感がなく暮れて行って、夢と

現の区別がつかないという趣。

夕暗

45 忘れめや月をも待たず関越えて都たどりし夕暗ゆふの空そら

〔通釈〕 夕暗

忘れましょうか。月が出るのも待たずに、逢坂の関を越えて、都へと道を辿った夕闇の空を。

〔参考〕 夕暮の月よりさきに関越えて木の下暗き桐原の駒（新撰六帖・第一・こまびき・一四三・知家）

〔語釈〕 ○夕暗―『古今六帖』（第一・天）の「ゆふやみ」（第一帖目録は「夕暗」と表記）。↓次項。○夕暗の空―題から見ても、また底本が「ゆふぐれのそら」を736と777で「夕暮の空」と表記していることから見ても、「ゆふやみのそら」であろう。

〔語釈〕 ○関―逢坂の関。山城と近江の国境。京畿の東を画し、東国への出入り口。○忘れめや―宗尊好尚の句。『柳葉集』に二首（七九一、八二二）、本抄に七首（45、59 Ⅱ 中書王御詠・二三四、63、230 Ⅱ 中書王御詠・二三二、472、701、861）見える。

〔補説〕 宗尊は、文永三年（一二六六）七月二十日の刻に入京し、六波羅の北条時茂邸に入ったという。とすれば、逢坂の関を越えたのは、二十日の月が出る前の時間帯で、そのまま暗闇の中を六波羅に向かったとしても不思議はない。実体験を詠じたものであるが、参考の知家詠を意識して、八月十六日の駒牽のために信濃国桐原の御牧の駒が逢坂の関を越えていく風情を、自らに重ね合わせたかとも疑われる。

天

46 世を照らす月日の影の明らけき空み見る時はなほ頼たのまれぬ

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔通釈〕 天

この世を照らす月の光が明るく澄んでいる空を見る時は、やはり自然と頼りにしてしまふのだ。

〔本歌〕 山別れ飛び行く雲の帰り来る影みる時はなほ頼まれぬ（新古今集・雲・雑下・一六九三・道真）

〔参考〕 世を照らす月日の光見るたびに曇らじと思ふ心こそつけ（続古今集・雑中・一六七七・実氏。洞院撰政治家百

首・雑・述懐・一七九六）

曇りなき鏡の山の月を見て明らけき代を空に知るかな（新古今集・賀・七五一・永範）

空はれて照らす月日の明らけく君をあふげばいや高の山（万代集・神祇・一六三六・経光。玉葉集・賀・

一一〇一）

〔語釈〕 ○天―『拾遺集』に「詠天」として人麿の「空の海に雲の浪立ち月の舟星の林に漕ぎかくる見ゆ」（雑上・

四八八）が見える。○月日の影―日光と月光。帝王と后妃を寓意か。

〔補説〕 大宰府左遷からの帰洛を、帰り来る雲に寄せて期待した道真詠を踏まえて、帰洛は果たしたもののいまだ不

遇をかこつ自身の復権を期待する意味を込めるか。弟亀山天皇代だが、「世を照らす月日の影の明らけき空」は、

父帝後嵯峨院の君臨と母妃（准后）棟子の存在を寓意するか。

夕日

47 いたづらに今日も暮れぬとながめつつ夕日に干さぬ我が袂かな

〔通釈〕 夕日

ただむなしく今日も暮れた、と、ぼうっと視線をさまよわせながら、夕日に（涙を）乾かすこともない我が袂であることよ。

〔参考〕 いたづらに今日も暮れぬる人相にまためぐりあふ我が涙かな（万代集・雑二・三〇五七・慶政上人）

いたづらに濡るる袖かな墨染の今日も暮れぬる空をながめて（新撰六帖・第四・おもひをのぶ・一二七三・知家）

朝露に濡れにし袖を干す程にやがて夕立つ我が袂かな（山家集・恋百十首・一二六六）

〔類歌〕 世を憂しと思ふ涙にしはたれて干す間も知らぬ我が袂かな（柳葉集・卷三・雑・弘長三年八月、三代集詞に

て読み侍りし百首歌・四四六）

〔語釈〕 ○夕日―歌題としては珍しい。○夕日に干さぬ―新奇な句。夕日を眺めて流す涙を、その夕日に乾かすこともない、ということ。「いたづらに」「ながめ」「袂」から、涙が暗喩されている。

〔補説〕 類歌は、「限りなく思ふ涙にそほちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに」（古今集・離別・四〇一・読人不知）の第二句を取りつつ、為家の「露けさは秋の草葉をたぐひとて干す間も知らぬ我が袂かな」（新撰六帖・第六・あきの草・一九二七）にも倣った作。『瓊玉集』にも窺われるとおり、宗尊は『新撰六帖』を披見していたと推測される。従って、参考の知家詠も宗尊の視野に入っていたであろう。同じく慶政上人歌を収める『万代集』も、宗尊の手許にあった可能性を見てもよいであろう。西行詠については、なお他の事例と併せて検証されるべきである。

月

48 長き夜も明くるをきはとまどろまで愁へぞ人に月は見せけり

〔通釈〕 月

長い夜も、明けるまでを限りだと、まどろむこともなくて、(夜明けまで) 月は人に対して愁えを見せたのだ。た。

〔参考〕 まどろまで物思ふ宿の長き夜は鳥の音ばかりうれしきはなし(新勅撰集・雑二・一一七一・匡房。堀河百

首・雑・暁・一二八二)

〔他出〕 中書王御詠・秋・愁へに沈みてのち、月を見て・一一六、二句「明くるをきはに」結句「月は見せける」。

〔影響〕 夜な夜なは明くるをきはに待ちつくす限りはいつも暁の鐘(伏見院御集・暁恋・二〇三六)

分きてなど夜しもまさる愁へにて明くるをきはに虫の鳴くらん(風雅集・秋中・五五九・章義門院)

〔語釈〕 ○月―「月」単独の題は、『古今集』(二九五)から見え、平安時代の歌合にも散見する。まとまった設題と

しては、『和漢朗詠集』の「八月十五夜」に「付けたり」として見えるのが早く、『堀河百首』が続く。○明くるをきはと―夜明けを境目としてそれまで、ということ。先行類句は、「灯火の尽くるをきはとながめつつあはれ幾夜を嘆き来ぬらん」(二条太皇太后宮大式集・一一七)や「灯火の尽くるをきはにながめつつまどろまぬ夜を幾夜経ぬらむ」(物語二百番歌合・心高・三六〇・御製)、あるいは「灯火の尽くるをきはに起きるつつこの世を夢とさとり行くかな」(後鳥羽院御集・雑百首・一〇八二)の「尽くるをきはに」で、白氏の「上陽白髮人」を踏まえる。

↓補注。

〔補説〕 一首全体が「月」を擬人化していて、「まどろまで」の主語も「月」と見れば、月はまどろみもせず終夜、悲哀の相を人に見せた、という主旨に解される。また、下句だけが「月」を擬人化していて、「まどろまで」の主語は「人」(宗尊)と取ることもできる。しかしいずれの場合でも結局は、その「月」を眺める「人」たる宗尊自

身が、まどろむこともできずに終夜、憂愁の心で月をながめた、ということではあろう。

語釈に示した「尽くるをきはに」の歌々に宗尊が学んだとすれば、該歌に於ても、「上陽白髮人」の「秋夜長（あきのよながし）夜長無眠天不明（よながくしてねぶることなければてもあけず）耿耿残灯背壁影（かうかうたるのこんのともしびのかべにそむけたるかけ）蕭蕭暗雨打窓声（せうせうたるくらきあめのまどをうつこゑ）」（和漢朗詠集・秋・秋夜・二三三・白居易）を意識していたであろうか。

春月

49 霞かすむともいつまで見えし影いまならん今は涙の春の夜よの月

〔通釈〕 春の月

霞むとしても、ともかくも見えた月影はいつまでであったろうか。今は涙に曇っている春の夜の月よ。

〔参考〕 さやかにも見るべき月を我はただ涙に曇る折ぞ多かる（拾遺集・恋三・七八八・中務）

時分かぬ涙に袖はおもなれて霞むも知らず春の夜の月（土御門院御集・詠二十首和歌承久四年正月廿五日・四季

月・春・一一五。秋風集・春上・五六）。↓補注。

〔影響〕 ほのかにもいつまで見えし影ならんよそになる戸の舟の追風（耕雲千首・恋・寄渡恋・六五〇）

〔他出〕 中書王御詠・春・春月・二四。

〔語釈〕 ○春月―ここから、52の「冬月」までの四季の「月」は、『古今六帖』（第一・天）の「春（夏・秋・冬）の

月」に当たる。↓補説。

〔補説〕 ここから52までの春夏秋冬の月の題、ならびに54～56の春秋冬の風の題の設定は、『古今六帖』（あるいは新撰六帖題和歌）に従ったものであろうが、なお、土御門院の「詠二十首和歌承久四年正月廿五日」の「四季日」「四季月」「四季雨」「四季雲」「四季風」（土御門院御集・一一一～一三〇）からの影響も考えられようか。

夏月

50 起きて見^おし今年^{ことし}の夏の有明^{あつま}や東^{あづま}の月の限り^{かぎ}なりけん^成

〔通釈〕 夏の月

起きてながめ見た今年^{ことし}の夏の有明^{あつま}の月が、東^{あづま}で見る月の最後であつたのだろうか。

〔語釈〕 ○夏月→49語釈。○起きて見し→歌詞としては他に見えない。実体験の反映か。↓補説。○今年の夏→ここは実際の今年の夏ということで、この「五百首」(↓1)が詠まれた文永三年(一二六六)の夏。歌詞としては、「今年の春」「今年の秋」がより一般的。○東の月→歌詞としては新奇。後鳥羽院の「東路の月」(後鳥羽院御集・二八五)が先行する。関東と京都とに跨つて活躍した寂身の、「宵に見る東の月はかたぶきぬ今や都の有明の空」(寂身集・雑雑歌 寛喜三年貞永元々等・同じ頃(十五日の夜)月をながめて・三三五)が管見に入る先行例。○限りなりけん→10。

〔補説〕 この歌を収める「五百首」(↓1)が詠まれたのは、文永三年(一二六六)十月で、それ以前の七月八日に鎌倉から京都へ出発している。東国で見る夏の有明月は、この夏が最後であった。特に六月二十日から月末にかけては慌ただしい状況が続いて(↓17)、宗尊は実際に、夜中あるいは夜明け近くに、有明の月を「起きて見」たこ

とがあつたのではないだろうか。

秋月

51 此この秋は涙に影ぞかはりぬる月やあらぬと思ふばかりに

〔通釈〕 秋の月

この秋は、月の光が涙で変わって（曇って）しまった。あの業平のように、「月やあらぬ」、昔と同じ月はないか、いやあるけれど（我が身の境遇が変わつたのだ）、と思うだけに。

〔本歌〕 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして（伊勢物語・四段・五・男。古今集・恋五・七四七・業平）

〔参考〕 面影の霞める月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に（新古今集・恋二・一一三六・俊成女）

里は荒れて月やあらぬと恨みても誰あさちふに衣うつらむ（新古今・秋下・四七八・良経）

身の憂さを月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞもりくる（新古今集・雑上・一五四二・二条院讃岐）

なにとかは月やあらぬとたどるべき我がもとの身を思ひ知りなば（続古今集・釈教・月の夜坐禪の次に・

七六二・後嵯峨院）

〔類歌〕 いかにせん月やあらぬとかこちても我が身一つにかはる憂き世を（本抄・374）

〔他出〕 中書王御詠・秋・愁へに沈みてのち、月を見て・一一三。

〔語釈〕 ○秋月→49語釈。○涙に影ぞかはりぬる―悲しみに流す涙によって、月光の様子が変わってしまつて見え

る、ということ。近い時代の先行の類例に、「月もなほ見し面影はかはりけり泣きふるしてし袖の涙に」(順徳院百首・恋・八四)や「待ち出でしならひばかりはそれながら影も涙にかはる月かな」(洞院撰政治家百首・恋・遇不逢恋・一三三四・成実)があり、同時代の例には「秋を経てなれしなかばの夜半の月曇る涙に影ぞかはれる」(実材母集・八月十五夜、終夜眺むる月も影寂しう見えしかば・一九四)がある。

〔補説〕 この「五百首」(↓1)を詠じた文永三年(二二六〇)の「この秋」は、京都を出て東下りする『伊勢物語』の男・業平とは逆に、將軍を廃されて鎌倉を追われて帰洛した秋。同じく「月やあらぬ」歌を本歌にした参考の諸詠は、該歌を作る際に特に意識の上に置いていたというわけではないだろうが、日頃から当然に学んでいて、既に宗尊の知識の中にあつたと見てよいであろう。

冬月

52 時雨れながらたえだえ迷ふ村雲の空行く月ぞ秋にまされる

〔通釈〕 冬の月

時雨を降らせながらちぎれちぎれにさまよう群雲、その空をめぐり行く冬の月は、秋にまさっている。

〔参考〕 時雨れつる峰の村雲たえだえにあらはれ渡る冬の夜の月(内裏百番歌合承久元年・冬夜月・一六九・信実)

紅葉するほどは時雨の村雲に空行く月やめぐりあふらん(千五百番歌合・冬一・一七四〇・後鳥羽院、後鳥

羽院御集・四五九)

たえだえに里分く月の光かな時雨をかくる夜半の村雲(新古今集・冬・五九九・寂蓮)

〔類歌〕

村雲の空行く月もあるものをたえだえにだに見えぬ君かな（新拾遺集・恋四・寄月恋・一三〇一・公忠）

風早み時雨ながらに行く月の空さだめなき村雲のかけ（六帖詠草・秋・時雨るる月を八六一）

〔語釈〕

○冬月―↓49語釈。○時雨ながら―先行例の見えない句。後出も、『文保百首』の例は「時雨れながらに」

（七五七・公顕、一八五一・実任）で、尊氏と伝える「夢絶えて枕ぞ寒き時雨れながら寝屋の隙もる夜半の嵐に」

（北野社百首和歌（建武三年）・閏冬・時雨・三七）が、真に尊氏の詠であれば、これが「時雨ながら」の近い時代の

作例となる。○たえだえ迷ふ―これも先行例は見えず、後出も、肖柏の「雪もまだたえだえ迷ふ草の上に霰乱れて

霞む春風」（春夢草・春上・早春・七〇七）を見出す程度。○空行く月ぞ―勿論「空行く月」は、参考の後鳥羽院

詠も踏まえる「忘るなよほどは雲ぬになりぬとも空行く月のめぐりあふまで」（拾遺集・雑上・四七〇・読人不知）

を初めとして通用の措辞で、「空行く月ぞ」の形は意外にも希だが、これは偶々のことで、特異な句という訳でも

ないであろう。早くは、「うき雲のをさまりにける秋の夜は空行く月ぞ物憂かりける」（大斎院前御集・三六五）の

例がある。○秋にまされる―「秋にまされる」や「春にまされり」等の類句も含めて明確な先行例は、定家の「忘れぬ

弥生の空の恨みより春の別れぞ秋にまされる」（洞院撰政家百首・春・暮春・二三〇。拾遺愚草・一四一五）

のみ。後代でも、春あるいは夏について言う例がほとんどで、冬について言うのは特異。

〔補説〕

「時雨ながら」「たえだえまよふ」「秋にまされる」といった伝統的ではない措辞を用いて、村雲と冬月の景

を秋に比して優るとする詠みぶりは、新鮮である。例えば伏見院の「時雨すさぶ夜半の薄雲たえだえに月の姿も消

えみ消えずみ」（伏見院御集・冬・二三〇二）のような、京極派和歌に通う景趣を佳しとする価値観が認められる

であろう。

用語の面から判断して、類歌として挙げた二首は、南北朝期の押小路内大臣三条公忠と、江戸中後期の小沢蘆庵

の歌。偶合の可能性は排除できず、公忠や蘆庵が『竹風抄』の歌を披見し得たか否かは、なお検討を要するべき問題である。

風

53 吹く風ふくに言ことづつてやらん東路の嶺ね越し山こ越し思おもふ心こころを

〔通釈〕 風

吹き行く風に言づつてをしてやろう。東路の嶺々を越し山々を越して、私の思う心を。

〔本歌〕 甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがもや言づつてやらむ（古今集・東歌・一〇九八・甲斐歌）

〔語釈〕 ○風―『和漢朗詠集』に設けられた題。

〔補説〕 東歌を本歌に、將軍を廃され鎌倉を追われて帰洛した宗尊が、東国に至る道筋にあつて自らが実見した山嶺を想起し鎌倉で心通じた者を念頭に置いて、現在の心境を伝えたい、と詠じたものであろう。

春風

54 ありて世はげにも果はてこそ憂うかりけれ卯うの花さそへ春の山風

〔通釈〕 春の風

この世の中は、生きながらえても、まことに最後には憂く辛いものであった。「憂」という名の卯の花を誘つて

連れ去ってくれ、春の山風よ。

〔本歌〕 残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中果ての憂ければ（古今集・春下・七一・読人不知）

〔参考〕 谷河のうち出づる浪も声立てつ鶯さそへ春の山風（新古今集・春上・一七・家隆）

〔語釈〕 ○春風―ここから、56の「冬風」までの春・秋・冬の「風」は、『古今六帖』（第一・天）の「春（夏・秋・冬）の風」に当たる。原「五百首」には、「夏風」も存したか。↓49語釈。○卯の花さそへ―「時鳥我とはなしに卯の花の憂き世の中に鳴き渡るらむ」（古今集・夏・一六四・躬恒）を初めとした「卯の花」に「憂」を掛ける趣向を踏まえて、「憂」き状態であることを「卯の花」によそえるか。「さそへ」は、参考の家隆詠も含めて一般に、こちらに連れてこい、との意だが、ここは一首の趣旨から見て、こちらから遠くに連れ去ってくれ、との意か。

秋風

55 いかにか吹く今年の秋の風なれば草葉の色を身に知らすらん

〔通釈〕 秋の風

いったいどのような吹き方をする今年の秋の風だといっているので、草葉の色が変わる（そのように人の身の上も変わる）ことを、この我が身に思い知らせるのであるうか。

〔参考〕 来ぬ人を待つ夕暮の秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ（古今集・恋五・七七七・読人不知）

秋風の吹きと吹きぬる武蔵野はなべて草葉の色かはりけり（古今集・恋五・八二一・読人不知）

秋の野にいかなる露の置きつめばちの草葉の色かはらん（後撰集・秋下・三七〇・読人不知）

〔類歌〕

いかに吹く秋の夕べの風なれば鹿の音ながら身にはしむらん（続拾遺集・秋上・二五六・後深草院少将内侍）

あすか川淵瀬のなにとありそめてかはるためしを身に知らすむ（中書王御詠・雑・六帖の題の歌に・川・二六二）

〔語釈〕

○秋風→54語釈。○この秋→この「五百首」（↓1）を詠んだ文永三年（一二六六）の秋。57にも。↓補説。

〔補説〕

この年文永三年（一二六六）の夏まで鎌倉で将軍であつたものが、秋には京洛で沈淪していることを念頭に置いた述懐性が強い歌であろう。

冬風

56 いづこにも残る木の葉やなかるらん夕ゆふ時雨しぐれて山風かせそ吹く

〔通釈〕

冬の風

どこにも、残っている木の葉はないのであろうか。夕方に時雨がきて、山の風が吹いている。

〔参考〕

木の葉散るむべ山風の風より時雨になりぬ峰の浮雲（北野宮歌合元久元年十二月・時雨・八・有家。万代集・冬・後鳥羽院御時歌合に・一二八九）

おのづから残る紅葉もあらかし山の秋風吹きまさるなり（洞院撰政治家百首・秋・紅葉・七五四・範宗）

〔類歌〕

山風に堪へぬ木の葉の降りそひて時雨を染むる神な月かな（寂身集・詠百首和歌 寛元三年於関東詠之・

冬・四〇七)

〔語釈〕 ○冬風―↓54語釈。○山風ぞ吹く―定家の「鶯もまだ出でやらぬ春の雲ことしともいはず山風ぞ吹く」(拾遺愚草・内大臣家百首建保三年九月十三夜講・春・早春・一一〇一)を初めとして、建保期頃から詠まれ始めて盛行する句。

〔補説〕 言うまでもなく「時雨」も「山風」もそれぞれ、落葉を誘うものとしても、落葉によそえられるものとしても、落葉と深く結び付いている。その両者を併せて、「時雨」を運ぶ冬の「山風」の中の残り無き落葉を詠じる。

嵐

57 この秋は人の心のあらしのみ我が身をせめて吹きまさりつつ、

〔通釈〕 嵐

この秋は、人の心の荒くすさんだような風の風ばかりが、我が身を責めてずっと吹きつづいていて。

〔本歌〕 身に寒くあらぬ物からわびしきは人の心の嵐なりけり(後撰集・雑三・一二四六・土佐)

〔影響〕 霜雪に我が身をせめて暮ると明くと君につかふる年ぞ経にける(隣女集・卷三自文永七年至同八年・雑・文の心よみ侍りし歌中に・夙夜匪懈臣事一人・一六七六)

〔語釈〕 ○嵐―『古今六帖』(第一・天)の「あらし」。○この秋―↓55。○心のあらし―「心の荒し」に、「吹きまさりつつ」の主語となる「嵐」が掛かる。

〔補説〕 影響歌の作者雅有は、関東祇候の廷臣で、祖父雅経・父教定と同様に秀句好みと見られ、「我が身をせめて」

を該歌に拠つたと見た。

58 天津つ空かせ風うへの上うへ行くくき雲やとの宿とどり定めぬ世よに迷まよひつつ、
雲

〔通釈〕 雲

はらかな天空で吹く風の上を行く浮雲のように、宿りを定めることのないこの憂き世にさまよい続けていて。

〔本歌〕 あしひきの山たちはなれ行く雲の宿り定めぬ世にこそありけれ（古今集・物名・たちばな・四三〇・滋蔭）

〔参考〕 を初瀬や宿やは分かむ吹きにはふ風の上行く花の白雲（後鳥羽院自歌合・落花・四。後鳥羽院御集・一七五二）

天つ空うき雲払ふ秋風にくまなく澄める夜半の月かな（新勅撰集・秋上・二五三・公能）

〔語釈〕 ○雲―『古今六帖』（第一・天）の「くも」。○うき雲―「浮雲」に、「世」「迷ひ」の縁で、「憂き」が掛かる。

〔補説〕 京洛に親王として生まれ育ち、十一歳ではからずも鎌倉に下つて將軍となり、十四年後の今また鎌倉を追われて京都に戻された境遇を、「浮雲」に寄せて詠嘆するか。

雨

59 忘れわすれめや軒かやまの茅かやま間に雨ふ降りて袖ほ干ほしかなし菊川きくがわの宿

〔通釈〕 雨

忘れましようか。軒の茅間に雨が降りそそいで、衣の袖を干しかねた、あの菊川の宿りを。

〔参考〕 忘れめや葵を草に引き結びかりねの野辺の露の曙（新古今集・夏・一八二・式子）

春くれば軒の茅間の雨そそきことづけてのみ濡るる袖かな（万代集・恋一・一九三三・匡房。江帥集・恋・二三五）

字津の山夕越え来れば雲降り袖ほしかねつあはれこの旅（六百番歌合・冬・雲・五二七・顕昭）

〔他出〕 中書王御詠・雑・旅歌とて・二三四。

〔語釈〕 ○雨―『古今六帖』（第一・天）の「あめ」。○忘れめや―↓45。○軒の茅間―茅葺き屋根の軒の、茅と茅の

隙間。雨が漏れやすい。珍しい景物だが、鄙びた侘びしさを醸す。参考歌の他に、『江帥集』に「忍べとや軒の茅間の忍草恋は人目を忍ぶものかは」（雑・こひ・三九五）、あるいはこれに倣ったと思しい『顕輔集』の「東野の軒の茅間の忍草恋をば人の忍ぶものかは」（恋・六三三）、またさらにこれに負ったかと思しい清輔作という「東屋の軒の茅間に生ふと見し人を忍ぶは我が身なりけり」（夫木抄・雑・あづまや・一四三八八）などが、数少ない先行例。宗尊は、これらに学んだかと思われるが、実見もしたかと思われる。後出の雅有詠「東屋の軒の茅間を漏る時雨音にぞ立てぬ袖は濡れけり」（隣女集・卷三自文永七年至同八年・恋・忍恋・一三七〇）も、関東に祇候し京都鎌倉を往還した経験が反映しているようか。○菊川―遠江国榛原郡菊川村、現在の静岡県島田市菊川の地名。鎌倉時代の古い宿駅。小夜中山と大井川という東海道の難所の中間に位置。『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）十月十三日条に、上洛途次の源頼朝が宿泊する、「於遠江国菊河宿」とあるのが早い。承久の乱に捕らえられて鎌倉に護送される途、中駿河国藍沢原で処刑された中御門宗行が、この地の宿の柱に「昔南陽県菊水、汲下流而延齡、今東海道菊河、

宿「西岸」而失_レ命（昔南陽県の菊水、下流を汲んで齡を延ぶ。今東海道の菊河、西岸に宿して命を失ふ）」と書きつけたという（吾妻鏡・承久三年七月十日条）。鎌倉期には初倉から大井川を越えて島田に至る道もあったというが、『海道記』『東関紀行』の作者も『十六夜日記』の阿仏尼も、小夜中山から当宿を通っていて、前二者は宗行のことを追想している。宗尊の脳裏にもまた宗行の故事がよぎったか、とも想像される。

〔補説〕 宗尊は、建長四年（一二五二）春三月十九日に京都を出発し、四月一日に鎌倉に下着していて、十二日間の東下の旅であった（同年三月は小月）。その旅程と思しき、『吾妻鏡』の記事では、菊川に至ったのは、京都を出て七日目の三月二十六日の夜で、それから四日目に鎌倉に入っていることになる。その折に宗尊と入れ違いに鎌倉を追われた前將軍頼嗣は、三月二十一日に幕府を出て北条時盛亭に移り（翌日鎌倉出発か）、四月三日に帰洛している。鎌倉出発も京都帰着も重服を押し進発したというから、少々強行軍であったということであろうか。この間、鎌倉を出て京都までは十一、二日間であった。宗尊の帰洛の場合は、文永三年（一二六六）七月四日に幕府を出て同じく時盛亭に移り、八日に鎌倉を出発し、二十日の子刻に入京している。頼嗣の場合よりやや時間を要した十三日間の旅である。以上を勘案して、帰洛する宗尊の菊川通過が、鎌倉を出てから四、五日目だとすると、菊川に至ったのは、七月八日か九日頃であったらうか。

63は、該歌と一対のような歌。

春雨

60 袖のみぞ今は濡_ぬれける春雨の恵_{めぐ}みやいつの昔_{むかし}なりけん

〔本文〕 ○第四～五句「いつの昔」の底本の表記は、「いつ。むかし」で、「つ」と「む」の間に補入符を打ち「の」を傍記。

〔通釈〕 春雨

袖ばかりが今は濡れたのだった。春雨の恵みがあったのは、いったい何時の昔であったのだろうか。

〔参考〕 草も木もあまねく恵む春雨に袖は濡れてもかひなかりけり（俊成五社百首・賀茂・春・春雨・一一一）

春雨のあまねき御代の恵みとは頼むものから濡るる袖かな（続古今集・雑上・春雨の心を・一四九五・基良。宝治百首・春・春雨・三二六。万代集・春上・一六三。三十六人大歌合弘長二年・一〇。新時代不同歌合・一四八）

重ねしも昔なりけん唐衣片敷くのみぞ今は悲しき（宝治百首・恋・寄衣恋・三二四三・為継）

〔語釈〕 ○春雨―『堀河百首』（春）に設けられた題。○袖のみぞ―「いさやまだ人の心も白露のおくにもとにも袖のみぞひつ」（後撰集・恋五・九六四・読人不知）が原拠。

〔補説〕 「春雨」の「恵」の歌は、参考の俊成詠に始発し、『千五百番歌合』の「消えやらぬ雪より恵む若草の露知り染むる春雨の空」（春二・二六七・具親）を経て、貞永元年（一二三三）の『洞院撰政治家百首』の「数数に恵む草葉もあらはれぬ曇らぬ御代の春雨の空」（雑・祝・一九六六・隆祐）あたりから、「御代」の「恵」を言う歌が詠まれてゆく。特に、後嵯峨院が宝治二年（一二四八）に召した『宝治百首』（春・春雨）では、参考の基良詠の他にも、次のような類想歌が詠まれている。

いたづらに降りぬと思ひし春雨の恵みあまねき御代にあひつつ（三二五・家良）
里分かぬうるほひ四方にあふぐかな君が恵みの春雨の空（三二七・隆親）

おしなべて四方の山べの草木まで恵みあまねき春雨ぞ降る（三三六・有教）

春雨の恵みあまねき君が代に跡を尋ねてふるかひぞある（三三八・定嗣）

ぬれてだに御代の恵みにもれじとてをがさもとらぬ春雨の空（三五〇・隆祐）

のどかなる御代のしるしをみせがほに四方の草木も恵む春雨（三六〇・下野）

これら、父帝後嵯峨院の代を言祝いだ歌うたは、当然宗尊の視野に入っていたであろう。これらを踏まえて、七月二十日に帰洛しつつ、後嵯峨院ならびに母の棟子から義絶されて謁見も許されない境遇を嘆息したものである。幕府による十一月六日の解義絶の奏請を承けて、宗尊が初めて仙洞で父に対面するのは、十二月十六日のことである。

なお、「文永九年十一月百番自歌合」（仮称）に「春雨の恵みも今は昔にて涙にくたす苔の袖かな」（巻五・945）という同工異曲が見える。また、「文永八年七月千五百番歌合百首」（仮称）にも「春雨に濡るる袂のあはれ知れ草木もれぬ御代の恵みに」（巻五・838）と詠んでいる。

五月雨

61 あはれ我が袖わより外に見みし物ものを過すぎにしさかたの五月雨さみだれの空

〔通釈〕 五月雨

ああ、私の袖に無縁のものとして見たのだけれど、過ぎ去った昔の五月雨の降る空は。（今は袖に五月雨のように涙が降るよ）

〔本歌〕 我ならぬ草葉もものは思ひけり袖より外に置ける白露（後撰集・雑四・一二八一・忠国）

〔参考〕 よそに聞く苗代水にあはれ我がおり立つ名をも流しつるかな（金葉集・別・三三五・兼房）

ながめつつ昔も月は見しものをかくやは袖の隙なかるべき（千載集・雑上・九八五・相模）

それとなく思ひ出づれば袖ぞ濡るる過ぎにし方の夕暮の空（後鳥羽院御集・詠五百首和歌・雑・一〇〇六）

〔類歌〕 あはれ我が袖のみぬれていとどしくいかに降りぬる五月雨の空（中院集・廿八日統百首立春・五月雨・

七〇）

〔語釈〕 ○五月雨―『堀河百首』（夏）に設けられた題。

〔補説〕 類歌の為家詠を収める『中院集』は、文永末年頃以降の成立とされるが（『私家集大成』佐藤恒雄解題）、該

歌との先後は不明である。

夕

62 忘れずよ富士の川門の夕立に濡れ濡れ行きし旅の悲しさ

〔通釈〕 夕〔立〕

忘れないよ。富士川の川門の渡りに降る夕立に、濡れに濡れながら行った、あの旅の悲しさを。

〔本歌〕 忘れずよまた忘れずよ瓦屋の下たく煙下むせびつつ（後拾遺集・恋二・七〇七・実方）

遅れじとつねのみゆきは急ぎしを煙にそはぬ旅の悲しさ（後拾遺集・哀傷・五四二・行成）

〔参考〕 濡れ濡れもなほ狩り行かんはし鷹の上羽の雪をうち払ひつつ（金葉集・冬・雪中 鷹狩をよめる・二八一・

道濟

舟よばふ富士の川門に日は暮れぬ夜半にや過ぎん浮島原（続古今集・羈旅・九三二・基政。宗尊親王百五十番歌合弘長元年・冬・二〇〇）

〔類歌〕 忘れずよ清見が関の波間より霞みて見えし三保の浦松（柳葉集・卷二・弘長二年十一月百首歌・旅・

二八五。続古今集・羈旅・八五八）

〔語釈〕 ○夕々方の意の「夕」は、44に既出。ここは、前後の配列から見て、「夕」の「雨」の類を言ったもので

あろう。省略かあるいは誤脱か。『古今六帖』（第一・天）には「ゆふだち」がある。本文は改めないが、解釈の上では、「夕立」と見ておく。○忘れずよ―父後嵯峨院にも「忘れずよ朝ぎよめするとのもりの袖にうつりし秋萩の花」（続後撰集・秋上・二八七・後嵯峨院）の作例がある。宗尊は、この句を多用している（柳葉集二八三、二八五。本抄・107、160、180、471、565）。○富士の川門―駿河国の歌枕「富士川」（現在静岡県富士市の富士川）の、川の両岸がせまっている所、川の渡し場。この形の先行例は参考に示した、上洛の経験のある幕府御家人の後藤基政の歌を見出すのみ。後年でも、建治元年（一二七五）の『都路の別れ』に関東祇候の廷臣藤原雅有が「明けやらぬ富士の川門の朝霧に浅瀬をたどる秋の旅人」（二三）と詠んでいる程度である。宗尊も含めて何れも、実際に「富士の川門」を渡った経験を踏まえた作であろう。

〔補説〕 『後拾遺集』の両首を本歌と見たが、実方は拾遺集初出歌人で、行成は後拾遺当代歌人である。これについては、『瓊玉和歌集注釈稿（二三）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

参考歌の作者後藤基政は、鎌倉幕府御家人で、宗尊幕下で、一芸堪能を以て結番された「昼番衆」にも加えられた近習であり、弘長元年（一二六一）七月二十二日には宗尊が「関東近古詠」（『東撰六帖』か）撰進を基政に下命

して、両者の関係の強さが窺われるのである。

宗尊の帰洛の折の感懐であろう。宗尊が十二日間で京都から鎌倉に東下したときの旅程と思しき『吾妻鏡』の記事によると、宗尊は建長四年（一二五二）の三月二十八日の昼に蒲原に至り、富士川を越えて、同日の夜に木瀬（黄瀬）川に至っていて、それから二日目の四月一日に鎌倉に入っているのである（当三月は小月）。文永三年（一二六六）の帰洛の旅は、十三日間であるが、逆の道程をほぼ同じような日程で辿ったとすれば、宗尊が富士川を渡ったのは、鎌倉を七月八日に立ってから二日目の七月十日の夕刻であつたらうか。↓59。

急雨

63 忘れめや宿立ち別れ今はとて出でし夕べの秋の村雨むらさめ

〔通釈〕 急雨

忘れましようか。宿を立ち別れて、今はもう（行くのだ）と出た夕方に降っていた秋の村雨を。

〔参考〕 忘れめや葵を草に引き結びかりねの野辺の露の曙（新古今集・夏・一八二・式子）

今はとて別るる時は天の河渡らぬさきに袖ぞ漬ちぬる（古今集・秋上・一八二・宗于）

〔語釈〕 ○急雨—むらさめ。『古今六帖』（第一・天）の「むらさめ」。○忘れめや—↓45。

〔補説〕 「宿」が、旅の宿所だとすれば、59と一対のような感もある。しかし、この「宿」は、鎌倉に於ける宗尊の御所を指しているのではないだろうか。『吾妻鏡』によると、文永三年（一二六六）七月四、宗尊は、「可有_二後_一帰洛_一之御出門」で御所を出て、女房輿に乗り、戌刻に入道勝円北条時盛の佐介亭に移った。この日の鎌倉は、少

なくとも夕方の申刻には雨が降っていたのである。

志津久

64 山陰の木々の雫に袖濡れて暁ごとに出でし旅かな

〔通釈〕 しづく

山陰の木々からしたたる雫に袖が濡れながら、暁のたびごとに出立した旅であったな。

〔参考〕 山路にてそほちにけりな白露の暁おきの木木の雫に（新古今集・羈旅・九二四・国信）

身をつめば露をあはれと思ふかな暁ごとにかでおくらん（拾遺集・恋二・七三〇・読人不知）

〔語釈〕 ○志津久しづく。一字一音の万葉仮名風の表記。『古今六帖』（第一・天）の「しづく」。第一帖の題目録

に同じ「志津久」の表記が見える。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の帰洛の旅を回想した歌か。

霧

65 隔て来てなほぞ忘れぬ越えわびし山は高しの秋の朝霧

〔通釈〕 霧

すでに遙か遠くに隔て来て、それでもやはり忘れない、あの時越えかねた山は高くあり、その高師の山を包んで

いた秋の朝霧を。

〔参考〕 雲のゐる梢はるかに霧こめて高しの山に鹿ぞ鳴くなる（新勅撰集・秋下・三〇三・実朝）

〔類歌〕 忘れめや霧深かりし明けほのの高しの山の秋〔の〕けしきは（竹風抄・卷二・文永五年十月三百首歌・鞆

中・四七二）

〔語釈〕 ○霧―『古今六帖』（第一・天）の「きり」。○山は高しの秋の朝霧―「山は高し」から「たかし」を掛詞に

「高師の秋の朝霧」へ鎖る。歌枕「高師（山）」は、三河国渥美郡（現在愛知県豊橋市）と遠江国浜名郡（現在静岡県湖西市）の境にある山。

〔補説〕 宗尊は類歌の他にも、「高師山にて霧いとふかかりしかば」の詞書で「霧深き高しの山の秋よりも我ぞ憂き世に道迷ひぬる」（中書王御詠・雑・二二四）と詠んでいる。いずれも、東下か帰洛の旅に通過した「高師」の山を思い起こしたものであろうか。

霰

66 冬されば初瀬をとめの袖さえて手にまく玉と散るあられかな

〔通釈〕 霰

冬になると、初瀬乙女の袖は冷たく冴えて、まるで手に巻き付ける玉と、散る霰であることよ。

〔本歌〕 こもりくの泊瀬をとめが手に纏ける玉は乱れてありと言はじやも（万葉集・卷三・挽歌・四二四・山前王）

〔参考〕 冬来ては初瀬をとめの衣手に玉と乱れて降る霰かな（弘長百首・冬・霰・三九〇・為氏）

やすくやは夢も結ばん袖さえて寝られぬ間に霰降る夜は（百首歌合建長八年・冬・一一七二・鷹司院帥）

〔他出〕 中書王御詠・冬・霰・一四八。夫木抄・未通女・雜十七・御集、霰・一六五八八。

〔語釈〕 ○霰―『古今六帖』（第一・天）の「あられ」。○初瀬をとめ―石田王の死を哀傷する歌の反歌である本歌で

は、藤原宮に居したと思しい石田王の、初瀬に住んでいたらしい愛人を言う。しかし、万葉左注には、「右二首者或云、紀皇女薨後山前王代三石田王二作之也」とあり、これに従えば、妻紀皇女を亡くした夫石田王の思いを、山前王が代作したということになる。いずれにせよ、「初瀬をとめ」は、古代の女性の印象があり、該歌もそれを踏まえていよう。○散る霰かな―宗尊は先に「さえ暮らす峰の浮き雲と絶えて夕日かすかに散る霰かな」（瓊玉集・冬・三百六十首中に・三〇三）と詠んでいて、これがこの句形の早い例となる。

〔補説〕 本歌は、愛する人の死を玉の緒が切れて乱れることに譬えて悲傷する歌。該歌は、その趣を残しつつ、霰を玉に見立てる趣向。

参考歌二首目の作者鷹司院帥は、真観の女であり、宗尊が意を向けていた可能性は見てよいであろう。

雪

67 埋もるるまた我が友となりにけり雪の下なる窓の呉竹

〔通釈〕 雪

世に埋もれる私の友と、またなったのであった。雪の下に埋もれる窓近くの呉竹は。

〔参考〕 我が友と我ぞいふべき呉竹の憂きふししげき身としなれば（堀河百首・雜・竹・一三二五・隆源）

窓に植えて我が友と見る呉竹は袖にかはらず露も置きけり（俊成五社百首・住吉・雑・竹・三八三）

夢かよふ道さへ絶えぬ呉竹のふしみの里の雪の下折れ（新古今集・冬・六七三・有家）

〔類歌〕

降り積もる雪の下なる呉竹や埋もる身の友となるらん（続門葉集・冬・四六〇・前権僧正教範）

〔影響〕

折れかへり末葉も今朝は庭の面の雪の下なる窓の呉竹（雅有集・一夜百首和歌・冬・竹深雪・二七七）

〔語釈〕

○雪―『古今六帖』（第一・天）の「ゆき」。○埋もるる―「我」と「友」の両者にかかると解する。「埋も

るる我」は、世に沈淪する私宗尊を言い、「埋もるる友」は「雪」「下」の縁で、雪の下に埋もれる友たる呉竹を言う。○呉竹―呉（中国）から渡来した竹で、淡竹のことという。真竹よりも丈は低く、節が多く、葉は細い。

〔補説〕

「呉竹」を「友」と見ることは、『和漢朗詠集』の「晋騎兵参軍王子猷（しんのきへいさんくんわうしいう）

裁称此君（うゑてこのきみとしようす）唐太子賓客白楽天（たうのたいしのひんかくはくらくてん）愛為吾友

（あいしてわがともとなす）」（和漢朗詠集・竹・四三三・篤茂）に依拠する。これは、『白氏文集』の「水能性淡

為三吾友―竹解三心虚―即我師（水は能く性淡にして吾が友たり 竹は心虚しきを解して即ち我が師）」（卷

五十三・池上竹下作）を誤ったもの。

煙

68

身を焦がす嘆きの煙くらべ見ん富士も浅間も立ちほまさらじ

〔通釈〕

煙

この身を焦がす胸の中の嘆きの煙を、比べて見てみよう。富士山も浅間山も、その煙が私の煙に立ち勝ることは

あるまい。

〔参考〕 くらべ見む我が身よ富士の山ならば絶えぬ煙に堪へぬべきかな（建保名所百首・雑・不尽山・九八八・家

衡）

くらべ見よ浅間の山の煙にも誰か思ひの焦れまざると（狭衣物語・卷四・一六三・狭衣）

道の辺の野原の柳下もえぬあはれ嘆きの煙くらべに（拾遺愚草・雑・野外柳・二七四七）

下燃ゆる嘆きの煙空に見よ今も野山の秋の夕暮（定家卿百番自歌合・於北野聖廟詠之・一六二）

〔類歌〕 くらべばや富士も浅間も下燃えの思ひあればぞ煙立つらむ（光吉集・恋・一七六）

〔語釈〕 ○煙―『古今六帖』（第一・天）の「けぶり」。○嘆き―「焦がす」「煙」の縁で、「投げ木」あるいは「木」

が響くか。↓36。○富士も浅間も―「富士」は、駿河国の歌枕。甲斐との国境に位置する。富士山。「浅間」は、

信濃国の歌枕。上野との国境に位置する。浅間山。この句形の先例は、良経の「消え難き下の思ひはなきものを富

士も浅間も煙立てども」（秋篠月清集・二夜百首・寄山恋・一六〇）で、これを宗尊は視野に入れていたか。

〔補説〕 参考の定家の両首の内、前者は周知のとおり、定家が後鳥羽院の勘気に触れる原因となった愁訴の歌。後者

は、菅原道真の不遇と無念を寓意した歌で、建仁三年（一一〇三）四月十日に、道真を祭る北野神社の旧木が煙を

出すことを伝え聞いて、愚案として記した歌である（明月記）。宗尊の念頭に、これらのことがかすめた可能性は

見てもよいであろう。

宗尊は、すでに「文永元年六月十七日庚申宗尊親王百番自歌合」の「名所恋」題で「くらべばや恋をするがの山

高みおよばぬ富士の煙なりとも」（瓊玉集・三四九）と詠んでいる。

類歌の作者惟宗光吉は、文永十一年（一二七四）生、文和元年（一一三二）九月二十九日に七十九歳で没の二条

派歌人。該歌との類似が偶然か、意識的かは今後の課題としておきたい。

69 身の愁うれへ重かさなる末よいかならん塵ちりも積つもれば山となるなり
塵

〔通釈〕 塵

我が身の憂愁がたび重なつてゆく結末、それはどうなるであろうか。塵も積もれば山となるというらしいが。

〔語釈〕 ○塵―『古今六帖』（第一・天）の「ちり」。

〔補説〕 「受」此業果報「則難」可レ得レ度、譬如「積」微塵「成」山難「可」得移動」（大智度論・九四）を原拠とすると、所謂「塵積もりて山となる」「塵も積もれば山となる」の類の措辞の、これは早い用例となる。現代では肯定的な意味合いに用いられるが、ここでは、否定的あるいは悲観的なものの集積の譬えに用いられている。

蜻蛉

70 あはれにもさすが憂うれき世にかけろふ有のありとしもなき身を嘆歌くらん

〔通釈〕 蜻蛉

ああなんとあわれにも、どういつてもやはり憂うれく辛い世の中に、夕暮までのはかない命の蜻蛉のように、はつきりと生きているという訳でもないこの身を嘆歌くのであろう。

〔参考〕 夕暮に命かけたるかげろふのありやあらずや問ふもはかなし（新古今集・恋三・一一九五・読人不知）

身ばかりはさすが憂き世にめぐれども心は山にあり明の月（拾玉集・一日百首・述懐・九九五）

〔語釈〕 ○蜻蛉―『古今六帖』（第一・天）の「かげろふ」。○あはれにも―「ありとしもなき」と「嘆くらん」の両者にかかる。○かげろふ―題の「蜻蛉」。トンボの総称でもあり、ウスバカゲロウ等の脈翅目の昆虫をも言うが、ここは特に、トンボに似た蜉蝋目の昆虫で、「朝生而暮死」（大戴礼・夏小正）即ち朝生まれた夕暮に死ぬとされた蜉蝋のこと。

山

71 今もなほ急猶いそがれぬかなみ吉野よしのの山成のあなた*の宿といひしに

〔本文〕 ○底本第四句は「山なのあなたな」とある。一首の内容から傍記に従いつつ、私に「あなた」を「あなた」に改める。

〔通釈〕 山

今でもまだ、ぐずぐずと急ぐことができないことだな。「み吉野の山のあなた」に住処が欲しいと言っていたのに。

〔本歌〕 み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れがにせむ（古今集・雑下・九五〇・読人不知）

〔語釈〕 ○山―『古今六帖』（題二・山）の「やま」。○急がれぬかな―吉野の山のあなたに隠棲することに向けて早く急に事を運ぶことができないことだ、その支度をするのがきかないことだ、といった趣意。「朝ごとの鏡の影にお

もなれて雪見にとしも急がれぬかな」(金葉集・冬・二八九・顕房)に拠るか。○み吉野の山―大和国の歌枕。はるかな隠棲の地としての通念がある。

山彦

72 思ふ事言ふに叶はば山彦のこたへするまで身をや愁へん

〔通釈〕 山彦

思うことを言ってもし叶うのならば、それこそ山彦が応えるまで、この身を愁い訴えましようか。

〔本歌〕 つれもなき人を恋ふとて山びこのこたへするまで嘆きつるかな(古今集・恋一・五二二・読人不知)

〔語釈〕 ○山彦―山の精霊・神。それが響かせると考えられていた、声や音の反響。『古今六帖』(第二・山)の「やまびい」。

柚

73 身の上にしげきなげきの目に見えば数にもあらし水尾の柚山

〔本文〕 ○底本は、結句の「みおの」の「お」の右に「お」を傍記する。本行の「お」がやや見にくいための処置か。
〔通釈〕 柚

この身の上に繁く絶え間ない嘆きが、もし目に見えるならば、(それがあまりにも多くて)水尾の柚山の繁木か

ら樵る投木も、物の数でもあるまいよ。

〔他出〕 中書王御詠・雑・柚・二五九。

〔語釈〕 ○柚―『古今六帖』(第二・山)の「そま」。○しげきなげき―「繁き嘆き」(絶え間の無い憂嘆)に、「水尾の柚山」の縁で、「繁木」(みつしりと繁っている木々)「投木」(薪の木)の意が掛かる。「折はへて音をのみぞ鳴く郭公しげきなげきの枝ごとにて」(後撰集・夏・一七五・不知)に遡る句だが、この「しげき」には「繁木」は掛からず、「なげき」には「木」のみが掛かる。○水尾の柚山―「水尾」は、近江国の歌枕。現在の滋賀県高島市高島北方の山という。「高島や水尾の柚山跡絶えて氷も雪も深き冬かな」(新勅撰・冬・四一三・家隆、壬二集・冬・三宮十五首歌の中に冬の歌・二六〇七)が早い例。「柚山」は、木々を伐採して用材とするために管理されている山。

嶺

74 手向せし磐国山の嶺いほとよりもなほ猶さがしきは此の世なりけり

〔通釈〕 嶺

古の人が手向けをした、あの磐国山の嶺よりも、さらに険しいのは、この世なのであったな。

〔本歌〕 周防なる磐国山を越えむ日は手向よくせよ荒きその道(万葉集・卷四・相聞・五六七・若麿。五代集歌枕・いはくに山 磐国山 周防・四二七・大伴百代、五句「荒しその道」)

〔他出〕 夫木抄・雑二・山・いはくに山御集、嶺・八一二〇。

〔語釈〕 ○嶺―『古今六帖』(第二・山)の「みね」。○磐国山―岩国山。周防国玖珂郡岩国の北、現在の山口県岩国市錦見と玖珂郡和木町の境界にある山。標高二七七・八メートル。この付近を通つて和木と岩国を結ぶ古道が存在した。○さがしき―「険し」の連体形。山や道が険しいの意。

〔補説〕 本歌は、次のような左注をとまなう。

天平二年六月、大宰帥大伴卿(旅人)がにわかには足に腫瘍ができ、病床に苦しんだ。そこで、馭使を走らせて朝廷に奏上し、庶弟の稲公と甥の胡麻呂と呼び寄せて、遺言をしたいと請願した。その二名に勅命を下し、馭馬を賜つて發遣して、旅人卿の看病をさせた。ところが、数十日経つて、幸いに(旅人は)回復した。そこで、稲公らは、(旅人の)病気が癒えたというので、大宰府を出發して都に上ることになった。そこで、大伴百代と山口若麻呂および旅人卿の子の家持らは、馭使を見送つて、一緒に夷守の馭家に着いた。ともかくも形ばかりの酒宴をして、別れを悲しみ、これらの歌を作つた。

特にこの作歌事情を踏まえている訳ではないだろうが、旅人が病に苦しんだ印象も手伝つて、「磐国山」を旅の難所として捉えていたか。

谷

75 憂なきに身を捨すつる人こそなかるらめあはれ深ふかくも見みゆる谷やかな

〔通釈〕 谷

憂く辛いことで、この谷にその身を投げ捨てる人はないでしょう。(しかし)ああなんと、(この)我が身を捨てる

のに十分なほどに) 深く見える谷であることだな。

〔参考〕

身を捨てて深き淵にも入りぬべしその心の知らまほしさに (後拾遺集・恋一・女の、淵に身を投げよといひ侍りければ・六四七・源道濟)

いたづらに身をぞ捨てつる人を思ふ心や深き谷となるらん (和泉式部集・恋・八〇)

ひたすらに憂き身を捨つるものならばかへりぶちには投げじとぞ思ふ (和泉式部統集・人人国国にある所を

よませしに、山城、帰淵・五三九)

あはれとやそれさへ憂しと身を捨てて思ひし谷の深き心を (明日香井集・詠千日影供百首和歌元久二年正月九

日相立春仍始之・述懐・四五三)

〔語釈〕

○谷―『古今六帖』(第二・山)の「たに」。○身を捨つる―「身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」(詞花集・雑下・三七二・読人不知)を原拠に、出家遁世する意に用いられる。しかしここ

は、「身を捨つる人や見るらん唐国の虎伏す野辺の秋の夜の月」(瓊玉集・秋下・野月・二二六)と同様に、実際に身体を捨てる、身を投げうつ意か。

〔補説〕

宗尊の別の一首「憂しとても身をやは捨つるいで人はことのみぞよき秋の夕暮」(瓊玉集・秋上・秋の御歌中に・二〇六)に似通うが、この歌の「身を」「捨つる」は出家遁世の謂いで、該歌の「身を捨つる」は実際の身投げを言うか。あるいはやはり、「谷」に「身を捨つる」は、深山幽谷に隠棲することの比喩であろうか。参考に挙げた、「淵」や「谷」に「身を捨つ」ことを言う歌々も、恋や述懐の比喩表現である。和泉式部の「ひたすらに」の歌のみは直截な身投げを言っているようだが、これも「かへりぶち(帰淵)」の所名の興味から、「ひたすらに憂き身を捨つるものならば」と仮定して、帰り戻ることがないように、「帰淵」は選ばないと戯れたごとくに見える。

もし該歌が、宗尊の投身自殺の願望を透かしているとすれば、古典和歌としてはやや異質な詠みぶりで、そこに宗尊の憂愁の深さを見るべきであろうか。

坂

76 金風(あき)にあふ坂越えし夕宿(なつ)や旅(つら)の辛(かき)さの限(成)りなりけり

〔通釈〕 坂

秋風にあいながら、逢坂を越えた夕方の宿りは、旅の辛さの極みであったのだな。

〔語釈〕 ○坂―歌題としては珍しいか。○金風―「あきかぜ」。漢語の「金風」は五行説から秋風のこと、万葉でも「あきかぜ」に「金風」が用いられている。『古今六帖』(第一・天)の「あきの風」。○あふ坂―「あふ」を掛詞に「金風にあふ」から「逢坂越えし」へと鎖る。「逢坂」は、近江の国の歌枕。現在の滋賀県大津市の南の逢坂山。関所が置かれ、京都と東国を結ぶ要所。○夕宿―他に例を見ない語。夕べの宿りという意か。○旅の辛さ―先行例を見ない措辞。○限りなりけり―平安朝から見える句だが、慈円が好み、勅撰集の初例になる慈円詠「山里の暁方の鹿の音は夜はのあはれの限りなりけり」(千載集・秋下・三二九・慈円)以降に、作例が増えている。

〔補説〕 鎌倉を追われた文永三年(一二六六)の帰洛の旅の逢坂越えを詠じたものであろう。七月二十日の子刻に入京(六波羅北方北条時茂邸に入る)している、その日の夕方に逢坂の関の辺りで休息の宿を取り、入京に備えたか。その折の、帰洛する喜びよりも深い失意を思い起こしての、詠嘆であろう。建長四年(一二五二)三月十九日に京都を発つて関東に下向したときを思い出した感懐と思しい、「忘れずよ鳥(の)音辛くおとづれて逢坂越え

し春の曙」（柳葉集・巻二・弘長二年十一月百首歌・旅・二八三）と一對の趣。

一一四

岡

77 とにかくに世の憂きことはしげ岡の松のつれなく立^たてる我^{われ}かな

〔通釈〕 岡

なんやかやと、この世の中の憂く辛いことは繁くしきりで、茂岡の千代を待つ松がよそよそしく立っている、それとは無縁に、ただこの世に立っている私であることだな。

〔本歌〕 千年経る松だに朽つる世の中に今日とも知らで立てる我かな（新古今集・雑下・松の木の焼けけるを見て・一七九一・性空上人）

茂岡に神さび立ちて榮えたる千代松の木の年の知らなく（万葉集・巻六・雑歌・九九〇・紀鹿人。五代集歌 枕・岳・しげをか・五九七・紀広人。袖中抄・二三七）

〔参考〕 とにかくに身の憂きことの茂ければひとかたにやは袖は濡れける（続後撰集・雑中・一一七九・八条院高倉）

〔語釈〕 ○岡―『古今六帖』（第二・山）の「をか」。○世の憂きことは茂岡の―「しげ」を掛詞に、「世の憂きことは繁（し）」から「茂岡の」へ鎖る。「茂岡」は、本歌の万葉歌の題詞「紀朝臣鹿人跡見茂岡之松樹歌一首」の「跡見の茂岡」で、奈良県桜井市外山^{とび}付近の岡。○松のつれなく立てる我かな―「つれなく」「立てる」を掛詞に、「松のつれなく立てる」から「つれなく立てる我かな」へ鎖る。「松」は、本歌の「千代松」を承けて、千歳を「待つ」

意を掛ける。「つれなし」は、そ知らぬさま・関係性が希薄で冷淡であるさまを言うか、あるいは自分の思いどおりにならないさまを言う。前者で通釈したが、後者の場合三句以下は、「茂岡の千代を待つ松がよそよく立っているが、そのように千代を待つことの思うに任せず、ただこの世に立っている私であることだな」、といった解釈になるか。

杜

78 思ひ出づることの繁しげさぞ隙ひまもなき信太しのたの杜もりや昔なるらん

〔通釈〕 杜

私わがが思い出すことの頻しばしば繁しげなことといったら、ほんの少しの絶え間もないよ。密生する葉が幾重にも分かれるようにするあの信太の杜の物思いというのは、昔のことを思うということなのであるうか。

〔本歌〕 和泉なる信太の杜の葛の葉の千重に別れて物をこそ思へ（古今六帖・第二・もり・一〇四九）

〔参考〕 我が思ふことの繁しげさにくらぶれば信太の森の千枝は数かは（詞花集・雑下・三六五・増基）

我が袖よ信太の杜にくらぶとも千々の滴も昔なるらん（壬二集・恋・恋歌あまたよみ侍りに・二八七四）

〔語釈〕 ○杜——『古今六帖』（第二・山）の「もり」。○繁しげさ——ことの多さ、頻しばしば繁しげさ。「杜」の縁で、木や葉の多さ、

それらが繁しげ茂も・密生みせいしていることの意が掛かる。

〔補説〕 本歌の『古今六帖』歌の「葛の葉の千重に」には、「楠の木の千枝に」（寛文九年刊本）の異同がある（他に

「ちへ」が「千々」の異同もある）。『歌枕名寄』（三四八二）や『夫木抄』（二〇〇九三）も、これと同様である。

宗尊が扱った本文は、この歌からは推測し得ない。「楠の木の千枝」の本文に沿えば、下句は、「繁茂する大きな楠の木の枝が千枝に分かれるようにするあの信太の杜の物思いというのは、昔のことを思うことなのであろうか」といった解釈になる。

野

79 憂うれきふしもまた思おもひ出でになり成にけり野路のちの篠生ささぶの秋あきの仮庵かりいほ

〔通釈〕 野

憂く辛い折の臥し寝もまた、思い出となったのであった。野路の篠原で秋の仮庵に宿りをしたことよ。

〔本歌〕 山田もる秋の仮庵に置く露は稲負鳥の涙なりけり（古今集・秋下・三〇六・忠岑）

〔参考〕 もとつての五十師の笹生分け見れど我がよばかりの憂きふしはなし（現存六帖抜粋本・第六・ささ・

二九一・真観）

我が宿は野路の篠原かき分けてうち寝る下に絶えぬ白露（秋篠月清集・十題百首・居処十首・二二八。後京

極殿御自歌合・野亭・一七八）

霰降る野路の篠原臥しわびてさらに都を夢にだに見ず（統古今集・羈旅・九〇七・式子）

〔類歌〕 露分くる野路の笹原憂き節のあはれ繁きは我が世なりけり（中書王御詠・雑・野路にて・二二八）

〔語釈〕 ○野―『堀河百首』（雑）に設けられた題。○ふし―折節の意の「節」に、「かり庵」の縁で、寝ることの意

の「臥し」が掛かると見る。「篠」とも縁語。○野路―近江国の歌枕。現在の滋賀県草津市野路。○篠生―「篠原」

に同じ。笹の群生する場所。

〔補説〕 この一首も、文永三年（一二六六）七月の帰洛の旅の途次を思い起こしたものであろうか。

参考の真観詠は、俊頼の「田上にて笹生の山にのぼりてあそびけるに、檀の紅葉をみてよめる」と詞書する「ももづての五十師の笹生時雨して襲津彦まゆみ紅葉しにけり」（散木奇歌集・冬・五七七。田上集・四二）に負つたと思しく、初句は「ももづて」が原態か。この「ももづて」も不審だが、「ももづたふ」の転か。

沢

80 あはれとも聞く人あれや沈みゆく身は葦鶴の沢になく音を

〔通釈〕 沢

ああしみじみと哀れだと、これを聞く人があってくれ。沈淪していく我が身というのは、葦鶴が沢に鳴いているようであり、そのように泣く私の声を。

〔参考〕 昔見し雲ゐを恋ひて葦鶴の沢辺に鳴くや我が身なるらん（詞花集・雑下・四位して殿上おりて侍りけるころ、鶴鳴_レ皐といふことをよめる・三五〇・公重）

〔類歌〕 あはれとも聞く人あらば和歌の浦の蘆辺の鶴に音をや添へまし（草庵集・雑・等持院贈左大臣家五首に、述懐・一二三四）

〔他出〕 中書王御詠・雑・六帖の題の歌に・鶴・二七一、二句「聞く人あれな」。

〔語釈〕 ○沢―『古今六帖』（第三・水）の「さは」。○沈みゆく―沈淪する意。「沢」の縁で、水に「沈みゆく」意

が響く。慈円（拾玉集・六七六）や定家（拾遺愚草・二七三八〈長歌〉）あるいは長綱（長綱百首・九五）など、新古今時代に少々作例が見える。建長五年（一二五三）四月に、時に五十六歳で散位（前権大納言正二位）の為家は、「すくひなん火水の河の横波にたちも離れず沈み行く身を」（為家集・雑・念同年〈建長五年〉四月・一五五六）と詠んでいる。↓補説。○葦鶴―「葦田鶴」とも。鶴のこと。鶴は葦の生える水辺ににいることから。○なく―鶴が「鳴く」意に、「あはれ」「沈みゆく」「身」の縁で、「泣く」が掛かる。

〔補説〕 宗尊は、該歌と同じ五百首で他にも、「憂き身世に思はぬ外の名取川いかにせんとか沈みくらん」（河・87。中書王御詠・雑・六帖の題の歌に・川・二六一）あるいは「沈み行く三島の浦の浜楸久しや袖を浪にまかせて（楸・215）と詠んでいて、我が身が「沈みゆく」ことを嘆じている。「思はぬ外の名取川」というように、將軍職に就きながら、文永三年（一二六六）七月に突如その地位を追われ失意にうちに帰洛した心情の表出ではあろう。しかし、それ以前の將軍在位中でも、「沈みゆく今こそ思へ昔せし我がかねごととははかなかりけり」（柳葉集・卷五・文永二年潤四月三百六十首歌・雑・八四一。中書王御詠・雑・述懐・二九五）と詠じていたのではあった。なお、「憂き身世に」歌と同じ「六帖題の歌」では、「鶴」題でも「あはれとも聞く人あれな沈みゆく身はあしたづの沢になく音を」（中書王御詠・雑・二七二）とも詠じているが、この「六帖題の歌」の詠作時期については、確言し難い。しかし、少なくとも宗尊が、生涯の中で長きに渡り、身の沈淪を嘆じる意識を持っていたらしいことは認めてよいであろう。

類歌に挙げた頼阿の一首は、該歌の影響下にある可能性もあるが、それは、『竹風抄』の流布や、頼阿の宗尊詠享受の問題を広く検証する中で見定められていくべきであろう。

81 霜深ふかき刈田かりのひつちあるかひもなき身を何なほとなほ惜おしむらん 田

〔通釈〕 田

霜しもが深い刈田かりの稽かきはあるかどうか分からない、そのようにこの世に生きていてもしょうがない我が身を、それでも何故惜おしむのだろうか。

〔参考〕

霜しも埋もむ刈田かりの木の葉踏ふみしだきむれる雁かりも秋を恋こふらし（続古今集・冬・五八九・良経）
鶉かり伏ふす刈田かりのひつち生なひ出でてほのかに照あらす三日月の影かげ（山家集・雑・題しらず・九四五）

よしさらば思おもふひつちのかしげつものにもならで霜しも枯かれねとや（永久百首・秋・稂田・二八三・俊頼）
刈かりりはてて守まもる人もなき小山田やまのに生なふるひつちのあるはあるかは（永久百首・秋・稂田・二八七・大進）
葦あし引ひの山のまにまに隠かくれなむ憂うれき世の中はあるかひもなし（古今集・雑下・九五三・説人不知）

〔類歌〕

老おいて世にあるかひもなきひつち田のの霜しもをいたたく身みとぞなりぬる（新千載集・雑下・資明・二〇七二）

〔語釈〕

○田―歌題としては珍しいか。承久二年（一二二〇）秋慈円勸進の「四季題百首」（拾玉集、壬二集、拾遺

愚草）に見える。○刈田―稲を刈り取った後の田。○ひつち―稽。稲を刈った後の株から生ずる芽。ひこばえ。

園

82 木にもあらず草にもあらずうつろふは我が棲すむ竹たけの園のの秋風あきかぜ

〔本文〕 ○底本第五句頭は、「すの、」だが、題の「園」と一首の内容に照らし、「その、（園の）」の誤写と見て、私に改める。

〔通釈〕 園

木でもなく草でもなくて、それでも我が身が移ろい衰えるのは、私が棲む竹の園、親王の境遇に吹く秋風によるのだ。

〔本歌〕 心なき身は草木にもあらなくに秋来る風に疑はるらん（後撰集・雑四・一二七四・伊勢）

〔類歌〕 さびしさは花もにははず鳥もみず苔に古りたる菌の秋風（草根集・秋・秋園・三八一八）

木にもあらず草にもあらず咲く花はまがきの竹につもる白雪（続門葉集・冬・四五七・寛恵）

木にもあらず草にもあらず咲く花や竹のさ枝に降れる白雪（新後拾遺集・雑秋・八一八・紀親文）

木にもあらず草にもあらず木にも咲き草にも咲ける雪の花かな（鳥の迹・冬・四七七・山名玉山入道）

おのが身よ草にもあらず木にもあらずさらぬ別れを堪へ忍ぶべく（挙白集・一九八五）

〔語釈〕 ○園―歌題としては珍しいか。○すむ―生きる、生活するの意。○竹の園の秋風―「竹の園」は、前漢孝文帝の子梁の孝王の竹園の故事から、天子の子・孫を言う。本抄の書名『竹風和歌抄』も、もとよりこれにちなむ。

「園の秋風」は、あまり例を見ない句だが、本抄には別に「夕されば緑の苔に鳥おりてしづかになりぬ園の秋風」（文永六年四月廿八日、柿本影前にて講じ侍りし百首歌・秋・633。夫木抄・秋四・五三九六、六華集・秋・六四七、共に三句「鳥落ちて」の作がある。他には、類歌に挙げた正徹詠が見える程度。

〔補説〕 類歌に挙げた、初二句が「木にもあらず草にもあらず」の三首は、竹に積もる雪を花に見立てる趣向で、内容の上では、該歌と無縁。三首間に影響関係があるか偶合かは不明。木下長嘯子の「おのが身よ」は、歌境として

は該歌に通じる点もあるが、該歌に拠らなければ詠出し得ない訳でもないであろう。

路

83 身の憂^うさも世のはかなさも道すがら思ひ^{つづ}続けて濡^{*ぬ}れし袖^{そで}かな

〔本文〕 ○第五句頭の底本の原状は「ぬ^れる、」「る、」の左に見消ちの傍点。

〔通釈〕 路

我が身の憂さも、この世の儂さも、旅の道すがらに思い続けて、涙に濡れた袖であることだな。

〔参考〕 そこはかと思ひ続けて来て見れば今年の今日も袖は濡れけり（新古今集・哀傷・八四一・慈円）

道すがら落ちぬばかりにふる袖の袂に何を包むなるらん（後拾遺集・雑四・一〇七八・読人不知）

雨雲のかへるばかりの村雨にところせきまで濡れし袖かな（後拾遺集・恋二・六八七・読人不知）

〔類歌〕 世の憂さも身のはかなさもつくづくと思ひ残さぬ夜半の手枕（芳雲集・雑・夜述懷・四七七六）

〔語釈〕 ○路—『古今六帖』（第二・山）の「みち」。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の帰洛途次の感懷であろう。

前歌と同様に初二句が、後の京極派が好む所謂双貫句法の措辞。結句の「濡れし袖かな」を、宗尊は「時も秋頃も月夜の旅寝してさためしなく濡れし袖かな」（竹風抄・文永五年十月三百首歌・羈中・475）とも詠んでいるが、この歌の初二句も双貫句法。

84 水
 帰り来ぬ昔を恋ひて我が袖に流るる水の絶ゆる間ぞなき

〔通釈〕 水

帰って来ない昔を恋い慕って、泣かずにはいられない私の袖に流るる涙の水が、絶える間もないよ。

〔本歌〕 あはれてふ言の葉ごとに置く露は昔を恋ふる涙なりけり（古今集・雑下・九四〇・読人不知）

先立たぬ悔いの八千たび悲しきは流るる水の帰り来ぬなり（古今集・哀傷・八三七・命婦）

〔参考〕 帰り来ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕ににほふ橋（新古今集・夏・二四〇・式子）

たけからぬ涙のかかる我が袖に流るる水と言はせてしかな（和泉式部続集・かへりごとさらにせぬ女にやる
 とて、よませし・二二八）

〔語釈〕 ○水―『古今六帖』（第三・水）の「水（みづ）」。○帰り来ぬ―流れて行って戻ることのない「流るる水」と縁語。○流るる―「恋ひて」「袖」の縁で「泣かるる」が掛かる。

85 池
 さこそげに世をうき草も茂るらめすみ浮かれにし宿の池水

〔通釈〕 池

さぞほんとうに、「世を憂き」ならぬ「浮草」も茂っているだろう。私が住み続けることなくさまよい出た家の、

澄みがたい池の水は。

〔参考〕 花さへに世をうき草なりにけり散るを惜しめばさそふ山水（西行法師家集・春・一〇六。聞書集・寄花述

懐・一〇六。宮河歌合・一八）

〔語釈〕 ○池―『古今六帖』（第三・水）の「いけ」。○さこそげに―『建礼門院右京大夫集』（二六五）や『拾玉集』（三九八九）辺りから見え始める句。『為家五社百首』に「さこそげにときはかきはと守るらめ国つ主のやほよろづ世を」（いはひ・石清水・六九五）の作があり、これに学ぶか。○世をうき草―「うき」を掛詞に、「世を憂き」（この世を辛くいやだと思ふ）から「浮草」へ鎖る。○すみ浮かれにし―「住み浮かる」は、もとの所に住み着かずに他の所へうかれ出る意。「池水」の縁で「澄み憂」（澄み難い）が掛かる。

〔補説〕 参考の西行詠は、「わびぬれば身をうき草のねを絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」（古今集・雑下・九三八・小町）を踏まえる。宗尊にとつて比較的身近であったかと想像される『新撰六帖』の信実詠「さそふ水ありて行瀬のなくはこそ世をうき草のさても絶えなめ」（新撰六帖・第六・うき草・二〇五四・信実）も、この古今歌を本歌として、「世をうき草」の語を用いている。あるいは、これに学んだ可能性もあろう。

〔補説〕 「すみ浮かれにし宿」は、鎌倉の御所を言うか。

滝

86 拾ふてふ滝の白玉よしや我ほかに借るべき涙ならねば

〔本文〕 ○底本の歌末「ならねば」は、「禰」の「ね」を「禮」の「れ」に誤ったと見て、他出の『中書王御詠』の

本文に従い、「ならねば」に改める。

〔通釈〕 滝

あの昔の人が拾うという散り乱れた滝のしぶきの白玉、それは憂き時の涙に借りるというが、仕方がない、ままよ、私^が他^に借りることができない涙ではないので。(憂き涙を流そう)

〔本歌〕 こき散らす滝の白玉拾ひ置きて世の憂き時の涙にぞ借る(古今集・雑上・布引の滝にてよめる・九二二・行

平)

〔参考〕 紀の国や由良の湊に拾ふてふたまさかにだに逢ひ見てしかな(新古今集・恋一・一〇七五・長方)

音に聞く吉野の滝もよしや我が袖におちける涙なりけり(続後撰集・恋一・六八六・後嵯峨院。宝治百首・

恋・寄滝恋・二六三八)

〔他出〕 中書王御詠・雑・六帖の題の歌に・滝・二六〇。

〔語釈〕 ○滝―『古今六帖』(第三・水)の「たき」。

河

87 憂き^{おも}身世に思はぬ^{おも}外の名取川いかにせんとか沈^{しづ}み行くらん

〔通釈〕 河

憂く辛い我が身が、この世の中で、あの「名取川」というように思いの外の名声を取りながら、いったいどうしようというところで、川に沈んでいくように沈淪していくのだろうか。

〔本歌〕 名取川瀬々の埋もれ木あらはればいかにせむとか逢ひ見そめけむ（古今集・恋三・六五〇・読人不知）

陸奥にありといふなる名取川無き名取りては苦しかりけり（古今集・恋三・六二八・忠岑）

〔参考〕 憂き身よに沈みはてたる名取川また埋もれ木の数や添ふらん（続後撰集・雑中・寄河述懐・一一六九・伊長）

いつはりの思はぬほかの名取川うき名とどむな瀬々の埋もれ木（紫禁和歌集・又当座、寄川恋・一八一）

〔他出〕 中書王御詠・雑・六帖の題の歌に・川・二六一。

〔語釈〕 ○河一『古今六帖』（第三・水）の「かは」。○憂き身世に―この句を、宗尊は本抄994にも用いている他に、

「憂き身世に色かはりゆく浅茅生の小野のかりねの袖の露けさ」（中書王御詠・雑・小野宿にとまりて・二二二六）とも詠んでいる。原拠は、『源氏物語』花宴卷の、光源氏の誘いかけをかわそうとする朧月夜君の「憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ」（一〇三三）。『新古今集』に「憂き身よにながらへばなほ思ひ出でよ袂に契る有明の月」（雑上・月前述懐といへる心をよめる・一五二三・経通）が収められて、以後、鎌倉期に盛行する。「憂き」に、「沈み」の縁で「浮き」が響くか。○思はぬ外の名取川―「思はぬ外の名取り」に、陸奥国の歌枕「名取川」を掛ける。「名取川」は、現在の宮城県南部を東流し、名取市閼上で仙台湾に注ぐ川。○沈み行く―沈淪していく意に、「名取川」の縁で、川に沈んでいく意が掛かる。↓80。

〔補説〕 「思はぬ外の名取川」は、思いがけず將軍職に就いたことを寓意するか。

岸

88 まつこともなくて憂き世に住吉のきし方をのみ偲ぶ比かな

〔通釈〕 岸

住吉の松ではないが何を待つこともなくて、この憂く辛い世に住み、住吉の岸ならぬ来し方をばかり、偲ぶこの頃であることだな。

〔参考〕

世の中をすみよしとしも思はぬに待つことなしに我が身経ましや（敦忠集・七二）

時鳥鳴く音ならでは世の中に待つこともなき我が身なりけり（詞花集・夏・五六・忠兼）

〔類歌〕

待つことのなきにつけても住吉のきし方のみぞ思ひやらるる（閑谷集・しづかなる所にて、何となく過ぎにし方など思ひ出でられて・二四五）

〔他出〕

書王御詠・雑・雑の歌の中に・二七三。

〔語釈〕

○岸―『和歌一字抄』や『五代集歌枕』の分類項目に「岸」があるが、歌題としては珍しいか。『為家集』に「文永八年四月六日続百首」の一首として「岸」題が見える。○まつ―「待つ」に、「住吉」「きし」の縁で「松」が掛かる。「住吉のきしもせざらんものゆゑにねたくや人にまつといはれむ」（拾遺集・神楽歌・ある人のいはく、住吉明神の託宣とぞ・五八七）に学ぶか。○憂き世に住吉のきし方をのみ―「すみ」を掛詞に「憂き世に住み」から「住吉の」へ鎖り、さらに「きし」を掛詞に「住吉の岸」から「来し方をのみ」へ鎖る。「住吉」は、撰津国の歌枕。現在の大阪市住吉区付近で、住吉大社がある。創祀時は海に臨んでいたと思しく、岸の神木の松が景物となる。

〔補説〕

将来の望みもなく、鎌倉に将軍として在った往昔をのみ回想するとの趣旨か。

89 朽ち^ちはつる谷のかけ橋^{わた}いにしへの道ありし世を恋^{わた}ひ渡り^{わた}つつ、

〔本文〕 ○底本の第二句末「かた橋」は、「个（あるいは介）」の「け」を「多」の「た」に誤ったと見て、私に「かけ橋」に改める。

〔通釈〕 梯

朽ち果ててしまった谷の架け橋よ、昔そこにまだ道が通っていて渡っていたときがあったように、往古の道理が通っていた世の中を、ずっと恋い慕い続けていて。

〔参考〕 朽ち^ちはつる長柄の橋の跡に来て昔を遠く恋ひ渡るかな（統後撰集・雑上・一〇二七・実氏）

〔語釈〕 ○梯―歌題としては珍しいか。○谷のかけ橋―平安時代から通用の句。宗尊に比較的身近かと思われる作例を挙げておく。「世を渡る道を絶えてもいるべきにあやぶまれけり谷のかけ橋」（明日香井集・溪梯・百日歌合・六五六）、「玉葛谷のかけ橋波越えて来る人絶ゆる五月雨の頃」（宝治百首・夏・溪五月雨・九六四・基家）、「朽ちにける谷のかけ橋ふみ見ても通はぬさきに中や絶えなん」（時朝集・不逢恋・六三三）。○道ありし世―道理がとおっていた正しい世。「かけ橋」の縁で、人が行く道筋が通っていた時代の意を掛ける。後鳥羽院の「奥山のおどろが下も踏み分け道ある世ぞと人に知らせん」（新古今集・雑中・一六三五）を意識するか。○渡りつつ―ずっとし続^つけての意に、「かけ橋」の縁で、橋を渡つての意を掛ける。

淵

90 恋^なだにも淵^なとなりぬるみな^なの川^なまして愁^{うれ}へに積^なもる涙^なは

〔竹風和歌抄〕注釈稿（一）

〔通釈〕 淵

恋でさえも、筑波嶺から落ちる水が集まるみな川の川のように、深い思いの淵となつてしまふという。まして私の愁えに積もる涙は（さらに深い淵となるのだ）。

〔本歌〕

筑波嶺の峰より落つるみな川の河恋ぞ積もりて淵となりける（後撰集・恋三・七七六・陽成院。百人秀歌・一二。百人一首・一三、結句「淵となりぬる」）

〔参考〕

さばかりに積もる涙をしきたへの枕ぞ恋の淵となりぬる（光明峰寺撰家歌合・寄枕恋・九七・成実）
いかにせむ逢ふ瀬も知らず恋せ川積もる涙や淵となるらん（時朝集・寄河恋・二二二）

〔語釈〕

○淵―『古今六帖』（第三・水）の「ふち」。○みな川―表記は「男女川」あるいは「水無川」とも。常陸国の歌枕。筑波山の東峰、女体山の岩間より流れ出て溪流となり桜川に流入する。

瀬

91 昨日まで思はざりきな明日香川今日に瀬になる恨みせんとは

〔通釈〕 瀬

昨日まで思つてもみなかつたな。あの明日香川の昨日の淵が今日の瀬になるといふ、世の無常の恨みを今日にするだろうとは。

〔本歌〕

世の中はなにか常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今集・雑上・九三三・読人不知）

〔参考〕

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを（古今集・哀傷・八六一・業平）

〔語釈〕 ○瀬―『古今六帖』(第三・水)の「せ」。○明日香川―「飛鳥川」とも書く。大和国の歌枕(能因歌枕は常陸とも)。現在の奈良県高市郡の南境高取山に源流し、稲淵を経て明日香村を北行して大和川に入る川。「昨日」「今日」の縁で「明日」が響く。○今日に―本歌の「今日は」(異文「今日の」)は、「(瀬に)なる」にかかるが、ここは「今日に」が、「(瀬に)なる」にかかり、かつ「恨みせん」にもかかる。

泡

92 人の世は流れて^{なか}早き山川の岩間^まにめぐるあはれいつまで

〔通釈〕 泡

人の人生は、流れて早い山中の川の岩間にゆきめぐる水の泡のようにはかなく、ああわれにもいつまでなか。

〔本歌〕 昨日といひ今日とくらしして明日香川流れて早き月日なりけり(古今集・冬・年の果てによめる・三四一・列樹)

春霞立つや遅きと山川の岩間をくぐる音聞こゆなり(後拾遺集・春上・一三・和泉式部)

〔参考〕 早瀬河渡るふなびと影をだにとどめぬ水のあはれ世の中(新勅撰集・雑三・一二三二・公経)

早くゆく岩間の水のわくらばにうきてもめぐるあはれ世の中(明日香井集・春日社百首・雑・尺教十是身如聚沫・六〇八)

聞きなるるやそぢ余りの鐘の声宵曉もあはれいつまで(続古今集・雑下・一八〇八・信実)

〔類歌〕 山河の流れて早き水よりもとまらぬものは命なりけり（新和歌集・釈教・人命不停過於山水・四〇四・仏也）

〔他出〕 中書王御詠・雑・無常・三三二。続後拾遺集・哀傷・題不知・一二二八。

〔語釈〕 ○泡―歌題としては珍しいか。○あはれいつまで―これを結句に置く早い例は、俊成の「田上や宇治の網代にもるるありて日を経ん程もあはれいつまで」（俊成五社百首・伊勢・冬・網代・六五）。その後、新古今時代から鎌倉中期にかけて作例が散見する。実朝にも「うつせみの世は夢なれや桜花咲きては散りぬあはれいつまで」（金槐集〈定家所伝本〉・雑・桜・五四九）や「朝ほらけ跡なき波に鳴く千鳥あなことごとしあはれいつまで」（同上・千鳥・六〇五）の作がある。勅撰集所収歌として信実詠を参考に挙げたが、その出典は、宗尊が目にした可能性の高い『新撰六帖』（第二・かね・九〇九、二句「むそぢ余りの」）で、同書には家良の「淀河にいけてつなげる鯉に見よ誰もこの世はあはれいつまで」（第三・こひ・九六一）も見える。特にどれに拠ったということではなく、宗尊の中に自然と貯えられていた歌句であったであろう。○あはれ―「泡（あわ）」に「あはれ」を掛ける。かつ、「流れて」から「泡」までは、「人の世」のはかなさを寓意する。『維摩経』の「此身如水泡」などが想起される。

湖

93 憂^うきことをみるめしなくは涙せく袖はあふみの海となるとも

〔通釈〕 湖

憂く辛い目を見ることがないのなら、涙を堰き止める袖は、たとえ海松布の生えない近江の湖のようになるとし

ても（かまわないのだが、なんとも辛い憂き目に逢う身であることだ）。

〔本歌〕 涙こそあふみの海となりにけれみるめなしてふながめせしまに（後拾遺集・恋四・八三〇・相模）

〔参考〕 涙せく袖に思ひや余るらむながむる空も色かはるまで（新勅撰集・恋三・八四五・良経）

〔語釈〕 ○湖―歌題としては珍しいか。藤原為忠の家集『為忠集』に一首（二〇八）見える。また、建久二年

（二一九二）十二月二十七日の左大将良経家の「十題百首」（秋篠月清集、拾遺愚草等）の地部（地儀部）では湖を

詠んでいて、『拾玉集』では地儀十題の三番目に「湖」とある。宗尊が撰定させたと考えられる『東撰六帖』の題
目録の雑にも見える。○憂き―「みるめ」「海」の縁で「浮き」が響くか。○みるめ―「見る目」（逢う機会）に

「海」の縁で「海松布」が掛かる。○あふみの海―近江国の歌枕。琵琶湖のこと。「近江」に「憂き」「みるめ」の
縁で「逢ふ身」が掛かる。

〔補説〕 後拾遺集初出歌人相模の歌を本歌と見ることにについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三二）』（本紀要四七、平

二二・三）126、128補説参照。

海

94 いづこかもつひのとまりと契るらん我世の中とうみ渡る舟

〔通釈〕 海

いったいどこを最後に行き着く港だと契っているのだろうか。私は、この世の中をそれとして、海を渡る舟ならぬ、この世を倦みわたる、いやいや過ごしてゆく舟なのだ。

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔本歌〕 いかにせむ身をうき舟の荷を重みつひの泊りやいづくなるらむ（新古今集・雑下・一七〇六・増賀）

難波津を今日こそみつの浦ごととにこれやこの世をうみ渡る舟（後撰集・雑三・一二四四・業平）

〔語釈〕 ○海―『古今六帖』（第三・水）の「うみ」。○世の中と―底本を尊重したが、「世の中を」とあるべきか。

○うみ渡る―「倦み渡る」に「海渡る」を掛ける。

潮

95 ありしにもあらずなるみの浦に満みつ潮なのいやましに物ぞ悲しき

〔通釈〕 潮

昔そうあつたようではなくってゆく身が憂く辛く、鳴海の浦に満ちる潮がますます満ちるように、ますますも
の悲しいのだ。

〔本歌〕 ありしにもあらずなりゆく世の中にかはらぬものは秋の夜の月（詞花集・秋・九八・明快）

葦辺より満ち来る潮のいやましに思ふか君が忘れかねつる（新古今集・一三七八・恋五・山口女王。原歌万

葉集・卷四・相聞・六一七）

〔参考〕 いさ知らず鳴海の浦にひく潮の早くぞ人は遠ざかりにし（続古今集・恋五・一三八七・為家）

〔語釈〕 ○潮―歌題としては珍しいか。『和歌童蒙抄』（地儀）の分類項目には見える。○あらずなるみの浦に―「なるみ」を掛詞に「あらず成る身」から「鳴海の浦に」へ鎖る。「浦」に「悲しき」の縁で「憂」が掛かると解しておく。「鳴海の浦」は、尾張国の歌枕。現在の愛知県名古屋市緑区鳴海町辺りの、かつて海辺であった所。「鳴海

潟」とも。鳴海には宿駅が置かれた。

〔補説〕 本歌の作者明快は後拾遺集初出歌人。これについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

浦

96 あはれ我がうきめをみつの浦うらに焼くはこれや藻塩もしほのからき世の中

〔通釈〕 浦

ああ、私が憂き目を見た辛さは、浮海布を御津の浦で焼く、その藻塩が塩辛いように、これが憂く辛い世の中なのか。

〔本歌〕 我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなり（古今集・雑下・九七三・読人不知）

〔他出〕 中書王御詠・雑・雑の歌の中に・二七四。

〔語釈〕 ○浦 『古今六帖』（第三・水）の「うら」。○うきめをみつの浦に焼く―「憂き目を見つの憂」に「浮海布（浮き藻）を御津の浦に焼く」を掛ける。「御津」は、官船の出入りする重要な港の尊称。ここは本歌から、摂津国西成郡の御津。現在の大阪市中央区三津寺町付近に比定れる。「大伴の御津」とも。↓99。○藻塩のからき世の中―「藻塩の鹹き」から「辛き世の中」を起こす。

渚

97 うらやまし渚に寄する白浪のかつ立ち返る昔ともかな

〔通釈〕 渚

うらやましいことだ。浦の渚に寄せる白波が、寄せるそばからすぐに返す、そのように、すぐに立ち返る昔となればよいのにな。

〔本歌〕 いとどしく過ぎゆく方の恋ひしきにうらやましくも返る波かな（後撰集・羈旅・一三五二・業平。伊勢物

語・七段・男）

あるかひもなぎさに寄する白波の間なくもの思ふわが身なりけり（新古今集・恋一・一〇六六・景明）

〔語釈〕 ○渚―『古今六帖』（第三・水）の「なぎさ」。○うらやまし―「渚」「寄する」「白波」の縁で「浦」が掛かる。○白浪のかつ立ち返る―「渚に」から「白浪の」までが、波が寄せてはまたすぐに返す意に、すぐに立ち返る（昔）あるいは繰り返す（昔）意を掛ける「かつ立ち返る」を起こす序。

潟

98 やすくこそ埋もれにけれ石見潟寄する玉藻の浪の荒さに

〔通釈〕 潟

ごくたやすくこの身は埋もれてしまったな。岩見潟のうち寄せる玉藻にかかる波の荒さ、そのような世間の荒波

〔参考〕 石見潟うらみぞ深き沖つ波寄する玉藻に埋もるる身は（新勅撰集・恋一・六三二・読人不知。古今六帖・第

三・も・一八五五、四句「うち寄する藻に」）

〔語釈〕 ○潟―『古今六帖』（第三・水）の「かた」。○玉藻―「藻」の美称。岸近くの水辺の景物として詠まれる。

〔補説〕 参考歌に負ったと思しいが、参考歌の下句が「うち寄せる玉藻に埋もれるように、人に知られずに埋もれる身は」という意味であるのに対して、該歌の下句は「打ち寄せる玉藻にかかる波の荒さによって玉藻が埋もれるように、世間の波の荒さによって（この身が埋もれてしまった）」という趣旨であり、人が埋もれることの比喩にずれがある、と解した。しかし、やはり同様の比喩と見て、下句を「うち寄せる玉藻にかかる浪の荒さで、入りにずれる玉藻に埋もれるように（この身が埋もれてしまった）」という趣意にも解しうるか。

泊

99 これもまた又な馴なれなばさぞなねうき寝ねする御津みつの泊よちの夜半よはの松風まつかぜ

〔通釈〕 泊まり

これもまた、もし馴れてしまふならばさぞまあ（どうなのであろうか）。憂く辛い旅の泊まりの浮き寝をする、御津の港に吹く松風は。

〔参考〕 これもまたさぞな昔の契りぞと思ふものからあさましきかな（統詞花集・恋中・五五六・和泉式部。千載集・恋四・八四一、初句「これもみな」）

ひとすぢに馴れなばさても杉の庵に夜な夜なかはる風の音かな（新古今集・雑中・一六二一・通具）

馴れなばと何思ひけん柴の庵に寝覚めゆるさぬ夜半の松風（白河殿七百首・山家夜・六三八・真観）

いざこともはや日のもとへ大伴の浜松待ち恋ひぬらん（新古今集・羈旅・八九八・憶良。原歌万葉集・卷

一・雑歌・六三）

〔類歌〕

ふけゆけば松風寒し大伴の御津の泊の秋の夜の月（柳葉集・弘長二年院より人人に召されし百首歌の題にて読み奉りし・秋・月・一七九）

〔他出〕

中書王御詠・雑・二四三・旅泊。夫木抄・雑七・みつのとまり、撰津・御集、旅泊・一一九九三。

〔語釈〕

○泊―『古今六帖』（第三・水）の「とまり」。○なれなばさぞな―特異な句。「さぞな」は、鎌倉時代以降に盛行の語で、これを二句切れに置き結句を体言で結ぶ歌の、宗尊に身近な先例は、「言はで思ふ心はさぞないとどしく恋ひまさるてふ山吹の花」（百首歌合建長八年・春・六〇九・良教）や「別れ路のつらさはさぞな有明の月の空行く春の雁がね」（宗尊親王百五十番歌合・春・二二・重教）などである。○御津の泊―官船が出入りするような港に停泊すること、あるいはその場所。ここは、「松風」から、参考の憶良歌が想起され、大阪湾の東岸一帯の地、今の大阪から堺にかけての地である「大伴」の「御津」のこと。↓96。

〔補説〕

和泉式部歌に拠り、通具詠や真観詠に倣いつつ、山上憶良歌を意識するか。

江

100 世の中にすみえぬものは蘆鴨の騒ぐ入江と我となりけり

〔通釈〕

江

この世の中ですみ得ぬものは、蘆鴨が騒ぐ入り江が澄むことができないのと、世間に住むことができない私となのであったな。

〔本歌〕 世の中にふりぬるものは津の国の長柄の橋と我となりけり（古今集・雑下・八九〇・読人不知）

蘆鴨の騒ぐ入江の白浪の知らずや人をかく恋ひむとは（古今集・恋一・五三三・読人不知）

〔参考〕 蘆鴨の騒ぐ入江の水の江のよにすみ我が身なりけり（新古今集・雑下・一七〇七・人麿）

山里の岩井の水は年ふれどすみえぬものは我が身なりけり（弘長百首・雑・山家・六三一・実氏）

〔語釈〕 ○江―『古今六帖』（第三・水）の「え」。○すみえぬ―「住み得ぬ」に「入江」の縁で「澄み得ぬ」を掛けろ。○蘆鴨―蘆辺に群がり居る鴨。

〔補説〕 『古今集』の両首を本歌と見たが、「蘆鴨の騒ぐ入り江」については、あるいは『新古今』の人麿歌を本歌と見ることできるか。

101 寄る^よ辺^へなき^こ心地^ちこそすれ^{なると}鳴戸^{なると}より出^へでけん^{ふね}舟^{ふね}や我^{わが}が身^みなるらん

〔通釈〕 戸

寄る辺もない気持ちがあるのだ。あの鳴戸から出たとかいう（激しい潮流に弄ばれて寄る辺もない）舟は、我が身なのであろうか。

〔本歌〕 鳴戸よりさし出だされし舟よりも我ぞ寄る辺もなき心地せし（後撰集・恋二・春宮に鳴る戸といふ戸のもと

に、女と物言ひけるに、親の戸を鎖して立てて率て入りにければ、またの朝につかはしける・六五一・滋幹)

〔類歌〕

浪の上にただよふ舟のうきてのみさすらひ行くや我が身なるらん（中書王御詠・雑・鳴海がたを過ぐるに、舟のあまた沖に浮かべるを見て・二二五）

〔語釈〕

○戸―『古今六帖』（第二・宅）の「と」に当たるが、同六帖も『新撰六帖題和歌』も家の「戸」に寄せた歌のみ。該歌は、海峡・瀬戸の「戸」に寄せて詠じている。○寄る辺―「我」の場合、頼みとする人。「舟」の場合、頼る所。○鳴戸―「鳴門」とも。潮流が潮の干満によって激しい音を立てて流れるような海峡の意。特に阿波と淡路の間の海峡や周防の大島の海峡が「なると」と呼ばれる。本歌の詞書の「鳴る戸」は、「開閉すると音がするゆえに「鳴る戸」と呼ばれている戸口が春宮御所にあつたのであろう」（新日本古典文学大系『後撰和歌集』）という。

〔補説〕 本歌の第二句には「さし下されし」（片仮名本）、「さし渡されし」（歴史民俗博物館蔵高松宮旧蔵本）の異同がある。

102 舟人の対馬の渡り浪高み過ぎわづらふやこの世なるらん
渡

〔通釈〕 渡り

舟人が対馬の渡りの波が高いので通り過ぎてゆくのが難しい、そのように生きてゆくのに苦しむのが、この世な

のだらうか。

〔本歌〕 ありねよし対馬の渡り海中に幣取り向けてはや帰り来ね（万葉集・卷一・雑歌・六二・春日老。五代集歌

枕・つしまのわたり 対馬国・一七二五）

霰降る鹿島の崎を波高み過ぎてや行かむ恋しきものを（万葉集・卷七・雑歌・一一七四・作者未詳。五代集

歌枕・かしまのさき 常陸・一六二二）

〔類歌〕 折れ違ふ薦間をくぐるをし鳥の過ぎわづらふはこの世なりけり（言葉集・述懐・水鳥・三九二・源仲頼）

〔他出〕 歌枕名寄・西海部下・対馬島・対馬渡・九二〇一。夫木抄・雑八・つしまのわたり、対馬・古渡、古来歌

・一二二三七。

〔語釈〕 ○渡―わたり。ここでは、海峡の意。歌題として「渡」一文字は珍しいか。

鳥

103 舟とめて誰ながめけんたち花の小島の月の有明あきの空

〔通釈〕 鳥

舟を泊めて、誰が眺めたのだらうか。橘の小島の有明月の空を。

〔本歌〕 今もかも咲きにほふらむ橘の小島の崎の山吹の花（古今集・春下・一二一・読人不知）

〔参考〕 いにしへや見ぬ面影もたち花の花散る里の有明の空（千五百番歌合・夏二・八一・雅経）

〔語釈〕 ○鳥―『古今六帖』（第三・水）の「しま」。○誰ながめけん―「身にしてみて誰ながむらん村雲に秋風はらふ

有明の月」(為家集・秋・「建長五年七月」・八〇二)等、「誰ながめらむ」が先行する通例。「誰ながめけむ」自体の先行例は、関東祇候の廷臣藤原顕氏の「桜咲く奈良の都のふることに大和言の葉誰ながめけむ」(顕氏集・日光別当法印会弘長元五廿七・花下歌・一〇四)が目につく程度だが、この「ながむ」は、「詠む」の意味で「眺む」が微かに響く。該歌も、「詠む」の意味を掛けて解釈することが可能ではある。〇たち花の小島―橘の小島。山城国の歌枕。京都府宇治市の宇治川辺りという。『万葉集』の「橘の島」(二七九、一三一五)は、奈良県高市郡明日香村橋辺り、飛鳥川左岸から右岸にかけての地とされる(渡瀬昌忠『万葉集前注卷七』昭六〇・八、有斐閣)。これと同じとも考えられるか。花木の「橘」の印象を込めるか。↓補説。

〔補説〕「橘」と「有明」の「空」「月」の詠み併せは、参考の雅経詠の他にも、定家の「袖の香を花橘におどろけば空に有明の月ぞ残れる」(千五百番歌合・夏二・八九一)や良経の「たち花のほひにさそふいにしへの面影になる有明の月」(秋篠月清集・夏・暁更盧橘・一〇六〇)がある。言うまでもなく、いずれも「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集・夏・一三九・読人不知)を踏まえている。雅経詠はさらに、「面影も立ち」と「橘の花」の掛詞を用いつつ、『源氏物語』の「花散里」も仕込んでいようか。該歌も、「誰ながめけん」という過去を思いやる表現には、『古今』「五月待つ」歌を初めとした過去を想起させる「橘」の花の属性が意識されているか。

巖

104 住みわぶる身をいづかたに隠かくさまし巖いの中なかも憂うれき世よなりけり

〔通釈〕 巖

どうにも住みかねるこの身を、いつたいどこに隠そうかしら。世の憂きことが聞こえてこないという巖の中もまた、憂く辛いこの世なのであったよ。

〔本歌〕 いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえざらむ（古今集・雑下・九五二・読人不知）

〔参考〕 住み侘ふる憂き身の果ての雲もなほさすらへ消ゆる方やなからん（秋風抄・雑・二九二・慶政。秋風集・雑

下・一二六二、三句「雲霧を」

〔類歌〕 忘はるる身をいづかたに隠さまし世の中ならぬ世の中もがな（登蓮恋百首・九七）

いかにせむ巖の中の谷の戸もただよふ雲のうき世なりけり（詠十首和歌・溪雲・一一七・孝継）

〔語釈〕 ○巖—『古今六帖』（題二一・山）の「いはほ」。

〔補説〕 類歌の前者は、宗尊の視野に入っていたとまでは考えにくい。後者は、道助法親王主催の嘉禄元年

（一二二五）四月歌会と推定されている作品の一首で、これも同様であろう。124と同工異曲。

都

105 待たれこし都は同じ都にて我が身ぞあらぬ我が身なりける

〔通釈〕 都

ずっと（還ることが）待たれてきた都は、変わることなく同じ都であって、しかし我が身は、かつて都にあったときは別の我が身なのであったな。

〔本歌〕 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして（古今集・恋五・七四七・業平。伊勢物語・四

段・五・男）

〔語釈〕 ○都―『古今六帖』（第二・都）の「みやこ」。

〔補説〕 宗尊は別に、やはり「月やあらぬ」歌を本歌にして、「待たれこし花の都の春の月もとの身にしてながめましかば」（中書王御詠・春・春月・二三）という類想歌を詠んでいる。

里

106 今は身のよそに聞くこそあはれなれ昔は主鎌倉の里

〔通釈〕 里

今は我が身とは無縁のものとしてその名を耳にするのが、何とも哀れであるよ。昔はその主であったのだ、鎌倉の里よ。

〔参考〕 雲間よりよそに聞くこそあはれなれ朝倉山の鶯の声（長秋詠藻・右大臣家百首・鶯・四九三。雲葉集・春

上・四六）

宮柱ふと敷き立てて万代に今ぞ栄えん鎌倉の里（続古今集・賀・一九〇二・実朝。金槐集・慶賀の歌の中に・六七六）

〔語釈〕 ○里―『古今六帖』（第二・都）の「さと」。○今は身の―↓4。

〔補説〕 將軍として君臨した鎌倉への懐旧の念。宗尊は、該歌に先立つ「文永三年八月百五十首歌」の「雑里」でも

「十年余り五年までに住み馴れてなほ忘れられぬ鎌倉の里」(竹風抄・卷三・五五五)と詠んでいる。

山家

107 忘れずよあくがれそめし山里きよのその夜の雨よの音のはげしさ

〔通釈〕 山家

忘れないよ。憧れて深く心を寄せた山里の、その夜の雨の音の激しさは。

〔参考〕 忘れずよまた忘れずよ瓦屋の下たく煙下むせびつつ (後拾遺集・恋二・七〇七・実方)

心からあくがれそめし花の香になほ物思ふ春の曙 (万代集・雑一・題しらず・二七九九・定家。拾遺愚草・恋・二六〇九。定家卿百番自歌合・一五七)

袖濡れしその夜の雨のなよりやがて晴れせぬ五月雨の空 (長秋詠藻・恋・三五〇)

吉野山紅葉の庵いかならん夜半の風の音のはげしき (万代集・雑中・一一八五・山田法師。山田法師集・

三三、結句「音のはげしさ」)

〔語釈〕 ○山家―『和漢朗詠集』に立てられ、『堀河百首』(雑)にも設けられた題。○忘れずよ―↓62。○そめし―

「染めし」(深く心を寄せた・思い込んだ)に解した。参考の定家詠の「そめし」は、「初めし」(始めた)。

〔補説〕 山家に隠棲することの憧憬から空想した「山里」か、あるいは京都鎌倉往還途次の山里風の宿りを仮構した

「山里」か。西行の「誰住みてあはれ知るらん山里の雨降りすさむ夕暮の空」(新古今集・雑中・一六四二)を念頭に置いた可能性も見ることがある。

山栖

108 荒れまさる庭の浅茅の露深み分けくる人も見えぬ宿かな

〔通釈〕 山栖

どんだん荒れてゆく庭の浅茅に置く露が深いので、それを分けてやって来る人も見えないこの家であることだな。

〔語釈〕 ○山栖―「山棲」に同じ。サンセイ。山に棲むこと。隠遁すること。いずれにせよ、珍しい歌題。○荒れまさる―平安時代から見え、「源氏物語」にも「荒れまさる軒のしのぶをながめつつ繁くも露のかかる袖かな」（須磨・一九八・花散里）と見えるが、院政期以降に盛行する語。為家（為家五社百首・五二九）、真観（新撰六帖・三九五）、家良（新撰六帖・八九一他）といった宗尊の師筋も詠じている。○浅茅の露深み―丈の低い茅に、露がその葉先から根元の底まで深くびっしりと置いているので、ということ。「浅」と「深」は意識的対比。「露深み」の句自体の先行例は、「狩衣萩の花摺り露深みうつろふ色にそほちゆくかな」（新勅撰集・秋上・行宗）などがあるが、むしろ、俊成女の「浅茅分け宿る月さへ影寒き露深草の野辺の秋風」（撰歌合建仁元年八月十五日・野月露涼・七五・俊成女）や良経の「露深しとばかりみつる浅茅原暮るれば虫の声もみちぬる」（秋篠月清集・秋・一一六八）などが、景趣としては近い。なお、西行の「浅茅深くなりゆくあとを分けいれば袂にぞまづ露は散りける」（聞書集・墓に参りて・一一一）を参考にして、「荒れまさる」状態が「浅茅」を深く茂らせたことを詠じたと思えば、深く茂った浅茅に置く露がびっしりと置いているので、といった趣旨に解することができる。

109 何となき世よのいとなみもあはれ哀なり水也の上うへ行くゆ宇治うちの柴舟ふね

〔通釈〕 水郷

何ということのないこの世の生業も、しみじみと哀れであった。はかない泡が浮く水の上を進み行く、憂しという宇治の柴舟も。

〔参考〕 流れての世をも頼まず水の上の泡に消えぬるうき身と思へば（後撰集・雑一・一一一五・千里）

暮れて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟（新古今集・春下・一六九・寂蓮）

〔語釈〕 ○水郷―結題にはよく用いられるが、「水郷」単独の歌題は珍しいか。○世のいとなみ―常磐三寂の寂然の「たちまじる世のいとなみをひきかづく衣の裏に玉もかけなむ」（唯心房集・十如是・作・二五）が早い。これは衣裏宝珠を詠む。その後、定家が建保六年（二二二八）の「文集百首」で「荒らし置く田のもの葉草茂りつつ世のいとなみのほかや住み憂き」、（拾遺愚草員外・山家・人間榮耀因縁淺、林下幽閑気味深・四六五）と詠む。建長三年（二二五二）の為家には、三月の「つきもせぬ世のいとなみに明け暮れて心しづむる時の間もなし」（為家集・雑・一四三九）や「あればある世のいとなみに身を捨てて過ぐる月日のはてぞ悲しき」（同・同・一四四一）、九月の「来む世こそ思へば憂けれ報ふべき世のいとなみを慰めにして」（同上・一五六九）、十二月の「明け暮らす世のいとなみを嘆く間に今年も早く暮ぞ近づく」（同・冬・九三四）といった一連の作がある。後代では、伏見院の用例（含む類例）が目立つ（伏見院御集・一五八六、一六三三～一六三五）。○あはれ―「水の上」の縁で、「泡」が掛かるか。○宇治―山城国の歌枕。「世」「あはれ」の縁で、「憂し」が掛かる。

田家

110 鷺のゐる外面そとちの梢色せうしきづきて門田さびしき秋あきの夕暮ゆふ

〔通釈〕 田家

鷺がとまっている家の外にある梢が色づいて、家の前の田は寂しさにつつまれる、秋の夕暮よ。

〔他出〕

中書王御詠・秋秋のうたのなかに・一二三三。夫木抄・雑九・鷺・秋御歌中・一二六九〇。

〔語釈〕

○田歌一〇七の「山家」と同じく、『和漢朗詠集』に立てられ、『堀河百首』（雑）に設けられた題。○鷺のゐ

る―和泉式部の「鷺のゐる松原いかに騒ぐらん白毛はうたて里響むなり」（金葉集・雑上・五五六・和泉式部）や『堀河百首』の「鷺のゐる荒れ田のくろに摘む芦も春の若菜の数にやはあらぬ」（春・若菜・七四・顕仲）が早い。家良の「鷺のゐる野沢のま昔水越えてなほ曇りそふ五月雨の空」（現存六帖・さぎ・八五四）や『百首歌合建長八年』の「鷺のゐる荒れ田のくろに雪さえて根芦も白く摘む若菜かな」（春・二三三・経家）などが、宗尊に身近な例。

○外面の梢―先例は見えない。後出としても、『歌合（正安元年―嘉元二年）』の親子詠「よも山に冬近からし今朝見れば外面の梢色染めぬなり」（秋朝・一〇）、あるいは『宗良親王千首』の「いとどなほ外面の梢茂りあひて煙に暮るる里のかやり火」（夏・蚊遣火・二八五）や『師兼千首』の「山里の外面の梢陰茂み心涼しき滝の音かな」（雑・山家夏・八三二）が見える程度。これらに、宗尊からの影響の可能性を見ておく必要がある。

〔補説〕

「鷺」が、「白鷺の松の梢に群れゐると見ゆるは雪の積もるなりけり」（為忠家初度百首・冬・松上雪・

四八一・頼政）のような白鷺を言っているのだとすれば、「色づ」く「梢」との色彩上の対照の趣向となる。

苦屋

III 明石^{あかし}潟^{かた}年^へ経し浦の秋風に苦屋^{*苦や}も荒^あれて月や澄[・]むらん

〔本文〕 ○底本第四句の「筈」は、「苦」を誤ったものと見て、私に「苦」に改める。

〔通釈〕 苦屋

明石潟は、幾年もの間吹き過ぎてきた浦の秋風によって苦屋も荒れて、しかし月は変わらずに澄んでいるのだろ
か。

〔参考〕 年経つる苦屋も荒れてうき波の返るかたにや身をたぐへまし（源氏物語・明石・二三八・明石君）

明石潟海人の苦屋の煙にもしほしぞ曇る秋の夜の月（続後撰集・秋中・三五七・順徳院）
名にし負ふ境やいづく明石潟なほ浦遠く澄める月かな（続古今集・秋上・四〇八・信実）

〔他出〕 中書王御詠・秋・浦月・一〇三。

〔語釈〕 ○苦屋―歌題としては珍しいか。○明石潟―播磨国の歌枕。現在の兵庫県明石市の海岸。「月」「澄む」の縁

で、月が「明かし」が響く。○秋風―「年」「経し」の縁で、「飽き」が響くか。○苦屋―菅や茅を編んで屋根を葺いた粗末な小屋。主に海浜のものを言う。

〔補説〕 参考の明石君歌は、光源氏が帰洛するのに際し、明石君にまた逢ふまでの形見として琴を残して惜別する場

面で、源氏の「うち捨てて立つも悲しき浦波の名残いかにも思ひやるかな」に対する返歌。

宅

112 家あればまた愁うれふなる世の中に宿よも定めぬ身こそやすけれ

〔通釈〕 宅

住む家があるのでさらに愁うという、この世の中に、住居も定めない身こそが気安いのだ。

〔本歌〕 白波の寄する渚に世をつくす海人の子なれば宿も定めず（新古今集・雑下・一七〇三・読人不知。和漢朗詠

集・遊女・七二二）

〔語釈〕 ○宅―『古今六帖』（第二・宅）の「いへ」に当たるか。

〔補説〕 上句には何らかの典故があるようにも思われるので、なお追究する必要があるだろう。

簾

113 今いまは身みのよよに煤すすけたる蘆あし簾れんかかりける身みの果はてぞ悲かなしき

〔通釈〕 簾

今ではもうこの身は、世の中にまみれて汚れている。掛かっている節も煤けて黒くなっている蘆簾のように、このようになつた身のなれの果てが何とも悲しいのだ。

〔参考〕 すくも焚く難波をとめが蘆簾よに煤けたる我が身なりけり（新撰六帖・第二・すだれ・八四二・為家）

年を経てよに煤けたる伊予簾かけさげられて身をば捨ててき（同右・八四五・真観）

〔語釈〕 ○簾―『古今六帖』（第二・宅）の「すだれ」。○よに―「世に」に、「蘆簾」の縁で「節」が掛かる。○蘆

簾かかりける身の―「蘆簾掛かりける」から「かかりける」を掛詞に「斯かりける身の」（このような身の）へ鎖る。○果てぞ悲しき―行く末の最後を思うと何とも悲しい、ということ。『清輔集』（一八〇）や『寂然法師集』（七〇）等の院政期末辺りから見られて、鎌倉期に盛行する句。勅撰集には、『新古今集』の「下燃えに思ひ消えなん煙だに跡なき雲の果てぞ悲しき（恋一・一〇八一・俊成女）」が初出。為家は、参考歌と同じく『新撰六帖』で「かげろふのありやなしやも頼まれぬ世はあだものの果てぞ悲しき」（第一・かげろふ・四九七）や「人はさも知らぬものゆゑあぢきなく思ふ思ひの果てぞ悲しき」（第四・ざふの思・一二六七）と詠じている他、「あればある世のいとなみに身を捨てて過ぐる月日の果てぞ悲しき」（為家集・雑・〈建長五年三月〉・一四四一。109にも所引）や「身に報ふ憂き世の罪と知りながらなほまどはるる果てぞ悲しき」（同・同・報〈建長五年四月〉・一五五一）とも詠じている。宗尊は、これらから自然と学び得たであろう。

門

114 いかにせん我が門にさへ関据すへて人の行き来ゆきもやすからぬ世よを

〔通釈〕 門

どうしようか。自分の家の門にまで関所を据えて、人の行き来さえも安らかではない、この世の中を。

〔参考〕 いかにせむ恋路の末に関据すへて行けども遠き逢坂の山（新勅撰集・恋二・七五五・藻壁門院少将。三十六人
大歌合・一八八）

〔語釈〕 ○門―『古今六帖』（第二・宅）の「かど」。○人の行き来―さほど多用はされないが、古く「逢坂のゆふつ

け鳥にあらばこそ人の行き来をなきつつも見め」(古今六帖・第二・にはとり・一三六一・伊勢)や「妹背川昔ながらのなかならば人の行き来のかげは見てまし」(蜻蛉日記・一七六・登子)の作があるが、以後は、鎌倉期まで用例が見えない。宗尊に直近の例としては、「逢坂や人の行き来はいかならん我が身にかたき夜半の関守」(亀山殿五首歌合文永二年九月・不逢恋・六九・資季)がある。○やすからぬ世―容易ではない世の中。「水草ゐる入江になるるうき鴨のやすからぬ世は思ひ知りにき」(新撰六帖・第三・かも・九三六・家良)に学ぶか。

〔補説〕 宗尊は別に、「いかにせん急ぎしまでは閑据えて憂きに越える足柄の山」(中書王御詠・雑・足柄を越ゆとて・二二三)という、参考歌に負ったと思しい歌を詠んでいる。

庭

115 よそに見^みん人の袂も濡^ぬれぬべし露けき庭の草の深^{ふか}さを

〔通釈〕 庭

この庭をよそ事として見るであろう人の袂も、きつと涙で濡れてしまふに違いない。びつしりと置く露で湿つばい我が庭の、草深さを(そのあわれさを見ると)。

〔参考〕 分けて入る袖にあはれをかけよとて露けき庭に虫さへぞ鳴く(山家集・秋・四四四、西行法師家集・雑・

五二三)

分け侘びて今も人目はかれぬべし茂る夏野の草の深さに(宝治百首・夏・夏草・一〇一〇・実雄。万代集・

夏・六六六。新後撰集・夏・二三一)

〔語釈〕 ○庭―『古今六帖』(第二・宅)の「には」。○よそに見む―自分とは無縁の、関係のないものと見るだろう、という意。紫式部の「水鳥を水の上とやよそに見む我もうきたる世を過ぐしつ」(紫式部日記・六。千載集・冬・四三〇)が原拠となるか。

関

116 皆人の疎くなりつつ足柄の関の山路を別れ来しかな

〔通釈〕 関

すべての人がだんだんと疎遠になっていきながら、足柄の関がある山路を別れて来たのだな。

〔本歌〕 足柄の関の山路を行く人は知るも知らぬも疎からぬかな(後撰集・羈旅・東なる人のもとへまかりける道

に、相模の足柄の関にて、女の京にまかり上りけるに逢ひて・一三六一・真浄法師)

〔語釈〕 ○関―『古今六帖』(第二・山)の「せき」。○足柄の関―相模国の歌枕。相模国と駿河国の境にある足柄山の東麓にある関。

〔補説〕 文永三年(一二六六)七月に鎌倉を追われて帰洛した折の、足柄関を越えて関東で親しかった「皆人」が次第に遠くなっていった感懐を詠じたか。

人

117 さこそはあれあはれいかといふ人もなきや憂き身の限りなるらん

『竹風和歌抄』注釈稿(一)

〔本文〕 ○底本初句「さこそはあれ」の「は」は、「そ」と「あ」の間の右傍に小字で補記。

〔通釈〕 人

憂き身ではあることはあるけれども、それを、「ああ、どれほどでしょう」と問うてくれる人も無いことが、その憂き身の極みであるのだろうか。

〔本歌〕 おのづからさこそはあれと思ふ間にまことに人の間はなりぬる（新古今集・恋五・一三九九・経信母）

思ひやる心の中の悲しさをあはれいかにと言はぬ日ぞなき（統後撰集・羈旅・同じ時（成尋法師入唐時）、かの母のもとにつかはしける・一二八九・読人不知）

〔参考〕 さりともと昔は末も頼まれき老いぞ憂き身の限りなりける（統古今集・雑中・一七一〇・道円）

〔語釈〕 ○人―十界や六道の中の「人」ではなく、他の人の意か。歌題としては珍しいか。○さこそはあれ―それはそうであっても。「さ」は「憂き身」を指す。『新古今集』の読人不知歌の詞を取ったと見た。ただし、宗尊は別に、「さこそはあれ出で入る人の跡もなし身のことわりの庭の白雪」（中書王御詠・冬・庭雪・一五二）とも読んでいるが、これは北条政村の「憂きもなほさこそはあれとことわりを世になくさめて身ぞふりにける」（三十六人大歌合・一八〇）に負ったかとも思われるので、本歌取と見ることにしてはなお考える余地がある。○限り―極限の意。

父

118 行く末ぞ思ひしらるる、たらちねのある世にだにもかく沈む身は

〔通釈〕 父

行く末が、おのずから思い知られるよ。たらちねの父が生きているこのときでさえも、このように沈淪している我が身は。

〔参考〕 冬深み枯れ野を見てぞ行く末の我が身の上は思ひ知らるる（久安百首・冬・四五一・季通）

〔語釈〕 ○父―次歌の「母」、次次歌の「子」と一連だろうが、いずれも歌題としては珍しいか。○たらちね―父。後嵯峨院のこと。○ある世にだにも―今現に生きている間でさえも。「あはれともたれかは我を思ひ出でむある世にだにも問ふ人もなし」（千載集・雑中・一〇九七・兼房）に拠る。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月二十日、將軍職にあつた鎌倉を追われて入京した宗尊は、恐らくは鎌倉幕府あるいは北条執権家への遠慮のために、父後嵯峨院と母平棟子から義絶されて謁見を許されなかつた。この「五百首」を詠んだ十月の時点でもその事態は変わっていなかつたであろう。十一月六日に幕府が後嵯峨院に義絶を解くように奏請し、宗尊が、帰洛後に初めて父と対面するのは、十二月十六日のことであつた。

母

119 迷まよふらん心の闇やみを思ふにぞ涙なみもいとどかき暗くらしける

〔通釈〕 母

子である私を思つて道に迷っているであろう母の心の闇を思うにつけ、私の心もいつそがかき乱れて暗くなり、流す涙もよりいつそやどりを暗くするのであつたな。

〔本歌〕 人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（後撰集・雜一・一一〇二・兼輔）

かきくらす心の闇に迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ（古今集・恋三・六四六・業平）

〔語釈〕 ○母―歌題としては珍しいか。○かき暗し―涙で目が見えないぐらいに暗くする意。本歌を受け、かつ「迷

ふ」「心」「闇」の縁で、悲しみや惑乱で気持ち真つ暗になる意を掛ける。

〔補説〕 宗尊は、鎌倉から帰洛後も母平棟子に会えなかった（↓前歌補説）。当時の貴顕として、必ずしも母親に直

接保育された訳ではないだろうし、事実幼児には曾祖母承明院に養育されたとも思しい。しかし、少なくとも関東下向の前々年の九歳頃までは、母との同行の記録も垣間見えていて、宗尊の母親に対する記憶は、当時の親王としては十分に深く心に刻み込まれていたと想像される。「日記の家」（今鏡）の出で聡明であったと思しく、かつ頗る美人であったと伝える（岡屋関白記）、母棟子の自分に対する変わらない愛情を疑わない真情の吐露ということであろう。

子

120 移り行くこの世なりとも東人情けはかけよ親の為として

〔通釈〕 子

移ろって行くこの世であり、親の子である私の人生であるとしても、東国の人よ、私に情けをかけてくれ、せめて私の親の為ということだ。

〔参考〕 移り行く月日ばかりはかはれども我が身をさらぬ憂き世なりけり（続後撰集・雑中・一一八一・家良）

出羽なる平鹿のみ鷹立ち返り親の為には驚も取るなり（新撰六帖・第二・おほかか・七一〇・真観）

〔語釈〕

○子―堤中納言集（部類名家集本）の雑の部類に「子」と見えるが、歌題としては珍しいか。○この世―「こ」に「子」を掛け込めるか。とすると、「世」は、世の中と人生の両意が重なる。○情けはかけよ―作例は希少。先行例としては、「逢はずとも情けはかけよおのづから報いにかかる恋もこそすれ」（久安百首・恋・七六二・実清）がある。○親の為とて―この句形は他に、「立ち返り心の闇ぞ頼もしき親の為とて子を思ふ身は」（長綱集・雑・三五八）が目に入る程度。

〔補説〕

「東人情けはかけよ」とは、直接には、自分を將軍職から降ろして鎌倉から追い出した東国武士、取り分けて執権家を中心とする北条氏を念頭に置いた表現であろう。あるいは、参考に挙げた真観の特異な歌も、出羽では親の為に驚までも取るといふのだから、東人は、親の為ということなら自分にも情けを掛けてくれてもよいではないか、というように意識した可能性があらうか。

忠臣

121 松の色は年の寒さむきに見ゆれどもその類たぐひなる人はなき世ぞ

〔通釈〕 忠臣

松の色が変わらずにいることは、一年のうちの寒い季節に分かるけれど、それと同類である（主君が困難などきにも）態度が変わらない人は無い、この世なのだ。

〔本文〕 子曰、歳寒、然後、知「松柏之後凋也」（論語・子罕第九）

〔参考〕 十八公栄霜後露（しふはつこうのえいはしものものにあらはれ） 一千年色雪中深（いつせんねんのいろは

ゆきのうちにふかし）（和漢朗詠集・松・四二五・順）

年寒き松の心もあらはれて花さく色を見する雪かな（新勅撰集・冬・四〇九・道家）

〔語釈〕 ○忠臣―歌題としては珍しいか。○その類なる―上句に言う、寒さにも変わらぬ常緑である「松の色」と同

様に、難局にも「色」（様子や態度）を変えないでいる、ということ。

〔補説〕 「玄冬素雪之寒朝（くゑんとうそせつのかんてうに） 松彰君子之徳（まつくんしのとくをあらはす）」（和漢

朗詠集・松・四二四・河原院賦・順）のように、常緑の「松」は、「君子」に比される。後代の例だが、「年寒み松の色にぞつかへては二心なき人も知られむ」（心敬集・百首和歌・冬・歳暮・七〇）と詠まれるのも、その通念に従つていよう。宗尊は、將軍であつた立場から、寒さにも変わらぬ「松の色」を、あえて心変わりしない「忠臣」によそえて、將軍職を追われた後の臣下達の変節を慨嘆したものであるう。

歌人

122 天地を動かす道と思ひしも昔なりけり大和言の葉

〔通釈〕 歌人

天神地祇を動かす（そして男女の仲を睦まじくさせ、勇猛な武士の心をもなだめる）道だと、（あの貫之が）思つたのも、もはや昔のことであつたのだ。この大和言葉の道、和歌よ。

〔本説〕 やまと歌は、人の心を種として万の言の葉となれりける。∴力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼

神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり（古今集・仮名序）

〔参考〕 石の上ふるの中道立ち返り昔に通ふ大和言の葉（千五百番歌合・雑・二九九八・具親。続古今集・雑下・

一七七七）

〔語釈〕 ○歌人―歌題としては珍しいか。

〔補説〕 文永三年（一二六六）、妻宰子の良基との密通の風聞ある中で、六月二十日の北条時宗邸での密議を経て、

同日に良基は逃亡し、二十三日に宰子と娘の掬子は山内殿に、嗣子の惟康は時宗邸に移される。宗尊自らは七月四日に鎌倉の御所を出て、八日には妻や子女と別れて帰洛の途につくのである。その政変を策動したのは北条執権家を中心とする鎌倉の武士達であろうことは想像に難くない。また、宰子が入洛するのは、十月にこの五百首を詠じた後の十一月十七日であった。このような絶望的境遇の中で、鎌倉で和歌を読み続けてきた宗尊が、「天地を動かし」て「男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むる」はずの「大和言の葉」の効能を疑い、そういう力を持った「道」だと貫之が思ったことも「昔なりけり」と慨嘆したことは、当然のことであつたのかもしれない。

その際、参考歌とした具親詠や、それに先立つ定家の「秋津島外まで浪はしづかにて昔に返る大和言の葉」（老若五十首歌合・雑・四一五・定家、拾遺愚草・一八二〇）などを、宗尊が否定的に意識した可能性は見てもよいであらう。

遊子

123 よもすがらあくがれ越ゆる関の戸の有明の月に鳥の音ぞする

〔通釈〕 遊子

夜通し、ほんやりとさまようようにして越える関の門を照らす有明の月に、鳥の声が聞こえるよ。

〔本文〕 遊子猶行於残月（いっしなほさんぐゑつにゆく） 函谷鶏鳴（かんこくにはとりなく）（和漢朗詠集・曉・

四一六・賈嵩）

〔参考〕 鳥の音に関の戸出づる旅人をまだ夜ぶかしと送る月影（白河殿七百首・雑・遊子越関・五七七・為家）

〔語釈〕 ○遊子―旅行く人の意。歌題としては珍しいか。参考歌は、文永二年（一二六五）七月七日の白河殿（白川殿・禅林寺殿）の当座探題歌会詠であり、その歌題「遊子越関」が先行する類例となる。○あくがれ越ゆる―新奇的措辞。「あくがる」は、さまよい歩く、あるいは身から心が離れてほんやりする意。ほうつとした心持ちでふらふらと（関を）越えるということ。宗尊は、「よもすがら」の「あくがる」を、「心のみ寝られぬままにあくがれてただよもすがら月を見るかな」（柳葉集・弘長二年十二月百首歌・月・三二七）とも詠んでいる。○関の戸―関所の出入り口、関門。○鳥―孟嘗君の函谷関の故事に拠る本文から、鶏のこと。

〔補説〕 この五百首を詠む少し前の文永三年（一二六六）七月に、宗尊が鎌倉を追われて帰洛する際に越えた逢坂の関に於ける感懐を追想し、自らを故郷を失った「遊子」になずらえたような趣がある。あるいは一般的に「遊子」を詠じたとしても、孟嘗君の函谷関の故事を踏まえた「夜をこめて鳥のそら音にはかるともよに逢坂の関は許さじ」（後拾遺集・雑二・九三九・清少納言）や、「有明の月」を詠じた「有明の月も清水に宿りけり今宵は越えじ逢坂の関」（千載集・羈旅・四九八・範永）から見て、「関」は「逢坂の関」を想起したと考えるべきであろう。

124 いかにせん山に入る人これもまたなほ憂うれき時のある世なりけり

〔通釈〕 隠子

どうしようか。世を捨てて山に入る人、これもやはり、さらに憂く辛い時がある世の中なのであったよ。

〔本歌〕 世を捨てて山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらむ（古今集・雑下・九五六・躬恒）

朝な朝な立つ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり（古今集・恋一・五一三・読人不知）

〔参考〕 道ありと我が君の代に出ではてて山の奥には住む人もなし（白河殿七百首・雑・隠士出山・五七八・経任）

〔語釈〕 ○隠子―世の中を厭い避けて隠れ住む人。「隠士」に同じか。前歌と同様に、参考歌の「隠士出山」が先行

する類例となる。○山に入る人―本歌の場合、出家する意味に解される。ここは、それを含めてより広く、世を出

離して山中庵居するような隠士を言うか。

〔補説〕 104と同工異曲。

老人

125 さすがまた年の積たもりのしるしにて老いぬる人は情けありけり

〔通釈〕 老人

なんといてもやはり、年を重ねていることの証拠として、老いている人は情けがあるのであったな。

〔参考〕 春雨にふりかはりゆく年月の年の積もりや老いになるらん（平中物語・五段・二五・友だち）

雲のゐる越の白山老いにけりおほくの年のゆき積もりつつ（和漢朗詠集・山・四九七。拾遺集・冬・二四九・忠見、初句「年経れば」四句「多くの冬の」）

〔語釈〕

○老人―『和漢朗詠集』に立てられ、『永久百首』（雑）に設けられた題。○さすがまた―真観の『宝治百首』詠「やよいかに言いははなたでさすがまた絶えずゆづるのかけたるやなぞ」（恋・寄弓恋・三一五八）が早い例か。鎌倉時代中期から南北朝・室町前期にかけて盛行する。宗尊は既に、「弘長二年十二月百首歌」で「さすがまた消えもはてなで埋み火の埋もるる身よなに残らん」（柳葉集・巻二・埋火・三四〇）と用いている。○情けありけり―先行例を見ない句。宗尊は先に、「弘長元年九月中務卿宗尊親王家百首」で「今の世に伝えて聞けばいにしへの人の心は情けありけり」（柳葉集・巻一・雑・一四一）と詠んでいる。

〔補説〕

文永三年（一二六六）六月の失脚前後から、帰洛して十月にこの五百首を詠じるまでに、思いがけず情けを掛けられた特定の「老人」に対する実感であろうか。あるいは、「老人」一般に対する感懐であろうか。ちなみに、当時は現代よりは老いの境目が早かったであろうことが想像されるが、『新撰六帖』で、当時五十二〜三歳の家良は「いそぢ余り老いぬる人の寢覚めにぞ夜を長月の程も知らるる」（第一・ながづき・一五六）と詠じている。また、正治二年（一二〇〇）秋の『正治初度百首』で、二条院讃岐は「暮れはつる年の積もりをかぞふればむそぢの春も近づきにけり」と詠んでいる。「老いぬる人」、「年の積もり」のいずれについても、五十歳代を老境とする通念が窺われるか。

漁夫

126 蘆まじる沖の洲崎に影見えて漁りに帰る海士の灯

〔通釈〕 漁夫

蘆が混じって生えている沖の洲崎に、その光がちらちらと見えて、海人の灯が漁へと戻ってゆくよ。

〔参考〕 わたつ海の沖なかにひのはなれ出でて燃ゆと見ゆるは海人の漁りか（捨遺集・物名・かにひの花・三五八・

伊勢）

海原やなぎたる波の漁り舟沖の洲崎に漕きまはる見ゆ（宝治百首・雑・海眺望・三八八一・家良）

山の端に月傾けば漁りする海人の灯沖になづさふ（万葉集・従三長門浦一船出之夜仰三觀月光一作歌三首・

三六二三・作者未詳）

〔語釈〕

○漁夫―「漁父」とも。『和漢朗詠集』に「水」の付けたりとして「漁父」が見えるが、歌題としては、

鎌倉時代まででは必ずしも一般的ではない。○蘆まじる―新奇な句。後代でも、室町時代の歌僧正広の「蘆まじる

入江の真薦吹く風に降らでも浪は五月雨の声」（松下集・夏・江五月雨）が見える程度。「洲崎」に、他の物に交じ

ってまばらに蘆が生えている状態を言うか。「蘆（葦）」に他の物が「まじる」ことを言うのは、古く『万葉集』に

「湊葦に交じれる草のしり草の人皆知りぬ吾が下思ひ」（卷十一・寄物陳思・二四六八・作者未詳。古今六帖・第

六・つれなしぐさ・三五九三・人丸、初句「しほあしに」結句「わがしたおもひは」がある。院政末期には「難

波江の蘆生にまじるかきつばた花し咲かずは誰か分かまし」（教長集・春・一六五）や「蘆原やかつみまじりに繁

りあひて入江は舟の通ひ路もなし」（有房集・水の辺に草深しといふことを・一〇九）あるいは「春駒も心あるら

むかきつばた花咲きまじる蘆のあたりは」（公衡集・賦百字和歌・春・かきつばた・一九）等と詠まれている。為

家には「難波なる蘆根にまじるみをつくしうき節繁き世にや朽ちなん」（新撰六帖・第三・みをつくし・二二〇二）

があつて、これらから発想した詞か。○洲崎―海浜で土砂が堆積した洲が、沖の方に突き出して崎状になっている

場所を言う。○漁りに帰る―「海士」について言う「帰る」は、多く浜や湊へと戻る意であるが、ここは、漁場へと戻っていくことを言っているとすれば珍しい。漁のために（沖へ出て、そこから）陸の方へと戻る意に解されなくもないか。あるいは、「帰る」は「反る（返る）」で、漁の作業につれて灯がひるがえることを言った可能性も見られるべきか。

〔補訳〕 沖の方に突き出た洲崎に生える蘆間から、漁へと戻る漁り火が明滅するように見えることを叙すか。

海人

127 我^{われ}なれや塩^{しほ}焼^やきめ刈^かり海^{あま}士人の干^ほさぬ袂^{たもと}もからき思^{おも}ひも

〔通釈〕 海人

私なのだ。塩を焼き、海藻を刈って、そのように海に働く者の、濡れて干すひまもない袂も、ひどい思いも（その憂き目を見ているのは）。

〔本歌〕 しかの海人のめ刈り塩焼き暇なみ櫛^{くし}げのを櫛^{くし}取りも見なくに（新勅撰集・雑四・一三三七・読人不知。原歌 万葉集・卷三・雑歌・二七八・石川君子、初句「しかの海人は」四句「つげのをぐしを」）

〔参考〕 潮たるる伊勢をの海人や我ならむさらばみるめを刈るよしもがな（千載集・雑下・七一九・実国）

〔類歌〕 つれなさの辛き思ひやまさるらんめ刈り塩焼く海人のしわざに（長綱集・こひ・三三四）

〔他出〕 中書王御詠・恋・恋歌・一八三、二句「塩焼きめ刈る」。

〔語釈〕 ○海人―『古今六帖』（第三・水）の「あま」。○塩焼きめ刈り―「め」（海藻・海布・和布）は、食用にす

る海藻の総称。原拠は、本歌の「め刈り塩焼き」である。「塩焼きめ刈り」の形では、同じ歌を本歌にした後鳥羽院の「海人をとめ塩焼きめ刈りしがの浦に黄楊のを櫛も取る間なき頃」(後鳥羽院御集・建保四年二月御百首・雑・五九二。万代集・雑三・三三九二)がある。また、『新撰六帖』には、家良の「海士人の身を浦なみに袖濡れてめ刈り塩焼き世を渡るらん」と為家の「海松布刈り塩焼く海人の足たゆく暮るれば帰る暇なの身や」(第三・あま・一〇九一、一〇九二)という、やはり同じ歌を本歌にした歌がある。これらに倣った可能性を見る必要もあろう。○からき―辛く過酷である意。「塩」の縁で、塩辛い意が響くか。

工匠

128 飛驒人の採るてふ板のわれまでも捨てられぬ世の情けともがな

〔通釈〕 工匠

飛驒人が採り集めるといふ板の割れ、それならぬ我までもが捨てようとして捨てることのできないこの世、そこにせめて人の情けがあつてほしいものだ。

〔参考〕 飛驒人の真木流すてふ丹生の川言は通へど船そ通はぬ(万葉集・卷七・一一七三・作者未詳)

伊勢の海に海人の採るてふ忘れ貝忘れにけらし君も来まさず(続後撰集・恋五・九八四・読人不知)

我ながら心のはてを知らぬかな捨てられぬ世のまた厭はしき(新古今集・雑下・一七六六・良経)

〔語釈〕

○工匠―たくみ。後代では、『易林本節用集』に見える表記。歌題としては珍しいか。○飛驒人の採るてふ板のわれまでも―「板の」までは序詞で、「割れ」との掛詞で「我」を起こすと解しておく。「飛驒人の採るてふ

板」の典拠は不明。「とにかくに物は思はず飛驒匠の打つ墨繩のただ一筋に」(拾遺集・恋五・九九〇・人麿。万葉集・卷十一・寄物陳思・二六四八・作者未詳、初句「かにかくに」三句「飛驒人の」)とも詠まれ、令制下で飛驒国から毎年交替で都に上ったという木工技術者の「飛驒匠(飛驒工)」が、製材としての「板」を扱うことから言うか。「板の割れ」の類の先行例も少なく、「ふき板の割れて漏り来る月影を恋しき人と思はましかば」(六条修理大夫集・二九二)が目につく程度。○情けともがな―先行例の見えない句。162にも。

朋友

129 またかかる友だにあれな世の中の憂きも辛きも嘆きあはせん

〔通釈〕 朋友

告げなくてもまっさきにそれと知る涙、このような友だけでも別に在ってほしいよ。そうしたら、世の中の憂きことも辛いことも、ともに嘆きあおう。

〔本歌〕 世の中の憂きも辛きも告げなくにまづ知る物は涙なりけり(古今集・雑下・九四一・読人不知)

〔語釈〕 ○朋友―歌題としては珍しいか。○またかかる―「またかかる旅しなければ草枕露けからんと思はざりしを」(古今六帖・第四・たび・二四二〇)に遡る句。内容の上では、「かかる」は、本歌の「世の中の憂きも辛きも告げなくにまづ知る物」である「涙」(の特性)を指す。

130 この世には犯せる罪もなきものを沈むや世世の報ひなるらん

〔通釈〕 沈倫

この現世では犯している罪もないのだけれど、このように身が沈淪するのは、前の世世で犯した罪の報いなのだろうか。

〔参考〕 八百万神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ（源氏物語・須磨・二二七・光源氏）

水底に宿る月だに浮かべるを沈むや何のみくづなるらん（拾遺集・雑上・四四一・済時）

〔語釈〕 ○沈倫―正しくは「沈淪」。誤写か、あるいは通用か。いずれにせよ、歌題としては珍しいか。○世世の報

ひ―前世の多くのときに犯した罪の応報。「報ひ」は、もと「報い」で、中世以後の転。定家の「いかなりし世世の報いの辛さにてこの年月に弱らざるらん」（六百番歌合・恋上・旧恋・七七五）が早く、以後盛行する。『新撰六帖』には家良の「いかなりし世世の報ひぞ木樵りむし身におふほどの宿のはかなさ」（第六・むし・二二二）の作例があり、これらに学んだか。

〔補説〕 参考の源氏歌は、須磨に退隠していた光源氏が、三月一日の上巳の祓えの折に、沈淪する自身の無実を神々に嘆訴した歌。これを詠むやいなや、「にはかに風吹き出でて、空もかき暗れぬ」さまとなり、以下、波浪・雷鳴・風雨に襲われることとなる。

述懐

131 言の葉も及ばこそは恨みても泣きても人に身をば愁へめ

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔通釈〕 述懐

言葉も、それがもし及ぶのであれば、恨んででも、泣いてでも、人に我が身の愁いを訴えようものを。

〔本歌〕 怨みても泣きても言はむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして（古今集・恋五・八一四・興風）

〔参考〕 たぐひなき嘆きのもと書きつくる言の葉もなほ及ばれぬかな（長秋詠藻・一六二）

身にまた書きつもる言の葉もありしにいまの及びやはする（為家五社百首・懷旧・北野・六七二）

〔語釈〕 ○述懐―題としては『和漢朗詠集』に立てられ、『堀河百首』（雑）に設けられる。『新撰六帖題和歌』（第四）に「おもひをのぶ」があるが、これは現存『古今六帖』には見えない。○恨みても―「言の葉」との縁で、「葉」に草木の「葉」が響き、「裏見ても」が響くか。

〔補説〕 本歌は、『源氏物語』浮舟巻で、匂宮と薫との愛情の間に苦悶する浮舟を、詩会の後の深更に匂宮が訪い、対岸の家に引き連れて行く場面の「恨みても、泣きても、よろづ、の給ひ明かして、夜深く、率て帰り給ふ」の部分の引歌である。『奥入』がそれを注しているが、『源氏積』は「恨みても泣きても言はん方ぞなきたとへて言はんことのはかなさ」（浮舟・四〇六）という歌を挙げている。

宗尊は「文永元年十月百首歌」で、同じ本歌により「真葛はふ野原の牡鹿恨みてもなきてもさこそ妻を恋ふらめ」（柳葉集・秋・五八三、瓊玉集・秋上・一七九）と詠んでいる。

宇多々寝

132 覚めて後悔いの八千たび悲しきは昔を見つるうたた寝の夢

〔通釈〕 うたた寝

覚めて後、後悔が繰り返し何千回も悲しいのは、昔のことを見たうたた寝の夢だ。

〔本歌〕 先立たぬ悔いの八千たび悲しきは流るる水の帰り来ぬなり（古今集・哀傷・八三七・閑院（命婦））

〔参考〕 うたた寝の夢なかりせば別れにし昔の人をまたも見ましや（金葉集・雑上・五五三・顕季）

橘の匂ふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする（新古今集・夏・二四五・俊成女）

〔語釈〕 ○宇多々寝―「古今六帖」（第四・恋）の「うたたね」。○覚めて後―「覚めて後夢なりけりと思ふにも逢ふ

は名残の惜しくやはあらぬ」（新古今集・恋二・一二二五・実定）に学ぶか。○昔を見つる―「折しもあれ花橘のかをるかな昔を見つる夢の枕に」（千載集・夏・一七五・公衡）に学ぶか。○うたた寝の夢―定家の建久二年冬の

「十題百首」詠「はかなしや見るほどもなし稲妻の光に覚むるうたた寝の夢」が早く、同じく定家の『六百番歌合』詠「夏の夜は馴るる清水の浮き枕結ぶほどなきうたた寝の夢」（夏・夏夜・二三九）や俊成の『御室五十首』詠

「匂ひくる花橘の袖の香に涙露けきうたた寝の夢」（夏・二六五）等以降、新古今歌人達が多用している。『新古今集』には式子の「窓近き竹の葉すさぶ風の音にいとどみじかきうたた音の夢」（夏・二五六）が採られ、右の俊成

歌は『続古今集』（夏・二四九）に撰入されている。

〔補説〕 本歌の「悔いの八千たび」の詞の撰取は、『日吉社撰歌合寛喜四年』の光俊詠「先立たぬ世世の契りを恨みても悔いの八千たび音のみぞ泣く」（恋・八六・光俊）まで見出せず、その後も鎌倉期には該歌が見える程度である。南朝の、『師兼千首』詠「なにとただ悔いの八千たび嘆くらん心に絶えし中川の水」（恋・絶後悔恋・

六九七）や宗良親王詠「涙川悔いの八千度思へども流れし名をばせくかひもなし」（李花集・恋・恋百首とてよみ

侍りし中に、顕恋・五七二。新葉集・恋二・七二八・読人不知）が、これに続く。南朝歌人による『瓊玉集』の受

容は認められるが『竹風抄』の場合は、その明確な徵証は認められない。写本の伝存状況に照らしても、本書が流布したとは考えにくいが、例えば、宗良の「覚めて後思ひ知るこそはかなけれもうたた寝の夏の夜の夢」(宗良親王千首・雑・夏夜夢・九〇〇)といった該歌との類歌をどのように捉えるか、なお追尋すべき課題であろう。参考、拙稿『瓊玉和歌集注釈稿(一〜四)』(本紀要四五〜四七、平二〇〜二二・三、『鶴見日本文学』一四、平二二・三)。

夢

133

時の間のただ目の前を現とて過ぐれば夢になる世なりけり

〔通釈〕 夢

ほんの束の間のただ目の前のことを現実として、しかし、それもすぐに過ぎると夢になるこの世なのであったな。

〔本歌〕 時の間の現をしのぶ心こそはかなき夢にまさらざりけれ(後撰集・恋三・七六七・読人不知)

行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり(後撰集・離別・一三三三・源のわたる(済))

〔参考〕 また暮れぬ過ぐれば夢の心ちしてあはれはかなく積もる年かな(拾遺愚草・冬・文治三年冬、侍従公仲よませ侍りし、冬十首・二四二九)

現とも夢とも言はじ目の前に見るとはなくてあらぬ憂き世を(続後撰集・雑下・一二四四・行範)

〔類歌〕 時の間のただ目の前の形にて身はうき雲のあととはかもなし(伏見院御集・雑・一一九九)

〔他出〕 中書王御詠・雑・夢・三二九。

〔語釈〕 ○夢―『古今六帖』(第四・恋)の「ゆめ」。

風
無常

134 見し人の昨日の煙けよりけふ今日の雲た立ちも止とまらぬ世にこそありけれ有

〔通釈〕 無常

見知った人の茶毘にふされた昨日の煙も、今日の煙の雲も、次々に立ち続けて、立ち止まることもない、この世なのであったな。

〔参考〕 見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな(源氏物語・夕顔・三六・光源氏)

鳥辺山遅れ先立つ夕煙昨日の友や今日のうき雲(如願法師集・哀傷・或所にて、無常歌よみ侍りしに・六五八)

〔類歌〕 鳥辺山昨日の煙今日の雲誰が家家の思ひなるらん(親清四女集・一四五)

鳥辺山昨日の煙今日の雲消えてはかなき数やそふらん(光吉集・雑・二七二)

〔他出〕 中書王御詠・雑・無常・三三〇。風雅集・雑下・題しらず・一九九六。

〔語釈〕 ○無常―『和漢朗詠集』に見え、『堀河百首』(雑)に設けられた題。○立ちも止まらぬ―「煙」と「雲」の立つことが止まらない意に、時が歩みを止めることのない意を掛け、次句の「世」に続く。

〔補説〕 参考の源氏歌は、何某院で頓死した夕顔の素性を乳母子の右近から聞き、光源氏が「ひとりごち」した歌。

詞書(題)の右肩の「風」は、『風雅集』入集の集付け。

懷旧

135 なにごとも思ひ捨つれどいにしへの恋しきのみぞかなはざりける

〔通釈〕 懷旧

どんな事も思い捨てたけれども、昔が恋しいことだけは、思い捨てることかなわないのであったな。

〔参考〕 いにしへになほ立ち帰る心かな恋しきことにももの忘れせで(古今集・恋四・七三四・貫之)

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひ捨つれど離れざりけり(金葉集・雑上・五九五。千載集・雑下・一一六一)

忍ぶるぞかなはざりける辛きをも憂きをも知るは涙なれども(続後撰集・恋一・六七五・後嵯峨院)

〔語釈〕 ○懷旧―前歌の「無常」と同じく、『和漢朗詠集』に立てられ、『堀河百首』(雑)に設けられた題。○恋し

きのみぞ―他の作例は、六条院宣旨(顕良女・俊成妻)の「ひきまゆのいとかく身をもつつまずは恋しきのみぞ嘆きならまし」(六条院宣旨集・恋・忍恋・七一)が見えるのみ。

別離

136 年を経て馴れ慣らひにし名残こそ別るる今の辛さなりけれ*

〔本文〕 ○底本の歌末「けれ」の「れ」は、「り」に上書き。

〔通釈〕 別離

長い年月を経て、馴れに馴れて親しんだ名残こそが、別れる今の辛さなのであったな。

〔参考〕 年を経て馴れたる人も別れにし去年は今年の今日にぞありける（後拾遺集・哀傷・五八六・時文）

〔他出〕 中書王御詠・雑・離別・二一一、結句「ちぎりなりけれ」。

〔語釈〕 ○別離―『古今六帖』（第四・別）の「わかれ」に当たるか。「別」の表記では、『堀河百首』（雑）に見える。宗尊が撰進させたと考えられている『東撰和歌六帖』の題目録（雑）には「別離」が見える。○馴れ慣らひにし「馴れ慣らふ」は、歌語としては珍しい。『今鏡』（花園の匂ひ）に、（賀茂臨時祭の四位の陪従として召されて、参内した清輔が、六条天皇代にまだ昇殿を許されていなかったたので、とまどいながら）「北の陣の方に巡りて、後の宮のおはします、御達の局町など見るに、また殿上の方ざまへ参りて、はるかに見渡しなどしけるにも、昔に変わらざる事もなく、馴れ慣らひたりし人どもの見えければ」（講談社学術文庫本）と見える。

旅行

137 送るとは言ふばかりにてさも人の身に添はざりし旅の空かな

〔通釈〕 旅行

送っていく、とは口で言うだけであって、そのようにも、他の人が我が身に付き添わなかった、あの旅の空であつたな。

〔参考〕 身に添ひて旅の空にも巡るかな月を友とも契らざりしに（林下集・旅の歌とて・三四八）

旅の空送るとならば秋の月群雲隠れよき道なせそ（林葉集・月送行客師光家会・四七六）

送るとて月も嵐も頼まれず我が独り行く佐夜の中山（建保名所百首・佐夜中山遠江国・一二七・行能）

〔語釈〕 ○旅行―『古今六帖』（第四・別）の「たび」に当たるか。「旅行」の形では、元仁二年（一二二五）三月

二十九日の「権大納言（基家）家三十首」に出題されている（拾遺愚草、壬二集、拾玉集等）。また、『続古今集』には、祖父土御門院の「旅行の心を」と詞書する「白雲を空なるものと思ひしはまだ山越えぬ都なりけり」（羈旅・九四三）の一首があり、父後嵯峨院にも「宝治百首歌召しけるついでに、旅行」と詞書する「限りなく遠くなりゆく都かな隅田河原の渡りしてけり」（新後撰集・羈旅・一六一四）の一首がある。○送る―目的地への到着を見届けるように付き添っていく意。○言ふばかりにて―『宝治百首』の「夏来ぬと言ふばかりにて遅桜散らぬ限りや春と頼まん」（夏・首夏・八二九・成茂）が先行例。宗尊は既に「亡き人の数そふ世こそ悲しけれあましかばと言ふばかりにて」（瓊玉集・雑下・雑の御歌の中に・五〇〇）と詠んでいる。○さも人―「忘るるをよしさらばとも思へかしさも人わろき身の嘆きかな」（百首歌合建長八年・恋・一四七六・家良）に学ぶか。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の、鎌倉から帰洛する旅の寂しさを詠ずるか。

旅泊

138 舟の中浪なみの上にて明けぬぬめりめりさてもうき世は過すぐる物ものとして

〔通釈〕 旅泊

舟の中、浪の上で、旅の浮き寝の夜が明けてしまふようだ。そうであっても、憂き世の中は、過ぎてゆくものとらいつて。

〔本文〕 翠帳紅圍（すいちやうこうけい） 万事之礼法雖異（ばんしのれいはふことなりといへども）

舟中浪上（ふねのうちなみのうへ） 一生之歡会是同（いつしやうのくわんくわいこれおなじ）

（和漢朗詠集・遊女・七二〇・以言）

〔参考〕 舟の中波の上なるうき寝には立ちかへると袖ぞ濡れける（六百番歌合・恋下・寄遊女恋・一一五〇・経

家）

〔他出〕 中書王御詠・雑・旅泊・二四四、結句「過ぐすものとて」。

〔語釈〕 ○旅泊―歌題としては、鎌倉時代以降に盛行する。勅撰集では、『新勅撰集』（羈旅・五二七・頼資）に初出し、『宝治百首』（雑）に設けられた。○明けぬめり―「睦言もまだ尽きなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は」（古今集・誹諧歌・一〇一五・躬恒）に遡及する句。○うき世―「憂き世」に、「舟」「浪の上」の縁で「浮き」が掛かる。

野行幸

139 芹川せりの千世ちよの古道ふるいかにして昔かへに帰かへる御幸ま待ちけん

〔通釈〕 野の行幸

芹川の千世の長い歳月を経た古道は、どのようにして、嵯峨天皇の昔に帰る、あの仁和の光孝天皇の行幸を待つ

たのだろうか。

〔本歌〕 嵯峨の山みゆき絶えにし芹河の千世の古道跡はありけり（後撰集・雑一・仁和の帝、嵯峨の御時の例にて芹

河に行幸し給ひける日・一〇七五・行平）

〔参考〕 いかで我隙行く駒を引き止めて昔に帰る道を尋ねん（千載集・雑中・一〇八七・参河）

芹川の波も昔に立ち帰りみゆき絶えせぬ嵯峨の山風（六百番歌合・冬・野行幸・五三九・良経。続古今集・

雑下・一七五〇）

御幸せし昔の跡の名残とて今もかひある千代の古道（白河殿七百首・雑・野行幸・五八一・教定）

〔語釈〕 ○野行幸―『永久百首』（冬）に設けられ、『六百番歌合』にも採用され、『白河殿七百首』にも詠まれた

（参考歌）題。○芹川―山城国の歌枕。本来は、山城国紀伊郡、現在の京都市伏見区鳥羽を流れていた川、あるい

はその辺りを言うか。しかし本歌の行平詠の「嵯峨の山」が嵯峨天皇の比喩ではなく地名に解されて、「芹川」が

山城国葛野郡、現在の京都市右京区嵯峨を流れて大堰川に注ぐ川、あるいはその辺りに比定されてゆくか。○昔に

帰る―往時に戻る意。「道」の縁で、来た道に戻る意が響く。○御幸―ここは天皇の「みゆき」を言っているので、

主に上皇等の「みゆき」に宛てられるこの「御幸」は相応しくないが、書き分けがどれ程厳密であったかはなお審

らかにしえない。底本に従っておく。

網代

140 朽ちねた身を宇治河の網代木よ浪のかけてもさやは思ひし

〔通釈〕 網代

ただひたすらに朽ちてしまえ。身を憂しと見る自分は、まるで宇治川の網代木だよ、だからそこに波が掛けて朽ちるように、朽ちてしまえばいいのだ。しかし、少しでもそのようになると思ったか。いや思わなかったのだ。

〔本歌〕 数ならぬ身を宇治河の網代木に多くの日をも過ぐしつるかな（拾遺集・恋三・八四三・読人不知）

〔参考〕 朽ちねただなほ物思ふ名取川憂かりし瀬瀬に残る埋もれ木（続後撰集・恋四・八九九・祝部成賢）

忍ぶれどかひもなぎさの海人小舟波のかけても今は頼まじ（金葉集・恋上・四〇九・読人不知）

〔語釈〕 ○網代―『古今六帖』（第三・水）の「あじろ」。○身を宇治河の網代木よ―「身を憂し」から、「うし（うぢ）」を掛詞に、山城国の歌枕「宇治河の網代木よ」へ鎖る。また、「宇治河の網代木」を「身」の比喩とする。

「網代」は、冬季に川の上流に向けて兩岸から杭を並べて打ち、その間に竹や柴を斜めに編んだ簀を付けて魚を捕る仕掛け。宇治川や近江の田上川で氷魚漁に用いるのが有名だが、弘安七年（一二八四）二月二十七日に官符により宇治の網代は停止されたという（歴代編年集成等〈大日本史料参照〉。「網代木」は、その「網代」の杭のこと。

○浪のかけても―「浪の掛けても」に、ちよつとでもの意の「かけても」が掛かり、次句の「思ひし」にかかる。

○さやは思ひし―反語表現。他には、「甲斐が嶺のかひもなくまたあひも見ず佐夜の中山さやは思ひし」（後葉集・雑四・甲斐歌に、逢ひて逢はぬ心を・五六五）が見える程度。

恋

141 なんとこは恋てふことを知り初めて憂き世の上にももの思ふらん

〔通釈〕 恋

何だつてまあ、恋ということを知り始めて、ただでさえ憂く辛いこの世の面で、恋の物思いをするのだろうか。

〔本歌〕 いさやまだ恋てふことも知らなくにこやそなるらんいこそ寝られね（拾遺集・恋四・八九六・読人不知）

〔参考〕 いかにして恋てふことを知りぬらむもの心も昨日今日こそ（六百番歌合・恋上・幼恋・八五五・有家）

〔語釈〕 ○恋―『古今六帖』（第四・恋）の「こひ」。○なにとこは―何だつて（どうして） いったい（これは）ま

あ、ということ。「知り初めて」と「もの思ふらん」の両方にかかる。「何と」は、感動詞にも原因の副詞にも解される。実定・俊恵・西行・俊成・隆信・慈円・秀能等々、院政期末頃から鎌倉前期にかけて詠まれていた。特に慈円は好んだようだが、その中の一首を挙げておく。「なにとこは身を知る雨の降りぬらん晴れよと思はば晴れぬべき世を」（拾玉集・難波百首・二七七六）。○憂き世の上―先行例は、「末の露本の雫は今日ならず憂き世の上と見るぞ悲しき」（源三位頼政集・六四二・素覚〔家基〕）が見えるのみ。「上」の縁で、「憂き」に「浮き」が響くか。

不知人恋

142 誰たれとしも知らぬながめの夕暮くれや上うはの空なる思おもひなるらん

〔通釈〕 人を知らぬ恋

誰だとも知らない恋の物思いに耽つてぼうつと眺める夕暮は、はるか上空を眺めるような、よりどころのない思ひであるのだろうか。

〔参考〕 夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて（古今集・恋一・四八四・読人不知）

誰としても知らぬ別れの悲しきは松浦の沖を出づる舟人（新古今集・離別・八八三・隆信）

一目見し人は誰ともしら雲の上の空なる恋もするかな（千載集・恋一・六四七・実能）

ひかげさしをとめの姿見てしより上の空なる物をこそ思へ（新勅撰集・恋一・六四七・高遠）

〔語釈〕

○不知人恋―『明日香井集』に、「不知人恋／知る人もなきさの松の根を深みまだあらはれず波はかかれど」

（詠百首和歌・恋・五一六）と見える題。先行する類題としては、『金葉集』に「すみかを知らせざる恋といへる心をよめる」（恋下・四七五。三奏本では「すみどころをしらせぬ恋といへる事をよめる」）が見える。歌は、「行方

なくかきこもるにぞひき繭の厭ふ心の程は知らるる」（堀河）である。より近似した「不知く恋」という類の題としては、院政後期に次のような例が見える。①「不知在処恋／逢坂の名をこそせめて惜しむとも関の清水のすむや

いづくぞ」（教長集・恋・七四一）、②「不知在所恋歌林苑／いづことも知らせぬにこそ知られぬれ我をなこそその関

にやあるらん」（林葉集・恋・七九八）、③「不知居所恋／なかなか虎伏す野辺と聞くならばはや思ひ寝の夢に見

てまし」（林葉集・恋・八九四）、④「不知在所恋／いかで我尋ね行きてか恨みまし海人の子なればとのみことへ

し」（重家集・二四〇）、⑤「不知家恋／我が恋は尋ね行くべき方ぞなきうらやましきは三輪の杉むら」（長方集・

恋・一八〇）。○上の空なる―心ここにないような不安な、あるいは、不確かであてにならないの意。「ながめ」

「夕暮」の縁で、空の上の方の意を掛ける。

経年^{*}人恋^{*}

143 今もなほ懲りぬ心を知るやとておどろかすこそつれなかりけれ

〔本文〕 ○底本の詞書（歌題）の表記「人々」の同字点は、前歌の「人恋」の「恋」を受けると解する。

〔通釈〕 年を経る人の恋

今でもやはり、懲りずに恋い慕う私の心を、あなたが知るかといって、気を惹いてみるこそが、何とも思ひどおりにならず非情であると分かることなのであったな。

〔参考〕 頼めつつ逢はで年経るいつはりに懲りぬ心を人は知らなむ（古今集・恋二・六一四・躬恒、後撰集・恋

五・九六七・業平（実は仲平か）

あし引の山田の引板のひたぶるに忘るる人をおどろかすかな（続後撰集・恋五・九九二・人麿）

〔語釈〕 ○経年人恋―類例は「経年恋」が、『後拾遺集』（恋一・六六一・俊房）に見え、『永久百首』（恋）に設けられてはいるが、「経年人恋」は新奇。

〔補説〕 「中納言平惟仲久しくありて消息して侍りける返事に書かせ侍りける」と詞書する「夢とのみ思ひなりにし世の中を何今更におどろかすらん」（拾遺集・雑賀・一二〇六・成忠女）と、それに倣ったと思しい「夢とのみ思ひなしつつあるものを何なかなかにおどろかすらん」（続後撰集・恋四・久しく絶えたる男の訪れたる女にかはりて・八七九・匡房）は、長い間つれなくされてきた女の立場で、相手の気紛れを責めるような趣意。該歌は、それと対照的な立場で、長年に渡って思慕しても、相手が結局はつれないのだと気付かされるだけだったことを嘆く主旨か。なお、詞遣いの類似した「はかなさを忘れぬほどを知るやとて月日を経てもおどろかすかな」（拾遺愚草・雑・無常・二七七二）は、定家の母美福門院加賀が建久四年（一一九三）二月十三日に亡くなった後の五月に、季経が定家に贈った弔慰の歌である。

初遇

144 別れ路はげに憂かりけるものぞともこの暁あかつきや思ひ知られん

〔通釈〕 初めて遇へる

恋人との別れ路は、まことに辛いものだとすることも、初めての逢瀬の暁の時に、ひとりでに思い知らされるのでしようか。

〔参考〕 有明のつれなく見えし別れより暁ばかりうきものはなし（古今集・恋三・六二五・忠岑）

別れ路をげにいかばかり嘆くらん聞く人さへぞ袖は濡れける（金葉集・別・三三九・彰子）

いにしへの恋しきたびに思ふかなさらぬ別れはげに憂かりけり（新勅撰集・雑二・一一四六・忠通）

〔語釈〕 ○初遇―『古今六帖』（第五）の「はじめてあへる」。同帖では、「雑思」の下に収められる題だが、ここで

は、下に「恋」あるいは「人」が略されている趣か。ここから166の「形見」まで、148「不忍」153「道使」159「恋昔」163「無名」を除き、同様か。○別れ路―恋人と別れて行く道だが、離別そのものを言う。

後朝

145 いかにせんかかるとためしはまだ知らで行く方かたまどふ明け暗くれの空

〔通釈〕 後朝

どうしようか。このような憤らいもまだ知らなくて、（恋人と別れて）帰って行く方角も迷い、気持のやり場に

も戸惑っている、この逢瀬の翌明け方のまだ暗い空よ。

〔本歌〕 明け暗れの空にぞ我は迷ひぬる思ふ心の行かぬまにまに（拾遺集・恋二・女のもとより暗きに帰りて、遣はしける・七三六・順）

〔他出〕 中書王御詠・恋・後朝・一八二、下句「行く方まよふ明け暮れの道」。

〔語釈〕 ○後朝―『古今六帖』（第五・雑思）の「あした」に当たる。これは、『新撰六帖題和歌』では、「のちのあした」とあるもの。「後朝」の表記は、『堀河百首』（恋）に「後朝恋」と見える。↓144語釈。○まだ知らで―「慣らひ来し誰がいつはりもまだ知らでまつとせしまの庭の蓬生」（新古今集・恋四・一二八五・俊成女）に学ぶか。○行く方―帰って行く方角の意に、比喩で、別れの悲しみに沈む心をもって行くところの意を重ねる。

〔補説〕 初二句の先行例は「いかにせむかかるとためしは片し貝並びふせれど会はでやみぬる」（今撰集・恋・一五四・内新宰相）だが、これに倣った訳でもないであろう。

思他人

146 色見えぬ花はなとは何か思ひけんあらはにうつる人の心こころを

〔通釈〕 他人を思ふ

（あの古歌のように）色に見えないでうつろう花だとは、どうして思ったのだろうか。こんなにも目に見えてあからさまに、他へと移る人の心を。

〔本歌〕 色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（古今集・恋五・七九七・小町）

〔他出〕 中書王御詠・恋・寄花恋・二〇四。

〔語釈〕 ○思他人―『古今六帖』（第五・雜思）の「こと人を思ふ」に当たるか。↓144語釈。○人の心を―「を」を格助詞に解した。逆接の接続助詞に解すれば、「人の心であるのに」の意、感動の間投助詞に解すれば、「人の心であるのになあ」の意となる。

忍

147 逢ふ事よいつの人間を契りにて忍ぶる中に年の経ぬらん

〔通釈〕 忍ぶ

（あの古歌のように）梅の花ではなく、いつの間にかうつろってしまふのは、逢ふこと、なのだよ。いったい何時の人の見ていないときを約束として、逢わずに忍んでいるうちに、年が経ってしまふのだろうか。

〔本歌〕 暮ると明くと目かれぬものを梅の花いつの人間にうつろひぬらん（古今集・春上・四五・貫之）

〔参考〕 逢ふことはながめふるやの板廂さすがにかけて年の経ぬらん（金葉集・恋下・五〇四・読人不知）

〔語釈〕 ○忍―この一字題は珍しい。「忍恋」は、『永久百首』（恋）に設けられて以降、盛行する。↓144語釈。○逢ふ事よ―先行例は、「逢ふことよ今は限りの旅なれや行く末知らで胸ぞもえける」（新勅撰集・雑五・一三七三・大式）のみ。あるいは「逢ふことは」の誤写の可能性も見るべきか。

不忍

148 故郷を寝とは偲びて草枕おくと急ぎし 暁の空あかつきぞら

〔通釈〕 忍ばず

故郷を寝るといつては忍び、草枕の旅寝で起きるといつては先を急いだ、あの暁の空よ。

〔本歌〕 つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆き寝とはしのばむ（古今集・恋一・四八六・読人不知）

〔語釈〕 ○不忍―珍しい歌題。建長三年（一二五二）頃まで生存し、東国にも居した寂身の『寂身法師集』に「不忍恋／よしさらばおさへぬ袖の涙にて深き心の色をだに見よ」（雑雑歌 寛喜三年貞永元年等・恋・三四九）を見出しうる。該歌は、恋歌ではなく羈旅の述懐である上に、その内容からしても、「不忍」の題に必ずしもそぐわない。「忍ばず」であるから、「偲びて」と表現したということであろうか。↓144語釈。○故郷―ここは京都を言うか。↓22。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の帰洛の旅の感懐か。142から166までが恋の歌群であるとすれば、「故郷」を思慕する羈旅の述懐の趣である該歌の配置は不審か。

隔日来

149 言問ひし面影ばかり形見にて幾日過ぎ来ぬ夕暮の空こととおも いたみ いくか・き くれ ぞら

〔通釈〕 日来隔てたる

私に恋の言葉をかけた、あの人の面影だけを形見として、いったい何日が過ぎ来たったのか。この夕暮の空よ。

〔参考〕

夕暮はもの思ひまさる見し人の言問ひし顔面影にして（古今六帖・第四・おもかけ・二〇七二・笠女郎、万葉集・巻四・相聞・六〇二・笠女郎、初句「夕されば」四句「言問ひしさま」）

〔語釈〕

○隔日来―『古今六帖』（第五・雑思）の「日ごろへだてたる」に当たる。類例は、『和歌一字抄』に「隔日恋裏」の題で「三日月のわれて逢ひ見し面影の有明までになりけるかな」（隔・三六七・関白）が見える。しかし、これは、『新撰六帖』（第五）の「日ごろへだてたる」の為家の詠作（二四三二）である。為家自身が、『歌一体』（題をよくよく心得べき事）に、題を「隔日恋」として引き、『玉葉集』（恋二・一四八〇）には、「六帖の題にて歌よみ侍りけるに、日ごろへだてたり、ということを」の詞書で収められている。後代では、室町時代の歌僧正広の家集『松下集』に「隔日来恋／呉竹の一夜隔つるふしの間をむなしき中といかで恨みん」（長享三年）十一月十日、引撰寺月次歌合に・一四九九）と見える。↓144語釈。

夜居間

150 忍びける誰が宵の間のながめより待つとは人に月を言ひけん

〔通釈〕

宵の間

いったい誰の、じつと堪え忍んだ宵の間の物思いの眺めから、他の人に対して、（恋しい人ではなく）月を待っていると言ったのだろうか。

〔本歌〕

あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて君をこそまで（拾遺集・恋三・七八二・人麿。万葉集・巻十二・寄物陳思・三〇〇二・作者未詳、結句「妹をこそ待て」）

〔参考〕 月待つと人には言ひてながむれば慰めがたき夕暮の空（千載集・恋四・八七三・範兼）

頼めつつ来ぬ夜は経ともひさかたの月をば人の待つといへかし（新勅撰集・恋五・九五六・赤染衛門）

〔語釈〕 ○夜居間―「夜居」は、宿直で、夜間に寝ずに部局に詰めていること。その意味での「夜居の間」でも通意

だが、歌題としては特殊であろう。『古今六帖』（第五・雑思）に見える「よひのま」に当たり、「宵」を「夜居」に宛てたと解釈しておく。↓144語釈。

〔補説〕 宗尊には、物事の起源あるいは本意の始元を問う傾きが窺われる（柳葉集・六七一、瓊玉集・七七、二〇二）。該歌も、その傾向の中にある。

待人

151 侘びつつも曇れと言ひし月影の時雨しぐるるしもぞ人は待たるまる。

〔通釈〕 人を待つ

（あの古歌のように）気落ちしながらも、（月夜には来ぬ人が待たれるので）曇れ（そして雨も降ってほしい）と言った月が、（かき曇って）時雨れるのは実に、かえって人がつい待たれることだ。

〔本歌〕 月夜には来ぬ人待たるかき曇り雨もふら降らなむ侘びつつも寝む（古今集・恋五・七七五・読人不知）

〔他出〕 中書王御詠・恋・待恋・一七四。

〔語釈〕 ○待人―『古今六帖』（第五・雑思）の「人をまつ」。↓144語釈。

不待

152 風の音をそれかと待ちし夕暮もげにいつまでの庭の萩原

〔通釈〕 待たず

庭の萩原を吹く風の音を、(訪れる人の) それかと待ってきた夕暮も、本当にまったく何時まで続くのか、この庭の萩原よ。

〔参考〕 さりともと思ひし人は音もせで萩の上葉に風ぞ吹くなる(後拾遺集・秋上・三三一・小右近)

萩の葉に人頼めなる風の音を我が身にしめて明かしつるかな(後拾遺集・秋上・三三二・実誓)
人とはぬ庭の萩原音立てて風のみ秋の夕暮の空(白河殿七百首・秋・聞萩・二一四・為氏)

〔語釈〕 ○不待―『古今六帖』(第五・雑思)の「待たず」。下に「恋」が略されるとすれば、「待たぬ恋」だが、

あるいは、前歌の「待人」との連続で見れば、「不待人(人を待たず)」の省略形かと疑われなくもない。↓144語
釈。○萩原―萩が群生している場所。

道使

153 なほざりの道行く人のたよりもあはれをかくる言の葉ぞなき

〔通釈〕 道の使ひ

とおりにいっぺんの、旅の道を行く人の便りにも、(私に) 情けを掛ける言葉などはないよ。

〔参考〕 玉ほこの道の便りに言問ふも人の情けの程は見えけり（新撰六帖・第五・道のたより・一四八一・家良）

いかにせんそなたの風のつてにだにあはれをかくる言の葉もなし（宝治百首・恋・寄風恋・二五五六・但馬）

〔語釈〕 ○道使―他には見えない題。『古今六帖』（第五・雑思）に見える「道のたより」と同じで、「便」と「使」の誤写か。あるいは、『古今六帖』（第二・山）の「つかひ」の改変か。ただし、同六帖では、一般的な恋の「使ひ」の歌が収められているが、『新撰六帖題和歌』の「つかひ」では、祭と神の「使ひ」が詠まれていて、趣を異にする。↓144語釈。

〔補説〕 歌題は誤写が疑われ、一首の意図が必ずしも分明ではない。参考の家良詠に異を唱えるような趣に解しておく。

人伝

154 知らせばや吉野よしのの山の桜花さくらまだ越えぬ間まの心づくしを

〔通釈〕 人伝て

知らせたいものだよ。吉野の山の桜の花を、まだ（大和へと）越えて行かない間は、人づてにばかり聞いていて、心尽くしの物思いをするように、まだ逢いに越えて行かない間の、さまざまに心を尽くす物思いを（人づてにでも）。

〔本歌〕 越えぬ間は吉野の山の桜花人づてにのみ聞き渡るかな（古今集・恋二・大和に侍りける人につかはしける・

五八八・貫之)

踏めば惜し踏までは行かむ方もなし心づくしの山桜かな(千載集・春下・落花満山路といへる心をよめる・
八三・赤染衛門)

〔参考〕 頼めてもまだ越えぬ間は逢坂の関もなこそこのこちこそすれ(六百番歌合・恋下・寄関恋・一〇〇四・家
隆)

夕づく夜花にいざよふ春はまた心づくしのみ吉野の山(如願法師集・春・建仁二年二月十三日当座御歌合
に、暮山見花・三七七)

〔影響〕 越えぬ間の心づくしよ花にだにかかりし物かみ吉野の山(春夢草・恋上・不逢恋・一四七八)

〔他出〕 中書王御詠・恋・六帖の題の歌に、人づて・一六六。

〔語釈〕 ○人伝―『古今六帖』(第五・雑思)の「人づて」。↓144語釈。○吉野の山―大和国の歌枕。吉野山。○越え
ぬ間―本歌の詞を取る。大和へと越えて行かない間の意に、逢うことの一線を越えない間の意を重ねる。

〔補説〕 影響の『春夢草』の一首については、先行例がない52の「たえだえ迷ふ」の語も、後出歌として『春夢草』
の一首を見出しうるので、肖柏の宗尊詠受容の問題を考える必要性を検討する材料として、一応掲出しておくもの
である。

忘

155 忘るるはやすかりけりと見ゆる世に我のみ人をなに偲ぶらん

〔通釈〕 忘る

(人)を忘れるのはたやすかつたのだ、と見える。この世の中で、私だけが人を、どうして(忘れずに)偲んでいるのだろうか。

〔参考〕

そのままにやすくや物の忘れると人の心を我が身ともがな(洞院撰政治家百首・恋・遇不逢恋・一二九七・実氏。万代集・恋四・二四〇六。続後拾遺集・恋四・九二九)

かくばかり忘るることのやすからば人づてにても教へやせむ(人家集・中務卿親王家百首に・四七〇・親子)

ながからぬ人の心も見ゆる世に涙の玉はを絶えざりけり(新撰六帖・第五・たまのを・一六八一・家良)

〔類歌〕

我のみや絶えぬ記念と偲ぶらむつらきが中の有明の月(瓊玉集・恋下・逢不会恋・三九一)

我のみよなど偲ぶらん世を見れば昔忘るる人ぞ多かる(竹風抄・卷五・文永六年八月百首歌・雑・八二三)

〔語釈〕

○忘―『古今六帖』(第五・雑思)の「わする」。↓144語釈。

〔補説〕

参考の『人家集』歌は、同集が作者別類聚であり、四七〇歌を収める歌群中の一首「有明はなほぞかなしき逢ふまでの形見とてこそ月は見れども」(寄月恋・四六二)が、『続拾遺集』(恋三・九五九)に、「典侍親子朝臣」の歌として見える他、他歌集と一致する歌から見て、光俊女の親子(後嵯峨院中納言典侍)の作と考えられている。親子は、弘長元年(一二六一)九月の宗尊主宰の「中務卿宗尊親王家百首」の作者であるので、『人家集』の詞書「中務卿親王家百首」も、同百首を指すと考えられるのである。従って、参考の三首は何れも、宗尊の視野に入っていた可能性があることになろう。参考 福田秀一「人家和歌集(解説・錯簡考と翻刻)」(『国文学研究資料館紀要』七、昭五六・三)、安井久善「中世散佚百首和歌二種について―光俊勸進結縁経裏百首・中務卿宗尊親王家百首―」

〔『日本大学商学集誌』四一、人文特集I、昭四七・九。〕

不忘

156 あけほの曙も夕べも絶えぬ形見にて人をわす忘るる時の間ぞなき

〔通釈〕 忘れず

曙も夕方も、絶えることのない恋の形見として、人を忘るる時は少しの間もないよ。

〔参考〕 恋ひ侘ぶ聞きにだに聞け鐘の音にうち忘らるる時の間ぞなき（新古今・哀傷・八一六・和泉式部）

ものごとくに忘れがたみを留めおきて涙のたゆむ時の間ぞなき（新勅撰集・雑三・一二五五・基良）

〔類歌〕 我のみや絶えぬ記念と惚ぶらむつらきが中の有明の月（瓊玉集・恋下・逢不会恋・三九一）

〔他出〕 中書王御詠・恋・遇不逢恋・一八九。

〔語釈〕 ○不忘―『古今六帖』（第五・雑思）の「わすれず」。↓144語釈。

心替

157 あはれにも命をきはと言ひし人添はぬが多くなりけるかな

〔通釈〕 心替はる

しみじみと感に堪えないで、（相手を思う心は）命の限りと言った人よ、（それなのに心変わりして）、なんとも

悲しく哀れなことに、いっしょにならない人が、多くなってしまったことであるな。

〔参考〕 頼むる命をきはのかね言もあまりになれば疑はれつつ（新撰六帖・第五・たのむる・一五五二・為家。秋

風抄・恋・二二五、初句「頼むから」。秋風集・恋中・八三八）

〔語釈〕 ○心替―『古今六帖』（第五・雑思）の「心かはる」。↓144語釈。○あはれにも―「言ひし人」と「多くなり
にけるかな」の両者にかかると解する。○添はぬ―「恋すれば我が身は影となりにけりさりとて人に添はぬものゆ
ゑ」（古今集・恋一・五二八・読人不知）に遡及する詞。「添ふ」は、男女が連れ添う、一緒に暮らす、夫婦とな
る、の意味。

驚

158 おどろ 驚かすさのみや夢になしはてんつれなく見^みえし月はいかにと

〔通釈〕 驚かす

ぐずぐずとして無情に見えた、あの別れの時の有明の月はどうであったかと。そう言って、（せっかく二人の仲
は夢とばかり思うようになった）私の気をまた今さら惹こうとする、むしろそのことだけを夢だとしてしまおう
か。

〔本歌〕 有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし（古今集・恋三・六二五・忠岑）

夢とのみ思ひなりにし世の中を何今さらに驚かすらん（拾遺集・雑賀・一二〇六・成忠女）

〔参考〕 辛きをも憂きをも夢になしはて逢ふ夜ばかりをうつつもがな（新勅撰集・恋五・九七七・顕昭）

問へかしたな蘆屋の里の晴るる夜に我が住むかたの月はいかにと（続後撰集・秋中・三四六・少将内侍）

〔語釈〕

○驚―『古今六帖』（雑五・雑思）の「おどろかす」。↓144語釈。

〔補説〕

宗尊にしては晦渋な歌。上句と下句は倒置で、結句から初句に還ると解した。

恋昔

159

昔とて思偲ぶばかりになり成にけり見しもき聞きしも昨日と思ふに

〔通釈〕

昔を恋ふ

昔ということ、懐かしく偲ぶ程になつてしまつたのだつたな。見たのも、聞いたのも、ほんの昨日のことだと思ふのに。

〔参考〕

世の中は見しも聞きしもはかなくてむなしき空は煙なりけり（新古今集・哀傷・八三〇・清輔）

〔他出〕

中書王御詠・雑・懷旧・三一五。

〔語釈〕

○恋昔―『古今六帖』（雑五・雑思）の「むかしをこふ」。↓144語釈。○見しも聞きしも―「すぐすぐと見し

も聞きしもなくなるにいつならんとぞ我も悲しき」（古今六帖・第四・かなしび・二四九二）や「人はみな見しも聞きしも世の中にあるはあるかとなきはなしとか」（好忠集・みなみ・四六五）が早い。参考歌とほぼ同時代の例に「おくれゐて涙さへこそとどまらね見しも聞きしも残りなき世に」（待賢門院堀河集・よろづの人のなくなるを聞きて・一二一）がある。○昨日と思ふに―「数ふれば八年経にけりあはれわが沈みしことは昨日と思ふに」（千載集・神祇・一二六二・実定）や「このへの花は老木になりにけりなれこし春は昨日と思ふに」（続後撰集・春

中・一一四・後鳥羽院)に学ぶか。

〔補説〕 一首は懐旧の趣であり、142から166までが恋の歌群であるとすれば、そぐわないか。

昔逢人

160 忘れずよとばかりだにも知らせばや昔がたりの夢の一夜を

〔通釈〕 昔逢へる人

忘れないよ、とだけでさえも知らせたいものだ。もはや昔話となった、あの逢瀬の夢の一夜を。

〔参考〕 忘れずよまた忘れずよ瓦屋のしたたくけぶり下むせびつつ(後拾遺集・恋二・七〇七・実方)

逢ひ見しは昔がたりのうつつにてそのかね言を夢になせとや(新古今集・恋二・一二九九・通親)

〔語釈〕 ○昔逢人―『古今六帖』(第五・雑思)の「むかしあへる人」。なお、新編国歌大観本や図書寮叢刊本および

細川家永青文庫叢刊本には、「むかしある人」とあるが、寛文九年刊本や『校証古今和歌六帖』等には「むかしあへる人」の本文が存し、『新撰六帖題和歌』も「むかしあへる人」であり、なおかつ所収歌の内容に照らしても、「むかしあへる人」であるべきか。↓144語釈。○とばかりだにも―家隆に「いかにして我が思ふ程は数ならずとばかりだにも君に知らせん」(壬二集・家百首・恋・片恋・一四一七)という先行作があるが、むしろ「今はただ思ひ絶えなんとばかりを人づてならで言ふよしもがな」(後拾遺集・恋三・七五〇・道雅)を意識したか。○夢の一夜―先行例は見えない。「辛かりし多くの年は忘れられて一夜の夢をあはれとぞ見し」(新古今集・恋三・一一六二・範永)などの、「一夜の夢」を言い換えたか。

〔補説〕 上句と下句は倒置。

来不逢

161 逢はでのみ帰るぞ辛き片糸の絶えずくるとは見ゆるものから

〔通釈〕 来れど逢はず

片糸が合わないように、逢わないままで帰るのは辛いよ。片糸の（縊り合わせて）途絶えずに繰るように、絶えることなく来ると見えるものなのに。

〔本歌〕 逢はでのみあまたの世をも帰るかな人目の繁き逢坂に来て（後撰集・恋五・女のもとにまかりて、えあはでかへりてつかはしける・九〇五・読人不知）

〔参考〕 片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ（古今集・恋一・四八三・読人不知）
濡れつつもくると見えしは夏引の手引きに絶えぬ糸にやありけん（後撰集・恋五・九七六・読人不知）

〔語釈〕 ○来不逢―『古今六帖』（第五・雑思）の「くれどあはず」。↓144語釈。○見ゆるものから―「天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから」（古今集・恋五・七八四・紀有常女）に遡る。○逢はで―「片糸」の縁で、片糸が「合はで」の意が掛かる。○片糸の絶えずくる―「片糸」は、二本の糸を縊り合わせる前の片一方の細い糸。ここは、「くる」の枕詞で、「絶えず」も縁語。あるいは序詞風に「絶えず繰る」の掛詞で「絶えず来る」を起こす、とも解される。

留人

162 長月の有明ありの夜よもまだ深ふかしあはれしばしの情けけともがな

〔通釈〕 人を留む

長月の有明頃の夜はまだ深い。ああ、もう暫くの間でも、愛情を通わしてほしいものだ。

〔本歌〕 しばし待てまだ夜は深し長月の有明の月は人まどふなり（新古今集・恋三・一一八二・惟成）

〔参考〕 今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな（古今集・恋四・六九一・素性）

〔語釈〕 ○留人―『古今六帖』（第五・雑思）の「ひとをとどむ」。↓144語釈。○有明の夜―宗尊以前に先行例の見え

ない詞―宗尊は既に、「文永元年十月百首」で「鹿のなく有明の夜の山おろしに木の葉時雨れて月ぞ残れる」（瓊玉集・秋下・二六九、柳葉集・文永元年十月百首歌・秋・五九二）と詠んでいる。○情けともがな―先行例の見えな
い句。128にも。

〔補説〕 本歌の類歌に「待てと言はばまだ夜は深し長月の有明の月ぞ人はまどはず」（古今六帖・第五・人をとどむ・

読人不知）があり、先後は不明である。両首共に、参考歌を踏まえていよう。宗尊も、本歌の背後に参考歌を見通
していよう。

無名

163 憂うれし辛つらしあら人神のいにしへも無なき名にてこそ沈しづみはてしか

〔通釈〕 無き名

憂いよ。辛いよ。あら人神である天神の昔も、この私のように、無実の評判によつて、すっかり沈淪したのだな。

〔参考〕 憂し辛し安積の沼の草の名よかりにも深きえには結ばで（続古今集・恋一・一〇三〇・定家。六百番歌合・

恋上・見恋・六四五）

思ひ出づや無き名を立つは憂かりきとあら人神もありし昔を（続詞花集・神祇・三七九・ある局なる女房。

袋草紙・希代歌・仏神感應歌・二五五・修理進某妹。袖中抄・六四四。十訓抄・第十可庶幾才芸事・

一六七・小大進。古今著聞集・小大進歌に依りて北野の神助を蒙る事・一二二）

〔語釈〕 ○無名―『古今六帖』（第五・雑思）の「なきな」。↓144語釈。○あら人神―人の姿となつてこの世に現れる神、あるいは強い力を持った靈験あらたかな神の意。後者は特にまた、菅原道真など高名な人物が死後に神と祀られた場合にも言う。ここも道真（天神）を意識する。「現人神」あるいは「荒人神」と表記。

〔補説〕 参考の「思ひ出づや」の歌については、宮中の装束紛失に無実の嫌疑を掛けられた折、北野神社で、天神（菅原道真）に愁訴した歌であるとの伝承がある。『袋草紙』は、次のとおりの話を伝える。

待賢門院（璋子）が中宮であつた時に、女の装束が一揃い失せてしまい、宮中が騒動となつた。この女（修理進）は、ある局の女房に嫌疑をかけられた。そこで、泣く泣く北野神社に参籠して、詠んだ歌である。その後まことの犯人が出来た。それは下女の敷島というものであつた。

『続詞花集』の詞書は、「待賢門院后宮と申しける時、女房の衣の失せたりけるを、ある局なる女房、怪しきさまにははれける、北野の宮に籠もり侍りける、御前の柱に書き付けける」であり、嫌疑を掛けられた者（歌の作者

が)「ある局の女房」となっている。『十訓抄』や『古今著聞集』は、さらに詳細な話となっていて、失せる衣は待賢門院の「御衣」で、その責めを負わされる「小大進」の名が明らかになっている。

右大臣から突如大宰府に左遷され、没後に天神と祀られた菅原道真に、將軍を廢されて鎌倉を追われた宗尊自身の境遇を重ねるか。

不恨

164 かかりける報むくひもおをのが辛つらさにて身をこそ嘆なげけ世よをば恨みみず

〔通釈〕 恨みず

このようになった報むくいも、自分の薄情さ故であつて、この身をこそ嘆なげくけれども、二人の仲を恨むことはしないよ。

〔本歌〕 海人の刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそなかめ世をばうらみじ(古今集・恋五・八〇七・直子。伊勢物

語・六十五段・一二〇・女)

〔参考〕 かかりける嘆なげきは何の報むくいぞと知る人あらば問はましものを(千載集・恋二・七六一・成範)

〔語釈〕 ○不恨―『古今六帖』(第四・恋)の「うらみず」。↓144語釈。

面影

165 な中かなかに見み馴なれし人の面影わかは別わかれてしもぞ身そには添そひける

〔通釈〕 面影

かえつて、逢い親しんだ人の面影は、別れてからに限つて、とりわけこの身に寄り添うのであった。

〔参考〕 衣河みなれし人の別れには袂までこそ浪は立ちけれ（新古今集・離別・八六五・重之）

面影の忘らるまじき別れかな名残を人の月にとどめて（新古今集・恋三・一一八五・西行）

〔語釈〕 ○面影―『古今六帖』（第四・恋）の「おもかけ」。↓144語釈。○なかなか―下句、より直接には「添ひける」にかかる。

〔補説〕 参考歌の他にも、同じ『新古今集』の良経詠「身に添へるその面影も消えなむ夢なりけりと忘るばかりに」（恋二・一一二二六）や、哀傷歌ではあるが西行の「なきあとの面影をのみ身に添へてさこそは人の恋ひしかるらめ」（八三七）等も、宗尊の視野に入っていたであろう。

形見

166 朝夕に馴れにし事を思ふには我が身ぞ人の形見なりける

〔通釈〕 形見

朝夕に、慣れ親しんだことを思うにつけては、この我が身こそがあの人の形見なのであったと気付くよ。

〔参考〕 思ひかね馴れにし人の形見とて厭はるる身をまづや惣ばん（新撰六帖・第五・かたみ・一六四六・家良）

思ひわび絶えゆく仲の形見とは馴れし我が身の頼まれやせん（新撰六帖・第五・かたみ・一六四七・為家）

〔影響〕 厭はじよ馴れしあはれを思ふ折は我が身ぞ人の形見ともなる（伏見院御集・恋形身・一六八一）

〔類歌〕 朝夕に面影うつす鏡こそ別れし君が形見なりけれ（竹風抄・第五・文永九年十一月比百番自歌合・鏡・

一〇一〇）

〔語釈〕 ○形見―『古今六帖』（第五・雑思）の「かたみ」。↓144語釈。

〔補説〕 直接には、参考に挙げた『新撰六帖』の「かたみ」題の両首に負った作であろう。これらの、「我が身」を恋の「形見」と見る趣向は、稍少将公重の「年経れど君に馴れにし我が身こそ面がはりせぬ形見なりけれ」（風情集・はなれて年経恋・五四）が先行する。『風情集』の流布と受容の問題を考える中で、改めて捉え返すべきであろうか。

また、伏見院の類詠を宗尊からの影響として挙げたが、あるいは偶然の類似かもしれない。伏見院ひいては、京極派の宗尊詠受容の有りようとして、今後の課題としたい。

金

167 いつまでか陸奥山も我が世にて金花咲く身と思ひけん

〔通釈〕 金

天皇の御代が栄えるだろうという黄金の花が咲く東国の陸奥の山のことも、私自身の人生として、まさに黄金の花咲く身であると、いったいいつまで思ったのだろうか。

〔本歌〕 すめろさの御代栄えむと東なる陸奥山に金花咲く（万葉集・卷十八・四〇九七・家持）

〔語釈〕 ○金―あまり例のない題。良経の「五行をよみ侍りける」という十五首とそれに唱和した定家の十五首中に

「木金土金水」の一つとして見える（秋篠月清集・一四八五〜九九、拾遺愚草員外・三七九〜九三三）。良経の一首は「来む世まで長き宝となる物は仏に磨くこがねなりけり」（秋篠月清集・一四八八）で、「金」を「こがね」として詠むが、定家のそれは「霜さえて月影白き風のうちにおのが秋なる鐘の音かな」（拾遺愚草員外・三八二）で、「鐘」あるいは「秋」に「金」の趣意を込めている。宗尊は、「こがね」として詠む。

〔補説〕 將軍時代を回想した述懐か。東国鎌倉の主として在った日々の栄華を、「金花咲く」「陸奥山」によそえたのであろう。北条氏を中心とした幕府に迎立された名ばかりの將軍であっても、宗尊にとっては忘れ難い栄耀であったということであろうか。宗尊の心裏を探る手がかりとなる一首ではある。

玉

168 返^{かへ}しても涙の外の玉は見^みず夜半^{よは}の衣の恨^{うら}めしの世^よや

〔通釈〕 玉

（あの古歌のように）たとえ夜の衣を裏返して着ても、恋しい人どころか、涙の玉以外の玉は見えないよ。この夜半の衣の裏は、裏ならぬ、恨めしいだけの恋の仲だ。

〔本歌〕 いとせめて恋しき時はむば玉の夜の衣を返してぞ着る（古今集・恋二・五五四・小町）

〔参考〕 引きかけて涙を人につつままに裏や朽ちなむ夜半の衣は（千載集・恋三・八一四・実定）

〔他出〕 中書王御詠・雑・雑の歌の中に・二八二。

〔語釈〕 ○玉―『古今六帖』（第五・服飾）の「たま」。○夜半の衣の恨めしの世―「夜半の衣の裏」から、「うら」

を掛詞に、「恨めしの世や」に鎖る。「世」は、二人の仲。『中書王御詠』では、雑歌としてあり、その場合、人生あるいは世間の意か。↓補説

〔補説〕 恋歌とすれば、古今歌の本歌取として、一応同意であろう。しかし、『中書王御詠』のように、雑歌（述懐歌）とすれば、「衣」の「裏」の「玉」、即ち法華七喻の一の「衣裏繫玉」（「衣裏明珠」とも）の譬喩が、意識されていると見る必要があるのではないか。「衣裏繫玉」は、本来既に仏性を得ているながらそれを悟らず、仏の導きで初めて悟ることの譬えで、昔、二乗の人が大通知勝仏から大乘の種因を得ながらも無明ゆえに悟らず、『法華経』を聞き初めて悟ったということから、『法華経』を無価（この上なく貴重である）の宝珠に譬えていうものである。本歌と共にこれを踏まえているとすれば、一首は、「（あの古歌のように）たとえ夜の衣を裏返して着ても、恋しい人どころか、仏性を見えていることを示す玉も、涙の玉以外の玉は見えないよ。この夜半の衣の裏は、裏ならぬ、恨めしいだけのこの世の中だ。」といった趣意にならうか。

参考までに、衣裏繫玉を言う『法華経』（五百弟子受記品第八）の一節を読み下して挙げておく（岩波文庫本による）。

世尊よ、譬へば、人有りて、親友の家に至りて、酒に酔ひて臥せるが如し。是の時、親友は官の事ありて当
 に行くべかりしかば、無価の宝珠を以て、其の衣の裏に繫け、之を与えて去れり。其の人、酔ひ臥して、都
 覚知せず、起き已りて、遊行して他国に至り、衣食の爲の故に、勦力つとめて求索もとむること、甚だ大いに艱難し、若し
 少しく得る所有れば、便ち以て足れりと為せり。後に於て、親友は会遇たまはまひてこれを見、是の言を作す。「咄つたなき
 な、丈夫そのこよ、何んぞ、衣食の爲に、乃ち、是の如くなるに至れるや。我昔、汝をして安楽なることを得て、五
 欲に自ら恣ほしまならしめんと欲して、某の年日月に於て、無価の宝珠を以て汝の衣の裏に繫けしなり。今、故、

現に在り。而るを汝は知らずして、勤苦し憂惱し、以て自活することを求む。甚だこれ癡なり。汝は今、此の宝を以て、須る所に貿易るべし。常に意の如くにして、乏しく短る所無からしむべし」と。仏も亦、是の如し。

鏡

169 見ればまた鏡の影もかはらぬにうつりはてぬる身の盛りかな

〔通釈〕 鏡

見ると前と同じように、鏡に映る姿も変わっていないのに、すっかり移ろってしまった、我が身の盛りであることだな。

〔参考〕

うばたまの我が黒髪やかはるらむ鏡の影に降れる白雪（古今集・物名・かみやがは・四六〇・貫之）

忍ぶとて影だに見えじます鏡うつりはてにし人の心は（続後撰集・恋五・九六三・実氏。宝治百首・恋・寄

鏡恋・三〇四〇）

〔語釈〕

○鏡―『古今六帖』（第五・服飾）の「かがみ」。○うつり―衰えるの意に、「鏡」「影」の縁で、映るの意が

掛かる。○身の盛り―宗尊は、別に「あはれにも賤の小手巻ありし世を身の盛りとて偲ぶ頃かな」（中書王御詠・雑・雑の歌の中に・二八五）とも詠んでいる。

鬢

170 天津つ人花はなの鬢かづらの時の間まにしほむためしぞ身しに知られぬる

〔通釈〕 鬢

天人の花の鬢が、ほんの少しの間に気がなくなりしほむように、すぐにしほむ例しは、この我が身によっておのづから分かつてしまったのだ。

〔参考〕

七夕の飽かぬ別れの涙にや花の鬢も露けかるらん（金葉集・秋・師時）

ながめきて年に添へたるあはれとも身に知られぬる春の夜の月（宝治百首・春・春月・四〇四・基家。秋風

集・春上・五八。新時代不同歌合・一三六）

〔語釈〕

○鬢―『古今六帖』（第六・草）に「たまかづら」は見えるが、「鬢」単独の歌題の例は少ない。『明題部類

抄』に著録する「出題入道光俊朝臣」という「三百六十首」の「述懐甘首 寄『雑物』」に見える。また、為家の

「文永八年四月廿八日当座百首」の「恋」には「鬢」題が設けられて、「そのかみの契りも知らず玉鬢あらぬすぢに

ぞかけはなれにし」（為家集・一九六一）と詠まれている。○天つ人―『金葉集』歌を念頭に、七夕の両星を言う

か。○花の鬢―季節の花で作った髪飾り。「花鬢」とも。

狩衣

171 狩衣かり葎むくろしげ茂れる宿やとにきてかこつばかりの袖の露けさ

〔通釈〕 狩衣

狩衣を着て、葎が茂っている家にやって来て、その葎の家のせいにするほどの、涙に濡れた袖の露っぼさよ。

〔本歌〕 秋の野の露分けきたる狩衣葎茂れる宿にかこつな（源氏物語・手習・七七二・妹尼）

〔語釈〕 ○狩衣―『古今六帖』（第五・服飾）の「かりころも」。元来は野外の鷹狩など遊獵に用いた衣。平安期以降には貴族（公家）の略装平服。中世以降武家が礼服に用いた。ここでは、本歌を承けて、原義が生きる。○きて―「来て」に、「狩衣」の縁で、「着て」が掛かる。○袖の露けさ―ここでは、袖が涙で濡れて露っぼさを言う。「露」は、「葎」の縁語。この句の先例には、『永久百首』の「夏山の裾野の草や深からん分け来る人の袖の露けさ」（夏・夏草・一四四・忠房）があるが、これは実際の草の露に濡れた袖の露っぼさを言う。涙に濡れた袖の露っぼさを言う例としては、『続古今集』に東三条院詮子の「いとどしく物思ふ夜はの月影に昔を恋ふる袖の露けさ」（雑・一五九四）が収められていて、宗尊が学んだ可能性は高いであろう。なお、宗尊は別に、「小野宿にとまりて／憂き身世に色かはりゆく浅茅生の小野のかりねの袖の露けさ」（中書王御詠・雑・二二二六）と詠んでいる。

〔補説〕 本歌は、小野の山里で、横川の僧都の妹尼に引き取られた浮舟に、妹尼の亡き娘の婿であった中将が心惹かれ、八月十余日、小鷹狩りのついでに三たび来訪する。応じぬ浮舟に代わり、妹尼が対応し、中将が、「松虫の声を尋ねて来つれどもまた萩原の露にまどひぬ」と詠んだのに対して返した歌。

湿衣

172 露深き草の袂は払へども我が濡れ衣は秋風もなし

〔通釈〕

湿衣ぬれぎぬ

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

露が深く置いた深い草のような涙の袂は、秋風が吹き払うけれども、私の濡れ衣は、無実の罪は、それを晴らす秋風とてないよ。

〔参考〕 世とともに我が濡衣となるものはわぶる涙の着するなりけり（後撰集・雑三・一二〇二・読人不知）

憂き事をしのぶる雨の下にして我が濡れ衣はほせど乾かず（後撰集・雑四・一二六七・小町孫）

〔類歌〕 「いかにせん露は払はで秋風の吹くにつけても濡るる袂を」（柳葉集・文永二年潤四月三百六十首歌・秋・

七〇七。続古今集・秋上・三五三）

〔語釈〕 ○湿衣―『古今六帖』（第五・服飾）の「ぬれぎぬ」。○草深き草の―「露深き」から「深き草の」へ鎖る。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の將軍更迭の事由を、宗尊自身の落ち度に求めるような策動があつて、あるいは

宗尊がそのように認識して、その冤罪を慨嘆するか。

濡衣

173 有明と言ひしばかりの月にまた誰待ちわびて衣打つらん

〔通釈〕 濡衣

有明の頃と、（恋人が）言つたばかりに待つことになつた有明の月に、同じように誰が待ちかねて衣を打っているのだろうか。

〔本歌〕 今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな（古今集・恋四・六九一・素性）

〔参考〕 ながむればちちに物思ふ月にまた我が身ひとつの峰の松風（新古今集・秋上・三九七・長明）

里は荒れて月やあらぬと恨みても誰淺茅生に衣打つらむ（新古今集・秋下・四七八・良経）

〔他出〕 中書王御詠・擣衣・一一八。

〔語釈〕 ○擣衣―『古今六帖』（第五・服飾）の「ころもうつ」に当たる。○誰待ちわびて―作例は少ない。同時代では他には、「夕暮は誰待ちわびて花薄野中の水に涙かるらん」（長綱百首・秋・水辺薄・四五）や「降り乱れみぞれし空の更けし夜に誰待ちわびてゆきかくれけん」（実材母集・題を探りて人人よみ侍り折折の歌・夜奠・七七三）が知られる。後代では、中院通秀に「思ひやりあはれもふかし里遠み誰待ちわびて衣打つらん」（十輪院御詠・擣衣幽・文明十五將軍家着到・一五二）がある。

単

174 うらなくも何頼たのみけん夏衣ひとへに憂うれきはこの世よなりけり

〔通釈〕 単

無邪気にも、どうして頼みとしたのだろうか。（裏地がない夏衣の）単衣ならぬ偏に、ただひたすらに憂く辛いのはこの世の中であつたのだ。

〔参考〕 夏衣ひとへに辛き人恋ふる我が心こそうらなかりけれ（続古今集・恋一・一〇三四・顕輔）

〔類歌〕 我が背子がけふたちきたる夏衣人の心のうらなくもがな（新撰六帖・第五・なつごろも・一七二一・家良）
うらなくも何頼みけん薄衣ひとへにかはる人の心を（永享百首・恋・寄衣恋・八七二）

〔語釈〕 ○単―ひとへ。歌題としては珍しいか。『古今六帖』（第五・服飾）の「夏ごろも」に相当するか。○うらな

くも―「うら（心）」は下心・内心で、「心無くも」は、何気なく・無心にも、の意。「夏衣」「ひとへ」の縁で、「裏無く」（夏衣の単衣の裏地が無く）の意が掛かる。○何頼みけん―「かくばかり常なき世とは知りながら人をはるかに何頼みけん」（後撰集・恋二・六一五・時望）に遡る句。宗尊は、「うつり行く人の心の花かづらのちの世かけて何頼みけん」（宗尊親王三百首・恋・二七六）とも詠んでいる。○夏衣―「ひとへ」の枕詞。○ひとへに―夏衣の「単衣」に「偏に」（ひたすらに）を掛けて言う。

裳

175 萩が花散りにけらしな乙女子が露の玉裳に秋風ぞ吹く

〔通釈〕 裳

萩の花が散ってしまったらしいな。乙女子の、（萩に置く）露の玉のような、美しい玉裳に秋風が吹くよ。

〔参考〕 秋されば妹に見せむと植ゑし萩露霜置きて散りにけらしも（続後撰集・秋下・四一〇・人麿。人丸集・

一〇七）

露ながら萩の枝折る乙女子が玉裳吹きしく庭の秋風（壬二集・院百首建保四年・秋・八三八）

〔語釈〕 ○裳―『古今六帖』（第五・服飾）の「裳」。○萩が花散りにけらしな―「萩が花」が「散る」ことを言う原

拠は、『古今集』の「萩が花散るらむ小野の露霜に濡れてを行かむさ夜はふくとも」（古今集・秋上・二二四・読人不知）に求められるが、「散りにけらしな」という古めかしい表現は、参考の人麿歌に倣った結果ではないか。なお『人丸集』には、他に「この頃の秋風寒し萩が花散らす白露置きにけらしも」（人丸集・一二三）という歌も見

える。○露の玉裳―「露の玉」と「玉裳」を合わせる。

〔補説〕 参考の家隆詠は、「をとめらが玉裳裾引くこの庭に秋風吹きて花は散りつつ」（万葉集・卷二十・四四五二・安宿王。古今六帖・題二・には・一三五五、初句「乙女子が」に負っていよう。あるいは宗尊も、これを視野に入れていたかもしれない。

176 東には結び絶えける契りにてはな縹の帯ぞ色かはりにし帯

〔通釈〕 帯

東国では、縹の帯の結びが絶えたように、結び付きが絶えた縁として、（それを表すように）縹の帯は色が変わってしまったのだ。

〔参考〕 泣きながす涙に堪へて絶えぬれば縹の帯の心地こそすれ（後拾遺集・恋三・七五七・和泉式部）

うつりやすき縹の帯の色ぞ憂き絶えける仲をなに結びけん（明日香井集・院百首建保四年・恋・八〇八）

〔類歌〕 月草の花田の帯のゆふは山絶えぬる妻を鹿や恋ふらん（宗尊親王三百首・秋・一一七）

思へただ縹の帯のかりにだに結ばぬ仲のうつりやすきは（中書王御詠・恋・変恋・一八七）

〔語釈〕 ○帯―「古今六帖」（第五・服飾）の「おび」。○結び絶えける―結縁が絶えたの意。「縹の帯」の縁で、帯の結びが途切れたの意が掛かる。

〔補説〕 将軍職を解かれ、鎌倉を追われた境遇から、東国の人々と絶縁となったことを嘆く趣旨か。

参考の和泉式部歌も含めて、「縹の帯」に寄せて「仲」の「絶」えを言う歌の淵源には、『催馬楽』の「石川の高麗人に 帯を取られて からき悔する いかなる いかなる帯ぞ 縹の帯の 中はたいれるか かやるか あやるか 中はいれたるか」(呂・石川)が存している。該歌も、その範疇にある。「縹の帯」の「色」について言う歌は、「憂きにさは仲や絶えまし色なくて縹の帯に思ひなしつつ」(頼政集・四五八)が早く、参考の雅経詠が続く。その他にも、鎌倉前中期には、次のような歌を見出しうる。

うつり行く縹の帯の結ばほれいかなる色に絶えははつらん(洞院撰政治家百首・恋・遇不逢恋・一二九〇・道家)
結びおきし花田の帯の幾夜経て逢はぬにかへる色は見ゆらん(光明峰寺撰政治家歌合・寄帯恋・一二〇・隆祐)

心のみ花田の帯の一すぢにうつろふ色はいふかひもなし(光明峰寺撰政治家歌合・寄帯恋・一二二・源家清)

月草の縹の帯の色も憂しこなたかなたのうつりやすさに(新撰六帖・第六・つきくさ・二〇五九・信実)

白露の結ぶ契りも月草の縹の帯の色やうつらん(範宗集・恋・寄草恋・五五六)

妹と我縹の帯の仲なれや色かはりぬと見れば絶えぬる(龜山殿五首歌合文永二年九月・絶恋・九〇・後嵯峨院)

参考に挙げた「うつりやすき」の雅経詠は、175の参考歌とした家隆詠と同機会、即ち建保四年(一二二六)の「後鳥羽院百首」の作であるので、同百首自体を、宗尊が目にしていた可能性を探る意味合いもあって、参考歌とした。しかし、右の歌うたの何れかに学んだかとも疑われるし、特定の一首ではなく、少しく流行したかと思しい詠み方に従ったものであると見ることもできるであろう。

錦

177 いかがせん錦にしきをとこそ思ひしに無なき名たちきて帰る故郷

〔本文〕 ○底本第二句の「とこそ」は、「とよに」〔「よ」「に」の字中に見消ちして右傍に「こ」「そ」とあり〕。

〔通釈〕 錦

どうしようか。錦を裁って着て（荣誉とともに）故郷に帰ろうとこそ思ったのに、それどころか、無実の汚名が立って来て、それを身にまとい帰る故郷よ。

〔参考〕

故郷に帰ると見てや龍田姫紅葉の錦空に着すらん（拾遺集・雑秋・一二九・能宣）
白浪は故郷なれや紅葉葉の錦を着つつ立ち帰るらん（拾遺集・雑秋・一一三〇・読人不知）

襖ぎして衣をとこそ思ひしか涙をさへも流しつるかな（続古今集・哀傷・服脱ぎ侍りける日よめる・一四六六・俊頼。万代集・雑五・三五二。散木奇歌集・悲嘆・八三七）

〔他出〕

中書王御詠・雑・都にのぼりてのち、錦を題にて・二五二、初句「いかにせん」。

〔語釈〕

○錦―『古今六帖』（第五・錦綾）の「にしき」。○いかげせん―宗尊がよく用いている句。『柳葉集』に三

首（二七〓瓊玉集・一八九、八二三、八一九）、本抄にも他に五首（216、223、344、422、703）見える。宗尊の閉塞感の反映と見てもよいであろう。○たちきて―「立ち来て」に、「錦」の縁で、「裁ち着て」が掛かる。○故郷―ここは京都のこと。↓22。

〔補説〕

文永三年（一二六六）七月に、將軍職を追われて、生まれ故郷京都に帰るに至ったことを詠嘆するか。宗尊

が同月二十日に入京するも、父帝後嵯峨院も母棟子も、義絶して謁見を許さなかったということから、この失脚は、表向き宗尊の不始末・不行跡に起因するものとされていたか、とも想像される。それを「無き名たちきて」と言い表したか。

荣誉と共に帰郷することを、「故郷」に「錦」を着て帰ると言う比喻は、「卿衣レ錦還レ郷、朕無レ西顧之憂一矣」

(南史・柳慶遠伝)や「令_三卿衣_レ錦還_レ郷、尽_三榮養之理_一」(南史・劉之遴伝)などの言説が典故であろう。参考の拾遺歌兩首も、これに負つていようか。「富貴不_レ歸_三故郷_一、如_三衣_レ錦夜行_一」(漢書・項籍(羽)伝、朱買臣伝。史記・項羽本紀、「錦」は「繡」という類似の漢故事も存する。それらは、『江吏部集』(中・寛弘七年三月三十日)や『本朝文粹』(卷三・对冊・大江拳周)、あるいは『唐物語』(第十九)や『十訓抄』(八の十)や『平家物語』(覚一本)『卷七・実盛』等々に引かれてもいる。宗尊が、『南史』を直接学んでいたか否か、何によつてこの知識を得たかは、全く不明である。しかし、該歌がこの類の比喩に拠つてゐることは疑いなくところであらう。

綾

178 ながめつつ今日もむなしく呉羽とり過_{あやま}たぬ身を空に愁_{うれ}へて

〔通釈〕 綾

物思いして眺めながら、今日も虚しく暮れた。(呉羽とり)綾ならぬ過つてはかない我が身を、空に向かつて空しく嘆き訴えて。

〔参考〕曇りなき星の光をあふぎても過たぬ身をなほぞ疑ふ(新勅撰集・雑二・嘆くこと侍りける時、述懐歌・

一一〇三・良経)

あはれまた五十の冬もくれはとり過たぬ身の老いをかこてば(道助法親王家五十首・冬・惜歳暮・八二二・保季)

〔語釈〕○綾―『古今六帖』(第五・錦綾)の「あや」。○今日もむなしく呉羽とり過たぬ身を―「今日もむなしく暮

れ」から、「くれ」を掛詞に、「呉羽とり過たぬ身を」へ鎖る。「呉織・呉服・呉服部」は、「綾」と同音の「過たぬ」にかかる枕詞。「過たぬ身」は、間違っていない自分の意。↓補説。○空に―天空に対しての意に、「むなしく」の縁で、かいがなく空しくの意が掛かる。

〔補説〕 参考歌は、建久七年（一一九六）十一月二十五日に良経の父兼実が関白を罷免され、翌日叔父の慈円が天台座主を辞任するなど、九条家が失脚した建久の政変で沈淪していた時期の「西洞隠士百首」の作。この歌の「過たぬ身」を、宗尊は、該歌と同じ「五百首」で、「人ぞ憂き藻に住む虫のそれとだに過たぬ身はそれとおぼゆる」（本抄・吾柄・256）や「跡垂るる四方の社の神神も過たぬ身のほどは知るらん」（同上・社・272）と用いている。後者は、『中書王御詠』（雑・三四五）にも収められ、そこでの詞書は「同じ頃（思はざるほかに沈みにしことを、北野に愁へ申すとて）、心のうちに思ひつづけ侍りし」である。他にも、『中書王御詠』に「いにしへもありきやいかにかくばかり過たぬ身の沈むためしは」（雑・述懐・二九四）の一首を残していて、將軍を廢されて鎌倉を追われて帰京した経緯について、宗尊は、172の「濡れ衣」、前歌の「無き名」と同様に、「過たぬ身」と詠じて、自分自身には過誤・瑕疵のないことを訴えたものであろう。

糸

179 くるしくも賤が紐糸手に掛けてへがたき世とは今ぞ知りぬる

〔通釈〕 糸

糸を繰るではないが、苦しいことにも、粗末で弱い賤の紐糸を手に掛けて綜難いように、経難く、思うままにし

て過ごすことが困難なこの世だとは、今やっと分かったのだ。

〔参考〕 我が恋は賤のしけ糸すぢ弱み絶え間は多くくるは少なし（金葉集・恋下・五一四・顕国）

花見にも行くべきものを青柳のいと手にかけて今日は暮らしつ（貫之集・延喜十五年の春齋院の御屏風の和

歌・女柳の枝をひかへてたり・四八。古今六帖・第六・やなぎ・四一六四）

かくばかり経がたく見ゆる世の中にうら山しくもすめる月かな（拾遺集・雑上・四三五・高光）

うばたまの夜の衣をたちながらかへる物とは今ぞ知りぬる（新古今集・恋三・一一七五・実頼）

〔他出〕 中書王御詠・雑・雑の歌の中に・二八四。

〔語釈〕 ○糸―『古今六帖』（第五・錦綾）の「いと」。○くるしくも―「苦しくも」に、「しけ糸」「手」「掛け」「へ

（綜）」の縁で、（糸を）「繰る」が掛かる。○紐糸―繭の上皮（表面部分）で紡いだ質の悪い絹糸。弱く切れやす
い。○手に掛けて―糸を手につ引掛ける意に、自分の思いどおりにしての意を掛ける。○へがたき―「綜難き」
（縦糸を伸ばして機に掛けることが難しい）に「経難き」が掛かる。

苳

180 わす 忘れずよ苔の筵むしろに仮寝かりねせし山路ちの秋の露ふかの深さは

〔通釈〕 苳

忘れないよ。苔の筵で旅の仮寝をした山路の、秋の露深さは。

〔参考〕 かくしても明かせば幾夜過ぎぬらん山路の苔の露の筵に（新古今集・羈旅・九四九・俊成女）

あだにしく苔の庭の露けきは都見ぬ目の涙なりけり（土御門院御集・草名十首・三二六）

〔語釈〕

○庭―『古今六帖』（第二・宅）の「むしろ」。「庭」は、「筵」に通ず。○忘れずよ―62。○山路の秋―定

家の「あしびきの山路の秋になる袖はうつろふ人の嵐なりけり」（六百番歌合・恋下・寄山恋・九七一）が早い作例となる。○露の深さ―平安期から見える通用の措辞だが、「思ひ出でて誰かはとめて分けも来ん入る山道の露の深さを」（山家集・雑・竜門に参るとて・一四二七）や「如何にせん忍ぶの山に道絶えて思ひいれども露の深さを」

（続後撰集・恋一・六六七・俊成女。秋風抄・恋・一七九）、あるいは「置きあまる露の深さや重ぬらんつたふしづくの秋の草根は」（新撰六帖・第一・しづく・四三四・信実）や「消ぬがうへにまたや結ばん秋草の茂る繁みの露の深さは」（現存六帖・秋のくさ・一六・藻壁門院少将）等々が宗尊の視野に入っていたか。

〔補説〕 建久三年（一二六六）七月の、鎌倉から帰洛する途次の旅寝を回想したか。とすれば実体験に基づくが、同時に、参考の『新古今集』の俊成女詠や祖父土御門院の歌をも意識していたのではないか。

扇

181 人心こころう憂うれきにあふぎの秋立たち捨すて置をかれしや我が身みなるらん

〔通釈〕 扇

人の心のつれなく冷淡であることに遇い、扇が秋になって捨て置かれたこと、それは我が身なのであろうか。

〔本歌〕 人心憂うれきこそまされ春立てばとまらず消ゆるゆきかくれなん（後撰集・春上・三〇・読人不知）

〔参考〕 世の中は憂うれきにあふぎの秋果はてぬなの別れの忘れがたみぞ（拾遺愚草・雑・二八三八・同じ頃（良経死去

の後）人のとぶらへりし、返し）

〔語釈〕 ○扇―『古今六帖』（第五・服飾）の「あふぎ」。○憂きにあふぎの―「憂きに遭ふ」から、「あふ」を掛詞に、「扇の」へ鎖る。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の失脚を念頭に置くか。

薰物

182 いかにしてただ、かばかりも残りけんを比叡ひゑの山かの深すき住まひに

〔通釈〕 薰物

どのようにして、ただ薰物の香ばかりが、こればかり残ったのだろうか。比叡山の山深い住居に。

〔本歌〕 春過ぎて散りはてにける梅の花ただかばかりぞ枝に残れる（拾遺集・雑春・一〇六三・如覚）

〔語釈〕 ○薰物―たきもの。「薰物」を遣り取りする贈答歌等にはまみ見えるが、歌題としては珍しいか。『久安百

首』の物名（一九七・公能）に「たきもの」が見える。○かばかりも―香だけがの意に、これほどもの意を掛けらる。○残りけん―「花に染む心のいかで残りけん捨て果ててきと思ふ我が身に」（千載集・雑中・一〇六六・西行）が勅撰集の初出。

〔補説〕 主題・作意が不明確である。本歌の詞書は、「比叡の山に住み侍りける頃、人の薰物を乞ひて侍ければ、侍りけるままに少しを、梅の花のわづかに散り残りて侍る枝に付けて遣はしける」である。この事情をも取り込んだ詠作か。

183 灯
月の射す秋の窓なる灯の背そむけられぬる身をいかにせん

〔通釈〕 灯

月が射す秋の窓にある灯が、光を後ろに背けられたように、人から背けられてしまったこの身を、どうしようか。

〔本文〕 背レ燭共憐深夜月（ともしびをそむけてはともにあはれぶしんやうのつき） 踏レ花同惜少年春（はなをふん

ではおなじくをしむせうねんのはる）（和漢朗詠集・春夜・二七・白居易）

秋夜長（あきのよながし） 夜長無レ眠天不レ明（よながくしてねぶることなければてもあけず） 耿耿残

灯背レ壁影（かうかうたるのこんのともしびのかべにそむけたるかげ） 蕭蕭暗雨打レ窓声（せうせうたるく

らきあめのまどをうつこゑ）（和漢朗詠集・秋夜・二三三・白居易）

〔語釈〕 ○灯—これ一字の題としては珍しいか。『明題部類抄』によると、光俊出題という「三百六十首」（年月未

詳）の「述懐廿首 寄雜物」に「灯」がある。○灯の—ここまで、「背けられぬる」を起こす有意的序。本文「上

陽白髮人」の、疎まれて幽閉された境遇を踏まえる。○背けられぬる—灯が光を後ろに向かせられたの意に、人か

ら離反されたの意を掛ける。前者の意味は、本文の「春夜」の詩の「背レ燭共憐深夜月」が当たる。

〔補説〕 定家は、建保六年（一二二八）の「文集百首」で、本文の前者を題に「背けつる窓の灯深き夜の霞に出づる

二月の月」（拾遺愚草員外・春・四一八）と詠むが、その一句目の「背燭」は、「背灯」に作る（時雨亭文庫本）。

筆

184 身の憂さは数かきあへぬ水茎の跡まで辛つらき名をや流ながさん

〔通釈〕 筆

我が身の憂さは、水の上に数を画いて数えられないように、数えきれないほど多く、それを書きおおせない私の筆の跡までが、憂く辛い評判を流すのであろうか。

〔参考〕 行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり（古今集・恋一・五二二・読人不知）

年を経て名のみや積もる言の葉に数かきあへぬ水茎の跡（紫禁和歌集・（建保二）三年人麿影供）・寄筆恋・

四三九）

〔語釈〕 ○筆―183の「灯」と同様、これ一字の題としては珍しいが、やはり『明題部類抄』によると、光俊出題とい

う「三百六十首」（年月未詳）の「述懐廿首 寄『雜物』」に「筆」がある。○数かきあへぬ水茎の跡―まず、「数画きあへぬ水」と続き、数を画いてかぞえることができない水、の意を表す。「数画く」は、ものの数をかぞえる時に、一定の数ごとに目印の線を引くこと。そして、「かきあへぬ」を掛詞として、「書きあへぬ水茎の跡」と続き、十分に書くことができない筆跡、の意を表す。「水茎の跡」は、筆で書いた文字の筆跡。ここは、記しとどめた和歌を言うか。「水茎」自体も、筆で書いた文字、それで綴った手紙を言う。○流さん―「水茎の跡」の「水」の縁語。

〔補説〕 「数かきあへぬ水茎の跡」は、愁いても愁いきれない「身の憂さ」を、嘆いても嘆きおおせない自らの詠草を言うか。

185 海山を越えてだに見し玉章を同じ都にかき絶えにけり

〔通釈〕
書（ふみ）

海山を越えていてさえ見た手紙なのに、この同じ都にあつて、ぱったりと見ることがなくなり、書くことも途絶えてしまったのだな。

〔参考〕 雲居なる海山越えていましなば吾は恋ひなむ後は逢ひぬとも（万葉集・卷十二・悲別歌・三一九〇・作者未詳）

程経れば同じ都のうちだにもおほつかなさの間はまほしきを（続後撰集・羈旅・一二九三・西行。山家集・雑・一〇九二）

〔語釈〕 ○書―『古今六帖』（雑五・服飾）の「ふみ」に当たる。○玉章―手紙。○同じ都―和泉式部の「別れても同じ都にありしかばいとこのたびの心ちやはせし」（千載集・離別・四九〇。和泉式部集・一八三、八四〇）が早く、後に影響を与えている。宗尊は、この歌や参考の西行詠に学んだのであろう。○かき絶えにけり―「掻き絶えにけり」（ぱったりとなくなつてしまった）に、「玉章」の縁で、「書き絶えにけり」（手紙を書くことが途絶えてしまった）を掛ける。

〔補説〕 上句「海山を越えてだに見し玉章」は、將軍として鎌倉に在ったときに都から届いた手紙を言ったのである。下句「同じ都にかき絶えにけり」は、文永三年（一二六六）七月に疑惑の内に將軍を廢されて帰洛して以後、同じ都にありながら、累の及ぶことを恐れてか、あるいは宗尊を義絶した父母を含めて、それまで鎌倉に音信して

いた者からもぱったりと手紙が来なくなり、自分からも書き送ることがなくなってしまうことを詠嘆したものであろう。

箏

186 この秋は悲しきことの音に立てて憂き身に通ふ峰の秋風

〔通釈〕 箏

この秋は、悲しい事が泣き声となつて表に出て、箏の琴が音を鳴らしてその音に峰の松風が似通つて音を出すよ
うに、憂きこの身の泣き声に通つて、峰の秋風が吹いてくるよ。

〔本歌〕 琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけん（拾遺集・雑上・四五一・徽子女王）

〔参考〕 身にぞしむ恋しきことの音に立ててかきなす松の風の調べは（仙洞句題五十首・寄琴恋・二九一・俊成女）

わび人の手馴れことの音に立てて憂き世をあきの調べをぞする（新撰六帖・第五・こと・一八〇三・知家）

〔語釈〕 ○箏—さう。中国渡来の十三絃の琴をいう。中国渡来の七絃の琴、六絃の和琴と併せて、琴に一括される。

歌題としては、『永久百首（雑）』に「箏」がある。『古今六帖』（第五・服飾）の「こと」に当たるか。○こと—
「事」に、題の「箏」と「音」「立て」の縁で、「琴」を掛ける。○音に立てて—声に出して（泣く）の意に、箏の
琴が音を鳴らしての意を掛ける。○峰の秋風—「秋風」では初句の「秋」と重なること、また、「箏」の題の下で
「かよふ」と詠んでいるのは、本歌の斎宮女御徽子の歌を踏まえていると見られること、から推して、本来は「峰
の松風」とあるべきでかと思われる。

187 帰^{かへ}り来^きて都を見^みれば斧^{きの}の柄^えの朽^くちし昔の心ちこそすれ

〔通釈〕 斧

帰^{かへ}つて来^きて都を見^みると、あの木樵りの斧の柄が朽^くちていつのまにか長い時が過ぎて、帰ると当時の人は誰もいなかったという、その昔と同じ気分がするよ。

〔参考〕

故郷は見しごとあらず斧の柄の朽ちし所ぞ恋ひしかりける（古今集・雑下・筑紫に侍りける時にまかり通ひつつ碁打ちける人の許に、京に帰りまうで来て遣はしける・九九一・友則）

斧の柄の朽ちし昔は遠けれどありしにあらぬ世をも経るかな（新古今集・雑中・後白河院かくれさせ給ひて後、百首歌に・一六七二・式子）

〔語釈〕

○斧―これ一字の題は珍しいが、『古今六帖』（第二・山）の「をののえ」に相当するものであろうか。○斧の柄の朽ちし昔―知らないうちに長い年月を過^こすことの喩えである「爛柯」の故事（述異記等）を踏まえて言う。晋の王質が、山に木を樵りに行き、信安郡石室山で、童子達が碁を打つのを、貰った棗の種を口に含んで言ることなく見ていたら、一局終わらないうちに持っていた斧の柄が朽ちてしまい、家に帰ってみると、当時の人はみないなくなっていたという故事。ここは、帰ってみたら当時の人が無かった（「既帰無^二復時人^一」）ことまでも意識してようか。

〔補説〕

建長四年（一二五二）三月に十一歳で出京して、十四年後の文永三年（一二六六）七月に二十五歳で帰洛した、その都の様子に対する感懐。

188 牛弱^{よは}み山路^ちにかか^るる小車^{*}のおし〔て〕上^{のほ}せし我が身[・]なりける

〔本文〕 ○底本第四句「をしのほせし」を、歌の解釈から、私に「おして上せし」に改める。

〔通釈〕 車

牛がひ弱くて、山道にさしかかる車を押し登らせるように、おして無理やりに都へ上らせた、我が身であったな。

〔参考〕 春樵りの柴積み車牛を弱み誰が古里の垣根しめにぞ（万代集・雑一・柴積みたる車のゆきわづらふを見て・

二八一五・実方。実方集〔時雨亭文庫本〕・一七七）

〔語釈〕 ○車―『古今六帖』（第二・人）の「車」。○小車のおし〔て〕上せし―車を押し山路の坂に登らせたの意に、強引に上京させたの意を掛ける、と解した。「小車の」までは序詞だが、あるいは、帰洛途次の実体験とすれば、有意ということになろうか。

〔補説〕 第四句の本文を私に整理した。建長四年（一二五二）三月に出京して、四月から鎌倉で征夷大將軍に就いたのも、宗尊の意志ではなかったはずだが、それなりにその地位に自足していたのであろうか。この「五百首」中にも、鎌倉を「故郷」と言い（24）、「昔」は鎌倉の「主」であったことを思い（106）、それを「我が世」「花咲く身」とも捉え（167）、だからこそ、その「故郷」鎌倉と心外にも別れたと嘆く（22）、そういった歌が残されているのであろう。該歌も、鎌倉で十四年を過し、文永三年（一二六六）七月に、突然のごとく鎌倉と將軍職を追われて帰洛するに至ったことを、「おして上せし我が身」と述懐したものである、と解しておきたい。

189 今是我引く人もなき捨て舟のあはれいかなるえに沈むらん 船

〔通釈〕 船

今は私は、曳く人もない捨て舟で、引き導いてくれる人もなく、その捨て舟があわれなことにどのような江にか沈みゆくように、ああ、どのような因縁で世の中に沈むのだろうか。

〔参考〕 この世だに月待つほどは苦しきにあはれいかなる闇にまどはむ（詞花集・雑下・三六〇・顕仲女）

最上川 瀬瀬の岩角 湧きかへり：いはではえこそ なぎさなる 片割れ舟の 埋もれて 引く人もなき嘆きすと 浪の立ちぬに 仰げども：（千載集・雑下・一一六〇・俊頼。堀河百首・雑・一五七六）

潮たるる海人の捨て舟うきながら引く人なしに年を積むかな（宝治百首・雑・浦船・三五三三・有教）

引きたつる人もなきさに年積もる身は捨て舟の綱手かなしも（百首歌合建長八年・一五〇一・雑・経家）

憂き身世に立ちこそめぐれ捨て舟の引く人もなしと何恨みけん（白河殿七百首・雑・寄舟述懐・六八九・経任）

〔他出〕 中書王御詠・雑・雑の歌の中に・二七七。

〔語釈〕 ○船—『古今六帖』（第三・水）の「ふね」。○今是我—万葉（旧訓）以来の措辞。文永三年（一二六六）七

月の帰洛後の作を収める本抄では八首に用いられている（189 中書王御詠・二七七、236、242、332、483、959、978、982）。他に『中書王御詠』には「今是我沈み果てぬと思ふ世にやすく浮かぶは涙なりけり」（雑・述歌意・二九三）があるが、これも身の沈淪を嘆いていて、失脚後の作であろう。宗尊の「今是我」は特に、自己の不遇な現在を意

識する傾きがあると見てよいであろう。○引く人もなき一舟を曳く人もないの意に、自分を導く人、あるいはひいきにして引き上げる人もないの意を掛ける。前者は後者の比喩でもある。○えに―「江に」に「縁に」を掛ける。これも、前者が後者の比喩ともなっている。

〔補説〕「捨て舟」を「引く人」がないことを、身の沈淪によそえて詠むことは、参考に挙げた俊頼の長歌が早いようだが、『宝治百首』以下の三首に見るように、鎌倉中後期に少しく行われたらしい。為家は、「文永八年四月廿八日当座百首」（雑・浦舟）で、参考の経家詠に刺激されてか、「引きたつる人やはあらん和歌の浦に沈みはてぬる海人の捨て舟」（為家集・一九八三）と詠んでいるし、雅有も、「難波江や海人の捨て船いたづらに引く人なくて身ぞ沈みぬる」（隣女集・卷四自文永九年至建治三年・雑・二五一六）や「稲舟のいまだ一瀬のほりかね引く人もなき身を嘆くかな」（雅有集・堀河院後百首題をよみ侍りしに・雑・船・六三一）を残している。宗尊は、こういった流行にも敏感であったのかもしれない。

筏

190 杣川の岩にかかれる筏士の過ぎえぬ世よにぞ身を砕くださける

〔通釈〕 筏

杣川の岩に引つ掛かっている筏士が、そこを通り過ぎられないように、生きて行くことができないこの世の中で、川の水が岩に碎けるように、この身を砕くばかりに嘆いたのだったな。

〔参考〕 風をいたみ岩うつ波のおのれのみ砕けてものを思ふ頃かな（詞花集・恋上・二二一・重之）

柚山の梢に重る雪折れに絶えぬ嘆きの身を砕くらむ（新古今集・雑上・一五八二・俊成）

〔語釈〕

○筏―平安中期の『故侍中左金吾家集（頼実集）』（八九）に「いかだ」の題が見えるが、これ一字の歌題は珍しいか。宗尊が撰定させたかと考えられる『東撰六帖』の題目録の雑に「筏」がある。○身を砕き―身の限りを尽くして思い煩う意。「柚川」「岩」の縁で、川の水が岩に砕ける意が掛かる。

〔補説〕

良経の「吉野川早き流れを堰く岩のつれなきなかに身を砕くらむ」（新勅撰集・恋一・六九五、六百番歌合・恋下・寄川恋・九九五）や実朝の「山河の瀬瀬の岩波湧きかへりおのれひとりや身を砕くらん」（金槐集（定家所伝本）・恋・四四四）は、いずれも恋歌で、共に参考の重之詠を踏まえたと思しい。これらも、宗尊の視野には入っていたであろう。

網

191 くるしくも引く人なくて朽ち^わはてぬ我が身をうらの海人^{あま}のうけ縄

〔通釈〕 網

浦の海人のうけ縄の網を繰り引く人もなくて、網が腐りきつてしまふように、苦しいことにも、私を引き導いてくれる人もなくて、朽ち果ててしまふ我が身を憂く辛く思うよ。

〔本歌〕

みるめなき我が身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくくる（古今集・恋三・六二三・小町。伊勢物語・二十五段・五七・色好みなる女）

〔参考〕

磯馴るる海人の釣り縄うちはへてくるしくもあるか妹にあはずて（古今六帖・第三・つり・一八三五）

うらみてもかひこそなけれ年月の絶えずくるしき海人のうけ縄（白河殿七百首・恋・寄泛恋・為氏・五四三）

〔語釈〕

○網―『古今六帖』（第三・水）の「あみ」。○くるしくも―「苦しくも」に、「引く」「浦」「海人」「うけ縄」の縁で、（網を）「繰る」が掛かる。○引く人―自分を導く人の意に、「浦」「海人」「うけ縄」の縁で、網を引く人（漁師）の意が掛かる。○朽ちはてぬ―我が身が衰滅してしまいう意に、「うけ縄」の縁で、網が朽ち果ててしまいう意を掛ける。○我が身をうらの海人のうけ縄―「我が身を憂」から、「浦の海人のうけ縄」へと鎖る。宗尊は、別に「いかにせん我が身をうらの沖つ風思ふ方には寄る舟もなし」（中書王御詠・恋・寄風恋・一九七）とも用いている。○海人のうけ縄―漁師の使う浮きのついた網の縄。「うけ縄」の作例は「いふかたもなぎさにこそは海人小舟釣りのうけ縄たゆたひてふる」（成尋阿闍梨母集・人の、いかでかある、と問ひたるに・六二）が早く、西行にも「小鯛引く網のうけ縄よりくめりうきしわざある塩崎の浦」（山家集・雑・一三七八）や「はらか釣る大輪田崎のうけ縄に心がけつつ過ぎんとぞ思ふ」（同・同・一四五〇）の作例があり、鎌倉期以降の用例は少くない。「海人のうけ縄」の句は、実朝の「うちはへて秋はきにけり紀の国や由良のみささきの海人のうけ縄」（金槐集〈定家所伝本〉・秋・一五七）が早い例となる。

竹

192 呉竹のその名は世世やに古ふるりぬれどかく憂うれきふしや身に始はじむらん

〔通釈〕 竹

呉竹というその名前は、そしてまた親王という名前は、呉竹の節よ節よならぬ代々を経て長い年月を経過してきているが、このように憂く辛い、呉竹の節ならぬ折節は、この身から始めるのである。うか。

〔参考〕 今更になに生ひ出づらむ竹の子の憂き節しげき世とは知らずや（古今集・雑下・物思ひける時いとよなきこを見てよめる・九五七・躬恒）

世にふればことの葉しげき呉竹の憂き節ごととに鶯ぞ鳴く（古今集・雑下・九五八・読人不知）
ちはやぶる 神のみよより 呉竹の 世世にもたえず：（古今集・雑体・短歌・一〇〇二・貫之）

〔類歌〕 世にふればうきことしげき笹竹のその名もつらき我が身なりけり（瓊玉集・雑下・人人によませさせ給ひし百首に・四六五）

〔他出〕 中書王御詠・六帖の題の歌に・竹・二七〇。

〔語釈〕 ○竹―『古今六帖』（第六・木）の「たけ」。○呉竹のその名は―「竹」は、宗尊の身分の親王（皇族・皇子・皇孫の）称である「竹園」を表象する。あるいは、「竹の園」を物名風に込め掛けるか。「竹の園」「竹の園生」は、前漢孝文帝の子孝王が梁に封ぜられ、方三百里の苑を作って修竹苑と名づけ、世人が梁の孝王の竹園と称した故事によるという（史記・梁孝王世家、西京雜記）。『瓊玉集』の「笹竹のその名も」と同様の措辞。なおまた、「呉竹の」は、「世世」の枕詞でもある。「呉竹」は、呉から渡来した竹の意で、丈低く、節が多く、葉が細い。淡竹に当る。内裏の清涼殿東庭に、御溝水側の河竹と一対で北側の仁寿殿寄りに植えられていたものが有名。

〔補説〕 親王を「竹の園」で表す一例を挙げれば、『御室五十首』で、「色かへぬ竹の園こそうれしけれやまと言の葉なほ常盤なり」（御室五十首・雑・述懐・二九二・俊成）や「色かへぬ竹の園なる鶯はいく万代の春を待つらん」（御室五十首・雑・祝・一九〇・公継）と、同五十首とその主催者の後白河院皇子守覚法親王とを言祝ぐ歌がある。

193 苔の下と言はぬばかりぞ世の中にあるかひもなく埋もるる身は
苔

〔通釈〕 苔

苔の下（に死んで埋もれている）と、言わないだけなのだ。この世の中に生きているかひもなく、沈淪して埋もれているこの身は。

〔本歌〕 ことに出でて言はぬばかりぞ水無瀬河下に通ひて恋ひしきものを（古今集・恋二・六〇七・友則）

〔参考〕 あしひきの山のまにまにかくれなむ憂き世の中はあるかひもなし（古今集・雑下・九五三・読人不知）
もろともに苔の下にも朽ちもせで埋まれぬ名を見るぞ悲しき（金葉集・雑下・六二〇・和泉式部）

今来むと言はぬばかりぞ郭公有明の月のむら雲の空（続後撰集・夏・一八七・順徳院）

〔語釈〕 ○苔―『古今六帖』（第六・草）の「こけ」。○苔の下―墓の下。死んで苔むした地中にあることを言う。
〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の將軍失脚後の沈淪を嘆く。

芝

194 これを見て涙のほどは人も見よ露も払はぬ庭の芝草

〔通釈〕 芝

これを見て、私の涙の程度は、人も分かってくれ。置く露を少しも払っていない庭の芝草を。

〔参考〕 世の憂さを思ひ忍ぶと人も見よかくてふるやの軒のけしきを（千載集・雑中・一〇八五・公重）

〔語釈〕 ○芝―『古今六帖』（第六・草）の「しば」。○これを見て―「これを見て思ひも出でよ浜千鳥あとなき跡を尋ねけりとは」（後葉集・雑二・五三二・忠通。袋草紙・一三四。今鏡・はまちどり・六四）が先行例。○露も―草に置く「露も」と、少しもの意の「つゆも」との掛詞。○芝草―葉が細長い、穂を出す雑草。

蕨

195 亡き人の形見かたみに摘つみし初蕨はつわらびあまたの春や思ひ出いづらむ

〔通釈〕 蕨

亡き人の形見として摘んだ初蕨。（それをよすがとして、あの中君は）たくさんうか。の春を思い出しているのである

〔本歌〕 君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり（源氏物語・早蕨・六八四・阿闍梨）

この春は誰にか見せむ亡き人の形見に摘める峰の早蕨（源氏物語・早蕨・六八五・中の君）

〔語釈〕 ○蕨―『古今六帖』（第六・草）の「わらび」。

〔補説〕 本歌の前者は、春頃に、山の阿闍梨から中君に、（堂童子が仏に供養した初穂である）「蕨、つくづくし、をかき籠に入れて」贈ってきた際の、阿闍梨の歌。「君」は中君を指して「君にとて」は「初蕨なり」にかかり、「あまたの春」は中君の亡父八宮に多年春毎に献上してきたことを言い、「つみ」は「積み」と「摘み」の掛詞。

後者は、それに対して中君が、以前までは「亡き人」（亡父八宮）の形見として「峰の早蕨」を一緒に見た姉の

大君までもが既に亡い、「この春」の悲しみを訴えて、返した歌。

その中君の心情を思いやった趣がある。

躑躅

196 恋しくもいかなからん岩つつじ言はねばこそあれありしその世は

〔通釈〕 躑躅

恋しくあることも、どうしてないことだろうか（やはり恋しいのだ）。岩躑躅ではないが、口に出して言わないからこそそのままのだけれど、かつての二人の仲のあの夜は。

〔本歌〕

思ひ出づるときはの山の岩つつじ言はねばこそあれ恋しきものを（古今集・恋一・四九五・読人不知）
思ひ出づやありしその夜のくれ竹はあさましかりし臥し所かな（金葉集・恋上・三六二・公実）

〔語釈〕

○躑躅―『古今六帖』（第六・木）の「つつじ」。○岩つつじ―「岩」と同音で「言は」を起こす序。○言はねばこそあれ―①恋しいと口に出して言わないからこそ、恋しいということが表にあらわれないでいるけれども、②恋しいと口に出して言わないだけであって、本当は恋しいけれども、の両方の解釈が考えられる。②の場合、初二句の趣意と重複してしまうので、①を採る。○ありしその世―昔の二人の仲の意に、その時の例の夜の意を掛けるか。

〔補説〕

本歌の作者公実は後拾遺集初出歌人。これについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三二）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

197 松が枝に末すゑに余あまれる藤の花かかかる方かたなきたぐひとぞ見みる

〔通釈〕 藤

松の枝で、枝のさらに先の方にまで余あまつて咲きかかっている藤の花は、頼るところが無いもの、その同類と見るよ。

〔語釈〕 ○藤―『古今六帖』(第六・木)の「ふぢ」。○かかる方なき―「人はみな立ち出づるものを庭鞠のかかる方なき身をいかにせん」(為忠家後度百首・雑・蹴鞠・六八八・親隆)や「風吹けばさやの中山なか空にかかる方なく迷ふ白雲」(隆祐集・百番歌合・名所述懷五首中右、九条前内大臣家百首・二四三)などと同様の用法。↓補説。
○たぐひとぞ見る―「暁の風に別るる横雲を起き行く袖のたぐひとぞ見る」(後京極殿御自歌合・恋・寄雲恋・一二二。秋篠月清集・二夜百首・寄雲恋・一五五)あたりが、宗尊が学びうる先行作か。

〔補説〕「松」と「藤」は、それぞれ多く皇統と藤氏によそえられて、その和合や共栄を言祝ぐ歌に用いられる。叙景歌としても例えば、宗尊の父後嵯峨院の「紫の藤江の岸の松がえに寄せて返らぬ波ぞかかれる」(続後撰集・夏・一五七)のように、悲嘆とは無縁の景趣に詠まれるのが普通である。該歌も、下句を、比類無いぐらいのすばらしさと見るよ、といった趣旨に解すれば、雅趣あるいは賀趣の歌となる。しかし、本「五百首」の述懐(悲嘆愁訴)の基調に照らし、特に次歌も本来祝意を持つ「葵(諸葛)」に寄せた嘆きの述懐であることを考え合わせれば、藤の花が松の枝の先の空間にまで伸びている様に、抛り所の無い不安定さを見て、自己の寄る辺なき境遇によそえたと解するべきではないだろうか。

葵

198 憂うかりける御蔭みかげの山の諸葛もろかつらかけきやかかる嘆なげきせんとは

〔通釈〕 葵

憂く辛かつた御蔭の山の諸葛よ、諸葛を掛けるように、神に願いを掛けたか、そして気にかけたか（いやかけやしなかつた）、このような嘆きをしようとは。

〔参考〕 かねてより思ひしことぞ伏芝のこるばかりなる嘆きせんとは（千載集・恋三・七九九・待賢門院加賀）

かぞいろの見し世の花の衣手にかけてきやかかる墨染の袖（新撰六帖・第二・おや・八六八・知家）

〔他出〕 歌枕名寄・卷一・賀茂・日影山 付御影山 同事歟、可尋決・御集・五九、三句「諸葉草」。夫木抄・夏一・葵・御集、葵・二四八一、三句「諸葉草」。

〔語釈〕 ○御蔭の山―こは、「御生山（みあれやま）」の別称。比叡山の西麓にある。賀茂別雷神社（上賀茂）の摂社御蔭神社がある。葵祭の前儀として、四月の中の午の日に、ここから神霊を賀茂御祖神社（下賀茂）に遷す祭儀が「御蔭祭」。○諸葛―葵（二葉葵）のこと。葵祭でこれを挿頭に用いるので、「諸鬘」とも書く。「かけて祈るそのかみ山の山人と人もみあれの諸鬘せり」（新勅撰集・神祇・五六四・雅経）などと詠まれる。○かけきや―「諸葛」が序詞のように働き、その諸葛を掛けるの意に、神に願いを託したかの意と、加えて、気にかけたかの意とを掛けるか。○かかる―「斯かる」、このような意。「諸葛」「かけきや」の縁で、「掛かる」が響く。

卯花

199 我もいざ隠れてなかん郭公世をうの花の陰はいづくぞ

〔通釈〕 卯の花

私もさあ、隠れて泣こう。卯の花の陰に隠れて鳴く声を忍ぶという時鳥よ、世の中を憂く思うときの物陰、卯の花の蔭は何処なのか。

〔本歌〕 鳴く声をえやは忍ばぬ時鳥はつ卯の花の蔭に隠れてて（新古今集・夏・一九〇・人麿）

〔参考〕 山がつの垣ほわたりに宿もがな世をうの花の盛りなる頃（長秋詠藻・〔保延六、七年堀河百首題述懷百首〕

夏・卯花・一二三）

〔他出〕 中書王御詠・夏・郭公・五三。

〔語釈〕 ○なかん―「泣かん」に、「郭公」の縁で「鳴（く）」が掛かる。○卯花―『古今六帖』（第一・歳時）の

「うのはな」。○世をうの花の陰―「世を憂」から、「う」を掛詞に、「卯の花の陰」に鎖る。「陰」には、「世を憂」の状況から隠れる物陰の意を掛ける。本抄では、他に617と959にも「世をうの花」が用いられている。

昌蒲

200 世の中に我隠り江の菖蒲草ねをば泣けども人はなびかず

〔通釈〕 昌蒲

この世の中で、私は隠れ籠もっていて、隠り江の菖蒲草の根ではないが、音に出して声をあげて泣くけれども、

菖蒲草が靡くようには、人は靡いて心を寄せてはくれないのだ。

〔参考〕

世をたえて我隠り江のうき草のひまなくうくは涙なりけり（百首歌合建長八年・雑・一四八一・真観）

風吹けばうれうちなびく隠れ沼のあやめの草も心あるらし（内裏歌合寛和二年・夏・菖蒲・一六・惟成。惟

成弁集・二五、二句「くれうちなびく」

〔語釈〕

○昌蒲―菖蒲。「菖」は「昌」にも作る。『古今六帖』（第一・歳時）の「菖蒲」。○我隠り江の―「我隠り」

から「隠り江の」へ鎖る。「隠り江」は、深く入り込んでいるかあるいは物陰になっていて、隠れている入り江。

○菖蒲草ねをば泣け―「菖蒲草」が序詞のように働き、その「根」に「音」掛けて、「音をば泣け」へと続く。○

なびかず―人が心を寄せて従ってはくれない、ということ。「菖蒲草」「根」の縁で、菖蒲草の根はそのまま葉先

が横に揺れる意を掛ける。この意味の「なびく」の原拠は、「河の瀬になびく玉藻のみ隠れて人に知られぬ恋もす

るかな」（古今集・恋二・五六五・友則）。

〔補説〕

「菖蒲草」が「なびく」ことを言うのは、和歌では必ずしも一般的ではない。参考の惟成の歌などを踏まえ

ているとすれば、宗尊の和歌の学習範囲の問題にも関わってくるであろう。

201 尋ね来たつてうち払はらふべき人もなし庭の蓬むすぶの秋の夕露ゆふつゆ

〔通釈〕 蓬

尋ねて来て払うはずの人もいない。この庭の蓬に置く秋の夕方の露は。

〔参考〕

宿は荒れぬ庭は蓬に埋もれぬ露うち払ひ問ふ人はなし（老若五十首歌合・秋・二四二・雅経）

問へかしの別れの庭に露深き蓬がもとの心細さを（続後撰集・雑下・相空法師身まかりにけるを、西行法師とぶらひ侍らざりければ・一二四五・寂然）

〔語釈〕

○蓬―『古今六帖』（第六・草）の「よもぎ」。

萩

202 身の憂さを嘆かて過ぎしいにしへはいかが聞きけん萩の上風

〔通釈〕

萩

我が身の憂き辛さを嘆くことなく過ぎた昔は、いつたいどのように聞いたことだろうか、萩の上を吹く風を。

〔類歌〕

秋の夜は現の憂きの数添へて寝る夢もなき萩の上風（柳葉集・弘長元年九月、人人によませ侍りし百首歌・

秋・九六。瓊玉集・秋上・一六一）

〔語釈〕

○萩―『古今六帖』（第六・草）の「をぎ」。

〔補説〕

「萩の上風」は、「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露」（和漢朗詠集・秋・秋興・二二九・

義孝）や「さらぬだに秋の寢覚めはあるものをけしきことなる萩の上風」（堀河百首・秋・萩・六七六・師頼）、あ

るいは「物ごとに秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは萩の上風」（千載集・秋上・二三三・行宗）等に窺えるように、秋の風情をいやがうえにも添えるものという通念があり、それを踏まえた歌。

萩

203 嘆なげくかな秋にはあへず色か変はる萩の下葉はを身のたくひとて

〔通釈〕 萩

嘆くことであるな。秋に堪えられずに色が変わる萩の下葉を、我が身の同類として。

〔参考〕 萩萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする（古今集・秋上・二二〇・読人不知）

ちはやぶる神のいがきに這ふ葛も秋にはあへずうつろひにけり（古今集・秋下・二六二・貫之）

我が袖は四方の草葉の上よりも秋にはあへず色変はりけり（洞院撰政治家百首東北大学本拾遺・早秋・

二二二・家隆）

〔語釈〕 ○萩―『古今六帖』（第六・草）の「秋はぎ」に当たる。一字の歌題の「萩」としては、『和漢朗詠集』（秋）

に立項され、『堀河百首』（秋）に設けられている。

〔補説〕 恋歌として、「秋にはあへず色かはる萩の下葉」を、「秋」に「飽き」を掛けると見て、相手が自分に飽きた

ことに堪えれずに自分の顔色・様子が変わる、と解釈すると、それを「身のたくひとて」と言う結句と整合しな
い。また、「色かはる萩の下葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らるる」（新古今集・恋五・一三五三・相模）を踏まえ
て、やはり「秋」と「飽き」の掛詞で、「色変はる萩の下葉」が、相手の表に表れない心底での心変わりを比喻し
ているとすると、これもやはり「身のたくひとて」と齟齬することになる。述懐歌として、「秋にはあへず色かは
る萩の下葉」は、文永三年（一二六六）秋に失脚し、様変わりして沈淪する我が身の比喩であると解するべきであ
ろうか。

204 憂き身とて人はさながら厭いとふ世にあはれに招く花薄かな

〔通釈〕 薄

煩わしい我が身ということ、人はすっかり嫌がるこの世の中で、いとしいことにも私を招いてなびく花薄であるな。

〔本歌〕 招くとして立ちもとまらぬ秋ゆゑにあはれ片寄る花薄かな（拾遺集・秋・二二三・好忠）

〔語釈〕 ○薄―『古今六帖』（第六・草）の「すすき」。○憂き身とて―ここでは、文永三年（一二六六）秋の失脚後の境遇を言うのであるが、宗尊は將軍在位中にも既に、「憂き身とて恨みもはてじさきの世に契りあればぞ思ひそめけむ」（柳葉集・弘長二年十一月百首歌・不逢恋二七六）や「憂き身とて思ひな捨てそ幾秋を馴れてもあかぬ袖の月影」（同・〔文永元年六月十七日庚申百番自歌合〕・月・四九五）と詠んでいる。○人はさながら―登蓮の「昔みし人はさながら薄水り思ひしとけばあぢきなの世や」（中古六歌仙・無常・二二三）。登蓮法師集・無常・二四）が早い。宗尊に先行して、『洞院撰政治家百首』には「いかにせん人はさながらこゆるぎの磯べに沈む波の下草」（雑・述懐・一八三九・範宗）が見え、同時代には、平親清の妻で後に西園寺公経妾となる実材母の「馴れて見し人はさながら夢の世に昔語りも誰とかはせん」（実材母集・昔見馴れし人、うち続き失せ侍るもいとあはれにて・一三九）と「馴れて見し人はさながら夢の世になほおどろかぬ程のはかなさ」（同・六九五）がある。

〔補説〕 「花薄」が「招く」歌の原拠は、「秋の野の草の袂か花薄ほにいでて招く袖と見ゆらむ」（古今集・秋上・二四三・棟梁）で、本歌の好忠詠もこれを踏まえる。

女郎花

205 しひてなほあはれとぞ思ふ女郎花我が身うつろふ秋は憂けれど

〔通釈〕 女郎花

(秋の花だけれど) やはり無性にいとしいと思う女郎花なのだ。その女郎花ではなく、我が身がうつろい衰える秋は、憂く辛いけれど。

〔参考〕

名にし負はばあはれとぞ思ふ女郎花誰を憂しとはまだきうつろふ(万代集・秋上・亭子院女郎花合後宴歌平希世・八六八。亭子院女郎花合・三七、初二句「名にし負へばあはれと思ふ」)

誰が秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出でてまだきうつろふ(古今集・秋上・二三二・貫之)

〔語釈〕

○女郎花―『古今六帖』(第六・草)の「をみなへし」。○しひてなほ―俊恵の「しひてなほ行きなん君と聞くからにかつみながらも恋しきやなぞ」(林葉集・雑・九九〇)や、文治二年(一一八六)十月の『歌合』に於ける定家兄成家の「しひてなほ秋の心をくだけとや伏見の暮に鹿の鳴くらん」(鹿・七六・成家)あたりが早く、定家も建仁元年(一一二〇)三月の『通親亭影供歌合』で、「しひてなほ袖濡らせとや藤の花春はいく日の雨に咲くらむ」(雨中藤花・八二)と詠み、後鳥羽院は元久元年(一一〇四)十二月の「賀茂上社卅首御会」で「花散りぬいし井の水のしひてなほ春をとどめよ志賀の山風」(春・一二三四)と詠んでいる。その後は、真観が「しひてなほ恋ひこそ渡れあふみにかありてふ瀬田の橋もとどろに」(宝治百首・寄橋恋・二七四一)や「しひてなほ恋ひや渡らむ下紐のとけしばかりを身の契りにて」(白河殿七百首・恋・寄紐恋・五〇八)と詠み、家良にも「しひてなほ春や行くらむ山桜散りかひ曇る花のまよひに」(後鳥羽院定家知家入道撰歌・後鳥羽院御撰・三四)の作がある。

宗尊はこれらから、流行を敏感に学び取ったのではないか。

〔補説〕 宗尊は先に、「尾花とも萩とも言はじ女郎花なれをぞ秋のあはれとは見る」（柳葉集・弘長二年十二月百首歌・女郎花・三三二）と、「女郎花」を特別視する歌を詠んでいる。

蘭

206 頼みつる夢路ちの小野せのの蘭らんいかに違ちがへて風かぜの吹ふくらん

〔通釈〕

蘭らん
（ふちばかま）

頼みとした夢路の小野に咲く藤袴よ。（しかし藤袴の香りは通つてこない）。いったいどのようにくい違わせて、風が吹いているのだろうか。

〔参考〕 夢のごと見しは人にも語らぬにいかに違へて逢はぬなるらん（新勅撰集・恋三・八三四・待賢門院堀河。久安百首・恋・一〇六九）

〔語釈〕

○蘭―歌中では「ふちばかま」。「蘭」の表記の題としては、『和漢朗詠集』（秋）に立てられ、『堀河百首』

（秋）に設けられる。○夢路の小野―他の用例は、『実方中将集』（時雨亭文庫素寂本）に「おほつかな夢路の小野ののたよりにやなほざりなりし宵の稻妻」（枇杷殿に行き、侍従君に・一一一。原文片仮名）と見えるのみ。○違へて―吹く方向を異ならせてという趣意か。「夢」の縁で、夢を違わせる（悪夢を吉夢に転ずる）意が響くか。

〔補説〕

「藤袴（蘭）」と「夢」とを結びつけるのは、その芳香と名前の「袴」の印象が関わるのであるが、文治六年（一一九〇）三月朔日に清書された『俊成五社百首』の「藤袴草の枕に結ぶ夜は夢にもやがて匂ふなりけり」

(伊勢・秋・蘭・四二)が早く、同年(四月建久に改元)七月には、俊成の甥に当たる公衡が「賦百字和歌(一字百首)」「ふぢばかま」で「まどろめば夢にぞ見つる藤袴昔もかかるためしをぞ聞く」(公衡集・五〇)と詠み、『千五百番歌合』では、公衡の甥公継が「藤袴夢路はさこそ通ひけれ逢ふと見る夜のうつり香もがな」(恋二・二四三六)と詠んでいる。また家隆は、文治四年(一一八八)頃、建久八年(一一九七)という(久保田淳『藤原家隆集とその研究』昭四三、三弥井書店)「二百首和歌」で「藤袴月の枕に匂ふなり夢は旅寝の露にくだけて」(壬二集・蘭・一〇六〇)を、また正治二年(一一二〇)「院百首」(正治初度百首)で「夢路より露や置くらん藤袴覚むればやがて袖ぞしほるる」(壬二集・院百首正治二年・秋・四三九)を詠んでいる(ただし、後者は『正治初度百首』(二四四二)では「藤袴」が「草の原」)。宗尊に身近な先行例としては、『白河殿七百首』の「脱ぎ捨てし誰が名残とて藤袴夢の枕に今にほふらん」(蘭薫枕・二三四・公雄)。同時代では、実在母に「誰か見し夢の枕の藤袴にほひも深き夜半の名残を」(実材母集・「亡姉娘追悼」・五四九)や「夢絶えし枕にかをる藤袴如何に見しよの名残なるらん」(同・蘭・七五四)、その実材母が平親清との間に設けたと思しい娘にも「暁の枕にはほふ藤袴誰が夢絶えし秋のかたみぞ」(親清四女集・八五)、さらにその実材母の子か孫か婿であるかとされる政範には『白河殿七百首』の「蘭薫枕」と同題で「夢絶ゆる夜半の寝覚めの藤袴見しよにかをる秋の手枕」(政範集・二〇一)の作がある。鎌倉前期から中期にかけて、主に俊成の周辺や実材母の縁者という狭い範囲で行われた詠み方であると言うことができる。とすれば、宗尊は、そういう比較的新しい小さな流行にも敏感であったということになる。

しかしまた、そうであったとしても、該歌の作意は分かりにくい。『古今集』(秋上・二三九〜二四一)の
 なに人か来て脱ぎかけし藤袴くる秋ごとに野辺をにはほす(敏行)

宿りせし人の形見か藤袴忘れがたき香にほひつつ(貫之)

主知らぬ香こそほへれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも（素性）

の三首などによる、「藤袴」の本意である、芳香を賞でる通念を踏まえたものと解しておく。

槿

207 朝顔はまた咲く秋も頼むらん我が一時の花ぞ悲しき

〔通釈〕 槿

一時の花である朝顔はそれでも、再び咲く秋も頼みとするのであろう。私自身の、（もう二度とない）一時の盛りの花が悲しいのだ。

〔参考〕 暮れ行けばもとの籬に帰るらしただ一時ぞ朝顔の花（拾玉集・百首句題・秋・槿花蔵垣・三三二二）

あだなれど花はときはに頼まれぬ散りてまた咲く人しなれば（久安百首・無常・二二八九・安芸）

〔語釈〕 ○槿―『古今六帖』（第六・草）の「あさがほ」。○また咲く―「朝顔」について言う例は他に見えない。先行の用例に「今よりはまた咲く花もなきものをいたくな置きそ菊の上の露」（新古今集・秋下・五〇九・定頼）や

「峰に散る桜は谷の埋木にまた咲く花となりにけるかな」（金葉集橋本公夏本拾遺・春・一八・覚樹。続詞花集・春下・七三）があるが、前者は「もうその他に咲く（花はないので）」の意味であり、後者は落花の見立てであり、

該歌の場合とは意趣が異なる。

〔補説〕 「花」を「一時」と見る通念の原拠は、「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」（古今集・

雑体・誹諧歌・一〇一六・遍昭）。

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

「一時の花」に、將軍在位の期間を寓意するか。

菊

208

よそにのみきくの籬に見し色の我が身の秋になりけるかな

〔通釈〕 菊

無関係とばかり聞いていた菊の花の変色、その菊の籬で見た色が、菊の花ではなく私自身の秋となった、私は様変わりしてしまったことであるな。

〔本歌〕

須磨の海人の浪かけ衣よそにのみ聞くは我が身になりけるかな（新古今集・恋一・一〇四一・道信）

〔参考〕

秋深みよそにのみきく白露の誰が言の葉にかかるなるらん（後撰集・秋下・四二五・伊望女）

色変はる菊の籬を来ても見よ身をこそ人の問ふに憂からめ（現存六帖・きく・一二〇・知家）

唐衣干せど袂の露けきは我が身の秋になればなりけり（新勅撰集・秋下・二九八・読人不知）

〔語釈〕

○菊―『古今六帖』（第六・草）の「菊」。○よそにのみきくの籬に―「よそにのみ菊」から、「きく」を掛

詞に、「菊の籬に」へ鎖る。「聞く」は、「色」にかかると解する。

葛

209

報ひある身をかへりみて真葛原ただ前の世に秋風ぞ吹く

〔通釈〕 葛

応報あるこの身を顧みて、葉裏が返り見える真葛原に吹く秋風のように、ただ前世には恨めしい秋風だけが吹いているのだ（と思う）。

〔参考〕 ものをのみさも思はする前の世の報ひや秋の夕べなるらん（新撰六帖・第一・あきの晩・一五四・信実。万

代集・秋上・九五三。秋風抄・序）

うけ難き身の報ひさへ忘られてなほ前の世ぞ悲しかりける（続後撰集・雑中・一一八〇・秋風集・雑中・一一二二三）

〔他出〕 中書王御詠・秋・葛・九〇。拾遺風体集・雑・述懐・四四八。

〔語釈〕 ○葛―『古今六帖』（第六・草）の「くず」。○かへりみて―「顧みて」に、「真葛原」の縁で、葛の葉が裏返って、それを見ての、意が掛かる。

〔補説〕 「秋風の吹き裏返す葛の葉の恨みてもなほ恨めしきかな」（古今集・恋五・八二三・貞文）を本歌にした歌は多い。「真葛原」を用いた公経の「かれ果てて言の葉もなき真葛原なにをうらみの野辺の秋風」（続後撰集・恋五・一〇〇二）もその一首。その先に宗尊は、「真葛原うらみしころの秋風やかれがれになるはじめなりけん」（宗尊親王三百首・恋・二七〇）と詠んでいる。これらは恋歌だが、「秋風」の吹く「真葛原」の印象は、葛の葉の「裏見」の掛詞の「恨み」と結び付いていたかと思われる。該歌も、その印象に従った感があるか。

葦

210 人のため葦あしのねたくも思おもはぬをなにはのことにかく沈しづむらん

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔通釈〕 葦

人のせいで、葦の根ならぬ妬ましいとも思わないのに、難波の葦の根のように、どのような事なりゆきで、どのように世に沈んでいるのだろうか。

〔参考〕

いにしへになにはのこともかはらねど涙のかかるたびはなかりき（後拾遺集・哀傷・五九五・信宗）
忘るるも苦しくもあらずねぬなはの妬くもと思ふことしなれば（後拾遺集・雑二・九四六・伊賀少将）

難波江の葦間に宿る月見れば我が身ひとつはしづまざりけり（詞花集〈新日本古典大系本〉・雑上・三四七・顕輔）

〔語釈〕

○葦―『古今六帖』（第六・草）の「あし」。○葦のねたくも―「なには」「沈む」の縁語「葦の根」から、「ね」の掛詞で、「妬くも」を起こす。この「妬し」は、いまましい、しゃくだの意。○なにはのことに―「葦の根」の縁語「難波」に、「何（は）のことに」（どのようなことでの意）を掛ける。「難波」は、摂津国の歌枕。現在の大阪市周辺。ここはその海。○かく沈むらん―118では「かく沈む身は」と言う。

萍

211 偽りの濁れる水に誘はれて身をうき草の世に迷ふかな

〔通釈〕

萍（うき）

（誘ふ水あればということ）嘘偽りの濁っている水であったのに、ついそれに誘われて、そのあげく、身を憂きものとして、水にさまよう浮草のように、この世の中に（京都から鎌倉、鎌倉からまた京都へと）さまようこ

とであるな。

〔本歌〕 わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらば去なむとぞ思ふ（雑下・文屋康秀が、三河掾になりて、梟

見にはえ出で立たじや、と言ひ遣れりける返事によめる・九三八・小町）

〔参考〕 君すめば濁れる水もなかりけり汀のたづも心してゐよ（後拾遺集・賀・東三条院に東宮渡り給ひて、池の浮

草など払はせ給けるに・四五五・小大君）

〔語釈〕 ○萍―『古今六帖』（第六・草）の「うきくさ」。○偽りの濁れる水―自分を將軍に招請し、そして失脚させた勢力あるいは情勢を念頭に言うか。○身をうき草―「身を憂き」に、「水」の縁語「浮草」を掛ける。「浮草の」は、「迷ふ」を起しす。

〔補説〕 宗尊は、建長四年（一二五二）春三月に十一歳で京都を東国鎌倉へと発ち、四月から將軍として在った十四年後、文永三年（一二六六）秋七月に突然の如く將軍を廢されて帰洛した。その転変を、小町歌を念頭に詠嘆した作であろう。なお、宗尊は別に、文永三年七月の將軍廢位・帰洛前後の詠をも収めたと思しい『中書王御詠』に、「偽りの世にあふ坂の岩清水清き心ぞ木隠れにける」（中書王御詠・雑・会坂の関を越ゆとて・二三〇）を残している。これもやはり、帰洛途次に通過した「逢坂の関」に寄せて、該歌と同様に、自分を失脚させた者達に対する不信感を吐露したと見るべきであろう。

木

212 友と見る谷の埋もれ木みそれなもまたなかかなる無なき名なに朽くち果はてしかな

〔通釈〕 木

友と想つて見る谷の埋もれ木、それもまた、無名の木のままで朽ち果てたように、私も世に埋もれて、このよう
な無実の汚名のままで朽ち果てたことだな。

〔参考〕

いたづらに世にふるものと高砂の松も我をや友と見るらん（拾遺集・雑上・官給はらで嘆き侍りける頃、人の草子書かせ侍りける奥に書きつけ侍りける・四六三・貫之）

花咲かでいく世の春にあふみなる朽ち木の柚の谷の埋もれ木（新勅撰集・雑四・雅経・一三〇七）

〔類歌〕

つひにさて朽ち果てぬべき我なれや春のよそなる谷の埋もれ木（親清四女集・一三八）

〔語釈〕

○木―『古今六帖』（卷六・木）の「き」。○かかる無き名―宗尊は、該歌に先立ち、文永三年（一二六六）

八月の「百五十首歌」（雑神祇）でも、「八百万神てふ神よあはれ知れためしもあらかかる無き名は」（本抄・592）と詠んでいて、この年の七月に將軍を廢された経緯については、自分に全く瑕疵がないことを愁訴している。

松

213

知る人もうとくなり行く世の中に色も変はらぬ高砂の松

〔通釈〕

松

知っている人も疎遠になってゆくこの世の中で、（人が心変わりするのは違い）少しも色を変えない高砂の松よ。

〔本歌〕

誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに（古今集・雑上・九〇九・興風）

〔参考〕 高砂の松と言ひつつ年を経て変はらぬ色と聞かば頼まむ（後撰集・恋四・八六四・読人不知）

〔語釈〕 ○松―『古今六帖』（第六・木）の「まつ」。

〔補説〕 121と類想。

桐

214 人訪はぬ秋の庭こそさびしけれ桐の落ち葉に風〔の〕音して

〔本文〕 ○結句は、底本「風をとして」を、歌意から私に、「風の音して」に「の」を補い改めた。なお、本抄底本の「音」は、「絶すをとする」（353）「をとたて」（621）「をとまても」（628）「滝はをとする」（705）と、「をと」と表記されている。

〔通釈〕 桐

人が訪れない秋の庭こそが、何とも寂しいのであった。桐の落ち葉に、風の音がなつて。

〔参考〕 秋庭不掃携藤杖（あきのはにははらはらずしてとうちやうにたづさはて） 閑踏梧桐黄葉行（しづかにごと

うのくわうえふをふんでありく）（和漢朗詠集・落葉・三〇九・白居易）

桐の葉も踏み分けがたくなりけりかならず人を待つとなけれど（新古今集・秋下・五三四・式子）

人は来て年ふる秋の柴の庵に桐の落ち葉を風ぞ訪ひける（千五百番歌合・秋二・六百三十三番判歌・後鳥羽院）

〔語釈〕 ○桐―歌題としては珍しいか。単題詩（単言を題とする詩）より成る李嶠の『百二十詠』（百詠）に基づく、

源光行の『百詠和歌』の巻四・嘉樹部に「松 桂 槐 柳 桐 桃 李 梨 梅 橘」と見える。この『百詠和歌』は、幼將軍実朝に献上されたかという。○秋の庭―『万葉集』(巻二十・四三二七)にも見える詞だが、「荒れわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなん露の夕暮」(新古今集・雑上・一五六一・俊成)に学ぶか。○桐の落ち葉―家隆が文治四、五年(一一八八、九)頃、遅くとも建久八年(一一九七)までに詠んだとされる「初心百首」の「故郷の庭の日影もさえ暮れて桐の落ち葉に霰降るなり」(壬二集・初心百首・冬・五九。新勅撰集・冬・三九三)が早いか(この第三句は、新編国歌大観本は「浅暮れて」だが、『藤原家隆集とその研究』本に従う)。その後、後鳥羽院が、建仁元年(一一〇一)九く十二月の『句題五十首』で「山陰や秋ぞ払はぬ庭の面に桐の落ち葉にすめる月影」(仙洞句題五十首・山家月・一四四)という、参考の白詩に負ったと思しい作をものしている。参考の『千五百番歌合』の判歌は、恐らくこれと相前後する時期の作であろう。なお、参考の式子の「桐の葉も」詠は、それに先立つ正治二年(一一〇〇)の『正治初度百首』の作。この「桐の葉」の語は、その前年までに成った『御室五十首』で、俊成が「秋を浅みまだ色づかぬ桐の葉に風ぞ涼しき暮れかかるほど」(秋・二七二)と詠んでいる。

〔補説〕 『風雅集』に収められた「さびしさよ桐の落ち葉は風になりて人は音せぬ宿の夕暮」(雑上・閑居冬夕を・一五九二・従二位為子)、あるいは「枯れ積もる榎の落ち葉に音すなり風吹きまざる夕暮の雨」(冬・題しらず・七七七・進子)は、景趣・歌境が該歌に似通う。直接の影響を見ることは躊躇されるが、宗尊詠が京極派の好尚に通じるものであったと言いうことはできるであろう。

〔通釈〕 楸

沈み行く身は、三島の浦の波にまかせて沈んで行く浜楸のように、久しく長いよ、この袖を涙の波に濡れるのにまかせて。

〔参考〕 浪間より見ゆる小島の浜ひさ木久しくなりぬ君に逢はずて（拾遺集・恋四・八五六・読人不知。原歌万葉

集・卷十一・寄物陳思・二七五三・作者未詳、結句「君に逢はずして」）

我が恋は浪越す磯の浜楸沈みはつれど知る人もなし（新勅撰集・恋二・七六七・俊成）

憂かりけるみ島の浦の藻塩火の燃えて焦がれて世をつくせとや（歌枕名寄・撰津三・三島・現六・四二一七・作者不表記。夫木抄・雑七・みしまのうら、撰津又伊与或肥後・うら、現存六・一一六五三・読人不知。

拾遺風体集・恋・三一二・衣笠内大臣（家良）、下句「燃えつ焦がれつつ身をつくすとも」）

田子の浦の海人とやさらばなりなまし濡れそふ袖の波にまかせて（為家千首・恋・六八三）

〔類歌〕 七十年の波をりかくる浜楸久しや我が身しほたれてのみ（宗良親王千首・雑・浜楸・八〇八）

〔他出〕 夫木抄・雑七・みしまのうら、撰津又伊与或肥後・御集、楸・一一六五二、結句「君にまかせ」。

〔語釈〕 ○楸——『古今六帖』（第六・木）の「ひさぎ」。○沈み行くみ島の浦の浜楸——「沈み行く身」から、「み」を

掛詞に、「三島の浦の浜楸」へと鎖る。「沈み行く」（80参照）は、「浜楸」にもかかる。「楸」は、「ひさぎ」の同音から、次句の「久し」を起こす序でもある。一般的に、「三島の浦」は、撰津国の歌枕で、現在の大阪府高槻市に地名として残る「三島江」付近にあったであろう河口あるいは海浜を言うか。参考の「憂かりける」歌の他に、好

忠の「波の打つみ鳥の浦のうつせ貝むなしきからに我やなりなん」（続後撰集・雑下・一二二六・好忠。万代集・雑三・三二八五、四句「むなしきからと」）が、宗尊の視野に入っていた可能性がある歌であろう。なおこれは、『好忠集』（四六四）では、「たつみ」の題で、初句「波のたつ」四句「むなしきからと」とある。物名で「たつみ」を詠み込んだのであろうから、本来の初二句は「波のたつみ鳥の浦の」であろう。○袖を浪にまかせて―「浜楸」が波が打ち寄せるままに濡れる様の比喻で、袖を涙の波で濡れるのに委ねざるをえないことを言う。

〔補説〕 参考の「憂かりける」歌は、諸集の詞書等から見て、『現存六帖』の散佚部分に収められていた家良の作と思しい。宗尊が目にした可能性は少なくないであろう。

檣

216 いか^ががせん我^{われ}おほしてふ^{ふる}杣山の古木のうれはしきこと

〔通釈〕 檣

どうしようか。私が烏帽子を被ったという杣山に生える真木の古木のように、それが今は古烏帽子となったのが、嘆かわしいことだ。

〔本歌〕 あしひきの山田のそほづおのれさへ我をほしてふうれはしきこと（古今集・雑体・誹諧歌・一〇二七・読人不^し知）

〔参考〕 見ずひさになりぞしにけるをすて山檣の古木の苔深きまで（新撰六帖・第六・まき・二四四二・為家、現存六帖・まき・六九四）

〔語釈〕

○檜―『古今六帖』（第六・木）の「ま木（まき）」「真木」「被」とも表記。優れた木のことで、檜や杉などの建築用材の木の総称。○いかがせん↓177。○我おほしてふ―誹諧歌である本歌は、「我を欲してふ」の意に解されているが、該歌の場合それは当たらないであろう。『八雲御抄』（卷四・言語部・料簡言）に、この古今歌に注して、「われをほしといふは、烏帽子といふといへり。古烏帽子になる故なり。それが無下におぼゆることがうれはしきなり」とある。契沖『古今余材抄』は、「八雲御抄には、我を烏帽子にせん、といふごとく注させ給へるは、いかがおぼしめしけるにか、おぼつかなし」と批判し、現在では顧みられない解釈であろう。宗尊はこの説に従ったのではないだろうか。仮にそうだとしてみてもなお、「てふ」の意味が釈然としないが、一応自分の元服を他人事のように言ったと解しておく。宗尊が元服して烏帽子を被るのは、十一歳の建長四年（一二五二）正月八日（増鏡）であった。○柚山―用材となる木々が繁った山。ここはあるいは、宗尊が元服した仙洞を暗喩するか。

〔補説〕

参考の為家詠は、「あだへゆく小為手の山の真木の葉も久しく見ねば苔生ひにけり」（万葉集・檜七・雑歌・一二一四・作者不詳）を本歌にする。「小為手の山」は、紀伊国の所在未詳の所名。

檜

217 柚山の峰の檜原と侘び人の絶えぬ嘆きといづれ繁けん

〔本文〕 ○底本第二句の「檜原と」の「と」は、「の」に上書き。○結句「いづれ繁けん」は、底本「いづれしけん」を、「ゝ」は衍字と見て私に改める。

〔通釈〕 檜

杣山の峰の檜原（の繁茂）と、侘び人の絶えることのない嘆き（の頻繁さ）と、どちらがより密であろうか。

〔参考〕 夕されば物思ふ袖と萩の葉と置きあへぬ露のいづれ繁けん（秋風抄・秋・晩露・五九・入道前撰政。秋風

集・秋上・二五四）

杣山の梢に重る雪折れに絶えぬ嘆きの身をくだくらむ（新古今集・雑上・一五八二・俊成）

〔語釈〕 ○檜―これ一字の歌題は珍しいか。○峰の檜原―良経の『千五百番歌合』詠「三室山峰の檜原のつれなきを

しをる嵐に霰降るなり」（冬二・一八九二）辺りから詠まれ始めた詞。宗尊の同時代では、『宝治百首』の知家詠

「繁りあふ峰の檜原に杣立てている山人のやむ時もなし」（雑・杣山・三五七七）がある。○嘆き―「杣山」「檜原」

「繁けん」の縁で、「き」に「木」が響く。○繁けむ―形容詞「しげし」の未然形の古形「しげけ」に助動詞「む」

が付いたもの。

椎

218 はし鷹たかのとかへる山にありといふしひひてつれなく世よをしたふかな

〔通釈〕 椎

はし鷹の羽が生え変わり色を変える山にあるという色を変えない椎、そのように強いてさりげなく、この世の中を慕うことであるな。

〔本歌〕 忘るとは恨みざらなむはし鷹のとかへる山の椎は紅葉ず（後撰集・雑二・一一七一・読人不知）

〔他出〕 中書王御詠・雑・六帖の題の歌に・椎・二六九。

〔語釈〕 ○椎―『古今六帖』(第六・木)の「しひ」(題目録には見えない)。○はし鷹―鶴。小型の鷹の一種。「はし

鷹の」は、「とかへる」の枕詞とも解される。○とかへる―鷹の羽毛が秋から冬にかけて生え変わり色を変えること。元いた所に戻ることともいうが、採らない。○しひて―前句までは序詞で、「椎」から同音の「強ひて」を起こし、「したふ」にかかる。○つれなく世をしたふかな―「つれなき世」とあれば、理解しやすいが、「つれなく」の場合、「したふ」にかけて解さざるをえない。そ知らぬふりをして、の意に解しておく。

〔補説〕 序詞「はし鷹のとかへる山にありといふ椎」が、「強ひてつれなく世をしたふかな」の比喩でもあるとすれば、色を変えない椎が宗尊自身、はし鷹が羽毛の色を変えることが様変わりする世間、ということになり、そのよくな世間をしかし、慕わざるをえないことの述懐か。

檉

219 つれなさのこれや憂き身のとも浦さびしく立てる磯のむろの木

〔通釈〕 檉(むら)

やりきれない切なさの、これがこの憂苦の身の友か、靱の浦に寂しく立っているむろの木よ。

〔本歌〕 靱の浦の磯のむろの木見ることにあひ見し妹は忘れむやは(新勅撰集・雑四・一三三三・旅人。五代集歌 枕・とも浦 靱浦 備後・一〇六八、結句「忘れんや」)。原歌万葉集・卷三・挽歌・四四七、三句「見むごと」に「結句「忘れめやも」

〔参考〕 月はよもすみもわびじを世の中に憂き身の友といかが頼まん(続後撰集・雑中・一一一〇・信実)

〔語釈〕

○榿―『古今六帖』（第六・木）の「むろ」。「むろのき（榿・室の木）」のこと。「榿」は、古訓に「かはやなぎ」と「むろ」がある。ひのき科の「杜松（ねず）」の古名と言ひ、それには、山地・丘陵に自生する常緑低木の「タチムロ」と、海岸に自生する葡萄性の「ハイムロ（はいねず）」があるという。しかし、後者では、本歌や該歌の景趣とは齟齬がある。常緑低木であるねずも、時に一〇メートル程に達するというのであれば、これに当たるともされる。また、「イブキ」（柏楨）のこととも、「モロギ」のこととも言う。あるいはまた、「榿」が、「ぎよりう」という別種の木を指すという説もある。いずれにせよ、宗尊詠が、旅人歌を本歌に、海辺に印象深く立つ木を思い描いていることだけは確かであろう。澤潟久孝『万葉集注釈』（昭三三、中央公論社）、西宮一民『万葉集全注』（昭五九、有斐閣）等参照。○これや憂き身のとも浦―「とも」を掛詞に、「これや憂き身の友」から、「鞆の浦」に鎖る。「鞆の浦」は、備後国沼隈郡（現在の広島県福山市）の歌枕。

〔補説〕

『夫木抄』に詞書「六帖題御歌、むろの木」、作者「中務卿のみこ」として見える「昔へを思へば遠し岩屋戸に根延ふむろの木幾よ経ぬらん」（卷二十九・粉・一四〇二三）は、宗尊の作である可能性が高く、それは「岩屋戸に根延ふむろの木なれ見れば昔の人をあひ見るがごと」（古今六帖・第六・むろ・四二八二）と為家の「世世かけて思へば遠し葦原や中つ国よりならふ言の葉」（新撰六帖・第五・ことのは・一七九二。万代集・雑二・三〇六六。為家集・雑・一四二六）に拠った作であろう。

梅

220 梅の花ただ一時を盛りにて身（の）なる果（は）てはすさまじの世（よ）や

〔本文〕 ○底本の第四句「身なるはては」は、歌意から、「身の」の「の」を誤脱したと見て私に「の」を補い、「身の」なるはては」に改める。

〔通釈〕 梅

梅の花がただ一時を盛りとして、（花は散り）実の生る果てとなるように、我が身も一時を盛りとして、この身が成り行く果ては、寒々とももの寂しい人生よ。

〔参考〕 梅の花咲きての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ（古今集・雑体・誹諧歌・一〇六六・読人不
知）

〔語釈〕 ○梅―『古今六帖』（第六・木）の「むめ」。○身（の）なるはては―類例は、「埋もれ木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞ悲しかりける」（平家物語〈覚一本〉・巻四・宮御最期・二九・頼政。同〈延慶本〉・第二中・源三位入道自害事・七六、結句「哀れなりける」）が見える。「身」「なる」は、「梅の花」の縁で、「実」「生る」が掛かる。

〔補説〕 「ただ一時を盛りにて」は、將軍在位のときを言ったものであろう。「桜」を題とする次歌と一対。
「すさまじの世」は、新奇な措辞である。伏見院は、これを次のように用いている。

春べとてまた霞立つ時はあれど我が身一つはすさまじの世や（伏見院御集・霞・六七二）

年暮れて荒れたる空の雪霰降るにつけてはすさまじの世や（伏見院御集・除夜述志・一九二〇、伏見院御集冬部・歳暮・三八）

遇合か該歌からの影響かの問題については、さらに考究する必要がある。

桜

221 今いまこそあれ我われも桜の一盛り花咲く春はありしものなり

〔通釈〕 桜

今でこそこうであるのだけれど、私も、桜が一盛り花咲く春を迎えるように、花が咲いた榮えの春はあったものなのである。

〔本歌〕 今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを（古今集・雑上・八八九・読人不知）

いざ桜我也散りなむ一盛りありなば人に憂きめ見えなむ（古今集・春下・七七・承均）

三千年になるてふ桃の今年より花咲く春にあひにけるかな（拾遺集・賀・二八八・躬恒。和漢朗詠集・三月三日付桃・四四）

いにしへの倭文の苧環賤しきも良きも盛りはありしものなり（古今集・雑上・八八八・読人不知）

〔語釈〕 ○桜―『古今六帖』（第六・木）の「さくら」。

〔補説〕 「一盛り花咲く春」は、將軍在位のときを言ったものであろう。「梅」を題とする前歌と一対。

本歌の四首の詞に負っている。四首全てを「本歌」と見るべきかについては異論もありえようが、少なくとも、実朝にも通じるこのような詠み方は、幅広い和歌の知識に基づいた、宗尊なりの意識的方法であったかと考える。

拙稿「瓊玉和歌集注釈稿（三）」（『鶴見大学紀要』四七、平二二・三）の130、150、351、367、492の補説等参照。

梨

222 さても我無われき名をおなふのうらなしの身はいたづら成なりにけるかな

〔本文〕 ○底本第三句の「おふの」は、「ふ」の上に「ほ」を上書きする。原本文に従う。

〔通釈〕 梨

それにしても私は、麻生の浦の梨の実が虚しく生る、ではないが、無実の罪の評判を負う、裏無しの下心がないこの身は、虚しくなってしまったのであったよな。

〔本歌〕 麻生の浦に片枝さし覆ひなる梨のなりもならずも寝て語らはむ（古今集・東歌・伊勢歌・一〇九九）

〔参考〕 さても我いかななるみの浦なれば思ふ方には遠ざかるらん（続古今集・羈旅・九三三・安嘉門院右衛門佐）

昔見し片枝もいかなりぬらん身はいたづらにをふの浦梨（続後撰集・雑上・一〇三〇・忠定）

〔語釈〕 ○梨―『古今六帖』（第六・木）の「なし」。○無なき名をおなふのうらなしの身―「無なき名を負おふの心こゝろ無ししの

身」に「麻生の浦梨の実」を掛ける。「麻生の浦」は、伊勢国の歌枕だが、所在・実態は不明。○いたづらになり―無為なものとしてはかなくなる意に、「梨」「実」の縁で、むだに生る意が掛かる。類例として、有名な伊尹の「あはれとも言ふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきかな」（拾遺集・恋五・九五〇・伊尹）の下旬は、我が身がむなししく死んでしまふに違いないことだな、の意で、該歌とは意味が異なるが、宗尊がこの歌を意識した可能性は見てよいかもしれない。

〔補説〕 「無なき名を負おふ心無ししの身」は、文永三年（一二六六）七月の突然の將軍廢位が、自らの罪ではなく、何の含む所もないことを言い表したものである。それなのに、自身が空虚な存在になったことを嘆く述懐の歌。

檣

223 いか、がせんか、かる憂き世にあふち咲く浅間の杜のあさましの身や

〔通釈〕 檣

どうしようか。このような憂く辛い世に逢っている、檣が咲く浅間の杜ならぬ、あさましく嘆かわしいこの身であるよ。

〔参考〕 雲晴れぬ浅間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ（古今集・雑体・誹諧歌・一〇五〇・中興）

あふちさく花に隠れて時鳥名こそあさまの杜に鳴くなれ（百首歌合建長八年・夏・九三三・忠定）

〔他出〕 夫木抄・雑四・あさまのもり、国未勘之・御集、檣・一〇〇七六。

〔語釈〕 ○檣―『古今六帖』（第六・木）の「あふち」。「棟」とも書く。「梅檀」の古名。夏に薄紫の花を付ける。○いかがせん―↓177。○世にあふち咲く―「世に逢ふ」から「檣咲く」へと鎖る。○浅間の杜の―信濃国の歌枕「浅間山」の「杜」を言うか。宗尊と同時代では、参考歌の他には、幕府御家人で宇都宮の一族笠間時朝に「夜もすがら待ちあかしつる郭公浅間の杜に今ぞ鳴くなる」（時朝集・杜郭公・一六九）の作例が見える程度。同音の縁で次の「あさまし」を起こす。○あさましの身や―あされるほどひどく情けない身よ、ということ。稍少将公重の「音羽川音に立ててはいはねども浅間の嶽のあさましの身や」（風情集・五九〇）が早い。家隆に「しかりとて直き心も世に絶えずまじる逢のあさましの身や」（壬二集・雑・述懐歌あまたよみ侍りしとき・三〇七九）、家長に「世とともに消えぬ思ひを信濃なる同じ煙のあさましの身や」（洞院撰政家百首・恋・不遇恋・一一六二）の作例がある。これらを宗尊が目にした可能性はあるか。

〔補説〕「あふち」と「浅間の杜」の取り合わせは、参考の忠定歌に倣ったか。建長八年（一二五六）の『百首歌合』の歌に拠ったかと思しい宗尊の歌は、他にも散見される。

橘

224 遠とよからぬ我が昔むかしのみ恋しきに見し世よに匂ほへ軒たなの橘はな

〔通釈〕 橘

遠くない私の昔ばかりが恋しいので、私がかつて見た世だと、思い出させて匂ほつてくれ、軒の橘よ。

〔参考〕 昔をば花橘のなかりせば何につけてか思ひ出でまし（後拾遺集・夏・二二五・高遠）

帰り来ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕ににほふ橘（新古今集・夏・二四〇・式子）

〔他出〕 中書王御詠・夏・六帖の題の歌に・橘・六八。

〔語釈〕 ○橘―『古今六帖』（第六・木）の「たち花（たちばな）」。

○見し世に匂へ―かつて見た世と同じに、それを思い出させるものとして薰かほつてくれ、との趣意か。家隆の「夏もなほ月やあらぬとながむれば昔にかをる軒の橘」（老若五十首歌合・夏・一四七）は、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」（古今集・恋五・七四七・業平、伊勢物語・四段・男）を本歌にし、慈円の「橘の風を涙に吹きためて昔にかをる袖ぞ悲しき」（拾玉集・詠百首和歌・夏・三六〇〇）は、補説の「五月待つ」歌を本歌にするが、両首の「昔にかをる」は、「見し世に匂ふ」と類似した意味であろう。後代になるが、東常縁の「忘れぬ心をなほや誘ふらむ昔に匂ふ軒の橘」（常縁集・夏・盧橘・七六）があるが、この「昔に匂ふ」も、同様の意味であろう。

〔補説〕 参考の両首も該歌も、大枠では、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今集・夏・一三九・読人不知）から派生した歌。

柞

225 柞原風はこその便たよりに音もせず憂うれき木この下の秋もとの夕暮ゆふぐれ

〔通釈〕 柞

柞原は、吹き来る風に、音を立てることもない。そのように、ふと寄せられる消息に、返信することもない。つれない柞の木の下の、憂鬱なる秋の夕暮よ。

〔本歌〕 時ならで柞の紅葉散りにけりいかに木の下さびしかるらん（拾遺集・哀傷・一二八四・村上天皇）

〔参考〕 色かへぬ松吹く風の音はして散るは柞の紅葉なりけり（千載集・秋下・三七五・朝仲）

〔語釈〕 ○柞―『古今六帖』（第六・木）の「はこそ」。○風のたより―漢語の「風便」「風信」に当たる。風が吹いて来ること、風が吹く機会の意。「音」の縁で、ふとした機会に寄せられる消息の意を掛けるか。○音―物音の意に、「風の便り」の縁で、返信の意が掛かるか。○憂き―柞原が風に音を立てないことがつれないの意に、自分が憂く辛いの意を重ねる。

〔補説〕 「柞原」が「風」に音を立てないとするのは、既に散った柞を想定しているのか、あるいは散る柞をむしろ視覚で捉えようとする意図なのか、よく分からない。参考歌を踏まえて、後者と見ておく。

226 檜のちの葉のもろく落おつるを涙なみだにて時雨ふ降り置をける袖そでの上うへかな

〔通釈〕 柏

檜の葉がもろくも散り落ちるのを、我が涙のそれとして、時雨が檜の葉に降り置いたように、涙の時雨が降り置いてある袖の上であることだな。

〔本歌〕 神無月時雨降り置けるならの葉の名に負ふ宮のふるごとぞこれ（古今集・雑下・貞観御時、万葉集はいつ許作れるぞと、問はせ給ひければ、よみて奉りける・九九七・文屋有季）

〔語釈〕 ○柏―『古今六帖』（第六・木）の「かしは」。「柏」は、ブナ科の落葉高木。ただし宗尊は、同じブナ科の落葉高木の「檜の葉」を詠む。これは「檜柏」（「檜」や「柏」と同じブナ科の落葉高木）あるいは「檜の葉柏」（檜の木の葉の意）からの誤用か通用か。↓補説。○檜の葉のもろく落つるを涙にて―檜の葉がはかなく散り落ちる様子を、自分の涙のことと見て、ということ。○もろく落つる―新鮮な表現。京極派に通う。為兼に「冬の来て木の葉吹きしく山陰に鹿も涙やもろく落ちそふ」（為兼鹿百首・冬・初冬・五五）、伏見院に「冬来れば枝に木の葉の力弱み風をかごとにもろく落つなり」（伏見院御集・落葉・一五八八）、後伏見院に「山嵐にもろく落ちゆく紅葉葉のとどまらぬ世はかくこそありけれ」（風雅集・雑上・風前落葉といふ事をよませ給ひける・一五九三）の作がある。○時雨降り置ける―本歌の詞を取り、「檜の葉」に時雨が降り置いている意に、涙の比喩の時雨が袖の上に降り置いている意を重ねる。

〔補説〕 「檜柏」の作例は、『為忠家後度百首』の「檜柏その八枚手やひらをそなへつつ宿のへつひに手向けつるかな」（雑・

神祭・七〇四・親隆) や、覚性法親王の『出観集』の「冬来れば遠方野辺の榎柏朝吹く風の声ぞさびしき」(冬・初冬の心を・五二一。万代集・冬・一二七二) が早い。『正治初度百首』に「榎柏末葉に夏やなりぬらん木陰涼しき蝸の声」(夏・一三八・惟明親王) がある他、『閑谷集』(一九一) や『明日香井集』(五五七) にも用例が見える。一方、「榎の葉柏」は、「榎とる卯月になれば神山の榎の葉柏元つ葉もなし」(後拾遺集・夏・一六九・好忠) を初めとして多くの作例が存する。宗尊に近い時代の、『新撰六帖』(第六) の「かしは」で、信実は「佐保山の榎の柏木また生えの元つ葉繁み紅葉しにけり」(二四七九)、真観は「山風に榎の葉柏音高しすむみづくも聞きやおどろく」(二四八〇) と詠んでいる。以上から、宗尊が「柏」題で「榎の葉」を詠むことも、ありうべきことであつたかと思われる。

花

227 色^か変^かはる^か憂^うき世^よの花の一盛^{さか}りありしをよしや思^{おも}ひ出^でにして

〔通釈〕 花

様子が変わるつれない世の中で、色があせ衰える花も一時の盛りがあるように、私にも束の間の栄華があつたのを、ままよそれでもかまわない、思い出にして。

〔本歌〕 いざ桜我也散りなむ一盛りありなば人に憂きめ見えなむ (古今集・春下・七七・承均)

〔参考〕 今はただ昔ぞ常に恋ひらるる残りありしを思ひ出にして (詞花集・雑四・三四三・伊通)

我もしかありしものなり山桜あはれはかなき一盛りかな (現存六帖・やまざくら・六一九・信実)

〔他出〕 夫木抄・春四・花・御集、落花・一四六二。

〔語釈〕 ○花―『古今六帖』（第六・木）の「はな（花）」。

○色かはる―「色」は、世の中の様子・気配の意に、花の容色・色合いの意が掛かり、「世」と「花」の両方にかかる。

〔補説〕 「花の一盛り」は、將軍在位のときを言つたと思しく、221と類想。

紅葉

228 類無たぐひなき身とや嘆なげかん秋山の木の葉はにかはる色いろの見えずは

〔通釈〕 紅葉

比べるものがないこの身と嘆こうか。秋山の木の葉に、もし変化する色が見えないものならば。いや、秋山の木の葉には変わる色が見えるのだから、自分もその類として嘆こう。

〔参考〕 秋山の木の葉も今は紅葉つつ今朝吹く風に霜置きにけり（続後撰集・秋下・四一四・人麿）

冬来ては時雨ぞいたくまさるらし木の葉にかはる色は見えねど（紫禁和歌集・同比（建保四年三月十五日）、二百首和歌・八五六。万代集・冬・一二九六）

〔語釈〕 ○紅葉―『古今六帖』（第六・木）の「もみぢ（紅葉）」。

〔補説〕 やや分かりにくい歌。「類無き身とや嘆かん」は反語表現だが、嘆かないと言っているのではなく、比較するものが無い身として嘆くことはしない、同類のものがあつてそれと同じような身だと嘆こう、という趣旨か。つまり、「秋山の木の葉」にはあたりまえに変色が見えるが、我が「身」もその同類であつて、（栄華から）様変わり

していて、それを嘆く、ということか。

229 近江路を朝立ち来しも涙にてたづの音にのみ我ぞなかれし
鶴

〔通釈〕 鶴

近江路を朝に立って来たのも涙のなかで、立つならぬ鶴の鳴く音とばかり、私の方が自然とただ声をあげて泣いたのだ。

〔本歌〕 近江より朝立ち来ればうねの野にたづぞ鳴くなる明けぬこの夜は（古今集・大歌所御歌・近江ぶり・一〇七一）

〔参考〕 下紐のゆふつけ鳥の声立てて今朝の別れに我ぞなきぬる（続後撰集・恋三・八二一・読人不知）

〔語釈〕 ○鶴―『古今六帖』（第六・鳥）の「つる」。○たづ―鶴の歌語。「田鶴」とも書く。「近江路」「立ち来し」の縁で、「立つ」が掛かると見る。○音―鶴の鳴く音の意に、「涙」の縁で、泣き声の意が掛かる。○なかれし―「泣かれし」に、「たづ」の縁で、「鳴（く）」が掛かる。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の失脚して帰洛する途次の感懐か。

230 忘れめや鳥の初音に立ち別れなく出でし故郷の空
鶏

〔通釈〕 鶏

忘れましようか。鶏が鳴く朝の初音とともに立ち別れ、泣く泣く出たあの故郷の空を。

〔参考〕 言問へよ思ひおきつの浜千鳥なくなく出でし跡の月影（新古今集・羈旅・九三四・定家）

〔他出〕 中書王御詠・雑・旅歌とて・二三一。

〔語釈〕 ○鶏―『古今六帖』（第二・宅）の「にはとり」。○忘れめや―↓45。○故郷―鎌倉を言うか。京都にも解される。↓22。↓補説。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月八日に、京都へ向けて鎌倉を出発した朝を思い起こした感懐かと思しい。しかしまた、建長四年（一二五二）三月十九日に、鎌倉へと京都を立つた朝のことを遠く思い出した感懐と解されなくもない。

参考の定家詠は、「君を思ひ興津の浜に鳴く鶴のたづね来ればぞありとだに聞く」（古今集・雑上・九一四・忠房）を本歌に、『伊勢物語』の「名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと」（九段・男）と「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり」（四段）をも踏まえた作と考える。従って、この「おきつ」（「置きつ」との掛詞）は、本歌の詞書「貫之が和泉の国に侍りける時に」を踏まえた和泉国の歌枕ではなく、昔男（業平）の東下りを念頭に置いた駿河国のそれと見る。宗尊が定家詠をそのように解していたとすれば、「故郷の空」は、京都の空を言ったものということになるうか。拙稿『新古今集』羈旅歌二首試解―「言問へよ」と「宿問はば」―（『国文鶴見』四三、平二一・三）参照。

鳥

231 さえまさる月夜鳥の梢より浮うかれてなくや吾がが身なるらむ

【通釈】 鳥

一段と冷えまさってゆく月夜、その下に居る鳥が梢からふらふらと落ち着かずに鳴くのは、心がうつろに泣く我が身の姿なのであろうか。

【参考】

暁と夜鳥鳴けどこの山の梢の上はいまだしづけし（古今六帖・第六・からす・四四七六。万葉集・卷七・雜

歌・一二六三・古歌集、三句「このみねの」

吹く風に霜置き迷ふみ山辺に月夜鳥の声も寒けし（新撰六帖・第六・からす・二六〇一・家良）

月さえて山は梢のしづけきにかれ鳥の夜たた鳴くらん（新撰六帖・第六・からす・二六〇五・真観）

うかれきてさこそは昼と迷ふらめ明るも知らぬ月の夜鳥（現存六帖・からす・八五三・実氏）

【語釈】

○鳥―『古今六帖』（第六・鳥）の「からす」。○さえまさる月夜鳥―「さえまさる月夜」から「月夜鳥」へ

と鎖る。「月夜鳥」の語は、『八雲御抄』（第三・枝葉部・鳥）の「鳥」に「月夜」とあるが、古い用例は見えず、作例としては参考の『新撰六帖』の家良詠が早い。なお、「夜鳥」については、『枕草子』（六十八段。新潮日本古典集成本）は、「夜鳥どもの居て、夜中ばかりに寝ね騒ぐ。落ちまどひ、木伝ひて、寝起きたる声に鳴きたること、昼の目にたがひてをかしけれ」という。○浮かれてなくや吾が身なるらん―梢の鳥が、落ち着かない様子で鳴いているのが、心落ち着かずに泣いている自分自身のように聞こえる、との趣旨。「なく」は「鳴く」に「泣く」を掛ける。「昔見し雲を恋ひて蘆鶴の沢辺になくや我が身なるらん」（詞花集・雑下・三五〇・公重）に学ぶか。鳥に

ついて、「浮かる」と言う例は、古くは「恨みつつとどむる人のなければや山時鳥うかれてなく」（寛平御時后宮歌合・六〇、袋草紙・八六三・躬恒。新撰万葉集・六五に異伝）があり、「可憎病鵲半夜驚人（あなにくのやもめがらすのよなかにひとをおどるかす） 薄媚狂鵲三更唱曉（なさけなきうかれどりのあけもはてぬにあかつきをとなふる）」（新撰朗詠集・雑・恋・七三二・張文成）という詩句もある。

〔補説〕 どれと特定はできないが、参考に挙げた六帖題の「からす」の歌に倣った作であろう。なお、同様の素材・措辞・景趣の歌が、京極派に散見するので、左に例示しておく。

星の影もあかつき近き梢より一声長き月の夜烏（伏見院御集・鳥・一一八二）

月に鳴くやもめ烏の夜の声我も寢覚めに聞きうかれつも（伏見院御集・雑・一四二二）

明け方の寒き林に月落ちて霜夜の烏二声ぞ鳴く（伏見院御集・冬・一五七〇）

明け方の霜の夜烏声さえて梢の奥に月落ちにけり（伏見院御集・冬鳥・二二七二）

夜烏は高き梢に鳴き落ちて月しづかなる暁の山（風雅集・雑中・一六二九・光嚴院）

朝鳥声する杜の梢しも月は夜深き有明の影（風雅集・雑中・一六三六・実明女）

鵲

232 この秋ぞ身に知られにし 鵲かさ、きの行き逢あひの橋つらの辛つらき別れは

〔通釈〕 鵲

この秋こそは、我が身にはつきりと分かってしまったのだ。鵲が渡す橋で七夕が行き逢い翌朝にまた辛い別れを

する、その恨めしく堪えがたい別れというものは。

〔参考〕 夜や寒き衣や薄き鵲の行き逢ひの橋に霜や置くらん（古今六帖・第六・かささぎ・四四八九）

〔語釈〕 ○鵲―『古今六帖』（第六・鳥）の「かささぎ」。○鵲の行き逢ひの橋―「鵲」はカラス科の鳥。七夕に天の川に翼の橋を架けて織女を渡すという『淮南子』などに言う中国の伝説が原拠。「七月七日、烏鵲填河、成橋而渡」織女」（白孔六帖）。日本の婚姻形態の影響からか、天の川を渡るのが男の牽牛（彦星）へと傾く中で、「彦星の行き逢ひを待つ鵲のと渡る橋を我に貸さなむ」（新古今集・雑下・鵲・一七〇〇・道真）などと詠まれる。

〔補説〕 「この秋」は、本五百首が詠まれた文永三年（一二六六）の秋で、即ち、失脚して鎌倉を追われるように離れた折の別れの辛さを嘆じたものであろう。

鷺

233 立ち出でて夕暮ことにながむれば鷺飛び渡る遠の山ぎは

〔通釈〕 鷺

外に立ち出て、夕暮ごとに眺めると、遠くの山際に鷺が飛び渡っていくよ。

〔参考〕 さびしさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮（後拾遺集・秋上・三三三・良暹）

逢ふことを夕暮ごとに出で立てど夢路ならではかひなかりけり（後拾遺集・哀傷・六〇一・読人不知）

〔語釈〕 ○鷺―『古今六帖』（第六・鳥）の「さぎ」。○遠の山ぎは―定家の「むら雲の絶え間の影に虹立ちて時雨過ぎぬる遠の山ぎは」（玄玉集・天地下・二二三三）と「誰すみて心の限り尽くすらん花に霞める遠の山ぎは」（同・草

樹上・五六二。拾遺愚草員外・一字百首・一一）が先行例となる。

〔補説〕「鷺」は「立つ」あるいは「ある」と詠むのが伝統である。「飛ぶ」「渡る」と言う古い例は、『万葉集』の「池神の力士舞かも白鷺の杵啄ひ持ちて飛び渡るらむ」（卷十六・詠白鷺啄木飛歌・三八三二・奥麿）があるが、これは伎楽の様子を比喻したものである。叙景として、「鷺（白鷺）」が「飛ぶ」「渡る」ことを詠むのは、定家の「夕立の雲間の日影晴れそめて山のこなたを渡る白鷺」（拾遺愚草・十題百首・鳥・七五五。玉葉集・夏・四一六）が早い例の一つか。京極派は、これを好み、同歌の他『玉葉集』には、雅有の「つららゐる刈田の面の夕暮に山もと遠く鷺渡る見ゆ」（冬・九三三）と伏見院の「田のもより山もとさして行く鷺の近しと見ればはるかにぞ飛ぶ」（雑三・二二六三）を収めている。その伏見院には、他にも、「見渡せば秋の夕日の影暗れて色濃き山を渡る白鷺」（伏見院御集・秋夕・九二七、八五二にも）や「ながめこす田のものうへははるかにて鷺つれ渡る秋の山もと」（同・秋鷺・九八二）の作があり、これらの影響と思しく、『風雅集』には「夕日影田のもはるかに飛ぶ鷺の翼のほかには山ぞ暮れぬる」（雑中・一六四五・光嚴院）と「緑濃き日陰の山のはるばるとおのれまがはず渡る白鷺」（同・一七三九・徽安門院）が残されている。該歌は、右の雅有詠にも先行し、伏見院の三首の先蹤とも言える景趣を詠じていると言える。

雉

234 み狩野の枯生の雉子いづくにか命待つ間の身をも隠さん

〔通釈〕 雉

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

御狩野の草枯れたところにいる雉は、いったいどこに寿命を待つ間の身を隠すのだろうか。そのように自分は、いったいどこに身を隠そうか。

〔本歌〕

ありはてぬ命待つ間のほどばかり憂き事しげく思はずもがな（古今集・雑下・九六五・貞文）

萩原も霜枯れにけりみ狩野はあさるきぎすの隠れなきまで（後拾遺集・冬・三九五・長濟）

〔参考〕

身を隠すかたなきものは我ならでまたは焼け野のきぎすなりけり（万代集・雑一・二七六一・赤染衛門。赤

染衛門集・つとめてかへるに雉の隠れ所もなきを見て・四八九）

霜枯れの野田の草根に伏す鳴のなにの陰にか身をも隠さん（新撰六帖・第六・しぎ・二五九七・為家。現存六帖・しぎ・八四八）

み狩野はきじの隠れの程だにも残る草なく霜枯れにけり（百首歌合建長八年・冬・八七二・行家）

〔他出〕

中書王御詠・雑・六帖の題の歌に・雉・二七二。

〔語釈〕

○雉―『古今六帖』（第二・野）の「きじ」。歌語としては「きぎす」とも。○枯生―草の枯れたところ。為

家の「霜さやく枯生の蘆のよを寒みあらはに氷るこやの池水」（為家一夜百首・冬・池氷・五七）と「浅茅原枯生の小野の草の上にまじる色なく積もる白雪」（院御歌合宝治元年・野外雪・一五六）、およびその子為氏の「浅緑このめ春雨ふるなへに枯生の小野ぞ色まさり行く」（宝治百首・春・春雨・三四三）が先行例で、その後用例が散見する比較的新奇な詞。

山雉

235 山鳥の尾ろの長尾のうちはへてひとり憂き世になくなくぞ経る

〔通釈〕 山雉

山鳥の尾の長い尾が長く延びているように、長くうち続いて、ただ独り憂く辛いこの世の中に、山鳥が鳴く鳴くように、泣く泣く月日を過こしているのだ。

〔参考〕 山鳥の尾ろの長尾に鏡掛けとなふべみこそ汝に寄そりけめ（奥義抄・三四八、袖中抄・五一八。和歌童蒙抄・四九〇、下句「となへつつこそなきゆすりけれ」。和歌色葉・一一八、五句「なきおそりけめ」）

山つ鳥尾ろの長尾のを鏡にかかる心を見るやとほづま（万代集・恋二・思不言恋といふことを・二〇二六・仲実）

増鏡影だに見せよ山鳥の尾ろの長尾のなかは絶ゆとも（万代集・恋五・寄鳥恋を・二六九三・承明門院小宰相）

〔語釈〕 ○山雉―珍しい歌題。あるいは、『古今六帖』（第二・山）の「やまどり」（山鳥）の誤りか。○尾ろの長尾の―ここまで次句の「うちはへて」を起こす序。「尾ろ」は、尾のこと。「ろ」は接尾語。参考の「山鳥の」歌の、原歌（異伝）である「山鳥の尾ろのはつをに鏡掛けとなふべみこそ汝に寄そりけめ」（卷十四・相聞・三四六八・作者未詳）が原拠。「はつを」は、未詳。○ひとり憂き世に―良経の「奥山にひとり憂き世はさとりき常なき色を風にながめて」（新古今集・釈経・一九三五）や後鳥羽院の「君かくて山の端深くすまひせばひとり憂き世にものや思はん」（続後撰集・雑中・一二〇〇）に学ぶか。○うちはへて―山鳥の尾が長く延びての意に、時が長くうち続いての意を掛ける。○なくなくぞ経る―「泣く泣く」に、「山鳥」の縁で、「鳴く鳴く」が掛かる。「無く」と「泣く」の掛詞だが、『源氏物語』の「見しはなくあるは悲しき世のはてを背きしかひもなくなくぞ経る」（須磨・藤壺・一七八）に始まる句。鎌倉時代に入ってからまま用いられていく。元久三年（一二〇六）三月七日に急逝し

た良経を哀悼する家隆と定家の贈答中に家隆の「桜花こふとも知らじかげろふのもゆる春日に泣く泣くぞふる」(壬二集・雑・三二四一)、拾遺愚草・雑・二八一三)が見える(「経る」と「降る」の掛詞)。為家には「河あひや身をうき波に立つ衛またはためしもなくなくぞ経る」(河合社歌合寛元年十一月・千鳥・二二)や「み狩りせぬ野守の鏡時にはあはでうつし心もなくなくぞ経る」(新撰六帖・第五・かがみ・一六九二)の作があり、『新撰六帖』には他に、家良の「むもれ行く浅茅が庭のすず虫は秋をかさねてなくなくぞ経る」(第六・すずむし・二二四六)もある。宗尊がこれらを目にした可能性は高いであろう。

236 今いまは我物われもの憂うれかる身みとなり成はてて、鶯あまの音ねになかぬ日はなし

鶯

〔通釈〕 鶯

今では、私は物憂くけだるい身となりはてて、鶯が声をあげて鳴くように、憂く辛く声を出して鳴かない日はないよ。

〔本歌〕 春立てど花もにはほぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く(古今集・春上・一五・棟梁)

花鳥の色をも音をもいたづらに物憂かる身は過ぐすのみなり(後撰集・夏・二二二・雅正)

住の江のまつほど久になりぬればあしたづの音になかぬ日はなし(古今集・恋五・七七九・兼覽王)

〔語釈〕

○鶯―『古今六帖』(第六・鳥)の「うぐひす」。○今は我―↓189。○鶯の音になかぬ日はなし―「鶯の音に鳴(く)」から、「な(く・かぬ)」を掛詞に、「音に泣かぬ日はなし」へと鎖る。「物憂かる」の縁で、「鶯」に「憂

く」が掛かると解する。

〔補説〕 古歌三首を本歌とすると見ることにについては、221補説参照。

郭公

237 都にもまだ出でやらで郭公いまだ旅なる音こそなかるれ

〔通釈〕 郭公

都にもまだ出で行くこともなく、時鳥は、いまだに旅にある声をあげて鳴いている、そのように私もさつと都に出て行けず、いまだに旅にあつて、自然と声に出して泣くことだよ。

〔本歌〕 今朝来鳴きいまだ旅なる郭公花橘に宿は借らなむ（古今集・夏・一四一・読人不知）

〔参考〕 来ぬ人をまつちの山の郭公おなじ心に音こそなかるれ（拾遺集・恋三・八二〇・読人不知）

〔語釈〕 ○郭公―『古今六帖』（第六・鳥）の「ほととぎす」。○まだ出でやらで―「時鳥」について言うのは、家隆

の「もろ共にまだ出でやらで時鳥山のあなたの月に鳴くなり」（壬二集・初心百首・夏・二四。一〇三四（二句「まだ出でやらぬ」、二二二六にも）が早く、為家の「時鳥まだ出でやらぬ峰に生ふるまつとは知るや惜しむ初声」（為家千首・夏・二二三）が続く。宗尊がこれらを目にした可能性はあろう。

〔補説〕 本五百首を通底する述懐性に照らし、また前後が鳥に寄せた悲嘆の述懐歌であることも考えれば、この歌も単なる旅の時鳥を詠んだものではなく、文永三年（一二六六）七月に失脚して帰洛する途次の旅の悲哀を回想して詠じたものであろう。

雁

238 浮うかれ来る雲井の雁も我がごとや都の秋の月になくらん

〔通釈〕 雁

さすらい来る雲居の雁も、私がさまよいながら帰って来たこの都の秋の月に泣くのと同じように、都の秋の月に鳴いているのだろうか。

〔本説〕 雁の鳴き渡る声、ほのかに聞こゆるに、幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、「雲居の雁も我がごとや」とひとりごち給ふ気はひ、若う、らうたげなり。(源氏物語・乙女)

〔参考〕 逢坂のゆふつけ鳥も我がごとや越えゆく人のあとになくらむ(新勅撰集・雑二・一一七〇・知家)

〔語釈〕 ○浮かれ来る―「浮かれ来」は、中世から詠まれ始める措辞で、「くだかけはいづれの里を浮かれ来てまだ夜深きに八声なくらん」(正治初度百首・鳥・七九五・忠良)が早い。その後は、為家の「咲きそむる花のところを限りにて今日幾里を浮かれ来ぬらん」(万代集・春上・一九五)や、実氏の「浮かれ来てさこそは昼と迷ふらめ明くるも知らぬ月の夜がらす」(現存六帖・からす・八五三)がある。これらから、ふらふらとさまようようにやって来る意味に解される。宗尊は、別に補説に挙げた歌をものしているが、必ずしも伝統的ではない新奇な措辞にも敏感な宗尊の姿勢が窺われる。ここでは、雁がさすらつて戻って来る意に、宗尊自身の鎌倉からさまようように帰落した意を掛けるか。○我がごとや―「あしひきの山郭公我がごとや君に恋ひつつ寝ねがてにする」(古今集・恋一・四九九・読人不知)が原拠。○なく―雁が「鳴くらん」に、自分が「泣く」を掛ける。

〔補説〕 本説は、内大臣(頭中将)の女で祖母大宮のもとに預けられていた雲居の雁が、幼なじみから恋仲となった

夕霧との関係を知った父内大臣の、雲居の雁を自邸に引き取る意向に対し、夕霧とともに悩む場面。「雲井の雁も我がごとや」の引き歌は、古歌と思しい。『源氏釈』『奥入』『紫明抄』は、「霧深き雲居の雁もわがごとや晴れせずもの悲しかるらん」を注する。ちなみに、伏見天皇の永仁元年（一二九三）八月十五日の『永仁元年内裏御会』で詠まれた「鳴きかはす雲居の雁の心にも我がごと月に物や悲しき」（月前雁・九六・定成）は、同歌を本歌にしたと思われる。

なお、宗尊は、「文永三年秋の頃、初雁を聞きて」（詞書）として、「我もさぞよをあき風に浮かれ来て都にわぶる初雁の声」（中書王御詠・秋・九五）という類歌を詠んでいる。

鶉

239 故郷を思ひやるこそあはれなれ鶉うづら鳴く野なとなりやしぬらん成

〔通釈〕 鶉

古郷を思いやるのは、なんとも哀れにさびしい。鶉が鳴く野となつてしまつてゐるのだろうか。

〔参考〕 年を経て住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ（古今集・雑下・九七一・業平。伊勢物語・

百二十三段・二〇六・男）

住みなれし我が古里はこのごろや浅茅が原に鶉鳴くらん（新古今集・雑中・三井寺焼けて後、住み侍りける房を思ひやりてよめる・一六八〇・行尊）

〔他出〕 中書王御詠・雑・東の故郷を思ひやりて・二五三。

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔語釈〕 ○鶉―『古今六帖』（第二・野）の「うづら」。○故郷―ここは鎌倉の居所を言う。↓22。

鳴

240 霜さゆる室むろの刈田かりに立つ鳴なの羽はねかく数かずや我わが思ふこと

〔通釈〕 鳴

霜しもが冷たく冴える室むろの刈田かりから飛び立つ鳴なの、羽はねを羽はねばたかせる多くの数は、私わたしがあればこれ思案することの数かず。

〔本歌〕 暁の鳴の羽はねがき百羽ひゃくがき君きみが来ぬ夜は我わぞ数かずかく（古今集・恋五・七六一・読人不知）

〔参考〕 我が門かどのおくての引板ひいたにおどろきて室むろの刈田かりに鳴なぞ立つなる（千載集・秋下・三二七・兼昌）

百羽ひゃくがき羽はねかく鳴なも我わがごとく朝あわびしき数はまさらじ（拾遺集・恋二・七二四・貫之）

暁あけの鳴なの羽はねがきかきもあへじ我わが思ふことおもふことの数を知らせば（続後撰集・雑中・一一五七・土御門院。万代

集・雑一・二八八八。土御門院御集・寄暁述懐・四）

〔語釈〕 ○鳴―『古今六帖』（第六・鳥）の「しぎ」。○室むろの刈田かり―促成せいじゆくのための室むろで育てた早稻はやいねを植うえて刈かりり取とったあとの田かり。

千鳥

241 聞きけばまたいと昔むかしの恋こひしきに寢ね覚めの千鳥ちどり心こころして鳴なけ

〔通釈〕 千鳥

その声を聞くとまたいつそう、昔が恋しいから、私が寢覚めに聞く千鳥は心して鳴いてくれ。

〔本歌〕 暁の寢覚めの千鳥誰ためか佐保の河原にをちかへり鳴く（捨遺集・雑上・四八四・能宣）

〔参考〕 近江の海夕波千鳥鳴くなれば心も知らぬ昔思ほゆ（古今六帖・第二・くに・一二六五。綺語抄・四七一、五八七、三・四句「なが鳴けば心もしのに」）

女郎花見るに心はなぐさまでいとど昔の秋ぞ恋しき（新古今集・哀傷・七八二・実頼。和漢朗詠集・秋・女郎花・二八一。伊勢集・七九。古今六帖・第五・むかしをこふ・二九〇八）

時鳥心して鳴け橘の花散る里の五月雨の空（千五百番歌合・夏一・六六〇・後鳥羽院。後鳥羽院御集・

四二三。万代集・夏・七一一）

〔語釈〕 ○千鳥―『古今六帖』（第三・水、第六・鳥）の「ちどり（千鳥・千どり）」。

242 今是我野原のあさる春駒の放たれてのみ世をや過ぐさん
馬

〔通釈〕 馬

今は私は、野原の餌をあさる春駒が解き放たれているそれではないが、追い放たれてばかりで、この世を過ごしてゆくのだろうか。

〔本歌〕 厭はるる我が身は春の駒なれや野飼ひがてらに放ち捨てつる（古今集・雑体・誹諧歌・一〇四五・読人不

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

知)

〔参考〕

水隠りに蘆の若葉や萌えぬらん玉江の沼をあさる春駒（千載集・春上・三五・清輔）

刈らぬより美豆の入江の草若みかげも離れずあさる春駒（為家五柱百首・春・春駒・石清水・七九）

春日野のにひ若草につながられて立ちも離れずあさる春駒（同右・春日・八一）

〔語釈〕

○馬―『古今六帖』（第二・人）の「むま」。○今は我↓189。○野原のあさる春駒の―「放たれて」を起こ

す序。○放たれて―馬が解き放たれての意に、追放されて・罷免されて・うち捨てられての意を掛ける。鎌倉を追われ、將軍職を解かれ、人々から遠ざけられていることを寓意するか。先行例は、「夜の鶴都のうちに放たれて子を恋ひつつもなき明かすかな」（詞花集・雜上・三四〇・高内侍）や「あしてなきかにの大野に放たれてする方もなき身をいかにせん」（散木奇歌集・恨躬恥運雜歌百首・一四二九）。

鹿

243

物思へば我がためならぬ鹿の音も涙もよほす成まとなりけり

〔通釈〕

鹿

物思いをすると、私のためではない、妻を恋い慕って鳴く鹿の声も、私が涙を催すたねとなるのであったな。

〔参考〕

秋風や涙もよほすつまならむおとづれしより袖の乾かぬ（千載集・秋上・二三四。散木奇歌集・秋・

三七五）

木の葉散る峰の嵐に夢覚めて涙もよほす鹿の声かな（散木奇歌集・秋・夜深聞鹿・四四八）

〔類歌〕 よそにかく涙もよほすつまぞとも知らでや鹿のひとりなくらん（嘉喜門院集・六二）

〔語釈〕 ○馬―『古今六帖』（第二・やま）の「しか」。○涙もよほす―『源氏物語』の「吹き迷ふみ山おろしに夢覚めて涙もよほす滝の音かな」（若紫・四九）が早い。「鹿」の鳴く音について言うのは、参考の俊頼詠に始まり、西行の「さらぬだに秋はもののみ悲しきを涙もよほすさ牡鹿の声」（山家集・秋・鹿・四三二）や実定の「おのが身もいかた露けき篠分けて涙もよほすさ牡鹿の声」（林下集・秋歌の中に・一〇三）が続き、新古今時代には通親の「あぢきなやおのれはなきてさ牡鹿のよその枕に涙もよほす」（正治初度百首・秋・五四三）や慈円の「草枕涙もよほす鹿の音や今宵の月もくもるなるらん」（和歌所影供歌合建仁元年八月・旅月聞鹿・七九）がある。○つま―よすが・機縁の意の「端」に、「鹿」の縁で「妻」を掛ける。

〔補説〕 「妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらん」（貫之集・萩・四一七。古今六帖・第六・女のつらきにやれる・三六四二。秋風集・秋下・三六〇、四句「下葉もけさす」）を初めとして、例えば「妻恋ふる涙なりけりさ牡鹿のしがらむ萩に置ける白露」（久安百首・秋・七四〇・実清。続後撰集・秋上・二九二）など、「鹿」が「妻」を恋しくて流す「涙」を置く「露」と見る歌の類型がある。そういった歌も念頭に置くか。

244 猪 愁へあれば安くやは寝るかるもかく臥す猪は物や思はざるらん

〔通釈〕 猪

愁いがあるので、安らかに寝るか、いやそうではない。（かるもかく）寝床で安眠して臥すという猪は、辛い物

思いはしないのだろうか。

〔本歌〕 かるもかき臥す猪の床の寝を安みさこそ寝ざらめかからずもがな（後拾遺集・恋四・八二一・和泉式部）

〔語釈〕 ○猪―歌題としては珍しいか。建久二年（一一九一）十二月二十七日の左大将良経家の「十題百首」（秋篠

月清集、拾遺愚草等）の獣部では「臥す猪」を詠んでいて、『拾玉集』では獣十題の九番目に「猪」が見える。↓
93。また、『土御門院御集』所収「土御門院御百首」の「獣名十首」の二首目（三五二）も「臥す猪」を詠む。○
かるもかく―「枯草搔く」と書く。「ゐ（猪）」にかかる枕詞。猪が枯れ草を搔き集めて寢床にすることからいうという。本歌の「かるもかき」は、動詞としてその原意が活かしている。なお、俊成は、『六百番歌合』の判詞で、「臥す猪のかるも」の詞でこの和泉式部詠を想起させてもいるが（四〇一）、「臥す猪の床」の詞を厳しく批判している（一〇六一―二）。

〔補説〕 「愁へあれば」を、宗尊は失脚以前の鎌倉で既に、「弘長三年六月廿四日当座百首歌」（春）に於て、「愁へあれば聞くこと厭ふ宿ぞとも知らずがほなる鶯の声」（柳葉集・三六〇）と詠んでいる。ちなみに、恐らくはこれを本歌に、南朝の宗良親王が「愁へあれば聞くこと厭ふ吾が宿になれのみ春と鶯ぞ鳴く」（李花集・春・永き日も暮らし難う侍りしに、ただ鶯のみ鳴きければ・二五）と、また師賢も「愁へあれば聞くこと厭ふ我が身とも知らでやここに鶯の鳴く」（新葉集・雑上・一〇一〇）と詠んでいる。南朝歌人の宗尊歌撰取については、『瓊玉集』からのそれが認められる。本抄は、さほど世に流布しなかったせいもあってか、これまでのところ南朝歌人による撰取の痕跡はさほど明確には見られない。しかし、なお本抄全体の注釈を終えて後に、改めて検討する必要があるであろう。

245 犬
賤しつの男おが手馴たなれの犬の我わもさぞ憂うき世の家いは出いでがねてにする

〔本文〕 ○結句は、底本「いてかねにする」を、解釈から私に「出でがてにする」に改める。↓補説。

〔通釈〕 犬

身分低き男が飼慣らしている犬は家を出て行けない、私もそのように、憂く辛いこの俗世の家を出て行きかねているのだ。

〔本歌〕 憂き世には門させりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする（古今集・雑下・九六四・貞文）

〔参考〕 賤の男が手馴れの駒も春来れば野辺につきげとなりけるかな（六条宣旨集・はるごま・一一）

〔語釈〕 ○犬―前歌の「猪」と同様に歌題としては珍しいか。建久二年（一一九二）十二月二十七日の左大将良経家の「十題百首」（秋篠月清集、拾遺愚草等）の獸部では「犬ぞとがむる」「犬の声」を詠んでいて、『拾玉集』では獸十題の七番目に「犬」が見える。↓93、244。○賤の男の手馴れの犬の―「我」を比喻する序。「家を」「出でがてにする」様の比喻と見た。

〔補説〕 貞文詠を本歌と見つつ、結句を「出でがてにする」に改めた。また、左に掲出する、「憂き世」の「家」の出入りを言う歌の存在からも、結句は「出でがてにする」とあるべきかと判断した。

憂き世をば厭ひがほなる身なれども心は家を出でばこそあらめ（重家集・六〇一）

憂き世をば嵐の風にさそはれて家を出でにしすみかとぞ見る（山家集・雑・七四七・待賢門院〔上西門院〕兵衛）

思へども心は出でて身は出でぬ家ぞ憂き世の関屋なるらん（現存六帖抜粹本・いへ・一一八・為家。夫木抄・

雑三・うきよのせき・結縁経百首・九五二〇)

迷ひこし憂き世の家を離れてぞ今はた法の門に入りぬる(新千載集・釈経・八二五・読人不知)

なおしかし、底本結句の「いてかねにする」は、「寝ねがてにする」の誤りとも考えらる。その場合、次のような歌が参考となろうか。

秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人の寝ねがてにする(古今集・秋上・二二〇・読人不知)

私もさぞ老曾の森のほととぎす暁がたは寝ねがてにする(林葉集・夏・暁郭公尾坂歌合・二六一)

誰となく人をとがむる里の犬の声澄むほどに夜は更けにけり(寂蓮法師集・已上円位法師勸進・二九八)

いかにせむ友こそなけれ山の犬の声恐ろしき夜半の寝覚めに(拾玉集・御裳濯百首・雑・五九三)

小夜更けて宿守る犬の声しげし人はしづまる里の一村(伏見院御集・一一五〇)

これらを踏まえると、一首の意味は、「身分低き男が飼い慣らしている犬が家で夜に吠えている、私もそのように、憂く辛いこの俗世ので眠りかねているのだ」ということになろうか。

鼠

246 虎とらとのみ用もちゐられしは昔むかしにて今は鼠ねずみのあな憂世うれよの中

〔通釈〕 鼠

虎とばかりに將軍として用いられたのは、昔のことであって、今は何の用もない鼠の穴ならぬ、あな憂のああ辛いこの世の中だ。

〔本文〕 東方先生喟然長息仰而応_レ之曰：用_レ之則為_レ虎、不_レ用則為_レ鼠（文選・卷四十五・設論）

〔他出〕 増鏡・北野の雪・八二。

〔語釈〕 ○鼠―歌題としては珍しいか。『和歌童蒙抄』第九・獸部に「鼯」の「鼠」順でみえる。また、『土御門院御集』所収の「土御門院御百首」の「獸名十首」の五首目（三五四）も「ねずみ」を詠む（左掲）。○あな憂世の中―「あな」は、ああ、の意の感動詞に、「鼠」の縁で、「穴」が掛かる。「あな憂世の中」の原拠は、「しかりとて背かれなくに事しあればまづ嘆かれぬあな憂世の中」（古今集・雑下・九三六・篁）に求められる。「鼠」の「穴」は、「壁厭空心鼠孔穿（かべにはいとふこうしんにしてねずみのあなのうがたるることを）」（和漢朗詠集・秋・虫・三二九・篁）と見える。「あな」と「穴」の掛詞の先例には、「よめのこのこ鼠いかなりぬらんあな美しと思ほゆるかな」（和泉式部集・入道殿の、小式部の内侍子産みたるに、のたまはせたる・六一四）、「後の世に弥陀の離相をかぶらずはあなあさましの月の鼠や」（秋篠月清集・十題百首・獸・二七〇）、「世を忍ぶ心のうちのあな鼠やすく出づべき道もあるらし」三二九（土御門院御集・獸名十首・三五四）等がある。

〔補説〕 東方朔の本文は、木藤才蔵校注『増鏡』（岩波日本古典文学大系、昭四〇）が引き、また、幽齋の『聞書全集』にもこれを注することを、井上宗雄全訳注『増鏡（中）』（講談社学術文庫、昭五八）が指摘している。

鼯

247 三_{みくに}山梢に伝_{つた}ふむ_＊ささびも_と取りつく方はある世なりけり

〔本文〕 ○第三句「むささびも」は、底本「むさ、ひも_＊」（見消ち字中）の。一首の解釈から、見消ちと傍記の位置を

誤写したものと判断して、私に改める。

〔通釈〕

〔Chap. 2〕
颯

三国山の梢に伝い渡るむささびでも、取りつく場所はある世の中であつたのだな。(それなのにわたしは取りすがる所とてないよ)

〔本歌〕

三国山木ずゑに住まふむささびの鳥待つがごと我が待ち瘦せむ(万葉集・卷七・譬喻歌・寄獣・一三六七・作者未詳。五代集歌枕・みくに山・三〇一、二句「いずゑにまよふ」)

〔参考〕

奥山の木ずゑに伝ふむささびの声も寒けく夜は更けにけり(新撰六帖・第二・むささび・五三一・家長。現存六帖・むささび・六九)

〔語釈〕

○颯―『和歌童蒙抄』第九・獣部に「颯」「鼠」順でみえる。また、『土御門院御集』所収の「土御門院御百首」の「獸名十首」の六首目(三五五)も「むささび」を詠む(前歌の「ねずみ」と連続)。○三国山―三つの国境に位置する山の称であろうが、『五代集歌枕』『八雲御抄』『歌枕名寄』は、摂津国とする。○取りつく方―公重の「鷗ある入江に流すもち縄の取りつく方もなきぞわびしき」(風情集・六三〇)、信実の「玉かづらはふ木あまたもあるものを取りつく方もなきぞ悲しき」(新撰六帖・第六・たまかづら・二〇九九)が先行例。『夫木抄』に、後者(古今集・七〇九が本歌)に倣ったかと思しい作者宗尊とする「み山木の末まではへる玉かづら取りつく方も今はなき身か」(雑十・縷・六帖題御歌、玉かづら・一三三八六)が収められている。

蛙

井の底に住むや蛙も我ばかり行く方もなき物は思はじ

〔通釈〕 蛙

井戸の底に住んでいるよ、その蛙でも、私ぐらい、どこに行く所もない、何の方途もない物思いはするまい。

〔本歌〕 あらち男の狩る矢の前に立つ鹿もいと我ばかり物は思はじ（拾遺集・恋五・九五四・人麿）

〔参考〕 いかにせむ井の底に見る大空の我が身一つにせばき憂き世を（新撰六帖・第二・井・八一二・為家。現存六帖抜粹本・第二・井・一一一）

涙河身なぐばかりの淵はあれど氷解けねば行く方もなし（後撰集・冬・四九四・読人不知）

涙河袖のみわたにわかかへり行く方もなき物をこそ思へ（新勅撰集・恋一・六六一・俊成）

〔語釈〕 ○蛙―『古今六帖』（第三・水）の「かはづ」。○住むや―「や」は、詠嘆の間投助詞。

〔補説〕 井の中の蛙よりも閉塞的な自己の慨嘆。

蝶

249 花の色せいろに心を〔染めて〕 飛ぶ蝶てぶの離れはなやらぬは憂うれき世なりけり

〔本文〕 ○底本の二・三句は「こゝろを飛てふの」で脱落があるが、一応解釈から私に補い、「心を〔染めて〕 飛ぶてふの」に改めておく。↓補説。

〔通釈〕 蝶

花の色に心を深く寄せて飛ぶ蝶が花を離れきれないように、私が完全に離れられないのはこの辛い憂き世なのであったな。

【参考】 秋の野の千草の花に飛ぶ蝶の命に頼む露もはかなし（新撰六帖・第六・てふ・二二七二・家良）

ひとすぢにまどふは人の身なりけり蝶すら花の色はやつさず（新撰六帖・第六・てふ・二二七五・真鏡）
昔より離れがたきは憂き世かなかたみにしのお中ならねども（新古今集・雑下・一八三三・兼実）

【語釈】 ○蝶―『古今六帖』（第六・虫）の「てふ」。○飛ぶ蝶の―「離れやらぬ」を起こす序。「飛ぶ蝶」は参考の

『新撰六帖』の両首に先行して、西行の「ませに咲く花にむつれて飛ぶ蝶のうらやましくもはかなかりけり」（山家集・雑・一〇二六）と家隆の「撫子の花の籬に飛ぶ蝶の色色まじり置ける露かな」（壬二集・夏・夏歌・二二六八）がある。比較的新鮮な措辞に敏感な宗尊の姿を窺わせる一例。

【補説】 二句は、「心をしめて」「心をうつし」等とも考えられるか。いずれにせよ、花を離れないで飛ぶ蝶の様子を、自分が憂き世を離れきれないことの比喩とするものであろう。あるいは、世の中を思い切れないことを言う、「あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ」（古今集・雑下・九三九・読人不知）を意識するところがあつたか。もちろんこの「てふ」は、というの意味で「蝶」ではない。しかし、『新撰六帖』の「てふ」題で、為家は「咲き続く折節変はる花ばなにうつるてふなや思ひ知るらん」（二二七二）、信実は「咲く花に羽うちかはしあはれてふさのみや深き色にめぐらん」（二二七四）と、物名風に、「蝶」を「てふ」（という）に掛けて詠み込んでいるのである。それらに触発されて、古今歌の「あはれてふ」に宗尊の意識が及んだ可能性を考えてみたいということである。

〔通釈〕 蟬

唐衣を織つて長く延ばすように、長く引き続いて寒い秋風に、この身は空蟬のように空しく、蟬が鳴くように、一日中ずっと泣き続けていて。

〔本歌〕 うちはへて音をなき暮らす空蟬の空しき恋も我はするかな（後撰集・夏・一九二・読人不知）

〔参考〕 木隠れて身は空蟬の唐衣もころも経にけり忍び忍びに（千五百番歌合・恋二・二四三二・良経）

鳴き暮らし思ひ暮らして空蟬の涙おりはへ絶えぬ恋かな（宝治百首・恋・寄虫恋・二九一四・少将内侍）

あはれともいふ人なしに空蟬の身をいたづらに泣き暮らすらん（新撰六帖・第六・せみ・二二二八・知家）

〔語釈〕 ○蟬―『古今六帖』（第六・虫）の「せみ」。○唐衣―「織り延へ」を起こす序。枕詞とも解されるか。○織

り延へ―布を織つて長く延ばすように、長く続けて、ということ。「折延へ」（時を長く続けての意）との掛詞にも解しうるが、大意はかわらない。○空蟬の―「なき」を起こす序。枕詞にも解されるが、「身は空蟬」に、我が身が蟬の抜け殻のように空しいの意を込める有意の序と見る。○なき―「鳴き」に「泣き」を掛ける。

蜚

251 声絶えずなげや枕のきりぎりすさぞな今年ことしの秋あきは悲かなしき

〔通釈〕 蜚

声が途絶えることなく鳴いてくれ、枕にいる蟋蟀よ。私も声が途絶えずに泣いて、いかにも今年の秋は、悲しいのだ。

〔本歌〕 声絶えず鳴けや鶯ひととせにふたたびとだに來べき春かは（古今集・春下・一三一・興風）

鳴けや鳴け蓬が袖のきりぎりす過ぎ行く秋はげにぞ悲しき（後拾遺集・秋上・二七三・好忠）

〔参考〕 我がごとく物や悲しききりぎりす枕つどへによもすがらなく（古今六帖・第六・きりぎりす・三九九〇）

〔語釈〕 ○葦―『古今六帖』（第六・虫）の「きりぎりす」。コオロギの古名。○なけや―「きりぎりす」に対して言う「鳴けや」に、「悲しき」の縁で、自分自身が「泣く」の意が掛かる。○さぞな―「悲し」にかける先例は、『千五百番歌合』の後鳥羽院の判歌「夜はの秋はさぞな悲しき虫の音も風のけしきも月の光も」（秋三・七百六番）が早く、宗尊と同時代では、真観の「岩木にももの心はありといへばさぞな別れの秋は悲しき」（新撰六帖・第一・あきのはて・一七〇）と真観女尚侍家中納言の「恋は世の常なりけれどみな人の身にはじめてはさぞな悲しき」（閑窓撰歌合建長三年・四七）がある。

〔補説〕 「今年」は、本五百首を詠じた文永三年（一二六六）の秋で、失脚して帰洛した秋の嘆き。

松虫

252 限りなきあれば松虫むしの音ねも弱よほるなり我われのみひとり鳴・ひなき残れとて

〔通釈〕 松虫

期限があるので、松虫の鳴く音も弱っているようだ。私だけがひとり、残って泣き続けろといつて。

〔参考〕 山遠み雲ゐに雁の越えて去なば我のみひとり音にやなきなん（金槐集定家所伝本・雑・六三〇）

〔語釈〕 ○松虫―『古今六帖』（第六・虫）の「まつむし」。○なき―「泣き」に「松虫」の縁で「鳴き」が掛かる。

〔補説〕「松虫」の鳴く音が「弱る」ことを言うのは、西行の「さらぬだに声弱かりし松虫の秋の末には聞きもわか
れず」（山家集・秋・秋の末に松虫を聞きて・四七五）が早い。続く、寂蓮の「来ぬ人の秋のけしきや更けぬら
む恨みに弱る松虫の声」（六百番歌合・恋下・寄虫恋・一〇八〇。新古今集・恋四・一三二一、初句「来ぬ人を」
や俊成の「さえまさる秋の頃もをうちわびて人まつ虫も声弱るなり」（正治初度百首・秋・一一五五）、あるいは良
経の「宿さびて庭に木の葉のつもるより人まつ虫も声弱るなり」（秋篠月清集・秋・秋の暮に・一二六三）は、「松
虫」に「人」を「待つ」意を掛けたもの。より純粋な叙景歌には、定家の「霜のたて山の錦をおりはへて鳴く音も
弱る野への松虫」（拾遺愚草・秋・「建保二年水無瀬殿秋十首」・二三八三）や家隆の「高砂の尾上にまさる秋風に
裾野に弱る松虫の声」（壬二集・院百首建保四年・秋・八五二）、あるいは、秀能の「庭の萩のなかは霜や結ぶら
ん末越す風に弱る松虫」（如願法師集・秋・建保六年八月廿七日水無瀬殿歌御会侍りし時・五二三）や順徳院の
「霜さゆる籬の菊の色ながらうつろひ弱る松虫の声」（紫禁和歌集・同〈建保六年九月〉廿五日、当座詩歌合、秋
歌・一〇八八）など、建保期の諸詠がある。また、『宝治百首』では、顕氏の「長月の暁深く置く霜にやや声弱る
庭の松虫」（秋・暁虫・一五四〇）や俊成女の「忘れじと契りし宿に秋や来しなまつ虫は声弱るまで」（恋・寄虫
恋・二九一三）などが詠まれている。中世に詠まれ始める、新古今前夜から建保期を経て確立したかに見える表現
であり、宗尊がそうだった流れに沿っていることが窺える。

蜘蛛

253 世の憂うれさはかくてもいかがさがにの厭いとひやせまし惜おしからぬ身に

〔通釈〕 蜘蛛

世の中の辛さは、それでもどうだろうか。（ささがにの）厭うことをしたものでしょうか、惜しくもないこの身で。

〔語釈〕 ○蜘蛛―『古今六帖』（第六・虫）の「くも」。○ささがにの―「いと」の枕詞。「ささがに」は蜘蛛の歌語。

○惜しからぬ身―「命かはなにぞも露のあだものを逢ふにしかへば惜しからぬ身を」（友則集・四九）に遡及する措辞で、その後も、恋歌で恋人に逢うことに比べて言う例が散見する。述懐歌で、世にあるに値しない我が身を言うのは、梢少将公重の「よの人もあはれといはじ我もまた惜しからぬ身ぞ消えはてねただ」（風情集・五五二）が早く、守覚法親王の「何事を待つともなしにながらへて惜しからぬ身の年を経るかな」（守覚法親王集・雑・述懐・一一〇。万代集・雑六・三六八三。続後撰集・雑中・一一九〇、二句「待つとはなしに」）が続く。真観にも「秋の夜に月を離れて行く雲の惜しからぬ身と思ふ悲しさ」（百首歌合建長八年・秋・四八八）の作がある。

鱸

254 鱸釣る海人とだによも人は見じあるにもあらで旅を来しかば

〔通釈〕 鱸

（あの人磨のように）鱸を釣る漁師とさえも、まさか人は見るまい。生きていともなくて、旅をやって来たので。

〔本歌〕 あらたへの藤江の浦に鱸釣る海人とか見らむ旅行く我を（万葉集・卷三・雑歌・二五二・人磨）

〔参考〕 さりともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして（伊勢物語・六十五段・一二一・女）

数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木（源氏物語・帚木・二三・空蟬）

〔語釈〕 ○ 鱸―『古今六帖』（第三・水）の「すずき」。

〔補説〕 文永三年（一二六六）七月の、失脚して帰洛する旅を述懐したものであろう。

貝

255 あはれ誰が拾へる跡の浦なれば今は言ふかひなき身なるらん

〔通釈〕 貝

ああいったい誰が貝を拾った跡の浦なので、今は貝もなく、言うかいもない、取るに足らないこの身であるのだろうか。

〔本歌〕 潮の間に四方の浦浦尋ねれど今は我が身の言ふかひもなし（新古今集・雑下・一七一六・和泉式部）

〔語釈〕 ○ 『古今六帖』（第三・水）の「かひ」。○言ふかひなき―言う「詮」もないの意に、「拾へる」「浦」の縁で、「貝」が掛かる。○身―自身の意に、「かひ」の縁で、貝の身の意が響くか。

〔補説〕 文永三年（一二七七）の將軍失脚後の身の沈淪を、一体誰のせいなのかと慨嘆する趣。

吾柄

256 人ぞ憂き藻に棲む虫のそれとだに過たぬ身はそれとおほゆる

〔通釈〕 吾柄

人がつれなく恨めしいのだ。海藻に棲む虫の「割殻」ならぬ「我から」それとさえも、我が身故とさえも過つてはいないこの身は、人がつれなく恨めしいのだと、自然と思うのだ。

〔本歌〕 海人の刈る藻に棲む虫のわれからと音をこそなかめ世をは恨みじ（古今集・恋五・八〇七・直子）

〔参考〕 人からの恨みともがな海人の刈る藻に棲む虫の名だに忘れん（新撰六帖・第三・われから・一一四九・信

実）

〔語釈〕 ○吾柄―『古今六帖』（第三・水）の「われから」。海藻に棲息する小さな甲殻類。「吾柄」は宛字。多く

「割殻」と書く。○過たぬ身―178。○藻に棲む虫のそれとだに過たぬ身は―「藻に棲む虫のそれ」は、「割殻」で、「我から」を掛ける。自分自身のせいだと少しでも思う程にさえも過ちを犯してはいない我が身は、という趣旨。○それ―初句を指すと解する。

〔補説〕 文永三年（一二六六）の將軍失脚が、自らに起因するものではなく、それをもたらした人が恨めしい、と詠嘆する趣。

伊勢

257 五十鈴川同じ流れに沈む身をいかが哀れと神も見ざらむ

〔通釈〕 伊勢

伊勢の五十鈴川と同じ流れの皇統であるのに、川の流れに沈むように世に沈むこの身を、どうして哀れだと伊勢

の神も見ないだろうか、見るに違いないよ。

〔参考〕

山川の同じ流れにすみながら我が身ひとつ沈みはてぬる（続後撰集・雑中・園城寺住みうかれける頃よみ侍りける・一一七二・隆明。万代集・雑六・前大僧正増誉園城寺長吏になりて侍りける時、言ひ遣はしける・三六一〇）

〔語釈〕

○伊勢―伊勢大神宮（内宮・外宮）のこと。ここは内宮、「天照坐皇大神宮」つまり皇大神宮のこと。皇室の祖先神天照大神を祭る。↓補注。○五十鈴川同じ流れ―「五十鈴川」は、伊勢国の歌枕。「御裳濯川」とも言い、伊勢国度会郡を流れる川。伊勢内宮の御手洗川。内宮の祭神は皇室の祖先神天照大神であるので、宗尊も属する皇統を寓意。「川」の「同じ流れ」が、皇統をなぞらえる先例は、故後冷泉院から後三条院への代替わりを言った「天の川同じ流れと聞きながら渡らむことのならほぞ悲しき」（後拾遺集・雑一・八八八・周防内侍）、故禎子内親王から惊子内親王への齋院の交代を言った「有栖川同じ流れはかはらねど見しや昔の影ぞ忘れぬ」（新古今集・哀傷・八二七・雅定）がある。○沈む―川の流れの水に沈む意に、世に沈淪する意を掛ける。

〔補説〕

歌の主題あるいは奉献先の神社名としては、『俊成五社百首』は、伊勢・賀茂・春日・住吉・日吉の五社、『為家五社（七社）百首』は、俊成の五社に石清水・北野の二社を加える。建保三年（一二二五）九月十三夜披講の「内大臣道家百首」は、伊勢・石清水・賀茂・春日・住吉が神祇五首の歌題。『明題部類抄』によると、「前大納言為家卿中院亭会」の「千首」（出題為家）の「神祇二十首」は、「伊勢・石清水・賀茂・松尾・平野・稻荷・春日・大原野・布留・住吉・日吉・梅宮・吉田・祇園・北野・貴布祢・出雲・三輪・玉津島・熊野」の諸社である。本五百首の内の二二八首を収める本抄では、この257から272までの一六首（伊勢・石清水・賀茂・平野・稻荷・春日・大原野・広瀬・住吉・日吉・北野・熊野・伊豆・箱根・三島・社）が、神社名題（272は「社」）の歌群である

ので、原「五百首」では二〇首〜三〇首ほどが同類の歌題の歌群であったかと推測される。伊勢および畿内に近江の日吉社を加えた主要神社を列して、白河朝の永保元年（一一〇八）十一月十八日に定められたという「二十二社」（百練抄）は、恒例の祈年穀や国家重要時に勅使等を發遣し奉幣される。伊勢・石清水・賀茂（上下）・松尾・平野・稲荷・春日（上七社）、大原野・大神（おほみわ）・石上（いそのかみ）・大和・広瀬・竜田・住吉（中七社）、日吉・梅宮・吉田・広田・祇園・北野・丹生・貴船（下八社）の二二社。原「五百首」に詠まれた諸社は、257「伊勢」から267「北野」までは、全てこの中にある。これら京都朝廷ゆかりの諸社に、上皇等が熱心に参詣した268「熊野」と、269〜271「伊豆・箱根・三島」などの関東（幕府・將軍家）縁故の諸社（あるいは他にも若干の神社）を加えたものではなかつたか。

『とはすがたり』卷四の、惟康親王の將軍廢位にともなう上洛を語る場面に、次のとおりある。

さても將軍と申すも、夷などがおのれと世を打ち取りてかくなりたるなどにてもおはしませず。（宗尊は）後嵯峨天皇第二の皇子と申すべきにや、後深草帝には、御歳とらやん月とやらん御まさりにて、先ず出で來給ひしかば、十善の主（帝王）にもなり給はば、これ（惟康）も位を嗣ぎ給ふべき御身なりしかども、（宗尊の）母准后（棟子）の御事故、叶はで止み給ひしを、（宗尊が）將軍にて下り給ひしかども、ただ人にてはおはしませず、中務親王と申し侍りしぞかし。（惟康は）その御後なれば、申すにや及ぶ。何となき御思ひ腹など申すこともあれども、（惟康の母・摂政近衛兼経女宰子は）藤門執柄の流れよりも出で給ひき。（惟康は父母の）いづ方につけてか、少しもいるがせなるべき御事にはおはします、と思ひ続けるにも、先づ先立つものは涙なりけり。

五十鈴川同じ流れを忘れずはいかにあはれと神も見らるん

この歌は、作者後深草院二条の、惟康に対する同情の感懐であろうが、該歌との類似は偶合ではなく、惟康の父宗尊の歌を流用した結果と考えられないだろうか。後深草院二条の宗尊歌受容の道筋、『竹風和歌抄』の流布、など不明なままだが、一応その可能性を見ておきたい。ここから272まで、諸々の神社を歌題とする神祇を寄せる述懐歌群。

石清水

258 さかゆきし道こそかはれ男山おとしそれも昔むかしと神かみに愁うれへて

〔通釈〕 石清水

男山の坂を上っていった道、男として栄え来た道はすっかり変わるけれど、私が栄えたのも昔だと、(今は)男山石清水八幡の神に愁訴して。

〔本歌〕 今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もあり来しものを(古今集・雑上・八八九・読人不知)

〔他出〕 中書王御詠・雑・神祇の歌の中に・八幡・三三三三。閑月集・羈旅・題知らず・四四三。

〔語釈〕 ○石清水―石清水八幡宮。清和天皇の貞観二年(八六〇)に宇佐八幡宮を勧請。古来朝廷の崇敬を受けるが、八幡神は、武門特に源氏の守護神の性格も帯びる。↓257。○さかゆきし―「坂行きし」に「栄ゆ」を掛ける。「来し」も響くか。○男山―山城国の歌枕。石清水八幡宮が鎮座する山城国綴喜郡(現在京都府八幡市)の男山。生駒山の北端に連なる。八幡宮、八幡神をも意味する。在俗の元服後の男性の意を寓意。○それも昔と―本歌の「我も昔は」を変化させたと思しいが、「知る人とまつを頼むもあはれなりそれも昔は馴れし友かは」(現存六帖・

まつ・五〇六・下野。秋風集・雑中・一一六〇。秋風抄・雑・三〇五）も宗尊の視野に入っていたか。なお、『秋風抄』は初句「ある人と」だが、「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（古今集・雑上・九〇九・興風）を本歌にしていると見られるので、「知る人と」が正しいか。

〔補説〕宗尊は將軍在位中には、「世の中の憂きを見るにも男山頼む心に身をまかせつつ」（瓊玉集・雑上・同じ心を〈神祇〉・四一二）と詠んでいる。これには、武門の信仰を集めた八幡神を將軍として頼みとする心情があったか。また、該歌より五年後には、「文永八年七月、千五百番歌合あるべしとて、内裏より仰せられし百首歌」の「祝」で「今こそは昔に越えて男山さかく君が御代と見えけれ」（本抄・900）と、同じ題材ながら、弟龜山天皇の代を寿ぐ、該歌とは対照的な詠み方を見せている。

賀茂

259 頼たのみ来し身もいたづら成になりぬ又きべきまた雲わ分かくな賀か茂も川の波な

〔通釈〕 賀茂

賀茂別雷神を頼み来たった我が身も、このままではきつとはかなくなってしまうだろう。どうかあの請願を違うことなく、我が身を助けて、雲を分けて天に昇ることをするな、賀茂川の波近く鎮座する賀茂別雷神よ。

〔本歌〕 我頼む人いたづらになしはてばまた雲分けて昇るばかりぞ（新古今集・神祇・一八六一・賀茂別雷神）

〔参考〕 あはれとも言ふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきかな（拾遺集・恋五・九五〇・伊尹）

〔語釈〕 ○賀茂―賀茂社（上・下両者）のこと。ここは特に上賀茂、別雷神を祭る賀茂別雷神社を言う。宮城鎮護の

神として、伊勢大神宮に並び皇室・朝廷の尊崇を受ける。ここの「賀茂」から「平野」「稻荷」「春日」を挟んで「大原野」までの並びは、『袋草紙』の「希代歌・神明御歌」の並びに一致するが、この部分は「五百首」からの抄録であるので、その原態との一致は不明。↓257。○賀茂川の波―他に「葵草かざして行くと思ふよりいそぎ立たる賀茂河の波」（和泉式部集・夏・三二五）が見えるが、珍しい句。こゝは、上賀茂神社、あるいはその祭神の賀茂別雷神を寓意。○また雲分くな―本歌を踏まえる。賀茂別雷神は、「雲分けて天下りけむそのかみの誓ひたがふな賀茂のみづ垣」（政範集・ある所にて人人百首の歌よみ侍りし時・賀茂社・三九四）と歌われるように、雲を分けて天下つたと信じられていた。

平野

260 民を撫なでし三年とせの情なさけ忘れずはいかにこの世よを神みの見るらん

〔通釈〕 平野

人民を慈しみいたわった（あの仁徳天皇としての）三年に渡る恩情を忘れていないなら、今は平野明神としてある神は、この世の中をどのように見るのだろうか。

〔語釈〕 ○平野―平野神社のこと。山城国葛野郡（現京都市北区平野宮本町）にある式内社。祭神は、今木神（いまきのかみ）・久度神（くどのかみ）・古開神（フルアキノカミ）の三座と、後れて承和（八三四―四八）年間に合祀されたという比売神（ひめがみ）を併せた計四座。平野神は、狭義の主神たる、「今来」すなわち新しい渡来を意味する今木神を意味し、広義には右の三座ないし四座を意味する。草創は、延暦十三年（七九四）の平安遷都に際

し、平城京田村後宮の今木神が桓武天皇によって勧請されたものという。『帝王編年記』（仁徳）は、仁徳天皇について、「今平野大明神此天皇也」という。『二十二社注式』では、今木神に日本武尊、久度神に仲哀天皇、古開神に仁徳天皇、比売神に天照大神、そして撰社異社の神に天穗日命を各々祭神として比定し、またそれぞれに源・平・高階・大江氏、そして中原・清原・菅原・秋篠氏の氏神とする。また、各本地を大日・聖観音・地藏・不動とする説も生じた。「八姓の氏神」（簾中抄、公事根源）「あまたの家の氏神」（今鏡）と了解されていたらしい。四月・十一月の上申の日の平野祭には、大臣もしくは参議以上が赴参し、皇太子奉幣があつたので、平野社は皇太子守護の神と位置づけられ、伊勢に並んで「平野神宮」（文徳実録・仁寿元・十・十七）とも呼ばれていた。神宮寺は施無畏寺。該歌は、『帝王編年記』に伝える、仁徳天皇を平野大明神とする考えに従つて詠まれている。↓257、259。○民を撫でし三年の情け—平野明神たる仁徳天皇が、国中の貧窮に際して、人民の課役を三年間免除したことを言う。↓補説。○この世—宗尊が將軍職を追われ、心ならずも京都に舞い戻らざるをえなかつた世の中。嘆かわしく辛い世の中との認識であろう。

〔補説〕

平野明神となつたという仁徳天皇の仁政の伝説を踏まえる。『古事記』から、当該部分を引いておく。

是に天皇、高山に登りて、四方の国を見たまひて詔りたまひしく、「国の中に烟発たず。国皆貧窮し。故、今より三年に至るまで、悉に人民の課・役を除せ。」とのりたまひき。是を以ちて大殿破れ壞れて、悉に雨漏れども、都て脩め理ること勿く、械を以ちて其の漏る雨を受けて、漏らざる処に遷り避けましき。後に国の中を見たまへば、国に烟満てり。故、人民富めりと為ほして、今はと課・役を科せたまひき。是を以ちて百姓栄えて、役使に苦しまざりき。故、其の御世を称へて、聖帝の世と謂ふなり。（日本古典文学大系訓み下し文）

稻荷

261 稻荷山いなり憂うき目めをみつと思おもふこそ祈いのる社やしろの数もつられ

〔通釈〕 稻荷

稻荷山よ、憂く辛い目を見た「見つ」と思ふからこそ、祈りを捧げる稻荷の社の「三つ」の数さえも恨めしいのであった。

〔本歌〕 稻荷山社の数を人間はばつれなき人をみつとこたへむ（拾遺集・雑恋・一二一一・貞文）

我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき（古今集・雑下・九七三・読人不知）

〔語釈〕 ○稻荷―山城国紀伊郡稻荷山（現在京都市伏見区）の稻荷神社のこと。通称伏見稻荷。上・中・下の三社が

あり、五穀の神倉稻魂神を祭る中の社を本社とし、上社には猿田彦命、下社には大宮女命を祭る。↓257、259。○稻

荷山―山城国の歌枕。稻荷神社が鎮座する山。稻荷神社そのものをも言う。↓「稻荷」。○みつ―「見つ」に、「稻

荷山」「社」「数」の縁で、稻荷の上・中・下・三社の「三つ」を掛ける。↓「稻荷」。○祈る社の数―稻荷神社が

上・中・下の三社からなることを言う。↓「稻荷」。

〔補説〕 本歌二首目は、96でも本歌にしている。「うきめをみつ」は、「憂き目」と「浮海布（浮き藻）」の掛詞で、

96はそれを踏襲するが、該歌では「浮き藻」が掛けられてはいない。宗尊の本歌取を広く捉える立場で、本歌と見
ておくが、宗尊の詠作方法全体を見渡してなお考えるべきであろう。

春日

262 哀れとやさすがに神もみ笠山ふりさけ空に＊なげ嘆く心こころを

〔本文〕 底本の結句の「こゝろを」は、下の文字（判読不能）に上書き。

〔通釈〕 春日

哀れだと、さすがに三笠の山の春日明神も、見るだろうか。振り仰いで空に向かって嘆く私の心を。

〔本歌〕 いかばかり神もうれしとみ笠山ふた葉の松の千代のけしきを（金葉集・賀・三三二・周防内侍）

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（古今集・羈旅・四〇六・仲麿）

〔語釈〕 ○春日―大和国添上郡（現在奈良市）の春日神社のこと。春日大社、春日大明神とも。藤原氏の氏神。↓

257、259。○さすがに神もみ笠山―「さすがに神も見」から、「み」を掛詞に、「三笠山」に鎖る。「さすがに」は、「見」にかかり、そうは言うもののやはり見るだろうの意で、本来藤原氏の氏神である三笠山の春日明神でも、皇統にある自分を（哀れだと）見るだろう、の趣旨か。↓次歌。「三笠山」にかけて、なんといつてもやはり、神は神でも、三笠山の神だ、と解される文脈も活きるか。「三笠山」は、大和国の歌枕。大和国添上郡（現在奈良市）の春日山前方にある一峰、春日大社の背後に位置し、春日大社を寓意。

〔補説〕 後拾遺集初出歌人周防内侍の歌を本歌と見ることにについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

大原野

263 小塩山松せしほに憂うれき身みやう愁うれへまし神代もかかるためしあらじな

〔通釈〕 大原野

大原野の神の小塩山の松に、この憂鬱の身を愁訴しようかしら。神代にも、このような例はあるまいな、と。

〔参考〕 大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の影見む（後撰集・慶賀・一三七三・貫之）

〔類歌〕 高砂の松に憂き身や愁へましさらでこの世に知る人はなし（中書王御詠・雑・松・二六六）

〔語釈〕 ○大原野―山城国乙訓郡（現在京都市西京区）の大原野神社のこと。藤原氏の氏神奈良の春日明神を勧請。

参考歌も詞書「左大臣の家の男子女子、冠し、裳着侍りけるに」で、氏長者藤原実頼の子女の成長と繁栄を祈念するもの。↓257、259。○小塩山―山城国の歌枕。山城国乙訓郡（現在京都市西京区）大原野町西部の山。今現在は、西京区大原野南春日町の大原野神社や勝持寺の西に位置する標高六四一メートルの峰をそれとするが、この付近は多くの峰が連なるので古くは不明。山麓の大原野神社を象徴し、神社そのものをも言う。

〔補説〕 「かかるためし」は、突然の將軍からの失脚のようなひどい先例、という趣旨に解される。本五百首の二ヶ月前、失脚して鎌倉から帰洛直後の「文永三年八月百五十首歌」（雑神祇）でも宗尊は、「八百万神てふ神よあはれ知れためしもあらじかかる無き名は（本抄・592）」と、該歌と同様に、冤罪とも言うべき不当な処置を神に愁訴する歌を詠じているのである。ただしまた、「かかるためし」に、参考歌のように本来藤原氏の祝賀に寄せて言うはずの「小塩山」の「松」には、皇統にある宗尊のような親王がひどい不遇を愁訴するといった先例はない、という趣旨を重ねて解することもできるか。前歌も、藤原氏の氏神たる「春日」に寄せた愁訴。

広瀬

264 哀れあはし神の御室みむろの広瀬川袖つ漬ひくばかり祈りいのやはする

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔通釈〕 広瀬

哀れを知つてくれ。広い社殿にいらつしやる広瀬の神よ。そこを流れる広瀬川は、あの古歌のように、袖が浸つて濡れるほど浅いけれど、そのように浅く祈ることはするか。するはずもない、深く祈るのだから。

〔本歌〕

広瀬川袖漬くばかり浅きをや心深めて我が思ふらむ（万葉集・巻七・譬喩歌・一三八一。古今六帖・第三・かは・一五八一、結句「我は思はん」。五代集歌枕・ひろせがは・一二八三、結句「我が思へらん」。続古今集・恋二・一一二五、三句「浅き瀬に」結句「我は思はん」）

〔語釈〕

○広瀬―広瀬神社のこと。大和国広瀬郡（現在奈良県北葛城郡河合町川合）、大和川と曾我川との合流点に鎮座。「延喜式」神名上に広瀬郡「広瀬坐和加宇加乃売命神社名神大 月次新嘗」とある。祭神は主神若宇賀能売命（食物神・水神）、相殿神櫛玉比売命・穗雷命。元慶二年（八七八）七月二十六日、広瀬・竜田両社に神宝を納める倉が一字ずつ造立されて、翌年六月十四日に神財が奉納されたという（三代実録）。陰暦四月四日と七月四日に、その竜田神社と共に、広瀬竜田祭が行われる。↓257。↓補説。○御室―神が来臨する場所。神を祭る物。神社の社殿などを言う。あるいは、元慶年間に造られたという神宝を収める倉（↓前項）を指すか。○広瀬川―大和国の歌枕。曾我川が広瀬神社の東付近で大和川に合流する、その流れを言うか。前の「御室の」を受けて、場所が広いの意の「広（し）」が掛かるか。

〔補説〕

「広瀬」を歌に詠むことは珍しい。『夫木抄』（雑十六・神祇付社）の「広瀬の神、広瀬、山城」の項に、集付「御集、現存六」作者「衣笠内大臣」として「手向けする広瀬の神のしるしあらば恋の涙の淵もあせなん」（二六〇九二）がある。この家良詠が一応先行例となり、これを宗尊が目にした可能性はあろう。他に、『歌枕名寄』（巻十一・飛鳥・雑篇）には「広瀬河 神」を立項するが、右の本歌（三二四六。集付は万葉巻七と続古今巻

十二で本文は後者に同じ」と該歌（三三二四七）とを挙げるのみで、『夫木抄』（雑六・河）には「広瀬川、広瀬、山城又大和」の項に、「題不知」（集付万葉卷七）として右の本歌（一一三〇六）を挙げるのみ。後出でも南北朝期に、「広瀬竜田祭」を年中行事として詠む例（年中行事歌合・三六、新葉集・五九九）が見える程度。

住吉

265 敷島の我が道^{まも}守る誓^{ちか}ひあらば憂^{うれ}き身^みな捨^すてそ住吉^{よよし}の神

〔通釈〕 住吉

私が敷島の和歌を詠む道を守ってゆく誓願をもし立てるのならば、この情けなく厭わしい身を見捨ててくれるな、住吉の神よ。

〔参考〕 我が道を守らば君を守るらむ齡はゆづれ住吉の松（新古今集・賀・七三九・定家）

敷島の道を守らば住吉の神をしるべに関も越えなむ（為家五社百首・恋・関・住吉・六二二）

敷島の道^{みち}を捨^すてずは住吉の神ぞ守らん我が君の御代（弘長百首・雑・神祇・六八二・家良）

〔語釈〕 ○住吉―住吉大社、住吉明神のこと。撰津国住吉（現在大阪市住吉区）に鎮座。撰津一宮。表筒男（ウワヅ

ツオ）命（第一本宮）・中筒男命（第二本宮）・底筒男命（第三本宮）の三神に加え、神功皇后の三韓出兵の時、その海上を守護したとの伝承から、神功皇后（息長帯姫命。第四本宮）を祭る。海路・軍事の神だが、南社の祭神を玉津島明神（衣通姫）と説く（奥義抄）ように、和歌の神としても信仰された。ここの意識。↓257。○敷島の我が道―「敷島の道」は、「敷島の道も盛りに興りて」（千載集・序）のように、和歌の道、歌道のことを言う。

「敷島の我が道」は、先行例が見えない。参考の定家詠から援用か。後代では、下冷泉持為の「敷島の我が道守れ玉津島入江に沈むうき身なりとも」（持為集・同日〈永享九年十一月二十九日〉新玉津島にて一一〇）や烏丸光広の「敷島の我が道照らすともし火の明石の浦に影遺す人」（黄葉集・人丸の凶に・一六三八）がある。これらは、自分の和歌の道、自己の歌道の意であることは明らかである。該歌の場合、「わが」は、「守る」にかかると解されるが、「道」にも「誓ひ」にも、あるいはその三者にかけても解しうる。一応、「守る」にかかると見ておく。「我が」に「和歌」を響かせるか。なお、「敷島の道」を嘉する「住吉の神」を詠むのは、俊成の「敷島や道をばことに住よしの松もうれしと千世をそふらし」（正治初度百首・祝・一二〇三・俊成）が早い。○誓ひあらば―意外に用例が少ない句。先行例には家隆の「誓ひあらば逢ひ見んといふ露の身は何にかくべき言の葉もなし」（壬二集・恋・恋歌あまたよみ侍りしに・二九一九）がある。

〔補説〕 既に將軍在位の在関東時から数多の和歌を詠じて来た宗尊が、改めてこの先も和歌を読み続ける誓いを立てて、住吉の神の加護を願う。少なくとも、日頃の「荒荆」で没する文永十一年（一二七四）七月の二年前、文永九年頃までは、宗尊は和歌を捨てていないことが諸資料に確認される。

日吉

266 曇りなき心のうちを照らし見よ天つ日吉の神ならば神

〔通釈〕 日吉

天の日のように曇りのない我が心の中を、照らし見てくれ。天の日という名の日吉の神であるならば、その神神

よ。

〔本歌〕 天の川苗代水に堰き下せ天下ります神ならば神（金葉集・雑下・六二五・能因）

〔参考〕 やはらぐる光さやかに照らし見よ頼む日吉の七のみ社（拾遺愚草・十題百首・神祇・七九〇）

我が頼む心の底を照らし見よ御裳濯川に宿る月影（老若五十首歌合・雑・四七五、拾遺愚草・一八二六）

〔類歌〕 敷島の道のしるべぞ曇りなき天つ日吉の照らす光に（拾藻鈔（公順）・雑下・同家〔為世〕 日吉社百首歌・

四六六）

三笠山あふぐ春日も曇りなき心の底は照らし見るらん（伏見院御集・山・七五一、一六一四）

〔語釈〕 ○日吉―日吉（ひえ） 山王権現のこと。日吉大社とも。主神は大山咋神（オオヤマクイノカミ）。多くの末

社を有する（古く七社、後に二十一社） 比叡山の大比叡峰や小比叡（八王寺山）の山岳信仰から始まったとされ、延暦寺と習合して朝野の信仰が厚かった。伊勢と畿内の諸社の二十一社に、最後にこの近江の日吉社が加えられて、「二十二社」となった。↓257。

〔補説〕 後拾遺集初出歌人能因の歌を本歌と見ることにについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平

二二・三） 126、128補説参照）

参考歌の「七のみ社」は、東本宮二宮（地主権現）と西本宮大宮権現に聖真子を併せた「両所三聖」に、八王子・三宮・客人宮・十禅師の四社を加えた山王七社を言う。

北野

267 頼むたのむかなかなかるあは憂き身の為にこそ神も北野に跡を垂たれけん

『竹風和歌抄』注釈稿（一）

〔通釈〕 北野

頼みとすることであるよ。このような辛い身のためにこそ、天神も北野に跡を垂れて現れたのであろうか。

〔参考〕 たぐひなく憂かりける身のためにこそ人のつらさもある世なりけれ（秋風抄・恋下・九一六・家長）

〔他出〕 中書王御詠・雑・神祇の歌の中に・北野・三三五、結句「跡は垂れけめ」。

〔北野〕 ○北野―北野神社のこと。北野天神、北野天満宮とも。平安京北郊、現在京都市上京区御前通今小路上ル馬喰町にある。菅原道真（神号「天満大自在天」）を祭る。左遷された道真が大宰府に没してのち、その怨霊が醍醐天皇や藤原時平等に崇りをなしたとして、御霊鎮魂のために宗祀。↓257。

〔補説〕 『北野天神縁起』では、北野天神は、「一仏浄土の縁として必天満大自在天神あはれみをたれ」たものとい、そもそも人間の姿としての天神即ち菅原道真は、仏や菩薩が衆生済度のために仮にこの世に姿を現した「権者」の「化現」として、菅相公是善の家の南庭に小児の姿で出現したのだ、ともいう（承久本他）。また、同書の一部伝本では、「本地を尋ぬれば観音の垂迹なり」（津田本）とも記す。宗尊が、具体的に北野の本地をどのように認識していたかは不明だが、当時一般の本地垂迹の通念に従い、北野天神も何らかの仏菩薩が神明として示現したものと、「神も北野に跡を垂れけん」と表現したのであろう。参考、真保亨『北野聖廟絵の研究』（平六・二、中央公論美術出版）。

268 熊野
神も見よ熊野の那智の山深み落ちたる滝の清き流れを

〔通釈〕 熊野

神も御覽あれ。熊野三山的那智の山が深くて、その山奥から落ちている那智の滝の、清い流れを。落ち沈んでい
る私の、清廉を。

〔参考〕 み熊野的那智のお山に引くしめのうちはへてのみ落つる滝かな（金槐集〈定家所伝本〉・雑・那智の滝のあ
りさま語りしを・六五一）

那智の山はるかに落つる滝つせにすぐ心のちりも残らじ（続古今集・神祇・七三七・式乾門院御匣）

〔語釈〕

○熊野―熊野権現のこと。本宮・熊野坐神社（和歌山県東牟婁郡本宮町）、新宮・熊野速玉神社（新宮市）、
那智山・熊野那智大社（東牟婁郡那智勝浦町那智山）の三山を一体と見て、熊野三山とも言う。平安時代以来、上
皇達が崇敬して熱心に参詣した。↓257。○神も見よ―治承二年（一一七八）三月十五日の『別雷社歌合』の作「神
も見よ思ふ事なき人だにもたつことやすきしめの内かは」（述懐・一六〇・仲綱）が早く、慈円が多用し、定家や
為家に用例が見える句。勅撰集では『続後撰集』に初出で、同集の「神も見よ曇りなきよの鏡山祈るかひある月ぞ
さやけき」（賀・一二六三・祝部成茂）や「神も見よ姿ばかりぞ男山心は深き道に入りなき」（神祇・五四六・源定
通）を、宗尊は学んだか。○熊野―この「熊野」は、熊野権現全体、熊野三山の総称。○那智の山―紀伊国牟婁郡
那智（現在和歌山県東牟婁郡那智勝浦町）の、那智滝を擁する山域。熊野三山の内の一つ、那智大社があり、ここ
もそれを指す。

〔補説〕

「落ちたる滝の清き流れ」は、將軍を失脚し沈淪する自身の潔白を寓意するか。「清き流れ」が清廉を寓意す
るのは、玄賓の「三輪川の清き流れにすぎてし我が名をここにまたや汚さむ」（和漢朗詠集・僧・六一二。続古
今集・釈経・八〇一）に始まるが、宗尊は「文永元年六月十七日庚申宗尊親王百番自歌合」（河）で既に、この歌

を本歌に「住み侘びば行きて尋ねん三輪川の清き流れやいづこなるらん」(瓊玉集・雑上・四三九)と詠じている。該歌でも玄賓の歌を微かに意識するか。

伊豆

269 朽ちにけり伊豆のみ山の宮柱心のうちに立てし誓ひを

〔通釈〕 伊豆

朽ちてしまったのだな。何時だったか、伊豆の御山に立つ宮柱のように、心の中に立てた誓願であったものを。

〔参考〕 ちはやぶる伊豆のお山の玉椿八百万代も色はかはらじ(金槐集(定家所伝本)・賀・二所詣し侍りし時・

三六六。続後撰集・賀・一三五九・実朝)

春日なる三笠の山の宮柱立てし誓ひはいまも古りせず(続後撰集・神祇・五五一・素俊)

〔語釈〕 ○伊豆―伊豆御山にある伊豆山神社のこと。伊豆権現、走湯(山)権現とも。祭神は伊豆山神。古代の、洞

穴中より湧いて海に流れる走り湯(下宮・浜宮)とその北の伊豆山(上宮)に対する信仰が基という。源頼朝が崇敬し、伊豆権現と箱根権現の二所権現(および三島明神)を参詣する、「二所詣」の先例を開く。以後、鎌倉將軍の重要行事となり、宗尊も参詣した。歌題としては珍しい。人麿家集の『柿本集』(書陵部蔵。私家集大成人麿Ⅱ)に「伊豆」の題で「逢ふことをいつしかとのみまつ鳥のかはらず人を恋ひ渡るかな」(五九〇)が見えるが、これは物名風に、「伊豆」を「何時しか」に詠み込んだもの。相模が治安二年(一〇二二)正月に走湯権現に参詣して社頭に埋めた「走湯百首」は、その後の山の僧からの返歌の百首、さらに相模の権現への返歌の百首と共に、『相

模集』(流布本)に見える。↓257。○伊豆のみ山―伊豆国の歌枕。現在熱海市の伊豆山。伊豆権現が鎮座する。「伊豆のお山」とも。「伊豆」に「何時」が掛かると見ておく。

〔補説〕 次歌の「筥根」と一对で、また次次歌の「三島」と併せて、三首は、將軍として二所詣に参じた各社に寄せた述懐。該歌は、將軍として立てた(経世撫民)の心中の誓願が、將軍失脚により脆くも崩れ去ったことを嘆く。將軍を失脚し帰洛してこの歌を詠んだ前年、文永二年(一二六五)には二月七日―十二日に二所詣を行い、その間に伊豆山に「三十首歌」を奉納している。その歌の一首が『新後拾遺集』(神祇・一五二三)に次のように見える。文永二年二月、二所に詣でける時、伊豆の御山に奉りける卅首歌の中に

中務卿宗尊親王

神もまた捨てぬ道とは頼めどもあはれ知るべき言の葉ぞなき

筥根

270 箱根山はせね去年こぞの二月きつひ此この度かきを限りなりとや神は知りけん

〔通釈〕 筥根(箱根)

箱根の山、箱根権現よ。(私が参詣した)去年の二月に、この度の参詣の旅をそれでもう限りだと(もう参詣はしないと)、神は知っていたのだろうか。

〔参考〕 さりととも我は頼みしいにしへも憂かるべき身と神は知りけん(秋風集・神祇・六三四・忠良。玉葉集・神祇・二七八九)

〔他出〕 中書王御詠・雜・神祇の歌の中に・箱根・三三六。

〔語釈〕 ○箱根―一般に「箱根」だが、「宮根」とも書く。箱根神社のこと。箱根権現とも。相模国足柄下郡（現在神奈川県足柄下郡箱根町元箱根）にある。駒が岳や昔の湖を中心となる箱根の山に対する信仰が基。旧国幣小社。祭神は箱根大神と称し、瓊瓊杵尊・木花咲耶姬命・彦火火出見尊の三神とされる。前歌の「伊豆」（伊豆山神社）と共に、「二所詣」の神社として崇敬され、宗尊も将軍在位時には恒例の参詣を行った。↓257。○箱根山―相模国の歌枕。現在の神奈川県と静岡県との境に位置する箱根の山全体を言う。箱根神社（箱根権現）を擁し、ここもそれを寓意。○この度を―底本の「度」については、他にこの字は用いられていないが、散見する「夏」と比較して、点を打つていて明らかに区別されている。『私家集大成』『新編国歌大観』共に、「夏」に起すが、「度」と見るべきであろう。「度」に「旅」を掛ける。

〔補説〕 前歌の「箱根」と一対で、また次歌の「三島」と併せて、三首は、将軍として二所詣に参じた各社に寄せた述懐。該歌は、宗尊が将軍を失脚した文永三年（一二六六）七月の前年に行った、二月七日〜十二日の二所詣を回顧した述懐。文永三年にも、正月三十日に二所詣の精進始を行っているが、その後の将軍解任に向けた一連の動きのためか、結局宗尊自身は二所に参詣せず、二月五日に奉幣使が進発し、九日に帰参しているのである（吾妻鏡）。従って、文永二年度が宗尊の二所詣の最後となった。

三島

271 思ひ出づる心こころや神かみも通かよふらん夢にみしまの御手洗みたらしの水

〔通釈〕 三島

思い出す心は、神も共に似通うのだろうか。夢に見た、三島の御手洗の水よ。

〔語釈〕 ○三島―伊豆国田方郡（現在三島市大宮町）にある神社、三島大社のこと。延喜式内社。伊豆国一宮。源頼朝が当社伊豆山権現と箱根権現の二所と共に、三島大社にも度々参詣して神事には奉幣使を派遣して崇敬して以来、將軍の恒例行事となり、宗尊も二所詣の折に併せて参詣した。↓257、269、270。○夢にみしまの御手洗の水―「夢に見し」から、「みし」を掛詞に、「三島の御手洗の水」に鎖る。「御手洗の水」の句は、早く「神垣のい垣のいかに契らねどかくていくたびみたらしの水」（惟規集・加茂にて、或女に・四）の例が見える（「みたらし」の「み」に「見」を掛ける）。その後は、宜秋門院丹後の「千はやぶる神にも問はん君が代をうれしといかみたらしの水」（正治初度百首・祝・二二〇〇。これも「見」を掛ける）や、長明の「さりとと濁りなき世を頼むかな流れ絶えせぬ御手洗の水」（正治後度百首・神祇・六五四・長明）、あるいは慈円の「賀茂百首」の「夏きても暑さまさらぬ衣手に結ぶ影ある御手洗の水」（拾玉集・詠百首和歌・夏・二三一六）や、為家の賀茂社奉納の「末結ぶ手にも千歳やせかるらん菊咲きかかる御手洗の水」（為家五社百首・秋・菊・賀茂・三六七）などと詠まれる。丹後の一首は判然としないが恐らくこれも含めて、何れも上賀茂神社の御手洗川を詠んでいる。「三島の御手洗の水」は新奇。三島は清水豊富な土地で、現在の三島大社にも神前の池に水が湛えられている。当時も同様のものが存在していたとすれば、これが「御手洗の水」に当たると見てよいであろう。ちなみに南朝の師賢は、「下総国へ下り侍りける道にて、三島大明神に読みて奉りける歌中に」として、「契り有りて今日はみしまの御手洗に憂き影うつす墨染の袖」（新葉集・雑下・一二七九）と詠んでいる。

社

272 跡垂るる四方の社の神々も過たぬ身の程は知るらん

〔通釈〕 社

我が国に垂迹している四方の社の神々も、間違っていない無実のこの身の様子をご存じであろう。

〔参考〕 守れただ四方の社の天つ神君ゆゑにこそ跡も垂るらめ（続古今集・神祇・七四七・基家。宝治百首・雑・寄

社祝・三九二〇）

君を祈るただ一言の神のみや二心なき程は知るらむ（続古今集・神祇・七一六・賀茂氏久）

〔他出〕 中書王御詠・雑・三四五。

〔語釈〕 ○社―『古今六帖』（第二・山）の「やしろ」。神霊の降り立つ場所、神を祭る建物の意。○過たぬ身―↓
178。

〔補説〕 『中書王御詠』では、「同じ頃、心のうちに思ひつづけ侍りし」の詞書の下、「身の憂さもさてこそしばし慰むれ神のまことのある世ともがな」（三四三）「末の世もかはらぬものと頼み来し神の誓ひのいかなりぬる」（三四四）に続く歌。「同じ頃」は、「その頃同社に奉りし十首歌に」（三三九の前）を通して、「思はざるほかに沈みにしことを、北野に愁へ申すとて」を受ける。

257から271までが各諸社名に寄せる述懐で、それを概括する「四方の社の神々」という該歌で結ぶ。

序品、入於深山

273 忍ぶ山心の奥おくや教せきへけんしひみてぞ見みつる有明の月

〔通釈〕 序品、「深山に入る」

信天山ならず、深い山の奥に入つて忍ぶ心の奥を、私は説き教えたのであろうか。どうあつても見てしまふ、有明の月よ、私の光明よ。

〔参考〕 信天山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく（伊勢物語・十五段・二三・男。新勅撰集・恋五・九四二・業平）

〔語釈〕 ○入於深山―『法華經（妙法蓮華經）』「序品第一」で、『法華經』を説く前に釈尊が靈鷲山で示した瑞相につき、弥勒菩薩が集衆に代わり、その奇跡の不思議を文殊菩薩に対して問う偈の中の一節、「又見下菩薩 勇猛精進 入於深山 思与惟仏道」の一句。○忍ぶ山―参考歌から、陸奥国の歌枕「信天山」を念頭に置くか。ただし、参考歌の場合は「忍び」の序だが、ここは「忍ぶ」に、堪え忍ぶの原意が生きた掛詞。「道絶えて我が身に深きしのぶ山心の奥を知る人もなし」（続後撰集・恋一・六六六・道家）にも学ぶか。宗尊には、これに倣つた「しのお山心の奥に立つ雲の晴れぬ思ひは知る人もなし」（宗尊親王三百首・恋・二〇五）もある。○心の奥―「奥」は、題の「深山」から、「忍ぶ山」の縁で、深い山奥の意が掛かる。○しひてぞ見つる―先行例は、建長三年九月『影供歌合』の「旅衣ほさで時雨るるみ山路にしひてぞ見つる峰のみみぢ葉」（行路紅葉・三〇三・公基）。

〔補説〕 同じ偈頌句を題とする歌は、行尊の「入於深山／世を背き深き山路へ入りにけりしづかに法を思ひとくとて」（行尊大僧正集・五五）が早く、以後散見する。中で、「月」を詠む歌には、寂然の「入於深山思惟仏道といふ文の心を／雲かかる苔の岩とに跡絶えて心に晴れぬ月をしぞ思ふ」（唯心房集・一六二）や秀能の「入於深山／奥

山にすむ心だにありければしづかに四方の月は見えけり」（如願法師集・九二六）がある。これらの「月」は、「思惟仏道」の「仏道」、あるいはそれを導く仏の光明、即ち「序品」で仏（釈尊）が示す瑞相の一つ、眉間の白毫相から遍く光を放つその光明、を寓意していようか。該歌の場合も同様か。

ここから巻一卷軸の288まで釈経歌。内、285までは『法華経』二十八品の各品の経文歌で、286は『法華経』の結経たる『普賢経』を題とする。恐らくは、『法華経』の開経『無量義経』を題とする一首、法華経二十八品の各品の経文を題とする二八首、『普賢経』を題とする一首、からなるいわゆる法華経二十八品歌三〇首からの抄録であろう。全体には、選子『発心和歌集』以来の法華経二十八品歌の経文題で経旨を詠む伝統的な歌と、他にあまり例を見ない経文を題とする新奇な歌とが併存している。

方便品、常自寂滅相

274 長閑にも心と花の散るにこそ風の辛さはなき世なりけり

〔通釈〕 方便品、「常に自ら寂滅の相なればなり」

何とものどかに自づから花が散るにつけて、吹く風の恨めしさは無い、この世であったのだな。この世の万物は、もとより自づから消滅するのが本質であり、それはしかし真の滅でなく、来世に仏となることができるのだから、辛い恨めしさなどはないこの世であったのだ。

〔参考〕 吹く風ぞ思へばつらき桜花心と散れる春しなれば（後拾遺集・春下・一四三・大式三位）

吹く風ものどけき御代の春にこそ心と花の散るは見えけれ（雲葉集・春中・百首歌の中に・一四九・式子、

式子内親王集・百首歌の中に三五三・三五三

〔語釈〕

○方便品、常自寂滅相―『法華經』「方便品第二」は、釈尊が舍利弗に大乘一乘の智慧に転じさせて、諸法実相（有形無形の万物は全て空なるままに真実の姿であること）を説く。そこで、釈尊が「唯一仏乘」（一切衆生を成仏させる無二の教法）の意義を説く偈の一節、「我雖^レ説^レ涅槃^一 是亦非^二真滅相^一 諸法從^レ本來 常自寂滅相 仏子行^レ道已 來世得^レ作^レ仏」の一句。なお、底本の「滅」は、『私家集大成』『新編国歌大観』共に「成」に起こす。しかし、284「藥王品、病即消滅不老不死」の「滅」と比べれば三水がはつきりしないが、他所の「成」に比較すると明らかに異なる運筆であり、「滅」と見るべきである。

〔補説〕

經旨歌ではあるが、参考の両首を念頭に置いていようか。

同じ偈頌句を題として、慈円は「常自寂滅相／昔より心のどかに行く舟はまどひし浪の末をしぞ思ふ」（拾玉集・詠百首和歌法門妙經八卷之中取百句・方便品十四首・二四二二）と詠んでいる。他例は見えない。

譬喩品、淺識聞之、迷惑不解

275 山の井の淺き^{あさ}心に迷ふ^{まよ}こそ^{ことわり}理とこそ袖は濡^ぬれけれ

〔通釈〕

譬喩品、「淺識のものはこれを聞きて、迷惑して解らざればなり」

山の井戸が浅いように、浅い心で迷っている、しかし、淺識のものは法華經の説法を聞いても迷い惑って理解しないと言うから、そこそが仏の説くまさに真理だと、袖は涙に濡れたのだった。

〔参考〕

山の井の淺き心も思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ（古今集・恋五・七六四・読人不知）

〔語釈〕

○譬喩品、淺識聞之迷惑不解―『法華經』「譬喩品第三」は、方便品の教えを領解して悦んだ舍利弗が、阿羅漢達に真実の教えを説くことを懇請し、釈尊が「三車」の喩を以て説く。そこで、釈尊が重ねて義を説いた偈の一節、「斯法華經 為深智一説 淺識聞之 迷惑不解」の一句。○山の井の―「淺き」を起こす序。

〔補説〕

經旨歌で、偈頌の句題を受けてはいるが、参考歌の措辞を取っている。本歌と見ることもできるか。同じ偈頌句を題とする例は見えない。

法師品、諸法空為座

276 人を待つ心もいつか残りける空しき床に明るるしのめ

〔通釈〕

法師品、「諸法の空を座となす」

法華經を説くために人々を待ち受ける心も、いつの間にか残ったのだった。万物が無である空しい台座に、白々と明ける夜明けよ。

〔参考〕

山人の昔の跡を来て見れば空しきゆかを払ふ谷風（千載集・雜上・一〇三九・清輔）

たぐひなくつらしと思ふ秋の夜の月を残して明るるしのめ（千載集・秋上・一七八・成通）

〔語釈〕

○法師品、諸法空為座―『法華經』「法師品第十」は、藥王菩薩をはじめとする八万の居士に対し、釈迦在世にも仏滅後も、『法華經』の一偈一句を聞いて随喜する者に、成仏の記別を授けることを約し、五種法師（受持・読經・誦經・解説・書写）、十種供養（華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・繪蓋・幢幡・衣服・伎楽）を説く。そこで、釈尊が重ねて説いた偈の一節、「若人説此經 応入如来室 著於如来衣 而坐如来座 処衆無レ

所_レ畏 広為分別説 大慈悲為_レ室 柔和忍辱衣 諸法空為_レ座 処_レ此為説_レ法」の一句。○空しき床―「むなしきゆか」。題の偈頌句「諸法空為座」を受けて言うが、歌詞としては参考歌に拠るか。「むなしきとこ」とも読め、それが歌詞としてはむしろ通用だが、ここは寢床の意味ではないので、勤行の台座の意味を持つ「ゆか」に読んでおく。

〔補説〕 題の経旨がどのように表現されているのかが、必ずしも分明ではない。上句は、「衆に処して畏るる所なく 広く為に分別して説くべし」を踏まえて、(釈尊が説く)法華経を説く為に衆人に対処する心がまえも、知らず知らずのうちにそのまま残り伝わったのだ、といった趣旨を表そうとした、と解しておきたい。

同じ偈頌句を題とする例は、室町後期の岩城の連歌師広幢の他撰家集『広幢集』に、「諸法空為座／見し人もにほひし花も春風も跡をとどめぬみ吉野の山」(二二五)が見える程度。

宝塔品、如所説者、皆是真実

277 誓_{ちか}ひ置_をきし昔の人の理_{ことばり}に今説_とく法のまことをぞ知_しる

〔通釈〕 宝塔品、「説く所の如きは、皆これ真実なり」

誓願し置いた昔の人の真理によつて、今説く法華経の真実であることが分かるよ。

〔語釈〕 ○宝塔品、如所説者、皆是真実―『法華経』「見宝塔品第十一」は、大地から湧出して空中にある高さ五百由旬の七宝の宝塔から、塔内の多宝如来と並座した釈尊が、仏の白毫から放たれた光明に照らされて集まった十方浄土の諸仏に空中説法を行うことを説く。その冒頭部分で、諸天諸衆が宝塔供養をすると「その時、宝塔の中より

大音声を出だして、歎めて言ふ」とする一節、「善哉。善哉。釈迦牟尼世尊。能以平等大慧。教菩薩法。仏所護念。妙法華經^上。為大衆說。如是。如是。釈迦牟尼世尊。如所說者。皆是真實」の末尾の章句。○まこととぞ知る—公任が、法華經二十八品歌の「神力品」に「めづらしくのぶる下にてみ法をば誠のなかのまことをぞ知る」(公任集・二八〇)と詠むのが早い例。慈円にも「花もみも同じにはひの枝を見て法の蓮のまことをぞ知る」(拾玉集・五一九〇)の作例がある。

〔補説〕 同じ經文を題とした歌の先行例は目に入らない。後代でも、室町期の歌僧正広の「詠法花經廿八品和歌」の「宝塔品、如所說者、皆是真實／春の風岩間の氷解く水を空よりすます日の光かな」(松下集・三二二五)や、近世初期の烏丸光広の法華經二十八品歌の「宝塔品、如所說者皆是真實／香をとめて来ぬる鶯声なくは妙なる梅の花と知らめや」(黄葉集・一四三二)等(他には難波拾草・八一二の一首)、が見える程度。

提婆品、于時奉事、經於千歲

278 薪樵^こりいつか千歲^{とせ}を過ぐしけん山路^ちの露に袖は濡れつつ、

〔通釈〕 提婆品、「時に奉事^{つつか}ふること、千歲を經」

釈尊は法華經を得るために、薪を伐採して、知らぬ間に千年を過ごしたのだろうか。山路の露に袖は濡れながら。

〔本歌〕 濡れて干す山路の菊の露の間にいつか千歲を我は經にけむ(古今集・秋下・二七三・素性)

〔語釈〕 ○提婆品、于時奉事、經於千歲—『法華經』「提婆達多品第十二」は、三逆の罪で生きながら無間地獄に墮

ちた提婆達多と垢穢五障ある八歳の童女が成仏したことから、末世一切の男女成仏を説くが、釈尊が過去世に国王であつたとき阿私仙人に千年のあいだ仕え、難行苦行して法華經を得た、その阿私仙人が提婆達多の過去世の名であつたとする。この巻の冒頭で、釈尊が仙人に従つて、水を汲み薪を拾つて修行し、法華經を得たということ説く部分の、「即隨^二仙人^一。供^三給所^レ須^一。採^レ菓汲^レ水。拾^レ薪設^レ食。乃至以^レ身。而作^二床座^一。身心無^レ倦。于^レ時奉事。經^二於千歲^一。為^二於法^一故。精勤給侍。令^レ無^レ所^レ乏」の章句の一部。

〔補説〕

經旨歌で經文の題を受けてはいるが、特徴的な詞の一致から、索性歌を本歌にしたと見るべきであろう。

勸持品、我不愛身命 但惜無上道

279 かかる憂き身をば何とか惜しむべき花にぞ後の春も待たるる。

〔通釈〕

勸持品、「我身命を愛せずして 但、無上道のみを惜しむなり」

（あの菩薩達でさえ、法華經を説き弘めるために諸難を忍び、身命をとくに愛しむこともなく、ただ無上の悟りの道を希求して、来世に仏の教えを護持することを誓願したのだから） このような憂く辛い我が身を、どうして惜しむであろうか、ちつとも惜しみはしない。ただ、花によつて後の春も自然と待たれるように、法華經によつて後世が待たれるだけなのだ。

〔参考〕

身に替へてあやなく花を惜しむかな生けらば後の春もこそあれ（後撰集・春・五四・長能）

〔語釈〕

○勸持品、我不愛身命 但惜無上道―『法華經』「勸持品第十三」は、藥王や大衆説等の菩薩や阿羅漢達が、仏滅後の法華經弘法を誓願することを説く。そこで、諸菩薩が声を合わせて唱える偈の一節、「為^レ説^二是經^一故

忍^二此諸難事^一 我不^レ愛^二身命^一 但惜^二無上道^一 我等於^二來世^一 護^レ持仏所^レ囑」の章句の一部。○花―「法華經」を寓意する。

〔補説〕 勸持品の同じ偈頌句を題として詠むことは、選子内親王の『発心和歌集』の法華經二十八品歌で「勸持品爲説是經故 忍此諸難事 我不愛身命 但惜無上道／憂きことの忍び難きを忍びてもなほこの道を惜しみとどめん」(三七)に始まり、以後、和泉式部(和泉式部続集・四八九〜五〇〇)。「我不愛身命」の訓読文字を各歌頭に置く)、忠通(田多民治集・一八〇。両句とも)、俊成(長秋詠藻・四一五。両句とも)、慈円(拾玉集・二四八一、四四五七。前一句のみ)、定家(拾遺愚草・二九七。前一句のみ)等に作例が見える。

寿量品、常在靈鷲山 及余諸住処

280 我^{われ}と見^みぬ心ぞつらきいづこにも有りしながらの月はすむなり^也

〔通釈〕 寿量品、「常に靈鷲山 及び余の諸の住処に在るなり」

自分から進んで見ようとしなない心は恨めしいよ。この世界のどこにでも、はるか昔から有ったそのままの月は今も澄んで、住んでいるのだ。仏は、久遠に靈鷲山やその他の住処に常在しているのだ。

〔参考〕 昔思ふ草にやつるる軒端より有りしながらの秋の夜の月(洞院撰政治家百首・秋・月・六二六)

荒れはてて人目まれなる故郷に有りしながらにすめる月かな(秋夢集Ⅱ後嵯峨院大納言典侍集・四十三)

〔語釈〕 ○寿量品、常在靈鷲山 及余諸住処―『法華經』「如來壽量品第十六」は、「方便品」「安樂品」「普門品」と

ともに四要品という。本門(法華經後半部)の正説の中心で、弥勒の疑問に答えて、仏が、五百塵点劫の喩えと良

医の喩えて、仏の寿命の久遠常住を説く。「自我得仏来」に始まる、重ねて仏身常住を説く最後の「自我偈」と通称される偈頌は、如来加持の文・破地獄の文とも呼ばれて『法華経』の眼目とされ、我々の住む世界がそのまま寂光浄土であることを説き、仏の大悲の発露を説く。その「自我偈」の一節、「常在_二靈鷲山_一 及余諸住処_一 衆生見_二劫尽_一 大火所_レ焼時 我此土安穩 天人常充滿」の章句の一部。○有りしながらの月―昔からあつたそのままの月。久遠常住の仏を寓意。○すむ―「澄む」と「住む」の掛詞。

〔補説〕「自我偈」の同じ句を題に詠むことは、『久安百首』の崇徳院詠「寿量品、常在靈鷲山／世の中になほありあけのつきせずとけば心の闇ぞ晴れぬる」(八七)や、『詞花集』に収める登蓮の「常在靈鷲山の心をよめる／世の中の人の心のうき雲に空隠れする有明の月」(四一五)が早い。以後、この「常在靈鷲山」のみを題とする例が散見するが、「及余諸住処」までを題とする例は見えない。

随喜品、世皆不牢固 如水沫泡焰

281 水の上のあはれはかなき此の世とは知りてまどふに濡るる袖かな

〔通釈〕 随喜品、「世は皆牢固ならざること 水の沫・泡・焰の如し」

水の上のように、ああなんともはかないこの世の中だとは、知っていて心乱れるにつけて、涙に濡れる袖であることだよ。

〔本歌〕 なにかその名の立つことの惜しからむ知りてまどふは我ひとりかは(古今集・雑体・誹諧歌・一〇五三・興

風)

〔参考〕 世の中をいかが頼まんうたかたのあはれはかなき水の泡かな（堀河百首・雑・無常・一五五四・匡房）

玉きはる命をあだに行く舟のあはれはかなき浪の上かな（壬二集・家百首・雑・寄舟雑・一四三五）

〔語釈〕 ○随喜品、世皆不牢固 如水沫泡焰―『法華経』「随喜功德品第十八」は、前品の「分別功德品第十七」の

終りに説かれた五品中の初随喜品について、その功德を弥勒に対して説く。仏滅後に『法華経』を聞いて随喜する者の功德が、五十人目に至っても広大無量であることを説く。その義を重ねて宣べる偈の一節、「世皆不牢固―

如三水沫泡焰― 汝等咸応_三当 疾生_三厭離心_二」の一部分。

〔補説〕 経旨歌で経文の題を受けてはいるが、特徴的措辞の一致から、興風歌を本歌にしつつ、参考の匡房詠などにも負ったと見る。

―随喜品の同じ偈頌句を題として詠むことは、選子内親王『発心和歌集』の法華経二十八品歌「随喜功德品、世皆不牢固 如水沫泡焰 汝等咸応当 疾生厭離心／かげろふの有るかなきかの世の中に我有るものと誰頼みけん」（四二）に始まり、寂然『法門百首』の「随喜功德、世皆不牢固 如水沫泡焰／結ぶかと思れば消え行く水の泡のしばしたまるる世とはしらずや」（八五）に受け継がれる。宗尊より後出では、『尊円親王詠法華経百首』の「世皆不牢固 如水沫泡焰／涙川身さへ流るる水の泡のあはでやつひに思ひ消えなん」（六五）や、堯恵『下葉集』の「法花経廿八品」歌「随喜功德品、世皆不牢固 如水沫泡焰 汝等咸応当 疾生厭離心／おろかなり見ても知らずや水の泡の身はすみやかになき物かとも」（六四五）がある。選子以外はいずれも、題に即したはかなさの喩えで「水の泡」を詠み込んでいる。それに照らしても、宗尊の「水の上」はやや異質。

不軽品、汝等皆行菩薩道、当得作仏

282 秋はみな花に咲くべき萩なればあだには分けじ宮城野の原

〔通釈〕 不軽品、「汝等は皆菩薩の道を行じて、当に仏と作ることを得なければなり」

秋には皆、花として咲くことができる萩であるので、あだやおろそかには分け行くことはするまい、萩がある宮城野の原を。(それが、あらゆる者は皆仏になることができるのだから、まったく軽んじ侮ることはしない、と言った常不軽菩薩の心だ)

〔参考〕 秋はみな思ふことなき萩の葉も未たわむまで露は置くめり (詞花集・雑上・三三〇)

今ぞ知る冬こもりせる草も木も花に咲くべき種しありとは (万代集・釈経・一切衆生悉有仏性の心を・一七〇六・有長)

さ牡鹿のしがらみ伏する萩なれば下葉や上になりかへるらん (拾遺集〈書陵部堀河宰相具世筆本〉・雑下・

五一四・躬恒、拾遺抄・雑上・四〇九。拾遺集三句は新編国歌大観本「秋萩は」)

〔語釈〕 ○不軽品、汝等皆行菩薩道、当得作仏―『法華経』「常不軽菩薩品第二十」は、常不軽菩薩の故事を示して、法華経の行者を誹謗する者の罪報と護持する者の功德とを得大勢菩薩に説く。威音王如来滅後の像法時の過去世で、増上慢の比丘達が勢力を振るう中、常不軽菩薩が現れて、一切衆生は仏性があるとして、出会うあらゆる四衆を礼拝讚歎した。その時に唱える、「我深敬_二汝等_一」。不_二敢軽慢_一。所以者何。汝等皆行_二菩薩道_一。当_レ得_レ作_レ仏 (我は深く汝等を敬ふ。敢へて軽しめ慢らず、所以はいかん。汝等は皆、菩薩の道を行じて、当に仏と作ることを得なければなり)「我不_三敢軽_三於汝等_一」。汝等皆当_レ作_レ仏故 (我敢へて汝等を軽しめず。汝等は皆当に仏と作るべきが故なり)の、前者の一部分。

〔補説〕 經文を題とする經旨歌ではあるが、詞を参考の三首に負っていようか。

「不輕品」の同じ章句を題にする先例は見えない。慈円の「詠百首和歌法門妙經八卷之中取百句」には「譬喩品五首」の一首として「必当得作仏／高き峰に先立つ人を見るからに我も行くべき道を知るかな」（拾玉集・二四二七）の類題詠がある。

属累品、汝等亦、応随学如来立法、勿生惱[＊]

283 みな人に五月知らせて郭公夕^{ゆふ}への空に声な惜^おしみそ

〔本文〕 ○底本は、經文章句題の末尾が「而生惱」とあるが、『法華經』の原文と文意とに照らして、「而」は「勿」であるべきであり、単純な誤写と見て私に改める。

〔通釈〕 属累品、「汝等も亦、応に随つて如来の立法に学ぶべし。悩みを生ずることなかれ」

全ての人に五月を知らせて、時鳥は、夕方の空に声を惜しむな。一切の衆生に、法華經の弘通を付託して如来の法を学んで、悩みを生ずるな、と三度説いた仏の声のように。

〔本歌〕 鳴けや鳴け高田の山の郭公この五月雨に声な惜しみそ（拾遺集・夏・一一七・読人不知）

〔語釈〕 ○属累品、汝等亦、応随学如来立法、勿生惱―『法華經』「喩累品第二十二」は、一切の大衆に対する仏法の付嘱（実践弘通を付託すること）を説く。そこで、釈迦牟尼仏が、宝塔の説法の座から立ち上がって、右手で無量の菩薩達の頭を三度摩でて作す言説、「我於^二無量。百千万億。阿僧祇劫^一。修^レ習是難^レ得。阿耨多羅三藐三菩提法^一。今以付^レ嘱汝等^一。…如来は一切衆生。之大施主。汝等亦應^二随学^一。如来之法^一。勿^レ生^二慳慳^一」の章句の部

分に相当しようか。字句の異なりの原因は不明である。

〔補説〕 経文の題詠ではあるが、他の法華経経旨歌（278、281）にも認められるように、拾遺歌を本歌にしたとみるべきであろう。

「囑累品」のこの部分の章句を題とする例は、他に見えない。

薬王品、病即消滅、不老不死

284 舟のうちにのり知らでこそ求め^{もと}けめ有りける^物ものを死^しなぬ薬は

〔通釈〕 薬王品、「病は即^{（たち）}に消滅して、不老不死ならん」

舟の中^{（たち）}に乗りならぬ、法華経の法を知らないからこそ、求めたのであろう。不死の妙薬法華経は、とづくに存在していたものを。

〔語釈〕 ○薬王品、病即消滅不老不死―「法華経」「薬王菩薩本事品第二十三」は、仏が宿王華菩薩に対して、法華経の座に列する薬王菩薩往時（前身たる一切衆生喜見菩薩）の苦行や焼身供養を説いて、行者を勧奨する。この品の最後部で、仏は宿王華に対して薬王菩薩本事品を囑累することを告げ、後の五百歳の中で閻浮提に広宣流布して神通力で守護すべきことを説くが、その所以として言う「此経則為。閻浮提人。病之良薬。若人有^レ病。得^レ聞^二是経^一。病即消滅。不老不死」の末尾の章句。○舟のうちに―「乗り」の掛詞で「法」を起こす序。○死なぬ薬―蓬萊山の不老不死の仙薬の趣意で詠まれる例が散見するが、「薬王品」の「不老不死」に寄せて言う先例は、建長五年（一二五三）に藤原定家十三回忌に為家が勧進した追善詩歌である『二十八品並九品詩歌』『薬王品』の小宰相

詠「名のみ聞く蓬が鳥も尋ね見し死なぬ葉の法に逢ひなば」（四八）がある。

〔補説〕 同じ章句を題とする先行例は、寂然『法門百首』の「薬王品、病即消滅、不老不死／舟の中に老いを積みけるいにしへもかかるとみ法を尋ねましかば」（四四）、と慈円「詠百首和歌法門妙経八卷之中取百句」「薬王品六首」の一首「病即消滅／法の風に秋の霧さへ晴れのきてしほむ華なきませの中かな」（拾玉集・二五二五）がある。該歌は、前者に負ったかもしれない。後出は、『尊円親王詠法華経百首』の「病即消滅、不老不死／唐人も御法にあはばいたづらに蓬の島の草は尋ねじ」（雑・薬王品・八五）と正広「詠法華経廿八品歌」の「薬王品、病即消滅、不老不死／谷の戸にふる年明けて老いせじと若菜つむなり雪の山人」（松下集・三三三七）が見える。

妙音品、宿王智仏、*問訊世尊

285 尋ね来てさまざま問ひし言の葉を答へぬしもぞ言ふにまされる

〔本文〕 ○底本は、經文章句題の末尾が「問訊世尊」とあるが、『法華経』の原文により、単純な誤写と見て「問訊世尊」に改める。

〔通釈〕 妙音品、「宿王智仏は、世尊を問訊したまふ」

妙音菩薩が釈迦牟尼仏を尋ね来たつて、さまざまに問い尋ねた言葉を、釈迦が答えないというのも、直接言うのに優っているのだ。

〔本歌〕 主なしと答ふる人はなけれども宿のけしきぞ言ふにまされる（後拾遺集・靈山に籠もりたる人に逢はむとて

まかりたりけるに、身罷りて後十三日にあたりて物忌すと聞き侍りて・五五三・能因）

〔語釈〕

○妙音品、宿王智仏、問訊世尊—『法華経』「妙音菩薩品第二十四」は、釈迦が光明を放って東方の恒河沙の世界を照らすと、その中の淨光莊嚴世界にいた淨華宿王智如来とその弟子の三昧を得ている妙音菩薩がいて、妙音菩薩が三昧の力で耆闍崛山（靈鷲山）に来詣して『法華経』を聴聞することを説く。その妙音菩薩が、耆闍崛山で釈迦に瓔珞を奉って言う「世尊。淨華宿王智仏。問訊世尊…又問訊多宝如来…我今欲見」。多宝仏身。唯願世尊。示我令見」の章句の一部分。続いて、「爾時釈迦牟尼仏。語多宝仏。是妙音菩薩。欲得相見。一時多宝仏。告妙音…」とあり、釈迦は宿王智には答えておらず、また、妙音にも直接には語っていない。このことを詠むか。

〔補説〕

経文の題詠ではあるが、他の法華経経旨歌（278、281）にも認められるように、また、歌詞の一致からも能因詠を本歌にしたと見る。なお、後拾遺集初出歌人能因の歌を本歌と見ることにについては、『瓊玉和歌集注釈稿（三）』（本紀要四七、平二二・三）126、128補説参照。

同じ章句を題とする先行例は見えない。

普賢経

286

露霜の消えてぞ色はまさりける朝日向かふ峰の紅葉々

〔通釈〕

普賢経

置いていた露や霜が消えて、その色は鮮やかに照りまさるのであった。朝日に向き合う峰の紅葉の葉よ。罪障は霜露の如きもので、仏の智慧の日光がそれを削除してくれる、そのように。

〔参考〕 紅葉葉のなほ色まさる朝日山夜の間の露の心をぞ知る（拾遺愚草・秋・内裏にて、朝見紅葉・二三九四）

露霜の色どる木木も数見えて朝日いざよふ嶺の紅葉葉（歌合建保四年八月廿二日・朝紅葉・一七・資高）

〔他出〕 新後撰集・釈経・同経（普賢経）の心を・六二八。

〔語釈〕 ○普賢経―観普賢菩薩行法経。『法華経』の掉尾「普賢菩薩勸発品」を受けて締め括るとされ、『法華経』の結経。釈迦が、三か月後に涅槃に入ることを予告した際、阿難や弥勒菩薩達が仏滅後の修行の心得などを問い、仏が答えた様子を説く。仏滅後に衆生が修行の師とすべき普賢菩薩と出会う方法、また、六根を清浄にして滅罪懺悔する方法等を説く。その経文の「衆罪如霜露、慧日能消除、是故応至心、懺悔六情恨」を念頭に置く。↓補説。○朝日に向かふ―先行例は、良経の「人の世は思ひなれたる別れにて朝日に向かふ雪の曙」（拾遺愚草・雑・無常・同じ年（建久四年）の雪の朝、大将殿より・二八〇〇）が目に入る程度。

〔補説〕 「普賢経」を題に詠むことは、選子『発心和歌集』の「普賢経 衆罪如霜露、慧日能消除、是故応至心、懺悔六情恨／作り置ける罪をばいかで露霜の朝日に当たるごとくけしてん」（五三）に始まる。以後、左に挙げるとおり、多くは「衆罪如霜露」、慧日能消除」を踏まえた詠み方である。該歌も同様だと考える。

夜半に置く露のごとくの罪なればつとめて消ゆる物にぞありける（後葉集・雑五・普賢経の心をよませ給ひける・五八六・近衛院）

ゆきつもる罪の名残も知らじかしかばかりさせる法の日影に（田多民治集・一九六・観普賢経）

長き夜に積もれる霜のあだものは恵む朝日に消えぬとぞ聞く（教長集・雑・普賢経・八四〇）

露霜と結べる罪のくやしきを思ひとくこそ朝日なりけれ（長秋詠藻・普賢経、衆罪如霜露、恵日能消除・

心より結び置きける霜なれば思ひとく日に残らざりけり（月詣集・釈経・普賢経の心をよめる・一〇六二・大輔）

朝日影思へば同じ夜の夢別れにしほるしののめの露（拾遺愚草・雑・普賢経・二九五五）

法の日の照らさざりせばいかにして積もれる罪の霜を消たまし（秋風集・釈経・普賢経の心を・五八四・俊房女）

露霜とともに日を待つ老いの波積もれる罪はかつや消えなむ（二十八品並九品詩歌・普賢経・六〇・基良）

寺

287 誰かまた向かひの寺の鐘の音を雪の夕べの月に聞くらん

〔通釈〕 寺

私の他に誰がまた、向かいにある寺の鐘の音を、雪が降る夕方月の月の下で聞いているのだろうか。

〔本説〕 雪のかき暗し降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人の、すさまじきことにいふなる、十二月の月夜の、曇りなくさし出でたるを、簾垂巻き上げて見給へば、向かひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬ、と、かすかなる響きを聞きて、

おくれじと空行く月を慕ふかなつひにすむべきこの世なれねば（薰）（源氏物語・総角）

〔影響〕 秋はいま今日暮れぬとぞおどろかす向かひの寺の入相の鐘（龜山院御集・暮秋詠十首和歌・古寺暮秋・

二九一）

〔語釈〕 ○寺―『古今六帖』(第二・仏事)の「てら」。○向かひの寺―『源氏物語』「橋姫」で、光源氏の異母弟宇

治八宮が、宇治の山荘に隠棲して、この寺の阿闍梨と法談しまた参籠する宇治山の寺。「総角」では、薫が宇治八宮邸にあつて鐘の声を聞く。↓補説。○雪の夕べ―家隆の「年も経ぬいかに待ち見ぬ宿なれや雪の夕べの杉の山本」(壬二集・冬・前参議信成卿北野会、冬望雪・二六六五)が先行例として見える。「雪の夕暮」は、寂蓮の「降りそむる今朝だに人の待たれつるみ山の里の雪の夕暮」(右大臣家歌合治承三年・雪・三三三)が早く、『正治初度百首』の定家詠「駒とめて袖うち払ふ陰もなし佐野の渡りの雪の夕暮」(冬・一三七〇)と家隆詠「さびしさの友だになきは庵さす野中の松の雪の夕暮」(冬・一四七〇)が続き、新古今歌人達が多く詠み寂蓮と定家の歌が『新古今集』(冬・六六三、六七一)に入集する。「雪の夕べ」を詠むのは、この状況とも無縁ではないであろう。

〔補説〕 「向かひの寺」「雪の夕べの月に聞くらん」は、歌詞としては新鮮である。宗尊が「寺」の題の本意をどのように捉えていたのかはよく分からないが、『源氏物語』(総角)の薫に我が身をよそえて、絵画的な情景を叙しつつ、鐘の音を聞く孤独さを述懐する趣か。本説は、宇治八宮の娘大君が匂宮等との関係を悲観して重態となり、薫が看護するうちにやがて他界し、悲しみに沈む薫が、世の無常と分離への思いを募らせる場面。

影響に挙げた、『源氏物語』「総角」の同じ場面を本説とする、「秋はいま」の一首は、作者が宗尊の七歳年少の弟亀山院であるので、一応影響下にあると見たが、直接の関係はない可能性もある。しかし、いずれにせよ、この『源氏物語』を踏まえた「宇治」の「向かひの寺」については、宗尊以降に作例が散見するのである。まず正徹が、「鐘の声向かひの寺と聞きし夜の宮も跡なき宇治の川橋」(草根集・雑・八七七八)や「身は夢ぞ宇治の橋姫忘れねよ向かひの寺の鐘に待つ夜を」(同上・九三三二)と詠んでいる。その後にも、正広「すむ月に向かひの寺の鐘の声昔よいかに宇治の山里」(松下集・自歌合 三百六十番・対月聞鐘・三〇九六)、大内政弘「ほどもなき向ひ

の寺の鐘のこゑをちこちかはるうぢの川風」（拾塵集・雑中・古寺鐘・九三九）、長孝「月もまた入らば名残や宇治河に向かひの寺の暁の空」（広沢輯藻・古寺の月といふ事をよみける二十首・一〇〇六）等、細々ではあるが、「宇治」の「向かひの寺」を詠む系譜を辿ることができる。ただし、正徹に対してだけでも、宗尊詠からの影響があるか否かについては、現段階では不明である。『竹風抄』の流布あるいは宗尊詠の享受を、総合的に検証する必要がある。

鐘

288 暮るる間も知らぬ命のながらへて今日も聞きつる入相の鐘

〔通釈〕 鐘

日が暮れるまでのほんの短い間も知れない命が、（思いがけず）生き長らえて、今日もまた聞いてしまった、日没を知らせる鐘よ。

〔参考〕 暮るる間も頼むものとはなけれども知らぬぞ人の命なりける（統古今集・雑下・一七九二・順徳院、秋風集・雑下・一二四八。順徳院百首・九九）

〔語釈〕 ○鐘―『古今六帖』（第二・仏事）の「かね」。○暮るる間も知らぬ命―平安中期頃から詠まれ始める。勅撰集では「逢ふことはいつともなくてあはれ我が知らぬ命に年を経るかな」（金葉集・恋下・四六六・経信）が初出で、以降、多く類想の恋歌に詠まれる。先行例に、和泉式部の「暮るる間も知らぬ命にかへつつもおそく桜の花をこそ見め」（和泉式部集・桜の花の待ち遠なり、といひて・六五七）があるが、これを宗尊が視野に入れていたか

どうかは不明である。宗尊の、和泉式部詠撰取の問題として総合的に検証する必要がある。

〔補説〕 伝統的な言詞や想念に拠りつつ、厭世観漂う述懐を詠じる。

「入相の鐘」については、「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」（拾遺集・哀傷・一三二九・読人不知）を淵源に、寂然の「今日過ぎぬ命もしかとおどろかす入相の鐘の声ぞかなしき」（新古今集・釈教・此日已過、命即衰滅・一九五五・寂然）や西行の「待たれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらば聞かんとすらむ」（新古今集・雑下・一八〇八・西行）のように、自分の寿命の区切りを知らせるものとしての通念が存している。宗尊も、これらの歌を念頭に置き、その通念に従ってしよう。

なお、参考の順徳院詠は、「暮るる間も定めなき世に逢ふ事をいつとも知らで恋ひ渡るかな」（金葉集・恋下・四三一・隆源）を本歌にするが、宗尊もそれは認識していたであろう。